

し得ることぢや。ほんに人間運の悪い時には何で損をするか分りはせぬもので、役にもたぬ涙で紙衣の袖を濡してしまつたが、紙衣のつぎめの離れない先に歸ることにしよう」といつて立たうとすると、妻は「あゝ、それは餘りの御短氣でせう。奥においでのお客は平様ではありませぬ」「いや、平でも壺でも、私しは食事はよろしうござる」といつて立上ると、主人の妻「それはお前様の邪見と申すもの、それより先づ夕霧様にお遇せませう」「いや、ととも、けんどんを食ふ程なら、夕霧よりか蕎麥切りの方にしよう」と駄じやれを云ひながら、すね廻るその中に奥座敷から手が鳴るのであつた。

「あれ禿衆は何處にぞ」と、いひつゝ出る内儀に連れて、襖の蔭より差覗けば、兩人馴れにし床柱、もたれ懸るも形見ぞと、忘れもやらぬ物ごしは、たしかに彼の人何がなしほに座を立つて、逢ひたや見たやと心もせさ、そむけて向ふ客の顔、さも大名の小姓だち、風よしの衣裳つき、ばつばの鮫鞘、象眼罽、若紫の炮祿頭巾、懐中より香包、名木火鉢に薫らせ、「鼻是へ來やれ。身なんどが様な奉公人は、殿の御前に相詰め、たまさか遊興所へ參るも氣晴しと云内に、第一は夕霧殿に戀有故、君の機嫌のよい様にお身を頼む。一ツ飲みやれ肴せむ」と、ひらり紙花七九寸木枕に打敷いて、横に鳴門の阿波大盡、夕霧が襦に兩足ぐつと入れければ、夕「扱もなめたり」。此夕霧に足もたすは、こりや少と慮外そふな。夫れ程足が苦にならば、打折つて捨てたがよい」といひ捨てつゝと立ち、次へ出れば伊左衛門、ちやつと寝轉ぶ肘枕、空寢入して高軒、はつと計に夕霧、我身を共うちかけに、引纏ひ寄

せとんと寢て、抱付締寄せ泣けるが、夕「なふ伊左衛門様、目を覺して下んせ。わしや煩ふて、疾ふに死ぬる筈なれど、今日まで命ながらへたは、ま一度逢せて下さるゝ神佛の控へ綱。是懐しうはないかいの、顔が見たふはないかいの、目を開て下んせ」と揺起し、抱起せばむくと起き、横ざまに取て投げ、伊「是夕霧殿とやら、夕飯殿とやら、節季師走此方の様に際てはない。七百貫目の借錢負うて、夜晝稼ぐ伊左衛門、此様な時寝ねばならぬ。邪魔なされな惣嫁殿」と、轉りと臥して又ごろくと空軒。

【註】 ○あれ禿衆はどこにぞ—これを客の詞をとる人あれど、そのあとに、といひつゝいづる内儀とあるより見ると、どうも内儀の言葉と見た方が穩當だ。○襖の蔭よりさしのぞけば—のぞくのは一説には夕霧とふ説もあれど、どうもこれは伊左の方よからう。伊左が隣りの室即ち昔しのなじみの室をのぞいてゐるのだ。○兩人馴れにし床柱—夕霧と伊左とがよく、もたれかゝつてゐた床柱に、今阿波の大盡が夕霧と共にもたれかゝつてゐるのである。○もたれ懸るも形見ぞと—今夕霧が客と二人でもたれかゝつてゐるのも、思ひ出の種であると思ひながら伊左が見てゐると」と解すべし。此處で人形の振りが、ふと代つて、次の句からは夕霧の心をうつしたのである。○忘れもやらぬ物ごしは—前の句までは以上の如く昔を思ひ出して、伊左の方で見つてゐるのを、ちらりと見た夕霧は、おやあれは忘れもやらぬ伊左衛門だ、と忘れもやらぬから主格がかはるのだ、かく解しないと、此處不明になる。○物ごし—物を隔てた様子、遠くから見る様子。○彼の人—夕霧といふ説もあれど、これは忘れもやらぬものごしを見つけたものとして、彼の人を伊左とつた方よし。○何がなし—何かの機會に、何かのりを見つけて立つて、行つてあひたいと夕霧の心がせくのである。○そむけて向ふ客の顔—夕霧は客に背をむけて坐つてゐる、その夕霧に背を向けてゐる客の顔はとこゝで又主格がかはつてゐるのである。

○さも大名の小姓だち—いかに小姓あがりのやう。○ばつば—散る形にて、鮫皮の大粒が散在してゐるをいふのだ。樋口氏説。

○絞鞘—絞の皮ではり、漆をかけて磨き出した、きらびやかなもので、若いものがさす。○象眼鏝—鐵の鏝に、金銀で色々な模様を象眼したもの。○炮碌頭巾—まるで大黒頭巾、又は今日の鳥打帽子の庇のないやうなもの。○名木—もちろん伽羅や奇南などの香の名木。○身なんど—わしなんど。○奉公人—主人をもつてゐる武士の意に用ひたのだ。○遊興所—遊里。○君の機嫌のよいやうにお身をたのむ—君は、遊君にて、夕霧をさし、お身はおかみをさす。○ひらり紙花七九寸—遊里にて、花を打つと紙を出すを紙花といふ。これから見ると、紙花は目錄のつもりで、あとから金とかへてやる爲に、一度紙をひらりと投げてやることをいつたのである。七九寸といふのは例の七寸に九寸の延紙のことで、これをひらりと先づおかみに投げてやつて、残つた紙を木枕に敷いて寝たのであつて、紙花七九寸は、かけてやつたのと枕にしいたのを両方にかけてある。○横に鳴門—横になるのと阿波の鳴門と両方にかく。○なめたり—輕蔑してゐる、のんてかゝつてゐる、馬鹿にしてかゝつてゐる。失禮な。○慮外—そなた—無禮らしい、思ひ設けぬことのやうだ。○神佛のひかへ綱—神佛が、知らぬ中に守つてくれて、引きつないでくれる綱。

【譯】内儀は「あれ禿衆はどこに行つたのだろ」と、いつて室から出て、阿波の客の處へ行くのにつれて、襖の蔭から伊左がのぞくと、客は夕霧と二人で自分達が昔し寄りかゝりなれた柱によつてゐる。あれも昔の形見ぢやなと見てゐると、夕霧はそれを見つけて、おやあの隔で、見る様子は 伊左さんぢや、何かの機會に座を立つて行つて、逢ひたい、顔が見たいと心がせきながらゐる、夕霧に背をむけてゐる客の顔は、いかにも大名の小姓あがりといふ風で、衣裳着つけの風もよく、大粒の散在せる絞鞘といひ、象眼鏝といひ、若紫の炮碌頭巾といひ、よくつりあつてそれが懐中から香包を出して名木の香を火鉢にたきながらおかみを呼んで「おかみ此方へ來やれ、私しなどのやうなもの殿様の前にばかりつめてゐるのだから、たまには氣晴しと思つて遊里に來はするが、それも第一は夕霧を戀ひしてゐるからぢや、どうか夕霧の機嫌のよいやうによくとりもつておくれ、頼む、それにしても先づ飲むがいゝ肴を献じよう」といつて、ひらりと紙花をなげてやつて、餘りの延紙を木枕にしいて、鳴門の阿波大盡は身を横にした。そして夕霧のうちかけの中へ兩足を入れると、夕霧はつんとすまして「さても無禮な、人を馬鹿にしてゐなさる。此夕霧に足をもたせなさるの、これやちと無禮でござんせう。それほど足のもち扱に骨が折れるとあらば、べし

折つてお捨てなされたがよからう」といひすて、すつと立つて、次の間へゆくと、伊左衛門は、ちやんと肘枕をし寝転びながら、寝たよなふりをして高軒をかいてゐる。それを見ると夕霧はつと驚いて、自分の身も一緒に、うちかけの中へ引くるめようとして、寝ころんで、抱き締めよせた。「なう伊左衛門様、目を覺して下さんせ、わしや體が悪くてとくに死ぬ筈であつたが、今日まで生きながらへたのは、お前に今一度遇せてやろうと神佛が控へ綱を引つばつてゐて下さつたからぢや。もし、懐しくはないかいな、私しの顔が見たくはないかいな、目をあけて下さいな」と、ゆり起し／＼して抱き起すと、むつと起き上つて、夕霧を横様に取つて投げながら「これ夕霧どのとか夕飯どのとか、わしは節季師走の年の暮に、お前のやうに暇ではない、七百貫といふ借金を背負つて、夜も晝もかせいでるのぢや。だから今のやうな時こそ寝にやならぬ。この賣女奴邪魔しやるな」といつて、またころりと臥ころんで空軒をかく。

夕「ム、ウ身に覺えはなければ共、恨みがあらば聞きませぬ。寝させはせぬ」と引起す。伊「は何とする。此體でも藤屋の伊左衛門、今の如く奥座敷の侍に、踏まれたり蹴られたりする女郎に近付は持たぬ。此處な萬歳傾城、萬歳ならば春おじや。通りや」といひければ、夕「ム、ウ此夕霧を萬歳とは」伊「ヲヲ萬歳傾城の因縁知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを、萬歳傾城といふぞや。誠に目出度ふ侍蹴る。しかも足駄穿いて蹴るやら、年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ候ひける、聞こへたか。去ながら何も身過ぎ、あの様な好い衆には蹴られても損は往かぬ。慾を知らねば身が立たぬ。慾若に御萬歳や年立かへる足駄にて、誠に目出度ふ侍蹴る。町人も蹴る、伊左衛門も蹴る、ける／＼ける」と蹴散かし、伊「是喜左、餅でも米でも遣つてやりや」と、烟草引寄せ吹く烟管の、さらぬ體にて居たりけり。

【註】○萬歳—烏帽子素襖を着て、年の始に、人の門に来て祝ひ事をいふ、その詞の中に千秋萬歳といふ語あるより、昔は千秋萬歳といつたのが、だん／＼萬歳と變つた。又萬歳の詞の中に「……にて候ひける」といふ語が澤山あるので、侍にけられたやうだといふので、萬歳傾城とあざなしたのだ。つまり「候ひける」をもじつたのである。○足駄はいてけるやら年立ちかへる足駄にて—萬歳の詞の中に「あいけふありける、あら玉の年立ちかへる朝より」を悪くもぢつたのである。朝をあしたとよみにごらせてあしたとした。○身過ぎ—なりはひ、職業。○よく若に御萬歳や—萬歳の唄の中に「とくわかにかに御萬歳や」とあるのを、もぢつて、夕霧が怨にまよつたと思つて、あてこするるのである。萬歳唄は大經師昔曆、下の巻に出てゐる。「徳若に……」は徳はとこにて常の意。いつも若くての意。○さらぬ體—知らぬ風。さらぬはきせるの皿にかく。

【譯】夕霧は「何もさう恨をいはれる覺えは自分にはありませんが、あると仰有るならきゝませう。寢させはしませぬ」と引起す。伊左「これ何をする、わしはこの様な身なりはしてゐたも藤屋の伊左衛門ぢや。今のやうに奥座敷の侍に踏まれたり蹴られたりするよな女郎に近附はもつてをらぬ。この萬歳傾城奴、萬歳なら年があけてから來るがよいさ、行つてくれ〜」といへば「此夕霧を萬歳とは何としておいやる」「おゝ萬歳傾城の意味を知らぬのか、侍の足にかけてけられるのこそ萬歳傾城といふのぢや、まことにめでたいことぢや、侍にけられるもけられる、しかも足駄はいて蹴られる、まことに目出度いことぢや、分つたか、だが何も職業ぢや、あのやうな立派な人になら蹴られても損はゆくまい、何しろ怨を知らぬと身がたゝぬからな、怨にかゝつた萬歳や、年立ちかへる朝でなく、足駄でけられてまことにめでたいことぢや、いや蹴るといへば、侍も蹴る、町人も蹴る、わしもける、ける〜」といつてけちらかし、「これ喜左萬歳に米でも餅でもやつてくれ」と烟管を引よせ知らぬ風をしてゐた。

夕霧わつと咽せ返り、「エ、此方様共覺えぬ。此夕霧を未だ傾城と思ふてか、ほんの女夫ぢやないか。明れば私も廿二、十五の暮から逢ひかゝり何年に成る事ぞ。もふけた子さへま少とではや七ツ

誠をいはゞ今比は一門中の狀文にも、伊左衛門内よりと書いても人の咎めぬ事。私に恨みが有るならば此方様にも恨みが有る。去年の暮から丸一年、二年越は音信なく、それは幾瀬の物案じ。それ故に此病、瘦衰へが目に見へぬか。煎藥と煉藥と鍼と按摩でやうやうと命繋いで、たまさかに逢ふてこなさに甘ようと思ふ所を逆様な、こりや慘らしい何ふぞいの。私が心變つたら、踏んで計置かんすか、叩いてばかりおかんすか。是死懸つて居る夕霧ぢや、笑ひ顔見せて下んせ拜んます。エ、心強い胸懸な、憎やと膝に引寄せて、叩いつ擦つ、聲を上げ、涙亂れて髪ほどけわけも性根も無りけり。

【註】○傾城—もと美人いふに過ぎなかつた意が、遊女をいふに至つた。○あひかゝり—あひそめ。○幾瀬—幾ばく。○こなさ—こなさん。○あまえる—わがまゝをいつて可愛がられる意。○拜んます—んはみの音便、○心強い胸懸—剛情なむごさ。○わけも性根—わけは鬻にかけたのだ。

【譯】夕霧はわつと聲を出して涙にむせて「えゝ、こなさんとも思はれぬ、この夕霧をまだ並々の傾城と思つておいでか、ほんとの夫婦ぢやないかね。來年は私も二十二になる、十五の年から逢ひそめて、何年になるとお思いか二人の間の子さへ、も少しで七歳になるではないか。本當をいへば今ごろは、一門一家中の手紙にも伊左衛門内よりとかいたとて人もとがめぬ位に知れ渡つてゐることぢや。お前の方から私に恨みがあるといへば、私だつてお前に恨みがある。一体去年の暮から丸一年、二年かけて何の音沙汰なかつたのはどうしたわけぢや。それでどれほどの物案じをしたことか。私しやそれ故に此病になつて、これほどやせ衰へたのが目に見えないか。煎藥と煉藥と針と按摩とでやつと命をつないできたに、たまに遇ふたからは、私の方からこそお前に甘えて見ようと思つてゐたに、まるであべこべで、何といふむごい扱をされるのぢや、一体どうしたのぢや。もし私が心變りでもしてゐたら、ふ

んでばかりおきなさるか、たゞいてばかりおきなさるか。これ死にかゝつてる夕霧ぢや、笑顔を見せて下され、拜みます。え、剛情なむごい人、憎らしや」と膝に引よせて、叩いたりさすつたりして、聲をあげて泣くので、髪はほどける。譯もなく鬚も性根もない有様であつた。

伊左衛門も涙に暮れ、「ヲ、あやまつた。外にさして恨みはなけれ共、命にかへぬ大事の女房、奥座敷の若い者、我物面がむつとして、思はぬ腹立こらへてたも。我とても憂身の體、誠の正體見給へ」と、小袖くるりと脱ぎければ、肌に袷の破れ紙衣、四十八枚彌陀の願、つぎは平等施一切、胸慄ふこそ哀れなれ。伊左衛門涙を押へ、「扱かの悴は無事で里に居る事か、何んとしたぞ」と云ひければ、夕「されば其子を里に遣しと申せしは偽儘ならぬお身の上、苦勞にさせます氣の毒さ、彼の阿波の大盡平岡左近といふ人と、私とが中の子といひかけて塗付て見たれば、人は愚な、まんまとたらされ受取つて、腹は借物武士の種と、寵愛に逢ふと聞くにつけ、身の憂き時は色々の怖い智慧も出るもの」と、語りもあへぬに伊左衛門、「ム、ウ左もあらふ事。去ながら我古の手代共、其子をつき立て、母へ訴訟し、藤屋の家を取立度いとの談合有。どうぞわけをいふて取返す思案が仕度い」と云處に、奥より内儀色違へ、「なふおとましや〜。お二人この話が奥の座敷へ筒拔、お客様は不興顔、直に逢ふていふ事有りと今此處へお出。なふ喜左衛門殿、此方の人」と、皆々怖りひそめく處へ、客は刀を提げ、「ア、是伊左衛門殿夕霧殿、驚く事は少しもない。是其證據」と頭巾を取れば、突出し鬚の下笄

龍甲挿櫛、さしもの粹共、呆れて不審晴れやらす。

【註】○我物面—我物顔と同じ。自分のものゝやうな風をする顔つき。○四十八枚彌陀の願—紙子の四十八枚といふ諺あるが如く、前後に二十枚、左右の袖四枚、之に裏をうって丁度四十八枚の紙を、一々彌陀佛の願の數にあて、紙子をはる意。○つきは平等施一切—一切平等至る處つきだといふ意を佛語にかけたのだ。○ぬりつける—なすりつける。○人は愚か—人間といふものは愚なものだ。○たらされ—だまされて。○腹は借物—新時代の知識あるものにそんなことを今日信するものなけれど、種を如にうえつげごとくにして、子供は生れると信する舊時代の考から、女性の腹を、如の如く、一時の借りの宿と信じた語。○つきたて—もりたて。○おとましや—うとましや、忌はしや。○筒拔—一方か一方へ、まるですつきりきこゑるをいふ。○ひそめく—静になる。○これその證據—驚かんでもよい證據にこれを見せる意。○突出—鬚を鯨骨をもつてふくらました髪結び方。樋口氏説。○下笄—下げ下地とも笄鬚ともいふと、大抵解してゐるが、樋口氏は只下に笄をさした意だと説く。口繪に出したのは笄鬚である。○さしもの粹共—さすがの粹人達も。

【譯】これをきくと伊左も泣きながら、「私が悪かつた、別にこれぞといふ恨みはないが、命にもかへられぬ大事な女房に對して、奥座敷の若い衆が、まるで自分の物顔をするのがむつと癪にさはつて、思はぬ腹をたてたのだから、こらへてくりやれ、我とてこの通り憂い目を見てゐるのぢや、誠のわしの正體を見てくれ」と小袖をとり分けると、肌には袷の破れ紙子のつかつてゐる。それは四十八枚の紙ではつたもので、つぎはぎは一切平等どこにもこゝにもあてられてゐて、寒いので胸ふるひするといふ哀れな様である。伊左は涙をおさへて「さてあの子供は無事に里で暮らしてゐるか、どうぢや」といへば夕霧「されば、あの子を里にやつたと申したのは偽りで、思ふやうにならぬお身であるので、苦勞をかけるのが氣の毒で、阿波の大盡平岡左近といふ人と、私しとの中の子ぢやといつて、なすりつけて見たところ、人といふものは馬鹿なもので、うま〜と欺されて、受取つて行つて、女の腹はかりもの、武士である自分の種ぢや、といつて非常に寵愛してゐるといふ話をきくにつけても、身に心配のある時は、いろ〜と怖ろしい智慧も出せば出るものぢやな」と話してゐる最中に、伊左は「さうでもあらうが、私しの

以前の手代どもが、あの子をもり立て、母へ訴へて藤屋の家をとりたてたいといふ話がある、どうか譯をいふて子供を取りもどす思案がしたいがどうであらう」といふ所へ、奥からおかみが氣色をかへて「まあ忌はしや、お二人のこゝの話が奥の座敷へまるで筒拔にすつかりきこゑる。それでお客様は不興顔で、すぐ出遇つて、いふことがあると、今此處へおいでになる、なう喜左衛門殿」といつて皆びく々々して靜にしてゐるところへ客は刀をさげて来て、「あゝこれ伊左殿夕霧殿、驚くことはない、恐れられることはない、これがその證據ぢや」といつて頭巾をとるのを見ると、張出した鬢の下に笄をさしてべつ甲のさしぐしをして、まるで女の風である。これにはさしもの粹人達もあきれ不審顔でゐた。

客「ヲ、いかにも不審の立つはづ、男に化けたる其間は何の其と思ひしが、女子の姿を顯して此中物申すは、おはもじながら、彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我身事。夕霧殿の假の情、連合の子を誕生とて此方へ請取、いはゞ我が悦ぶ子、腹も痛まず苦勞せず、産んで貰ひし忝さ。あだにもせず守育て、手習、讀物、弓、鎧迄も器用にて、國隣の土佐駒引かせ、乗つた姿は天晴平岡左近が世繼、七百石の主なりと御家中の褒め者、嘸見たからうし見せたり一つはあの子が冥加の爲、夕霧殿を請出し、一所に伴ひ暮さんと、心根も聞かん爲、鐵齧落しつあらぬ態で、只今聞けば我連合をたらし、伊左衛門の子をつき付けたと、聞くよりはつと胸塞かり、夫の武士は廢つた。エ、恨めしい夕霧、男に化けたを幸、飛かかつて刺通し、我も死なふと刀を取るは取つたれ共、死んだ跡で、此雪が傾城に愷氣して、阿房死といはれてはいよゝゝ男の名を出すと、止るも殿御を思ふ故。無い事さへいふ

世のさがなさ。阿波の平岡左近こそ、町人の子を傾城に突付けられたと取沙汰し、殿様の御耳に立てば、よい仕合で御改易、阿房拂か切腹か、死しても悪名消えばこそ。此處を了簡し、あの子を其儘下されば、侍一人の取立、生々世々のお情ぞや。我人我子は大事のもの、殊に思ふ人の子を、思はぬ人の子といふは、何しに心よからふぞ。それは流れの身の辛さ、侍の妻には又此様な憂き事有り。女子と生れし此因果、女御更衣になるとも、うら山しうは思はぬ」と、心の底を口説立て、涙わりなき物語。夕霧夫婦、吉田屋の一家袖をぞ濡しける。

【註】 ○おはもじ—恥しの意の御殿女中などの語。○假の情—連合の子、假りの情によつて、わが良人の子を生んだとて。○我が悦ぶ子—自分で生んだ子の意。○あだにもせず—他人扱にもせず、仇敵扱にもせず。○土佐駒—土佐産の馬。○冥加—幸福。○あらぬさま—女としてはあるまじい姿。○さがなさ—よくないこと。不祥。即ち世人の口の悪さの意。○よい仕合で—よくいつた運で。○御改易—徳川時代武士に對する刑の一つにて、族籍をのぞき、資財をとりあげられるのであつて、蟄居より重く切腹より軽い。○阿房拂—大小兩刀をとりあげ、士籍をとり除き、追放されるを俗に阿房拂といふ。○生々世々—生れかはり死にかはり、現世も後世もいつまでもの意。○我人—われも人も誰しも。○思はぬ人の子—思ふ伊左の子を、思はぬ左近の子とすること。○流れの身—昔遊女は水邊にありて舟にてかせぎしより始るとか。遊女をさす。○女御更衣—共に女官の名。女御は中宮につぎて天子の御寢に侍し、更衣は女御につぎて、御衣を更へることを勤とす。○わりなき—あまりに甚し、限りなき、涙限りなく出る物語。

【譯】 客「おゝいかにも不審の感の起る筈ぢや。男に化けてゐる中は何でもないと思つてゐたが、かうやつて女の姿をさらけ出して此處で物いふは恥かしいことではあるが、かの阿波の大盡の平岡左近が本妻の雪といふのは私し

のことぢや。夕霧殿の假の情によつて、良人左近の子を誕生なされたといふので、私の方へ請受けて、いはば私の悦の子としたのぢや。何しろ腹もいためず、苦勞もせず、産んで貰つたのをありがたく思ひ、他人扱にもせず、守り育て、手習や読み書きや、弓や槍までも教へたところが一々器用で、隣國産の土佐馬を引かせて見ると、それも巧に乗つて、それに乗つた姿は天晴左近の世繼として恥しからず、七百石の主として立派ぢやと御家中のほめ者となつてゐる。さぞ見たくもあらうし見せたくもあるし、それに一つはあの子の幸福の爲に夕霧殿を請出して、一緒に暮らしたいものぢや、それについての心持も聞いて見ようために、おはぐるを落し、女にはあるまじい風態で、此處へ來たものゝ、さて只今聞けば我良人を欺して伊左の子をつきつたのだとやら。それをきくとはつと胸がふさがつて、良人の武士としての面目はすたつた、ゑゝ恨めしい夕霧、今男に化けて來たを幸ひ、飛つて刺し殺して我も死なうかと刀を取るにはとつたが考へ直して見ると、死んだあとで、私しが傾城に愒氣をして阿房死にをしたといはれてはいよゝゝ良人の男前を傷つけることになる。これではならぬと、夕霧を刺すことをやめるのも實は自分の良人を思ふからぢや。それにつけても無いことまでこしらへていふのが口の悪い世人のことであるから、阿波の平岡左近こそは、町人の子を傾城につきつけられたと取沙汰をして、それが殿様のお耳にはいることゝなれば、運がよくて改易になるか、又は阿房拂を食ふか、まづくゆけば切腹申しつけられるかも知れぬ。さらばといつて、死んだとて悪名はきゑはせぬ、考へて見るとかうした情けない破目に陥つてゐるわたし達ぢや、どうかこゝの處を考へて、あの子をその儘下されば、侍一人にとりたて、末永く御情を恩に着て有りがたく思ひます。凡そ誰しも自分の子は大事なものぢや、殊に愛する人の子を、愛してもをらぬ人の子にするといふことは、どうして快よいことであらう。だがそれは河竹の流れの身の辛さであつて、侍の妻にはまた今申したやうな憂いことがある。いづれにしても女子と生れた因果のなさけなさ。たとへ女御や更衣のやうな身分とて、うらやましいとは思ひませぬ。何といふ女の身の悲しいことであらう」と心の底をわつて、涙の限りなき物語をすれば、夕霧夫婦も、吉田屋の人達も、皆袖をしぼつた。

伊左衛門つゝと出て、「ハ、ア賢女かな貞女かな。左近殿とは夕霧故遺恨はあれ共、それは私。拙者もかの悴を力に、出世の望み御坐れ共、武家のお名には替へられず、進ずると云迄もなし。以前夕霧が申通り左近殿の御子息、伊左衛門が子では御坐らぬ」雪「ア、忝い。夕霧殿も左様ぢやぞや」夕「はて主の合點の上からは、私が否とは申されぬ。去ながら、命の内ちよつと見せて下さんせ」と、涙に咽ぶぞ道理なる。雪「ヲ、心得たゝ。萬事胸に込めました。身請の事も吉田屋と近々に談合しませう。あの子が成人するに付、伊左衛門殿も樂み。サア契約の堅めの盃、いよゝゝあの子は此方の子、平岡左近が惣領」さらりゝと手を打つて、廊でござんざ珍しし。日も暮れかゝれば、若黨中間駕籠釣らせ、「阿波の旦那のお迎ひ」雪「是下人も忍ぶ此姿」、元の男となりふり作り、頭巾大小、印籠、巾著雪「亭主さらば。夕霧事は追付是より便宜せよ。萬事頼む」喜「請込ました」と膝を屈める、腰屈める。腰元連れるを引換へて、昇夫が送る大門や、口をきこより奥様の深き情や 三重立歸る。

【註】○夕霧故—夕霧のこと。○それは私—私は私情。○ござんざ—騒がしく賑はしく唄ひはやす意。取引の時にも手を打はやすから、此處は賑に取引の意。○若黨—年若い郎黨。○中間—古くは、侍と小者との中間のもの、後世はしもべの中の頭立ちたるもの。○下人も忍ぶ此姿—下々のものにもかくすこの姿。○腰元つれるを引換へ—普通なら奥様には腰元がつくのだが、今はそれに引かへて昇夫がつく。○口をきこより奥様の—奥きかんより口をきけといふ諺を逆にして「口をきこより奥をきけ」としてこれを奥様に轉したのである。諺の意は人の心の奥をきいたとて云ふものでないから、それよりそのいふ所をきけ、口に漏れるにきまつてゐるからといふのであつて、それを此處では、人の言葉をきくより奥様の深い情で萬事が解決がつく、といふ意。

【譯】 伊左はつと出て「は、あ賢女だ、貞女だ。左近殿とは夕霧のことで恨はあるが、それは私事であり、又あの悴を力に自分は出世したい望ももつてはゐますが、武家の名といふものはそれにはかへられませぬ、だからあの子を差上げることは申すまでもありません。前に夕霧が申す通り、左近殿の御子でござつて、私の子ではござりませぬから御安心下され」。雪は「あ、それは忝ない、夕霧殿もさうぢやね」。はて主人が承知の上からは、私がいやとは申されませぬ。けれども、命のある内にちよつと丈見せて下され」と泣く。いふのも尤である。と雪は「心得た。萬事は胸に入れておきます。身請のことも此主人と近々の中によく話し合ひませう。あの子が成人するにつけても伊左衛門殿も楽しみであらう。さ、これで契約の堅めの盃をかはしませう。いよ、あの子は此方の子で、左近が長男でござりますぞ」といつて、さりり／＼と手を打つて、廊での取引契約はまことに珍らしい。その中に日も暮れかかるので、若者や中間たちが駕籠をつらせてやつて来て「阿波の旦那のお迎ひにまゐりました」といへば、お雪は「これ下の者にも隠す姿ぢや」といつて、なりふりのつくりを、元の男の妾となつてしまつて、頭巾や、大小の刀や印籠や、巾着などをちやんと身につけ、「亭主さらはぢや、夕霧の事は追附けこちらからよき様に取計らはう、萬事たのむ」。すると亭主は「承知しました」と膝をかどめ腰をかどめる。そして女故普通なら腰元をつれるのだが、それに引かへて、昇夫が大門を送つて出る、かうして奥様の言葉をきくよりか、深き情けで、凡てが片づいて、歸つてゆくのである。

中之巻

春や延寶六年と、明渡る世も昔の京、難波の今朝は珍しき、妻子引具し舊冬より、上本町の道場の玄關構借座敷、お國の御用新玉の、此處に年取るまめ男、阿波國平岡左近と宿札も、門の飾に時めきて

武家は綺羅有る春なれや、表の物見に女中の聲々、「申し奥様、珍しい大坂の正月を始めて見物致し、お國へ歸つて好い話、是もおかげ」と悦ぶにぞ、雪「ヲヲ／＼其方達が云通り、主のおかげは忝い。御用に就いて左近殿、我々連れて、僅か逗留の旅宿へ、今朝から禮者の絶へぬ事、皆殿様の御威光。左近殿は源之介連れて、天満とやらの神明様へ恵方參、親の子としてほらしい、六ツや七ツで馬に乗る。追付左近殿の名代、御奉公勤めるを見るで有ふ」と、御悦びの處へ旦那の御歸り、前供走る黒羽織、すつ／＼素鎗、栗毛の馬、のつし熨斗目に麻上下、親に續いて源之介、明て七ツの乳のまふ。饅頭形のし刺も、目元賢さうなる松、千代を嘶ゆる土佐駒に、手綱搔繰りしやん／＼しやん、轡の音はりん／＼、凜と坐りし袴腰、物見の前を乗廻せば、母「これ／＼源之介、戻りやつたか、目出度い、／＼。嘸馬上が寒からふ。溫柔い出來しやつた」と、招かれて源之介、「申し母様、恵方參に天満へ寄つて、これ買うて來ました」と、土人形の天神、手綱に持添へ、「私がこれ持て居るのを、道通が見付けて父様を見知つて居るやら、親は太夫買ひ、子は天神買ふと云て笑ひました。おれにも大きな太夫買ふて下され」と、あどなき詞に、こし元共氣の毒がり、「コレしゐ／＼」と目ませすれば源之介、「ヤイ駄賃馬の様にしゐしゐとは不調法な。侍の乗馬は、是此様にはい／＼、はい／＼」と、親の心も白泡嚙せ、門内へ乗入りし振り、いたい氣に溫柔しし。

【註】○延寶六年—夕霧この正月六日に死せるを、作者殊更に記し出したものと思はる。○昔の京—その昔仁徳帝が都を置かれしことをさす。○道場の…—一本此三字なし、又高野博士の詳解本にはのがをととなつてゐる。各多少の差あれど、のとして解すると、武藝道場の玄關構を借りての意。○御用あら玉の—御用のあらぬを新玉にかく。○豆男—忠實な男。此意を節分の豆まきの豆男にかけ、又豆から次のあは(粟)を出す。○門の飾—門松などの飾をいふ。○時めく—時機にあひてはえ榮ゆ。○綺羅ある春—きらびやかな春であるわい。○物見—物見をする窓。○天満とやらの神明—西天満の神明宮、天照大神をまつる。○惠方參—年の始に其年の吉方と定まれりといふ方の神社などへ福徳をいのりにまゐるをいふ。○しほらしい—あひらし。○すつす—槍を振る形容。素槍にかぶせた文飾。○素槍—双の直ぐな普通の槍。○のつし—男のあるく重々しい様をのつし—と形容し、それをのし目に續けたもの。慰斗目は練糸を經に、生糸を緯にして織つた無地の絹布に、腰のあたりだけ縞を織り出したもの、賀服に用ふと。○明けて七つの乳のまふ—あけて七つになるので乳のまふ、饅頭ほしいといふ位のこといふべきを、すぐに饅頭なりの中刺とつゞけた。○うなぬ松—稚松、小松。○凛とすわりし—上のくつはの音からかけて凛然とすはるといふ。○土人形の天神—こゝでは陶器の菅公をいふ。○子は天神買ふ—此天神は菅公と女郎とを掛けて悪口をいつたのである。即ち女郎の中、大夫が最上位で次を天神といふ、(揚代二十五夕)。○あどなき—あどけない。無邪氣な。○目ませ—目くはや、目で知らせる。○白泡かませ—白泡をはかせるは巧な乗りてのこと、せらる。心もしらぬを白にかく。○いたいけ—いとけなく、可愛い。

【譯】延寶六年の春があけると、昔の都である難波の今朝は珍らしいことである。妻子をつれて去年の冬から、上本町の武道修業場の玄關構を借りて、お國の御用のない新年を此處に來て年を取る忠實な男は、阿波國平岡左近と記した門札をかけ、それが門飾りにつらあひ、時にふさはしく榮えて、武家は如何にもきらびやかな春らしく思はれる。折から表の物見臺に女中達が「申し、奥様、珍しい大坂の正月を始めて見まして、おかげで、お國へ歸つてのよい話しの種になります」と言ふ。奥方雪は「お、そち達がいふ通り、御主人のおかけはありがたいものぢや左近殿は御用があつて我々をつれて僅か御逗留なさるのぢや、その旅のお宿へ、今朝から年始の禮に來る人の絶えぬこと、これも皆殿様の御威光からぢや。左近殿には子供の源之介を連れて天満とかの神明様へ惠方參りをなされたのぢやが、親の子ほどあつて、源之介の可愛いことはどうぢや。六つや七つで馬に乗る、あれでは今に左近殿の

名代として、御奉公をするやうにもなれるであらう」といつて悦ぶ所へ、主人の左近が歸つた。お先に立つた黒羽織の男、すつと素槍を音させる男の後に、栗毛の馬をのつしと歩ませて、慰斗目に麻袴をつけた親についで源之介が、明けて七つで、まだ乳のまふ、饅頭ほしいといふ年、ありながら、饅頭なりの中刺も、目元も賢さうな若松のやう風にて、千代八千代といなく土佐駒にまたがり、手綱をしゃんとくかいくつてりんと、くつはの音をさせ、凛然と坐つた袴腰しで、物見の前を乗り廻すのを見ると、母のお雪は、「これ、源之介戻つたか、目出度い、さぞ馬の上は寒からう、おとなしくして、よくいつて來たな、出來した」と招くので、源之介は「申し母様、惠方參に天満へよつて、これを買つて來ました」と土人形の天神様を手綱と一緒にもちながら、「私がこれをもつてゐるのを、道通る人が見つけて、父様を見知つてゐるのか、親は大夫買ひ、子は天神買ふといつて笑ひました。私にも大きな大夫買つて下され」と無邪氣な詞をはくと、腰元どもは氣の毒になつて、「コレしい」といつて目くはせして笑を制すると、何も知らぬ源之介は、「やい、駄馬のやうに、しい」とは何といふ不調法な聲をかける。侍の馬はこれこのやうにはい、と聲をかけるものぢや」と親の心のきまり悪さも知らず、駒に白泡をはかせ、門の内へ乗り入れた恰好が、いかにもかはゆくおとなしいものであつた。

今の詞にこし元衆、口をとちて奥様の機嫌を窺ふ體なれば、雪、是々源の話の聞いたか。道通が左近殿を太夫買と云ふたげな。此前大坂お屋敷役の時、新町通ひに夕霧と云ふ太夫に馴染をかけ、源之介を設けたは定めて皆も聞きつらん。人の見知るも道理。大名高家も母方の吟味はなし、大事なとはいひながら、あの子の心は、此雪を産の母と思ふて居る。必々夕霧が子と云ふ噂禁制ぞや。其夕霧をも請出し、あの子がお乳に置く筈。傍輩並みにあしらや」と、仰せも果てぬにこし元中口々に、「ア、奥様の

餘り結構過ぎました。我々がなんぼ沙汰を致さず共、彼の傾城のばしやれ者、それをいはずに居ませふか。お袋振て鼻高ふ、お家をありたい儘にして、奥様を踏付るは今の事。未だそれ計か下地がにやこい旦那様、小舌たるふ仕懸たら、ぼつかりと喰付いて、田も遣ふ畦も遣ふで、奥様はうつそり鼻明けて仕舞んしよ。小無益しいあた分の悪い。こりや御無用に遊ばせ」と、焚付らるゝ女心、雪「ア、いへば左様じゃ。おれはいかい阿房じゃ。いのりも除たい戀の敵持つて往て當がふは、盗人に藏の番、磁石に針、皆に氣を付られて、はやもや〜と腹が立つ。後に悔の出るは定、請出す事を止め遣ふ。皆出かいた、よふいふてくれた」女中「扱は彌々止めになされますか」雪「はて止めにせいで何んとせふ」女中「ア、氣がさつぱりと成りました。お林殿よい氣味か」林「私や痞が下りました」「おしゆん殿は何んと」しゆん「此方や金拾ふたより嬉しい」と、身に徳もなき法界格氣、是ぞ女の習ひなる。

【註】 ○お屋敷役―大名の領地から運送する米を受け入れておく處を藏屋敷といつた。其事務で出張滞在中の意。○高家―身分の高い家。○大事ない―差支ない、不都合ない。○お乳―お乳の人にて、こゝでは養育掛。○結構過ぎました―あまり御心がよすぎます。○はじやれ者―せいたく者、しまりないきやしやな者。○ありたい儘―したい放題。○にやこい―女にあまい、もろい。○小舌たるう―あまえて、でれ〜と。○田もやらう…言ひなりになる意。○うつそり―うつかり、ぼんやり。○鼻あく―あてがはづれる。失望する、がつかりする。○小むやくしい―益にもたぬ。○あた分の悪い―あたは助勢語、分は割。割の悪い意。○焚附ける―おだてる。○盗人…よき手引の意。磁石に針がよくすひつくことから、これも手引の意。○もや〜むか〜。○定―必定。○いのりものけたい―祈り殺しもしたい。○法界格氣―自分のことでもないに、たれかれなしにりんきすること。

【譯】 今の子供の言葉に、腰元衆は皆口をとちて奥様の機嫌をうかぶ様子なので、お雪は「これ〜源之介の話を書いたか、道通る人が左近殿を大夫買といふたさうな 此前大坂藏屋敷勤の時、新町通をして夕霧といふ大夫になじみて、源之介を設けたといふ話は定めし皆もきいたであらう。道通る人が知つてゐるも道理ぢや。一体大名や身分の高い家でも、餘りに母方の吟味はせぬ習だから、差支ないといふものゝ、あの子の心では、私を産みの母と思つてゐるやうぢや。必ず〜夕霧の子だといふ噂はすることなりませぬぞ。實はその夕霧をも請出し、あの子がお乳母とし養育掛としておく筈ぢや。朋輩なみにあしらつてやりやれ」と云ひも終らぬ中に、腰元達が口々に「あゝ奥様の氣前があまり善過ぎます。私共がなんぼ沙汰をしなくとも、あの傾城のだらしなやが、それをいはずにゐませうか、屹度自分が母親ぶつて、鼻高々と、お家をしたい様にして、奥様をふみつけにすることは今のことでせう。まだ〜そればかりか、もと〜どだいが女に甘い旦那様のことぢやから、あまえてもちかけたら、ぼかりと喰いついて、田地もやらう、畦もやらうで、奥様はうつかり失望してしまはれませう。役にもたぬ、割の悪いことおやめなされませ」とおだて上げると、女心のお雪「あゝ、いはまあそのやうなものぢや、私はゑらい阿房だつた、祈り殺しもしたい戀の敵をもつて往つてあてがふのは、盗人に藏の番をさせ、磁石に針を近づけるやうなもので、ばか〜しい手引をすることになるのぢや。お前達に氣をつけられてさへ、もうむか〜と腹が立つ。これではあとに悔みが出るにきまつてる。請け出すことは止めよう。皆出かいた。よくいふてくれた。」「ではいよ〜おやめになりますか」「はて止めにせいで何とせう」「あゝこれでさつぱりしました、お林殿はよい氣味ではないか」「私や胸のつかへが下りました」「おしゆん殿はどうじゃ」「私はお金でも拾うたより嬉しいうござんす」と何の徳にもならぬに、他人の事に格氣をしてゐる。これが女といふものゝ習である。

雪「あれ北から十文字の道具、御藏屋敷の小栗軍兵衛様年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅い。それや〜」と物見の簾下す間に早や玄關に、「物まう」家人「どれい」「小栗軍兵衛御慶申」家人「旦那幸

宿に有り。いざお通り」と云ひければ、軍兵衛玄關に立て、「是家來共、御用に就いて左近殿と申合する事有、暫く隙が入るべきぞ、屋敷へ歸つて八ツ時分迎ひに來い」家來「ない」小栗「其中少早く來い」家來「ない」小栗「油斷するな」と入りければ、若黨始め草履取、挾箱、皆々宿所へ歸りしが、道具持の槌右衛門、一人残つて臺所覗き、「誰ぞ頼みませふ。飯焚の竹呼出して下され」といふ處へ、馬取の角介苦い顔して、「ヤ槌右衛門わりや見事武家に奉公するかやい。此角介が僅な切米の内、五百五十と云錢を取替た。冬年一言の斷りもせず、今も先身に逢ひ度いと云ふべい處、竹を呼出しくれとはの太い者だ。錢の濟む迄是を取る」と、鎗の柄に絶付く。槌「待て角介、鎗持が鎗を取られては、槌右衛門が首が無い。五百や六百で賣る首じやない。成らぬ」角「ヤア取つて見せふ」と競合ふ最中、

【註】○十文字の道具―鎌倉足利時代には弓矢を調度といひ、江戸時代には鎗を道具といつた。こゝは即ち十文字形の槍をいふ
○お蔵屋敷―前の蔵屋敷の處で説くごとく、大名の領地から運送した米を入れおく所。多くの大名が大坂に設けた。○物もう―物申す。○どれい―誰れの轉化。○八つ時―今の午後二時。○ない―はい。○挾箱―衣服を入れる箱。口繪参照。○道具持―槍持。○馬取―馬の口を取るもの。○切米―扶持米を金錢にかへて渡すを切米といふ。○冬年―前年の暮。○身に逢ひたい―我にあひたい。○の太い―圖ぶとい。大胆な。

【譯】「あれ北から十文字の鎗が來る、お蔵屋敷の小栗軍兵衛が年首の禮に御いでなのぢや。一門中でもあの人は堅い人ぢや、それく」といひつゝお雪が物見の簾をおろす間に、はや玄關に「物もう」といふ。家人が「どなた」といへば、「小栗が御慶を申しにまゐつた」「旦那が丁度御いで、いざお通り下され」といへば、軍兵衛玄關に立つ

て、「これ家來共、上の御用について左近殿と申合せすることがある。暫くひまが在る、屋敷へ歸つて、二時頃迎ひに來い」「承知仕る」「其中少早く來い」「はい」「油斷すな」といつて中にはいれば、若者を始めとして、草履とり、衣裳箱持、皆家へ歸つたが、鎗持の槌右衛門は、一人残つて臺所をのぞき、「おたのみ申す、飯焚の竹を呼び下され」といふ所へ、馬の口取りの角介が苦い顔をして出て來て、「や槌右衛門、お前は立派に武家に奉公するか、おれの僅かばかりの切米の内、五百五十文といふ錢を取りかへてやつたに、去年の暮にも一言の挨拶もせず、今も先づこのおれに逢つて挨拶したいとでもいふべき所であるに、竹を呼出してくれとは圖太い太だ。錢勘定をすまず、まして之を取つておく」といつて鎗の柄にすがりつく。槌右は「さて角介、鎗持が鎗をとられては首がなくなる。五百や六百の金で賣れる首ではない、駄目だ」角介「や、とつて見せう」と競争する中、

竹走出で、「ヲウ角介殿道理じや。錢は竹が濟す、勘忍して下され。エ、情なの性悪男奴や、世間を見て恥を知りや。お小人町の久六は、此方より若い人、八軒屋の龜と只た一年念比して、小錢ためて宿持つて、冬年も鶴が橋のお婆々へ、大きな鏡に鮪添へて据へられた。藤の棚のねぢ兵衛は、此方程鎗は振らね共、お祓ひの練衆御番替り、人の氣に入り雇はれて、眞性者と云はれた故、片町のふりを内へ呼入れ、師走に廣めが有つたぞや。是でこそ女房の肩もいかるはいの。此方と言交して明けて四年、給分一文身につけず、皆此方に入上げる。それに何んじや、よい年して、長屋へ比丘尼引入れ、日が暮れると濱せせり、まだ其上に、稻荷邊りの裏屋小路を覗き廻り、揚句に此比は、夜見世狂もついたげな。私とても木竹じやなし、格氣も仕度い、腹も立つ。エ、憎いとは思へ共ア、そうじやな

い。女子に生れた因果じや、男のさがを顯すまいと、随分私が身を約め、三度付ける油も一度付け、雪駄はくを草履にし、草履はくを跣足で仕舞ひ、鍋釜の墨搔くにも此方の髭に入ると思ひ、よい處を除て置く。我身の事には元結一筋買はぬは、男を大事にかける故じやないかいの。女房には苦勞をさせ、榮耀が余つて色狂ひ、聞へぬ人じや」と縮泣に、恨み口説くぞ不便なる。

【註】○念比して―私通しての意。○鏡―鏡餅。○めぐろ―鮪のこま、大阪の方言。○据える―出す、御馳走する。○槍はふらねども―昔槍持の奴は、主人のお供をして往來する際槍をふつたもので、代りのものに之を渡す時には、「まつかせ」の合詞で十分振つて投げてやる、代りの者は槍の頭がゆれて、飛んでくるのを受取つたもので、此振り方で切米に差があつた。神社の祭禮の練りにも此槍をふつたものである。○お祓の練衆―大阪でお祓さいへば住吉祭に限つてゐるが、此處は一般に夏祭の時の練物に出る人々の意。○お番替―江戸から交替して來る大坂城の番士。雇はれる……は此番士などに臨時雇はれて鎗持するをいふ。○眞性者―眞に正直なもの。○ふり―袖のふりから來た年若い女の意でなく、女の名だ。○肩もいかる―肩身がひろい。○給分―給金。○比丘にん―比丘尼のなまりにて、比丘尼の装した賣女をいふ。○演せせり―大坂では川岸を濱といひ、此川岸に惣嫁がゐるから、之をあさることを濱せりといふ。つまり地獄あさりなどの意。○稻荷あたり―舊大坂城の南、玉造稻荷神社附近のことにて、元祿寶永の頃、藤の棚觀音から、此社のあたりの裏屋小路に、闇屋さいふものあり殊に賤しき賣女がゐた。○夜見世狂ひ―廓の夜見世に行つて遊女ぐるひをすること。○男のさが……男のよくない持前を世間に知らせまいと。さがは缺點さか悪い癖の意。○身をつめ、儉約をし。○鍋釜の墨かくにも―其頃鎗持の奴などは、いかめしく見せん爲に、釜の煤にて、つくりひげをなし又ひげを黒くぬつた。○締泣き―じぼり泣き。聲をたてぬやうに押へて泣くこと。

【譯】お竹は走つて出て、「お、角介殿のいやる通りぢや、錢は私がお返しします、勘忍して下さい。え、情けない性の悪い男ぢや、世間の人を見て少しは恥を知るがよい。お小人町の久六さんはお前より若い男ぢやが、八軒屋のお龜とたつた一年計り通じて、小錢をためて家をもつて、去年の暮にも鶴が橋のお婆々へ、大きな鏡餅に鮪をそへて送つたとやら、又藤の棚のねぢ兵衛さんは、お前さん程うまく鎗はふれぬが、夏祭の練物に出る人々とか大坂城の番士の替り役に、人の氣に入つて、臨時雇になつて眞實者といはれ、片町のおふりを内へ呼入れて、寺師に廣めをしたぞや、これでこそ女房の肩身は廣いといふものぢやわいの。私はお前と言ひ交はして明けて四年になるが、給金一文も自分にはつかはず、皆お前に入り上げてゐる。それに何ぢや。い、年をして、長屋へ比丘尼姿の賣女を引入れ、日が暮れると惣嫁あさりをやる。またその上に稻荷神社附近の裏屋小路をのぞきまはつて、その果は、此頃では廓の夜見世で遊女狂ひもするとやら、私とてどもとく、木や竹ではないから、りんさもしたいし腹も立つ。ゑ、僧いとは思ふが、又思ひ返して、さうぢやない、これも皆女に生れた因果ぢやからと、お前のよくない氣前を世間へさらすまいと、随分儉約をして、三度つける油も一度しかつけず、雪駄のはきたいのを、草履でがまんし、草履をはきたいときには跣足で歩くやうにし、鍋釜の煤をかくときにも、お前の髭をつくるに思つて、よい處はのけておくやうにし、自分の事には元結一本さへ買はぬやうにしてゐるが、それも皆お前を大事にするからではないか。それをお前は女房には苦勞をさせて、榮耀のあまりには色狂ひ女狂をするなんて本當にわけの分らぬ人ぢや」と聲をひそめて恨み泣きするはふびんの至りである。

竹「是此處の御奉公は、中途に參つて馴染はなし、お國迄も御内衆が惡名立てるが悲しい。此上張の袴を脱ぐ、角介殿これで濟して下され」と、帯を解かんとする處へ、おこし元のりん走出で、「是々竹、そなたの心底奥様物見よりお聞なされ、さて、奇特な。上々も女たる身の鏡と、殊なうお感じなさるゝ。奥様にも少お氣の濟ぬ事あれ共、そなたを手本にお心が納つてお嬉しさ。師匠共思召し、御褒美に此鳥目百疋下さるゝ。さて角介は慮外な。餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重て

此事云出さば旦那様へ仰せられ、討首になさるゝとの御意じや」といへば、あまた角介佛頂面、竹は悦び、「ア、冥加もない。有難い兎角お禮はよい様に」と、戴きく、「これ槌右衛門殿、是持つて往つしやれ。何を見込に此様に可愛ぞ」と、譬の裸百疋を、直に男に鎗持に、過たる妻が 三重優しさや。

【註】 ○お内衆—お内の人々。○殊なう—殊なる、殊の外なる。○鳥目百疋—鳥目は錢、百疋は青銅錢千文即ち一貫文。金四分の一兩即一分にあたる。犬追物の時、河原者が犬を百疋はなてば一貫文、五十疋放てば五百文得たといふより来る。錢を鳥目といふのは鳥の目の如く圓き故から来る。○慮外な—浪籍 無禮な。○あたま角介—あたまをかくさ角介さなかく。○佛頂面—顔形を動かさず、笑ひもせざるをいふ。○冥加もない—勿体ない。冥加な仕合な。○裸百疋—男は裸百貫といふ諺あるが、それを百疋に轉じたので、竹が裸にならんとした時、百疋をもらつて、それをすぐに男にやるさいふを槍持にかけたのである。

【譯】竹はまた言葉をついで、「此處への御奉公は中途で来たのぢやから、他の人との馴染はない。又お内の人々が、私の國までも悪くいられるのは悲しいことぢや。それでもお前の爲とあらば、此上張の袷をぬいでわたすから、角介殿借金の方はこれですまして下され」といつて帯を解かうとする處へ、腰元のりんが走つて出て、「これ竹、そなたの心の底を奥様は物見でおきゝになつて、さてく奇特なことぢや、上のものでも、女といふ女の鑑である、と殊の外お感じなされた。そして奥様御自分にも少し御氣に入らぬことはあるが、そなたを手本として、お心が納りついで、嬉しいとおのこと。そしてお前を師匠とも思召して、御褒美に此錢一貫文を下さるのぢや、さ角介は無禮な、よその大切な、お鎗に手をかけるとは亂暴至極ぢや、二度とこのことを云ひ出さば、旦那様へ仰せられて、討首になさるとのことぢや」といへば、角介は頭かきく、不平相な顔つきである。竹は悦んで、「あ、物体ない、ありがたい、兎角お禮は、よき様に仰せ下され」と戴いて「これ槌右衛門殿これをもつて往なつしやれ、本當に何の見

込があつてこんなに可愛いのであろ」と、裸になる所であつた身が、貰つた百疋を直ぐに男にやるといふ、鎗持には過ぎた妻の優しいことではある。

人の情に夕霧が思ひも寄らぬ此春の、子の日を根から根引の松に、かゝる藤屋の伊左衛門、我子の顔の見まほしく、ならばぬ駕籠の片端を、隠れて忍ぶ頬冠り、夕霧も簾越し、子を見る今日の嬉しさより、夫に別るゝ物憂さは、上本町にぞ著にける。宿札を見て喜左衛門、「誰方ぞ女中方頼みませふ」ハウ何方からぞ」と腰元出れば、喜、私は九軒町吉田屋喜左衛門と申者、奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事、随分と駈廻り、金子は當月一ぱいに、お渡しなさるゝ約束で、多いやちふと首尾成り、只今是へ同道。扱々節季の忙しい中私の働き、春の用意、正月のお客の詮索、錢金の請拂ひ押詰めての節分」大豆で打出す鬼の首取つた様にぞ申ける。

【註】 ○根引の松に—古き頃、正月初の子の日に人々野に出て、小松をぬきとりて千代を祝ひ、之れを小松引といった。それから頭韻を用ひて、子の日を根から根引(身請)の松(太夫)とつけたので、遊女の最上位を太夫。秦の始皇が松を太夫に奉したと、いふことから、遊女の太夫を松とも松の位ともいふ。故に「子の日に身請される太夫夕霧に」の意。○松にかゝる藤屋—松と藤とからみ合ふ意からいつた。○簾越し—駕籠に乗つての意。上に駕籠の片はなとあるから、駕籠とくり返す代りにいつたので、簾越しに子を見るとか、夫に別れるといふのではない、むしろ駕籠の簾の中で物案じながらの意。○上本町—例の左近の家のある町、上はまさるとか上越すの意から物憂さがまさるとつづく。○えいやをうと首尾成り—えいは力をこめる掛聲、をうは答の聲。即よし來たと、早速話の始末がついての意。藤井博士は之を「えいややつ」との意ととつてゐるが、何かの感違かな。○正月のお客—正月買をしていろゝ澤山かゝる費用を出してくる客。○大豆で打出す鬼の首—節分といつたから、豆打ちといひ

豆をなげて、鬼は外福は内と、鬼を打出し、鬼の首をとるといふ諺にかけて、忙しい中に、大手柄をした意。

【譯】人の情けによつて、此春の子の日に根から根引される松の位の夕霧にからまる藤屋の伊左衛門は、我子の顔が見たく、なれぬ駕籠かきとなりて、駕籠の片端を、頬かぶりして忍びながらかついでゆく。夕霧も自分の子を見るといふ嬉しさよりも、此日を限りに請出されて、簾越し、即ち駕籠に乗つて、色々のことを案じながら、夫に別れねばならぬことを思ふと、物憂い心の方が越して、ふさぎながら上本町の左近の家についた。さて家につくと喜左衛門は門札を見て「どなたか女中方にお頼み申します」「どちらから」と腰元が出て来る。「私は喜左と申すもの、奥様のお頼にて、扇屋の夕霧を請出す爲、随分かけまはりまして、金は此月一ぱいにお渡し下さる約束で、さつそくに話がまとまり、只今これへ連れてまわりました。さて、季節の忙がしい最中どれ丈け働きましたことか、春の仕度だの、正月買のお客のさがし求めだの、金銭の受拂だの、押つまつて節分のことだの、それは、大變でござりました」とさもないそがしい中に、鬼の首でもとつたやうな物云ひであつた。

女中「成程奥様にも其お噂、扱はあれが傾城どのか」と、駕籠を覗いて、「ハウアウ傾城と云もの始て見た、矢張常の女子じゃ」と走入て、「奥様々々、傾城が参りました」雪「ヤア喧ましい。皆物見から聞て居た、傾城、いふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人、侍町人の歴々に交際ふて、心も至り目恥しい、粗相して笑はれな。盃の用意せよ」と、ひそめく聲に、左近勝手へ入りければ、雪「是なふ豫て申せし夕霧の事、吉田屋の喜左衛門が埒明け、連立ち來たとの案内、なんと此雪が様な、恪氣せぬ氣の通つた女房は、御坐んすまいが」と笑はるれば、「ヲ、御奇特」。去ながら座敷に堅い軍兵

衛が居らるゝ、今内へは呼ばれまい。表に置いても目に立つ。何ふか斯ふか」と思案半ば、門前には喜左衛門、「ア、いかふ冷たい。夕霧様は御病後、早ふ内へ入れまし、火に成共あてましたい。頼みませふ」と呼はる聲、若黨、中間ばらくと、「小栗軍兵衛迎ひの者」と奴の聲、揚星の聲遣手はなくて傾城に、鎗侍交り喧しし。

【註】○けいせんけいせん即傾城と同じ。○心も至り目恥しい物の道理にもよく通じ、何事にも行届いてゐるを心も至るといふ。又目恥しいとは、大人は目恥かしげすは口恥かしといふ諺から出たもので、心の至つた動作舉動にも落度ない、見るもこちらの心が恥かしい處ある意。○ひそめく聲ひそかにさやく聲。○氣の通つた女粹な女。○御奇特感心々々。○やり手やり手は此處にゐないで、鎗侍がゐる。やの同聲三つ重ねて如何にもぎやかにしてゐる。

【譯】女中は「成程奥様にもそのやうなお噂さでござりました、さてはあれが傾城どのか」と駕籠をのぞいて、「はう傾城といふもの始めて見た、矢張普通の女子ぢや、奥様傾城がまわりました」と走入る。「やかましい、皆物見から聞いてゐました、傾城々々いふものではありません、今からは源之介の乳母です、あの人は侍や町人の立派な人達につき合つてゐただから、物の道理も分り、見るも恥かしいほど、動作などにも落度のない人ぢや、粗そうして笑はれぬやうにしやれ、盃の用意しや」とひそかにいふ聲についで、左近が勝手の方へ來ると、「申し、かねて申した夕霧の事、喜左が今日埒をあげて連れ立つて來たといふ知らせでござります、何と此雪のやうな恪氣をしない粹な女はござんすまい」と笑つていふ。「お、感心、だが座敷には物堅い軍兵衛がゐる、今内へは呼べない、といつて表へおいても目立つ、どうしよかかうしようか」と思案最中、喜左の「あゝいたく寒い、夕霧様は御病後であるから、早く内へ入れて下され、火にでもあたらせたい、頼みます」と呼ぶ聲がする。そこへ若黨中間ばらくと出て、

「小栗の迎ひ」といふ。奴の聲と揚屋の聲と入れ交り、遣り手でなくて、傾城に鎗持がついたやうで、やかましいこと〜。

や、日も長けて軍兵衛、「お暇申す」と立出る。左近親子送つて出で、色代あれば軍兵衛、「ヲ、源之介殿おとなし御座るよ。追付け殿の御用に立召されふ。随分弓馬の稽古精出し申そふぞ。永日〜」と暇乞して歸りけり。左近親子玄關に立休ひて見送る體、伊左衛門遙に見て、「あれは我子か、昔の伊左衛門ならばひとの子に爲さふか。大小こそ指せず共、數多の手代、若い者、若旦那とかしづかせ京大坂の町人の誰にかは劣るべき。侍とても負けまじき。母親の駕籠を父が昇き、我子の門にはひつくばふ。我親に背きたる其罰、」ひつしと思ひ知り、悔み涙に頬冠の、手拭浸す計りなり。奥方も端近く、「なふ〜喜左衛門か。其駕籠是へ」と他事なき風情、それを力に夕霧は、駕籠も思ひも漏れ出で、「平様お久しう御坐んす。奥様の御慈悲にて、あの子の乳母に付けらるゝ筈ながら、のらぞんざいの私しが身、氣色もしか〜抄らねど、先和子様を見たさに」と、つく〜と打守り、夕「あれ喜左衛門様、さても氣高いよいお子や。聞及びしよりおとなし様、常體の者の子が、七ツや八ツで斯ふ有ふか。人は筋目が恥かしい。流石父様のお子程有る。父様のお心がさこそと推量せらるゝ」と、表の方へ目を配れば、伊左衛門も首延し、魂脱けて緑子の、袖に飛入るばかりなり。左近夫婦は氣も付

かず、「サア喜左衛門、先少し成共金子渡そふ。いざ座敷へ。是源之介、あの人は我身の乳母、馴染をかけていとしがり、此母も同然に、大人になつても乳母は見捨ぬものじやぞや。吉田屋此方へ」とにこやかに、打連れ座敷に入りけり。

【註】○日もたけて一時間もたつて。○色代一式體のあて字、車軾に手をつけて禮をすること、式は車上の禮、禮記の語から出て會釋又は挨拶の意に用ふ。兩手をつけて禮すること。○永日一春永の意。年の始に、三四月頃の日の永き頃をさして、又、暖になつて出遇ふ意。○若い者一下に「に」の字を入れて見るべし。○負まけまじき一下に「ものを」を入れて見る。○母親の駕籠を父が……女房の駕籠をおれが……といふべきを子の立場からいつたのである。○他事なし一何げなし。○駕籠も思ひもれ出で一駕籠からも出る、思ひも洩れる。○のらぞんざい一のらは野らそだち、ぞんざいは禮にたらはぬ。○しが〜てきばきと。○常體一なみ〜。○筋目が恥かしい一筋目は家筋、家柄素性、子供の血縁がよいとこのやうに立派な子になる、それを思ふと自分が恥しい。○父様一左近をいつてゐるが如く見せて、實は伊左をさしてゐるのである。故にその後ですぐ表の方へ目をやつてゐる。○みどり子一赤ん坊

【譯】や、時間もたつて、小栗はお暇申すといつて立出ると、左近親子は送つて出で、挨拶すれば、軍兵衛は「お源之介殿はおとなしい、やがて殿様のお役に立ちなされる、弓馬の稽古よくしておかれよ、また來ますぞ」といつて歸た。左近親子が、玄關に立休みて見送る體を、伊左は遠くから見、あれは我子か、以前のおれであつたら、どうして人の子になどするものか、大小こそさ〜ぬにしても、澤山の手代や若い者達に若旦那様といつてつかへさせ、京坂の町人に誰にとてひけをとるものか、侍とて負けはすまいものを、女房の駕籠をおれが自分でかつぎ、我子の門に這ひつくばう。これも自分の親にそむいた罰ぢや、と、その罰を思ひ知つて、後悔の涙に頬冠の手拭をひたす計りであつた。奥方にも端近くよつて、「のら喜左か、その駕籠こちらへ」と何げなき様子である。その言葉を力に、夕霧は駕籠を出で、思ひも洩らして「平様お久しうござんす。奥様の御慈悲で、あのお子の乳母

におつけ下さる筈ながら、のら育ちの無作法者の私としたことが、氣色もてきばきと捗りませんが、先づ和子様を見たまにかうして参りました」といひながらつく／＼と見て「あれ喜左さん、さても氣高い上品な、よいお子ぢや、聞いたよりかおとなしくゐらせられる、並のものゝ子が七つや八つでかう有るものか、人間といふものは血統が悪いと恥かしいものぢや、いや血統がよいと見事なものぢや、さすがお父様の（暗に伊左をさす）子程ある。父様の心がさぞ嬉しいことであらうと推量出来る」といつて表の方へ目をくばると、伊左も首を延し、魂はぬけて子供の袖の中へ飛入る程である。左近夫婦は氣もつかず、「さあ喜左、先づ少しでも金を渡さう。さ座敷へ通りや。これ源之介あれはお前の乳母ぢや、なじんで、慕つて、お母さんも同じ様に、大きくなつても乳母は見すてぬものぢやぞ、喜左此方へ來や」とにこやかに笑つて座敷に入つた。

夕霧四邊を見廻し、「なふ懐しや。先きから抱付度ふてならなんだ」と、縫付いて泣きければ、伊左衛門も走入り、思はず知らず、「やれ可愛の者や」と抱付く處を、源之介飛退き、「やい駕籠昇奴、むさいなりて侍に抱付く慮外者奴」と、脇差に手をかくる。伊「ア、／＼申、眞平／＼御免なりませ。私が忤に、丁度お前程なが御坐れ共、小さい時から人手に渡し、見度い／＼と存ずる折節、お前を見付如何も堪へられず、心亂れて慮外の段御免遊ばし、あこぎな申事なれど、お侍のお慈悲に、父かといふて私に抱付いて、下されませ」と、額を疊に摺付けて、手を合せてぞ泣居たる。源「何んの己れを父といはふ。おりや父様にいふて來う」と、駈入る處を夕霧抱留め、「是申、乳母が始めての御訴訟頼上る」と泣きければ、源「乳母の云やる事ならいふて遣ふ。父様なふ」と抱付くを、伊「ヲ、忤

い、父じや／＼」と嬉し泣き。夕霧もうら山敷、「次でに私も母といふて下されかし」源「ヲ、いふて遣ふ、是は母様」夕「ヲ、私しが子じや」源「是は父様」伊「おれが子じや」二人が中の、思ひ子の親子夫婦の寄合は、又今生では叶はぬと、泣いつ笑ふつ様様に、寵愛こそは道理なれ。

【註】○むさい／＼穢い。○慮外者／＼狼籍者。無禮者。○あこぎなこと／＼阿漕の浦に引く網のたび重るといふ歌からきたもので、食りて、厭くことなくくりかへす意。○御訴訟／＼お願。

【譯】夕霧は四邊を見まはし、「なう懐しい、先程から抱きたくてならなんだ」といつて、すがりついて嬉し泣きになければ、伊左も走り入つて、思はず知らず「やれ可愛や」と抱つくを、源之介は飛のいて「やい、駕籠かき奴、きたないなりして侍に抱きつく無禮者奴」といつて脇差に手をかける。伊左驚いて「あ申し／＼眞平御免下され、私の子に丁度お前位なのがをりますが、小さい時から人手に渡してゐるので、それを見たい／＼と思つてゐる折柄お前を見つけて、どうにもたまらず、亂心して無禮をしたことは御免下され。重々あきたらぬことを申すやうだが、お侍のお慈悲に父かといふて私に抱きついて下され」と疊に額をつけて手を合せて泣いてゐると、「どうしてお前を父といふものか、そのやうなこといへばお父さんにいひつけてくる」と駈込むところを夕霧は抱きとめ、「もし、それでは乳母が先づ最初のお願をします、どうぞさういつてやつて下され」と泣いていへば「乳母がいふことなら父さんといふてやらう、のう、父様」といつて抱きつく。伊左「お、忤けない父ぢや／＼」と悦び泣く。と夕霧も羨ましくて「ついでに私も母といふて下され」「お、いつてやる、これは母様、夕霧「お、わしが子ぢや」源「お、これは父様」伊左「お、おれの子ぢや」かうして二人の間の思ひ子と、親夫婦と一緒に遇つて睦しくすることは、二度と今生では出来ぬことぢや、と笑つたり泣いたりして、さまざまに寵愛するの尤もである。

奥より左近が聲として、「藤屋伊左衛門、藤屋伊左衛門」と呼ぶ聲す。南無三寶と逃出づれば、續いて

左近走り出、袖を控へて「是いにしへ參會せし阿波の大盡と異名を呼ばれし平岡左近其方に恨みはなけれ共、夕霧にいふ事有り。それにて聽聞致されよ」と、かはと突退け、涙を浮め、「エ、偽り多き遊女の習ひ、驚くべきにあらね共、是程迄、能ふも〜此左近をつもりしな。此子は伊左衛門が悴とは先年死したる遣手の玉が話にて、疾くより聞付け、無念共口惜共心一ツに堪へかねしが、いや〜改めては侍の身分立ず。殊に此子も、我々夫婦を誠の父母と思ひ睦しく、不便さも増す故に、縁でがなと諦め、二世と連添ふ妻にも深く包み、夕霧が生んだる某が實子と偽りしかば、さすが女房の優しくも夕霧が心を憐み、乳母と名付け、此内へ呼取りしは、皆此悴が可愛さ故、それになんぞや淺ましい體にて忍び入り、親よ子よのと名乗合ひ、知らぬ子に智恵付ける。ヤレ幼くても此子はな、馬に乗り鎗つかせ、生先立身樂む身の悴に恥を與へん爲か、左近が武士を捨てん爲か。色に迷ひ馬鹿つくし、女共が手前も恥かし。エ、恨めしや是非もなや。悴を返す連歸れ、町人の子に刀、脇差無用なり」と、引寄せてもぎ取處へ、

【註】○南無三寶―失敗をくやしく思ふ時發する語。○參會―出くはす。○つもる―見くびる。人を謀る。ナは感歎詞。○改めては―もと新にする意から、調べたどす意。○縁でがな―がなは希望の感歎詞、縁でつながられてあれの意。○某―わし。○淺ましい體―あきれた風采。○武士を捨てん―面目をすてん。○色に迷ひ馬鹿つくし―色狂ひをし馬鹿をやつたことに對して、妻の手前が恥しい。○女共―妻をさしていふたのだ。

【譯】奥から左近の聲で「伊左衛門々々」と呼ぶ、これはしたりと逃げ出ると、引つゞいて左近が走つて出て袖をとらへて「昔出遇つた、阿波の大盡と呼ばれた平岡左近は此おれちや、何も其方に恨みはないが、夕霧にいふことがあつた。それにてきかれよ」とつきのけ、涙をうかめて「え、偽り多き遊女の習ひは驚くべきではないが、これまでよくも此左近を見くびつて謀つてゐたことぢや。此子が伊左の子だとは、先年殆んだ遣手の玉が話で、とくにきつてくやしくて〜心に堪らなかつたが、新に取調べては武士の身分が立たなくなる、殊に此子も我々夫婦を誠の親と思つて睦しくしてゐるし、ふびんさも増すので、凡てが縁であらうと諦めて、連れ添ふ妻にも内証にして、夕霧が生んだ、わしの實子であると偽ると、さすがに女房は、優しくも夕霧の心を憐んで、乳母と名づけて此内へ夕霧お前を呼取つたのは皆此子が可愛いからぢや、それに何ちやあきれた風體で忍び込んで、親ちや子ぢやと名乗りあつて、何も知らぬ子に悪智恵をつける。此子は幼くても馬に乗せ、鎗の稽古をさせ立身するやうにと樂みにしてゐるのにそのわしの子に恥をかゝせる爲か、それともわしの面目をすてせん爲にそのやうなことをするか、色に迷うて馬鹿をつくした恥を、女共の前にさらせといふのか、え、恨めしい、是非もないことぢや、悴を連れて歸りや、町人の子に刀や脇差は用はない」といつて子供を引よせて脇差をもぎとる所へ、

奥方は走出て、「なふ情なや。此子が事は我とても、直の話を聞きしか共、調べてはお侍の一分廢ると思案して、貫ひ切たる此子なり。今返しては武士が立たぬ。一寸も放さぬ」と、抱上ぐるを引放し左「身を立て名を立て、一分を立つるといふも子孫の爲。實子も持たぬ此左近、誰が爲に身を惜まん。一分捨る合點」と、大小もぎ取り突出す。雪「いや〜たとへ此方は返しても、契約して子にしたからは、此雪が返さぬ。夕霧も戻さぬ」と、取付くを引退け、絶付くを引放し、左「夫をもどく見苦し」

と、奥方引立て、玄關をはたと戸さして入りにけり。伊左衛門も夕霧も、前後に暮れて途方なく、源之介泣出し、「コレ父様母様、おりや駕籠昇の子ではないの、傾城の子にはなりともない。父様の子じやはいの、母様の子じやはいの。此處明けてくれやい侍共、明けをれやい」と泣叫び、玄關の戸をとん／＼と叩く楓のわくらははに、應ふる者もなかりける。

【註】〇直の話―直接の話、吉田屋にて伊左と夕霧の話を直接聞いたのをいふ。〇一分―面目。〇もどく―さからひ批難する。そむく。〇楓のわくらは―楓は小兒の愛らしき手の意にて。楓の、わくらは(病葉)といふのは、子供の事故、叩く手も弱々しいからで、又わくらははたまにあるもの故、たまにあふ意にかけたのである。

【譯】奥方が走り出て、「なう情ないことぢや、此子のことは私とて夕霧夫婦から直き／＼の話をききました、が、調べたりするとあなたの武士の面目がすたると思つて、思ひ切つて此子を貰うたのでござります。それを返しなどしては武家の意地が立ちませぬ、一寸も放すことはなりませぬ」といつて子を抱き上げるを引放し、左近は「身を立て名をあげ 面目を立てるといふも子孫の爲ぢや。ところが實子もたぬ此左近が誰の爲に身を惜まう、一分すてること承知ぢや」と子供の大もぎとつて突出すと、雪は「いや／＼たとへあなたは返されても、私は契約して子にしたからには返させぬ、夕霧も戻させぬ」といつてとりつくを引のけ、すがりつつくのを引放し、「夫にさからひ批難するは見苦しい」と奥方を引たて、玄關をはたと閉めてはいつた。伊左も夕霧も途方にくれてゐると源之介は泣出し、「これ父様母様、おりや駕籠昇の子ではない、傾城の子になりともない、父様の子ぢや、母様の子ぢや、此處あけてくれ、やい侍ども、明けろ／＼」と、泣叫んで玄關の戸をとん／＼と楓のやうな手で叩くが、それに答へるものがなかつた。

夕霧息も絶々ながら、「是源之介合點しや。眞實そなたは左近殿の子ではない。母こそは夕霧、父御はそれ藤屋伊左衛門、さもしい人と思やるな。江戸迄も知られて、左近殿より大身の武家に親子も有るぞいの。母故の御浪人、そなたも憂目見せまじと、左近殿の子と云しが、誠の親と、假親の心はさしも違ふかや。左近殿もそなたをよも憎ふは有まいが、我身の無念、一旦の腹立に、いとしいそなたを捨らるゝ。あの父様や此母は、今の如く人中で、踏れぬ計りに恥を掻き、云下られても其方を抱くが嬉しい、逢ふが嬉しい。肉身分けし本の子は、かうもいとしい物かいの。母が此氣色では、もう逢ふ事はなるまい。父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと、一つ寝臥もしたいぞ」と、搔口説き染々と眞實盡す憂涙、源之介聞分けて、「此方が本の母様か。父様は此方か。傾城でも駕籠昇でも、本の親の心がいとしい」と、涙まじりの笑ひ顔、血の筋見へて哀れ也。伊ヲ、出来いた／＼。侍とても貴からず、町人として賤しからず。尊い物は此胸一ツ。氣遣ひせまい伊左衛門が妻子、憂目はさせぬ、力落すな／＼と、いへ共我も力なく、只茫然と成りにけり。

【註】〇さもしい人―見すばらしい人。あさましい人。〇大身の武家に親子もある―ずつと身分のよい武家に縁組もある。この親子は親子關係つまり縁者の意。〇御浪人―父は母になじんで見すばらしい浪人になった。原本半人とあれどみなあて字である。〇あの父様―勿論伊左衛門をさす。〇云ひさげられる―いやしめられる。

【譯】夕霧は息もほとんど絶えるか絶えぬかで、「これ源之介分つておくれ、本當をいへばお前は左近殿の子では

ない、母親は此夕霧、父御はこの伊左衛門ぢや、決して私達を見すばらしい人と思ふな。江戸までも知れて、左近殿より身分の大きな武家に親類縁者もあるのぢや。父御は私故に浪人をしてをられるのぢや、それでお前にも憂き目を見せまいと思ふて、左近殿の子といふことにしたのだつたが、誠の親と假の親の心はこれほどちがふものかな。左近殿もお前を憎くゝはあるまいが、自分の無念さと、一旦の腹立しさで、可愛いお前をすてられる。けれども此の父さんや私は、今のやうに人中で、踏れぬばかりに恥をかゝされ、悪口をいはれいやしめられても、それでもお前を抱くのはうれしいことぢや、逢ふのは嬉しい。本當の血を分けた子ばかりも可愛いものかいな。それにしても私は此氣色では、もう出遇ふことも出来まいが、お父さんのことは頼むぞや。せめて一年間しんみりと一緒に寝起きもしたいな」といひながらしみんと真心こめて悲み歎く。源之介は之をき、分けて、「これが本當の父母か、傾城でも駕舁でも本當の親がしたはしい」と泣きながら笑顔をつくる。そこに血統か見えて氣の毒である。それをきくと伊左は「おゝ出来したよくいふた、何も侍とて尊いものではなく、町人として賤しいものではない、尊いのは人間の心一つぢや、心配すな、伊左が妻子、憂き目は見せぬから、力を落すなよ」といふものゝ自分にも力がなくて、只茫然としてゐた。

吉田屋喜左衛門駕籠舁雇ひ、「是非なし共御笑止共、參りかゝつて我等の迷惑、外の事ならば何卒思案も致すべきが、申しても霧様は親方がゝり、殊に病中大事のお身、先連れ歸つて扇屋へ手渡せねばお爲にも如何いざ召しませ」と舁寄する。夕「扱は二度、別れて廊へ歸るかや。ハアウ」と計りにかつばと伏し、既に息も絶へんとす。伊左衛門抱起し、吉田屋は印籠の、氣付さまく、看病し、やうく性根付さけるが、引「昔より幾人か斯した身の憂難儀、話にも聞きつれど、是程の辛い事、重なれば重なる

かや。今逢ふて今別るゝ。あの子をせめて相駕籠で、いざおじやや」と抱寄するを引放し、伊「それは喜左まで迷惑。これ世にも人にも恨みなし。左近もいはゞ尤至極、女房が情といひ、誰か親子三人に仇するものはなければ、親に逆らひ寶を費し、身を奢りたる其報ひ、あれあの天道に睨まれて、いづくにて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔の榮耀程憂目を見ねば罪消えず。男故の苦勞と思ひ、歸つてくれ」と泣諫め、賺し乗すれば弱々と、云ひ度い事の數々も、せき來る涙、せき來る胸、「命の内に今一度、顔ばせ見度い逢度い。末期の水を、あの子の手から頼む」と、夕霧の名に立替る夕霞、見送り見送る門々の、松に太夫が面影を、残して別れ三重歸りける。

【註】 ○お笑止—氣の毒。○申しても—何を申しても。○印籠—もと印を入れたものだが後世薬を入れるに至つた。此處では勿論薬入れの意。○氣付—氣付け薬。○相駕籠—同じ一つの駕籠にのせて。○おじやや—おいであれや、來なされや。○百里云々—已に出づるものは已に歸ると同じ意で、因果應報の理をいふ。○せきくる涙—烈しく出てくる涙といらだつ胸、その爲に消えての意。○末期の水—死にぎわいのませられる水。○夕霧の名に—春だから、霧は霞の名に代りて立つと云ひ、夕に云ふをかく。○門々の松に—正月始のことであるから、家々の門には松がたてゝある、その松に、松の位といふ太夫の面影をのこして別れた。

【譯】 吉田屋の喜左衛門は駕籠舁をやとひ、「是非ないことであり、又氣の毒なことではあるが、丁度乗りかゝつたからには我等の迷惑なことではある。それにしても他の事なら何とか思案もしようもあらうが、何といつても夕霧様は親方にかゝつてをれることではある。殊には病氣中大切の身ぢや。先づ一番連れて歸つて、扇屋へ手渡しせぬとお爲も悪いかも知れぬ。さ、お乗りなされ」と駕籠をかきよせる。夕霧は「さては別れて廊に歸るのか、はあ」

といつて打伏して、大方息も絶えようとした。伊左はそれを抱き起し、喜左は印籠から氣付薬を出してのませる。いろ／＼と看病して、やつと性根がついたが、夕霧昔から幾人かの、かうした憂さ苦しさを話にもきいたが、是ほどの辛いことが、よくも重れば重つたものぢや。今遇つたかと思ふと、今別れるなんて、何といふことぢや、せめてあの子を同じ駕籠で連れて行きたい、さ、來やれ」と抱きよせるを伊左は引放して、「それは喜左まで迷惑することになる。これは世を恨み人を恨むべきではない、いはば左近のすること云ふこと尤も至極ぢや、又左近の女房の情といひ見事なもので、誰一人として此親子三人に仇をするものはないが、親に逆らひて財産を費ひ、身を贅澤にくだしたその酬ひで、天道にいらまれて、何處で身を立つべきか分らぬ今のさまになつた。つまり百里來た道は百里歸らねばならぬといふのが因果ぢや、大方昔榮耀したほど憂目を見ないと罪が消えぬであらう。凡てはわし故に苦勞をするのぢやと思つて歸つてくれ」と泣いて諫め、すかしながら駕籠に乗せると、よわ／＼として、云ひ度いことの數々も、烈しく出て來る涙といらだつ胸の中に消えて、「命の中に今一度顔を見たい、逢ひたい。末期の水はあの子の手から吞ませてもらひたい」といふ夕霧の名にはりて夕霧の立つころ、見送るがごとくに立て飾られた家々の門松に、松の位の太夫の面影を残して別れ歸つた。

下之卷

相の山、夕べ晨の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども聞いてナ驚く人もなし。合手野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥途の友となる。扇屋、エ、物貰ひでもめかりを利しや。是程醫者の出入やら、神子の御符のと、屋内が持返いて、七草囃す間もないが目に見へぬか。通りや／＼と云處へ

梅庵御見舞四枚肩、おりゐの衣、長羽織、醫者は奥へぞ通りける。伊左衛門編笠傾け小聲に成り、「やれ源之介、母が氣色が重そふな。命の内にま一度見せたく、此姿にて來れ共、最早見せる事も、見る事も成るまい」と、叫べ源之介、「早ふ逢ひたい事じや」とて、父に絶りて泣居たり。

【註】 ○相の山—昔伊勢國內宮外宮の間の山で歌ひ始めた相の山節のことに、元祿頃女は紗綾、ちりめんをまとひ、三絃をひき男は編笠をかぶり、さ／＼をすり、子を踊らせ、これを歌うて物を乞ふもの上方に多かつたといふ。相の山は間の山が正しく、物哀れなことを歌ふを主とし、歌多くのこらず。此間の山節を歌ひながら、夕霧の様子をさぐりに伊左が忍んで來たのである。こゝは即ち此相の山節で語る意を示したのだ。○夕べあしたの……「友となる」までが間の山節。原歌には「驚く人もなし」と血脈の間が、「花は散りても春は咲く、鳥は古巢に歸れども、往きて歸らぬ死出の旅、野邊よりあなたの友とては、金剛界の曼茶羅と、胎藏界の曼茶羅に」となつてゐる。○寂滅爲樂—煩惱、無明の境から脱して、生も滅も共になくなり、無爲靜寂になつた境を寂滅といひ、此の如くして始めて眞の樂あり涅槃の世界に至ると説くこと。○野邊よりあなたの友—黄泉の友。○血脈—佛より授りたる守札にて、人死ぬと共に棺に納めるもの。○めかりささかす—氣をきかすこと。○神子—巫子。昔病にかゝると、他人の怨靈のたゞりありやなしやを巫子をして云はしめたものだ。○御符—護符ともかく。眞言の呪文をかけた書片。之を清水にて吞めば病を去ると信じたものだ。○持てかやいて—もちかやす、混雑する。

○七草はやす—正月七日七草の茶粥を食ふ習慣があるが、その前の六日の夜、七草を組の上におき、庖丁で叩きはやしなから「七草なづな、唐土の鳥が、日本の大地へ渡らぬ先に、七草なづな」と歌ふをいふ。○四枚肩—駕籠昇夫の四人ついた駕籠をいふ。○おりゐの衣—駕籠からおりて、出て來た衣の意にて別に衣あるにはあらず。○うたう壁にも—歌ふを善知鳥にかく。奥州そとの濱にうたふやすかたといふ呼子鳥がある。親鳥は砂の中にかくして子を生んでゐたが、獵師は母鳥のまねをして、うたふ／＼といふと、子はやすかたと鳴いて出て來て、取られた。即ち母鳥は獵師につき歩いて、涙の血をこぼしたといふ古事から、定家の歌にちなみての言葉である。善知鳥に出でゐる。「辭林」を見ると、此鳥はうとうとも、うとうやす方ともいひ、游

水類の鳥、小鴨大にして、頸長く、色薄黒く、嘴の根の邊りに、瘤のやうなものがある。嘴も脚も茶褐色にて、腹は白く、北國の海邊に産すとある。

【譯】相の山節の歌「夕べや晨の鐘の聲は、寂滅爲樂と響くが、それをきいて今更驚く人はない。人が死ぬると野邊から先の黄泉の友としては、佛から授かつた守札と數珠一連とだけで、これが冥途の友となるのみである。」かういつて相の山節を歌ひながら物乞ひの風をして伊左衛門親子が來ると、扇屋の主人は「ゑ、物貰ひでも氣をきかすがよい、これほど醫者の出入だとか、やれ巫子だ、やれ護符だ、家の内がごたかやして、七草の囃しをする間もないのが目に見えぬか、行つてくれ〜」といふ所へ、醫者の梅庵は、四人昇夫つきの駕籠で見舞に來て、駕籠から下りると、それが長羽織を着て奥へ通つていつた。すると伊左衛門は編笠を傾け小聲になつて「やれ源之介や、母の氣色は重態らしい、命のある内に、今一度お前を見せたくて、此姿で來たが、もうお前を見せる事も、母の顔を見ることが出來まい」とさゝやくと、源之介は「早く逢いたいな」といつて、父にすがりついて泣く。

「梅庵様お歸り」と、表へ出ればやり手杉、家内の上下ついで出て、「病氣は如何で御坐ります」梅庵頭を掉つて、「耆婆扁鵲でも叶はぬ、物に譬へていはゞ、干上つた土器に燈心一筋燈ひて、風吹に置く様なもの。今日の日中か遅うて初夜限り、最早毒も何も構はず氣任せにしたがよい。ア、惜しい人じや。夕霧〜と云ひて、親方にいかい金儲けて遣つた女郎じや。達者ア内に此梅庵、あの人を一年守れば、今比は匙取らなくても樂するもの。可惜金をあの世へやる。是がぼんの來世金じや」と、云捨て歸れば、扇屋一家は打萎れ、返答する者もなし。

【註】○耆婆—釋迦時代の名醫。○扁鵲—支那三國時代の名醫。○初夜—戌の刻、今の午後八時。○來世金—未來の冥福を祈る爲佛へあげる金。今死ぬる夕霧は其身が金なるのであるから、ぼんの來世金としゃれていつたのだ。

【譯】やがて梅庵が歸ることゝなつて表へ出ると、やり手のお杉や、家の上の人も下の人もついで出て「病氣は如何でござります」といふ。梅庵はかぶりをふつて、耆婆や扁鵲といふやうな名醫とてももう叶はぬことぢや。物に例へていへば、干上つて油のなくなつた土器に、燈心一本入れて、それに火をつけて、風の吹く所におくやうなものぢや、今日の日の中か、遅くても夕方までしかもつまない。もう毒も何も構はないで、氣任せにして、欲しいものはたべさせたがよからう。それにしても惜しい人ぢや、夕霧々々とて、親方にゑらう金を儲けさせた人ぢや、丈夫な内に此わしがあの人を一年もつてゐたとすりや、今頃は醫者をやつて匙で藥をもつたりなどせんでも、樂をし得たことであらう。惜しい金を、あの世へやるやうなものぢや、これが本の未來の冥福を祈る來世金といふものぢや」といつて歸ると、扇屋一家のものは打萎れて、返事をするものもなかつた。

伊「ヤレ源之介、醫者の云分聞いたか。最う叶はぬ思ひされ」源「ア、悲しや、何卒母様の死なしやれぬ様にして下され」と、取付き嘆くぞ不便なる。扇屋了空夫婦、涙片手に蒲團手づからあうへに敷き、了「今の相の山が奥へ聞へて、太夫の慰に、是へ出て聞度いと仰る。是へ這入つて面白い事歌ふて慰めて下され」「あつ」と親子は笠傾け、奥を見遣れば夕霧は、芙蓉の眼尻衰へて、夕べ待間の玉の緒の、今ぞ切れ行く息遣ひ、やり手禿に手を引かれ、肩に懸りし其姿、親子は目も暮れ胸塞り、漏るる涙を夕霧も、それと見るより飛立の如く、心を胸に積み疊む、蒲團の上にかつばと伏し、思を涙に通せ

て、人目を中に憚^{はな}かりの、せきたぐるこそ哀れなれ。了^り「サア、相の山、早く」といひければ、伊「あつ」と涙の玉^{たま}さら、うたふ聲にも血の涙、子は安方^{やすかた}の嘯^{さへづ}りや。

【註】 ○おうへ—庭などの表に對して奥の所。○心を胸に積み疊む—はやる心を胸につめてをさへながらの意、疊むはあとに蒲團といふから出したのである。○憚りの關—昔陸奥にあつたと。○せきたぐる—せきあぐるに同じ。人目の關にきかせて、「堰き」にかけた。たぐるはせきをすること。○玉さら—さらは、竹の先をわつてつくつた一種の樂器にて、さら／＼と鳴る。びんざらといふ。玉篋にかく。

【譯】 伊左衛門は「やれ源之介や、醫者の話をきいたか、最う遇ふことは出來ぬ、思ひ切るがよい。」「あゝ悲しい、どうか母様の死なれぬやうにして下され、」と源之介が取りついて泣くのが如何にも不びんである。扇屋の了空夫婦は、涙を流しながら、片手に蒲團をとつて、それを自分から、少し奥へ敷いて、今の相の山節が奥へきこえて、面白かつたので、夕霧は慰みに此處へ出て、もしきゝたいといやる。相の山よ、此處へはいつて、面目いことを歌つて慰めてあげて下され」「はつ」と親子は笠をかたむけ、奥を見やると、夕霧の芙蓉のやうな美しい眼尻は衰へて、夕方をまつまでの命は、今も切れさうな息づかひで、遣り手や禿達に手をひかれ、肩によりかゝつた姿を見ると、伊左親子は涙に目もくれ、胸がふさがるやうであるのを、夕霧は見るとそれと察して、飛立つやうになる心を抑へ、胸につみ疊むやうにして、蒲團の上にはたりと伏せて、心の中のやるせなさを涙にしてしまつて、人目を憚り、せきあげて泣く様は氣の毒であつた。主人が「さ、相の山、早く歌つて」といへば伊左は「はつ」といつて涙の玉を流し、歌ふ聲にも善知鳥が流す如き血の涙がまさり、さも善知鳥の子の安方が鳴く如く、夕霧と伊左の子源之介が嘯づるのであつた。

あひの山

相の山夕べ晨の浮き勤、花一時の眺めとは、知れ共迷ふ數々の、文に染めても誠は薄く、思ふ方へと駿河なる、富士も麓^{ふもと}の戀の山、我踏^{われふみ}分けて我迷ふ、夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半も有り。辛い座敷を貫はれて、冷泉餘所^{れいせんよそ}に行く身をかの人に、ちよつと鹿島^{かしま}の神も知れ。しんぞ嬉しき可愛さの、身にも堪へて忘れめや。初手^{しよて}二度迄はふる雪の、つみも恐れぬ無理起請。神も佛も二つの耳に、嘘と誠を叫^{まよひ}の、橋の蜘蛛^{くも}手に物思ふ。格子叩^{かかし}くを合圖にて、稀^{まれ}の御見^{ごけん}も籬^{かき}越し、何を歎^{なげ}くぞ歎^{なげ}きても、身は十年の繋ぎ船、出船の今日の名残の床、明日の朝ごみ枕より、跡より遣手^{やちて}の責來るは、呵責^{かしゃく}の責より猶^{なほ}辛く、仕舞太鼓^{しまひたいこ}の音迄も、寂滅^{じやくめつ}爲樂^{ひたひ}と響くなり。

【註】 ○浮き—憂き。浮き勤は遊女の身をさす。○文にそめても誠はうすく—澤山書く文の中にも誠は十分あらはし得ず。○思ふ方へとする河—思ふ男へ心をよせて、盡す。「する」は「爲す」の意。○戀の山—我戀に比べては、名高き富士の山も麓にしかなさぬ戀の山へ、我自らふみ入りてふみまよひ。○夢の中戸の夢枕—はかなき夢の通ひ路の中戸を越えて、かはすはかなき枕。○間夫に忍びて、中戸をあけてあふことなどをいふ。第一巻の巻頭圖参照。○冷泉—冷泉節といふ節づけのしるしである。○ちよつと鹿島—鹿島は貸間にかく。遊女が客に遇ふ爲に揚屋にゆくことを貸間といふ。○つらひ座敷…忘れめや—思はぬ客にあげられて辛いと思つて座敷を貫はれて、一寸戀する、かの人に遇ひ引するうれしきは、身にしみて、忘れられぬことぢや、鹿島の神も知られよ。○しんぞ—神ぞ、まことに。○降る雪—客をふるにかく。○つみも—積むと罪と兩方にかく。○無理起請—客にし

ひられて、心に思はぬ誓をして、遊女が神にかけて契る證文。○嘘と誠をさゝやきの……記請をかく時には神佛に誓をかけるから、神佛も、二つの耳に嘘と誠と兩方さゝやくといつたので、つまり間夫には誠を他の客には嘘をさゝやき、そしていろ／＼と物思ひするをいふのだ。○さゝやきの橋——くま野なる音無河に渡さばや、さゝやきの橋忍びく／＼に」の歌より来たもので、さゝやきの橋は備後に在り、囁くに、笹や木の橋をかけた。○くも手——くもの八つ足の八方に出たやうに、色々心をいたため、千々に思ひを碎く意。○格子——女郎屋の格子。○御見——見參、面會。○籬越し——籬とは、店の間と、落間即ち一段低くなつた間との間の格子戸をいふ。○身は十年の繋ぎ船——その頃遊女の勤めの年の十年が普通であつたをいふ。船の如く繋がれてゐるといふのは自由ならぬ身の意。

○出船の今日の名残の床——出船といつたのは、禿からの遊女を新艘といひ、此處で繋ぎ舟といつたからだが、遊女が今廓を出るに方つて、今日の名残の床をつとめるをいふ。○朝込枕より——朝込とか廓とかは皆戦國時代の語で、廓は城廓、朝込は朝に攻入ることから來てゐるのである。樋口氏説、即ち間夫が、限りの大鼓又は仕舞大鼓（二時頃）の後朝になつて、廓の門が開く時こつそりとやつて來て、揚屋から歸る遊女に、金なしで出遇ふことを朝込といふ。枕は朝に間夫が込入つて來て、枕を交すをいふ。○枕より跡より……古今集の「枕よりあとより戀のせめくればせん方なみぞ床中にをる」からとつた。そして後から遣手が來て叱るのはつらい意。○阿責の責——地獄にての阿責。○仕舞大鼓——限りの大鼓とも三番大鼓ともいふ。寛永の末迄は、亥の上刻に打つたが、だん／＼に後れ今の二時頃打つたといふ。此大鼓にて廓の大門をしめるのである。○寂滅爲樂——すぐ前にも説けど此處は世相の無常を示し涅槃の常樂を説いた四句、偈文「諸行無常、是 滅法、生滅々已、寂滅爲樂の最後の句、響がしたといふ意。鐘の音ならよいが、大鼓の音がかく響くといふは只勢でいつたのである。

【譯】 朝夕憂い勤をする遊女の身の盛も、花の盛りと同じく、ほんの一時にて、間もなく散りはてる果敢いものだと知つてゐながら、迷うては書き送る數多の文にも、誠を充分に表はすことは出來ないで、思ふ方の間夫へと心を盡して、名高い駿河の富士さへも、比べて見ると麓ともいふべきけはしい戀の山へ、我からふみ入つて我から迷ひ込み、夢の通ひ路の中戸を越えて、ひそかに夢枕をかはさんとして、月を憎んだ夜もあつた。思はぬ客に揚げられて、憂いとも辛いとも思つてゐる座敷を貰はれて、更に他の人にあげられに行く身が、かの思ふ人と一寸違

ひ引きをする時の、眞の嬉しさ可愛さといつたら、鹿島の神も知るしめせ、それは身にこたへてとも忘られるものではない。初めの一二度までは何とかいつては思はぬ客を振りすてしまふ罪も恐れず、無理強ひに書かされる起請も神佛に誓をしては書くので、自然と神も佛も二つの耳に嘘と眞の二つをさゝやくことになる。即ち神佛をだしにして、間夫には眞實を、他の客には嘘をさゝやくので、いろ／＼と物思ひをするのである。また或時は間夫が格子を叩くの合圖にて、稀に出遇ふのも籬越しにて思ふにまかせず、幾ら歎いても、身は十年の年のあくまでは繋ぎ船の如く縛られてゐるのである。それが今名残の床を終り、廓を出るに方りて、明日の朝込の枕に於て戀人と出遇つてゐるのを、あとから遣手が責めて來るのは、地獄で阿責の責に遇ふよりもつらく、其日の大門のしまるべき仕舞の大鼓の音まで、「寂滅爲樂」と響ききこゑるやうである。

死出の山路は誰とても、一つ泊の旅の宿、浮世隔つる涙川、此世に浮名更科や、姥捨て親捨て身を捨てて、櫻花かや散りく。五ツでは糸をより初め、六ツや難波に此身沈めて、八ツで遣手に附添ひ九ツで戀の小使ひ、十ツや十五の初姿、髻入れずの地髪房々、衣裳のこなし、心利發で道中好ふて、戀知りわけ知り、文の文章、思ひまゐらせ候べく候。床は伽羅／＼、諸沈や麝香の香迄、今の手向と燻らする。種蒔捨し撫子の、花の盛を餘所に見て、惜や三途の川霧と、消ゆる其身も人目にも、昨日今日とは今迄に、數珠を手取る事もなく、何をか後世の土産共、いさ白露の仇し野や、相の山野邊より彼方の友としては、襦一校一帯、これが冥途の友となる。知邊となれや此詞、形身共なれ回向となれ。迷ふな我も迷はじと、思ひを籠めし一節に、聞く人哀れを催せり。

【註】○死出の山路―行き来帰らぬ路、冥途。○浮世隔つる涙川―三途の川をさす。○浮名更科―浮き名をさらすといふことを更科にかけ、ついでに姥すて……としやれて飾つたのだ。○櫻はなやかや……「親は他國に子は島原へ櫻花かやちり〜」の俚諺から出づ。松の葉三卷にあり。○難に―七つにかく。此邊り皆手鞠歌になぞらへたのだ。○戀の小使―禿となつて使をするをいふ。○床は伽羅〜―きやは物をほめる意に用ひらる。床の技術は上手の意。○沈―沈香。上に伽羅といつたから無理にこゝへ引いて来たのである。○撫子―源之介をさす。○三途の川霧―三途川は冥途の入口にあり、之をわたれば火途（地獄道）刀途（餓鬼道）血途（畜生道）の三途にわかれると傳へられる。○消ゆるその身……其身の三途の川の霧ときえるのも昨日今日とは知らず。○仇し野―京都嵯峨野の奥にある、昔し死人を葬つた所。○白露……知らぬにかく。露のはかない意。○一擧―上の白露にかゝる。○知るべとなれや此詞―此處の夕霧の……から此語の前の友となるまでは、皆夕霧のことを相の山の歌のやうにして綴つたのである。此詞が冥途へのしるべとなり形見ともなり回向ともなれの意。○回向―佛の慈悲の功德を受けて之を衆生に向ける意。

【譯】 死出の山に上る人々は、誰とても皆同じ旅の宿に泊るのであつて、浮世を隔てる涙川即ち三途川を渡れば此世に浮名をさらした身は、親をすて身をすて櫻花の如く散り〜になるのである。思ひかへせば五歳の時に糸をよりそめ、六つや七つで難波に身を沈め、八つで遣り手につきそつて、九つで禿となつて戀の文使をなし、十や十五のうい〜しい姿で、初めて女郎となり、懸入らずの房々とした地髪丈けで髪を結び、衣裳のこなしもよく、心も利發で、道中もうまくふみ、戀も知り物の分けも知り、文の文章も上手にかき、床は上々等であつたが、それも昔の夢で、今は伽羅や沈香や麝香まで焚いて、手向にと熏らすのである。そして蒔いた種の撫子の源之介が、これから花の如く盛えるであらうを、他所に見すて、惜しや三途の川霧と消えるも身も、それが今日や昨日のこと、は人目にも分らぬので、今迄に數珠を手にする事もなく、何を後世の土産とも知らず、仇し野の野邊からあなたの黄泉の友といへば、只櫛のお花の一枝と白露の一手、これが冥途の友となるのである。此迄のべたことが冥途へのしるべとなれや、形見ともなれ又回向にもなるやうに。之をきく御身夕霧も迷ふな、歌ふ我伊左も迷はじと、思をこめた相

の山の唄の一節を聞く人皆哀れの感をいだいたのであつた。

扇屋夫婦情深く、「なふ此方は聞及ぶ藤屋の伊左衛門殿そふな。忍ぶ事も時に依る、娘とも思ふ夕霧が、臨終の心が堪能させたい。早ふ逢ふて下され」伊「ア、忝い」と走り寄り、「太夫又逢ひに来たは」の「夕」伊左衛門様私しや死ぬるはいのふ」源「母様死んで下さるな」と、縋り付けば家内の上下、「わつ」と一度に聲を上げ、泣沈むこそ道理なれ。重き枕に手を合せ、夕「且那樣ちひさい時より御苦勞に預り、御恩も報せず死ます。是さへはかなう御座んすに、いとしい男、可愛い子に逢はせて下んす。もふ私や佛で御座んす。とても事の事に伊左衛門様の手で、此髪切つて貰ひ、佛の形になつて、親子の手から水を〜」と云聲も、絶々にこそなりにけれ。伊「ヲ、髪飾は假の戯れ、佛の三十二相とは新木作りの卒塔婆を云。只今某が切る髪は阿字の一刀、彌陀の利釵を以て、煩惱の絆と觀念せよ」と、指添へ抜いて、二人添寝の寝亂髪、ふつ〜と切れば源之介、「可惜髪を」と身に添へて、悶へ臥してぞ嘆さける。重ねて櫛の水を携へ、伊「是夕霧、人界は一生造惡の娑婆世界、別て遊君流れの身は、面に紅粉を飾つて數多の人を迷はし、綾羅錦繡を身に纏ひ、多くの酒を酌流し、煩惱の種を植ゑて菩提の根を絶つとは遊女の事。此水は、極樂の八功德池の水と思ひ、雨甘露法雨愍衆生故と聞く時は、是を飲んで心身を潤し、九品の上剎に往生し、半蓮を分けて待つて居や。是其しるし」と、同

じく髪を押切つて、親子夫婦の手向の水、哀れにも又頼もしし。

【註】○堪能させたい―満足させたい。○佛でござんす―死んだ成佛した意。○水を―親子の手から死に水をもらう。○佛の三十二相―菩薩此の相を得るに遅きは百大劫、早きも九十一大劫の行を以てす、一相を得るには百面福をつむべく、一福は百億の大千世界の一時に死ぬるを救ふ功能であるといつてを。或は三十二相を美人の姿にいふ。○辛塔婆―梵語にて、方墳又は廟と譯す。五輪のこと。○只今某が切る髪…今切る髪は、迷を去りて一切實相の源を悟らしむべき阿字の一刀、彌陀の利劍をもつて、煩惱即ち迷の絆を斷つものと思へといふ意。○阿字の一刀―阿字は梵字の根本、一切實相の源とせらる。即ち利劍なる一刀の意。○彌陀の利劍―利劍即彌陀號、一聲稱念罪皆除といふ語あり、即ち南無阿彌陀佛の稱號を一たび唱へると、如何なる重罪も消滅せしめ得ること利劍をもつて物を斷つごとしといふ意から、彌陀號のやうな鋭い剃刀をもつて煩惱をたち切るのだと思へる意。○指し添へ―脇差し。○添寢の露亂髪―合衾の折亂れた髪。○人界は一生造惡…人間は生涯煩惱の爲に罪惡を重ねる世界である意。○別て遊君…まして遊女の身は殊にさうである。○煩惱―迷。○菩提―悟。菩提の根を絶つとは迷の種をまくことをいふので、故に、いつまでいつても悟りきれぬのだ。○八功德池―淨土にある池の水には八つの功德あり、一、澄淨。二、清冷。三、甘美。四、輕軟。五、香。六、飲時適心。七、飲已無患。八、不臭。此功德は説く本によりて多少の差あり。○雨甘露法雨聚衆生故―如來の教は天が甘露の雨をふらす如く、偏く衆生萬物をうるほす意。○九品の淨利―九品は極樂往生相の等階。淨利は淨土のこと。即九階級の極樂淨土の意。上品上生、中生、下生。中品上生、中生、下生。下品上生、中生、下生の九つが九品。

【譯】夕霧の主人、扇屋夫婦は情け深く、「のう、あなたはこれまで聞いてゐる藤屋の伊左衛門であるらしい。同じ忍ぶといつても時にこそよれぢや、相の山などに身をやつして、隠れ忍ぶといふは何のことぢや。私が娘とも思つてゐる夕霧が、心を満足させてやりたい。早く逢つて下され」といふ。伊左は「忝けない」と走りより、「太夫又逢ひに來たわいのう」夕霧、伊左さん私しや死ぬわいのう」源之介「母様死んで下さるな」といつてすがりつけば、家の人々「わつ」と一緒に聲をあげて泣くのは尤もである。夕霧は重い枕の上に手を合せ、「旦那様、小さい時からお世話になつて、御恩を報ひず死にます。是さへはかないことであるに、愛する男にも可愛い子にも遇はせて下さる。

もう私は何の思ひのこすことなく成佛しました。一層のことに、伊左様の手で、此髪を切つて貰つて、佛の形になつて、親子の手から死水をのませてもらいたい」といふ聲も全く絶え入るやうである。伊左「お、此髪はつまりが假りの飾りである戯れごとである。眞の佛の三十二相といへば、新しい木で作つた卒塔婆をいふのであるから、今私が切る髪は、一切實相の源である阿字の一刀なる彌陀の利劍即ち鋭き剃刀をもつて、煩惱即ち迷ひの絆を斷つて悟を開かしめるものと觀念せよ」といつて、脇差しを抜いて、昔二人が添寢に亂れた髪をふつつと切ると、源之介はそれを見て、「まあ惜しい髪を」といつて、それを抱いて、身をもだえて臥せて泣いた。伊左衛門は再び櫛の葉を浸した水をとりに、「これ夕霧、人間世界は一生の間煩惱によりて罪惡を重ねる娑婆である。別けて遊女の身は、顔に紅や白粉をつけて人を迷はし、美しい着物を身に纏ひ、多く、酒を酌み流して、迷の種をまいては悟りの根を斷つことばかりしてゐるのである。此櫛の水は極樂淨土の八功德の池の水であると思ひ、如來の教は天が甘露の雨をふらすごとく、偏に衆生萬物をうるほすときけば、此を飲んで身心をうるほし、九階の淨土に行つて往生を遂げ、蓮のうてなに半座を分けて待つてゐるがよい。私はあとからゆく。これは其記しである」といつて同じ様に髪を切つて、親子夫婦手向の水をさぐげたのは哀にもありまたたのもしくもあつた。

斯る處に吉田屋の喜左衛門、六尺に金箱持たせ、「是は平岡左近様の奥方お雪様の御使、夕霧を請出す所、其筈違ひ是非もなし。され共代金八百兩、其爲の金子なれば、外に遣はん様なし。御病氣以ての外の由、此金にて請出し、一時なりとも廊の外にて往生させませとのお使なり」と、いふ處へ下袴の若い者、金箱數多擔げさせ、「是是扇屋殿、我等は藤屋伊左衛門様の御老母、藤屋妙順様よりのお使、伊左衛門様は父御の御勘當、今は此世に亡き人なれば、お袋様の我儘に勘當御免はなり難し。夕

霧様には御一子迄有る事、嫁御、孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を廊の内にて殺されず、一時成共廊を出し、外にて往生させましたいとお願ひ、金子二千兩持參致す。サア、片時も廊を出して下され」と、きほひ勇めば扇屋了空。「御尤なれ共、金子を取つて暇を遣るとは、行末の年月無事て勤める女郎の事。今死ぬる夕霧に、大分の金銀取て暇をやるは、此扇屋は盗人と申者、殊に全盛して、親方に大分儲てくれた此太夫、命さへあらふならば、此扇屋が身代半分は入れます。此金子、夕霧そなたに遣る。臨終に金やるとは異な事申様なれど、此金では萬部の經も讀まる。跡の追善、遣言召され。キア、暇を遣つた、廊を連れてお出でなされ」と、切れ離れたる意氣方は、さすが所に住めばなり。

【註】〇六尺一駕籠昇のことをいふ。或はいふ駕籠に用ふる棒は一丈二尺あり、二人にてかく故六尺といふと、又いふ、大男が駕籠をかく故六尺男の意と。〇下袴一表袴の下にはくもの、俗に股行といふ。〇命さへ……命支けても助かるとあらば醫者の費用などいはず出す意。〇切れ離れたる意氣方一慾を離れた心ばせ。花柳の巷にある人は殊にしみつたれたやうな氣持のないものとして昔から氣前を買はれてゐる。

【譯】丁度そこへ揚屋である吉田屋の喜左衛門は、駕籠昇夫に金箱をもたせ、「私共は平岡左近の奥方お雪様のお使として来たもので、丁度夕霧を請出す約束をしてゐたが手管がちがつて、その出ぬこととなつたのは是非もないことぢやが、その請代の八百兩は、その爲の金であるから、外には遣ひ様もない。ところで夕霧殿の御病氣がつての外お悪いとやら、此金で請出して、一時でも廊の外にて往生おさせなされとお使でござる」といふ處へ、又

下袴をつけた若い者が、金箱を澤山かつがせて来て「これ、扇屋殿私共は伊左様の御老母妙順様のお使として参りました。伊左様は父御から勘當を受けられた身で、その父御は今死んで、おいでのない人であるから、母御が勝手に勘當を許されることも出来ませぬ。ところで夕霧様には一人の御子まで有る事であり、而も伊左様が勘當の身であるといつても、その妻や子に勘當はない筈ぢや。従つて妙順が嫁を廊の内殺すことは出来ぬ。一時でも廊から出して、廊の外でお死なせにしたいとお願ひ、それで金二千兩を持參した。さあ、片時も早く廊を出して下され」と勢ひ勇んでいふと、扇屋の主人了空は「御尤もながら、金をとつて暇を出すといふのは、これから先々まで無事で勤められる女郎についてすべきことで、今死ぬる夕霧に、澤山の金をとつて暇をやるとすれば、此扇屋はいはゞ盗人といふものぢや、それに此人はこれまでに全盛の勢で、大分金を儲けさせてくれたのぢやから、命さへ助かるとあらば此扇屋が身代半分は出して、どんなことをしてもと思つてゐる位だ。だから此金を夕霧そなたに差上げる。死に際に金をやつたところで何の役にもたぬ、といふことからいへば、變な申分ぢやが、此金でお經を讀ませるとすれば千部どころか萬部だとして讀んでもらへる、死んだ後の追善に關して遣言なさるがい、さあ、暇を出します。廊から連れて出ておいでなされ」と慾を離れた意氣はさすがに粹な所に往む人だけある。

今を限りの夕霧につこと笑ひ、「ア、どなたも、有難い御心ざし、お禮申して下されませ。これ源之介、此金は親方殿より下された、そなたに母が譲りじや。由々しい町人になつて、父様の名を揚げてたも。わが身の出世を草葉の蔭より見るならば、萬僧供養にも勝りて母は佛になるぞや。さりながら、伊左衛門様源之介に、妙順様を並べて、三尊の來迎と拜みたふ御座んす」ヤレ妙順様呼びに走れ」と立騒ぐ。「いや呼びにやる迄もなし、氣遣がつてアレ門口に」と、手代伴ひ入りければ、妙な

ふ花嫁御珍しや〜、嬉しい對面。誠の佛は西方のお迎ひ、此妙順は此方の家へ迎へ取り、金づくめにして養生し、此姑が精力で本服させて見せよ」と、家内が勇む氣勢に連れて、諸病は氣より本服の、顔も活々に〜と、立つて踊るや扇屋夕霧、憂却つて悦びを、語り傳へて三十五年、又五十年又百年、千歳の秋の夕霧を、猶萬代の春の花、見る人袖をぞ列ねける。

【註】 ○田々しい―際立つた。勝れた。○わが身の出世―お前の出世。こゝではわが身は汝の意で、源之介をさす。○萬僧供養―千僧供養といふと同じ。數多の僧を集めて供養すれば、いよ〜功德多しとされてゐる。○三尊の來迎―彌陀、觀音、勢至の三尊。信仰厚く念佛の功をつんだもの、臨終には、此三尊來り迎へて淨土に導くといふ。○顔も生々に〜と―殆んど死にかけた夕霧が生きかへつたごとく書けるは、作者のいたづらな好みではあらうが、かうした始めから死にかゝつた人物を只一個の人形として描いたものを、殺したからとて生かしたからとて、作が不自然だとか、作の値打が下るなどいふほどのこともない。何も劇的の功にはそれほど關係もないことである。

○三十五年―此淨璃理は、寶永七年、夕霧三十三回の追善の爲に始めて興行されたもので、三十五年、五十年百年といつたのは後の年忌をのべたので、見る人袖を列ねといつたのは、夕霧の芝居を見る人絶えまいといふ意である。尙ほ追善興行は必ずしも年忌に當らなくもよく、「お夏清十郎五十年忌」といふもさうであつたといへば、夕霧も三十三年目に三十五年忌追善の心で興行したものであらう。

【譯】 今が最後である夕霧はにつこり笑ひ、「あゝ、どなたも有りがたいお心ざし、それに對してお禮を申し下され。これ源之介、此金は親方さまから下されたものぢや、お前に私から譲る。優れた町人になつて、父様の名をあげておくれ。お前の出世を死んで草葉の蔭から見ることが出来たら、それこそ萬人の僧を集めての供養をされるにましてもうれしく、それこそ本當に佛になります。だが伊左様と母御と源之介と三人を並べて、彌陀勢至觀音の三佛を拜

むがやうに拜みたいものぢやが、」といふと、「それでは母御を呼びにやれ」と誰かといふ。「いや呼びにやるまでもない、心配して門口に来ておいでぢや」といつて手代がつれて來ると、母は「なう、花嫁御、珍らしいこと〜、嬉しい對面ではある、誠の佛は西方からお迎があるのぢやが、妙順はこちの家へ迎へて、金づくめにして養生させて此姑の精力で全快させて見せう」といふ、とそれにつれて家中が勇めば、病氣は氣から治るといふがやうに、顔も活々としてこ〜と立ちあがつて、扇屋の夕霧は踊り出し、憂却つて悦となつた。これを語り傳へて、三十五年又五十年又百年千千萬年の後までも、淋しい秋の夕霧を見ること、春の花を見る如く、芝居を見る人袖を列ねてたえぬことであらう。

大經師昔曆

大經師昔曆

大經師昔曆

解題

京都烏丸四條下る大經師意俊の女房おさんが、手代茂兵衛と通じ、其媒をした下女のお玉と共に、丹波國氷上郡山田村に潛伏して中捕へられ、おさんと茂兵衛は牢舎に入れられ、やがて元和三年九月二十二日、三人とも浴中引廻しの上、粟田口にて、おさん茂兵衛は磔　お玉は獄門にかけられ、茂兵衛の兄弟三人は追放され、大經師の家は斷絶して落着した事實によつたものであるが、近松の此作では、大經師以春が、下女のお玉に戀して、毎夜のやうにお玉の寢所に忍ぶときいて、妻おさんは夫を懲さうとして、お玉と寢所をとりかへたがもとで、却つて手代の茂兵衛と妙な契を結ふことになり、現はれて二人は丹波にかくれ、やがて時の國法によりて粟田口にて磔刑にされんとする折、且那寺の東岸和尚が命乞をして助けるといふ筋になつてゐる。

此事件は江戸の八百屋お七と、ほど時を同うした上に、おさん茂兵衛が非常な美人であつたといふことから、天下の興味を引き、やがて小唄小説などにも作られたものゝ如く、西鶴は五人女の一人として「中段に見る曆屋物語」の題で描き、「松の落葉」では歌音頭として、「大經師おさん歌祭文」の名に傳へられてゐる。各その取扱ひ方はちがふが、西鶴と近松とは、おさんといふ人物の取扱ひ方が全く正反對で、そこに二人の作者の人生觀の相違もまざくゝと見ることが出來て、對照研究するには此上もないゝ材料である。殊に近松の作としては、此作品は傑作

の一つに加ふべきものであらうし、かつは私は此處に近松の大理想の一端を伺ひ得るものとして、可成りに重く見たいと思つてゐる。従つて私はおさんの描き方と扱ひ方の上に、一種の意見を有し、既に日本大學に於ける講義上には之を公にしてゐるのであるが、あまりに長きに亘るものであるから、現に執筆中の別冊の「近松研究」の上にて之をゆづりたいと思ふ。

尙此作は外題年鑑によると、寶永三年の初興行となつてゐるが、やはり此作の終にある「當年未の新曆」の語から、その前の未年元祿十六年ではなくて、正徳五年の未の年に初興行されたものだらうと説かれてゐるのは信すべきことであらう。

蓋しおさん茂兵衛の三十三年忌に因んで名づけられたしく思はれる「昔曆三十三年忌」といふ名が、同じ作品に名づけられてをり、正徳五年から丁度三十三年前は二人が處刑された天和三年にあたり、其翌年は貞享元年にて、別に「貞享元年昔曆」といふ題になつてゐる本もあることを思ひ合せても、正徳五年の作たることが肯かれるやうである。また元文五年の十一月近松の十七回忌追善興行に際して、此作は「戀八卦柱曆」と改題され、それでは終りの曆歌の處が道行乗合約となつてをる。

大經師昔曆

歌から猫が男猫よぶとて、薄化粧するはしほらしや。猫さへも夫ゆへ忍ぶに、我身は何とから打の、
マイッリヤ綱よりとけぬ契りぞや。じやれてそばへて手鞠とれ。ま一つふたつ、みつ四ついつむつ
なつる八つる、このほんほとおんゑゑいころくく、ころり火燧にしなだれて、なつくもを
のが戀ならん。それは昔の女三の宮、是はおさんの當世女、おつとの名さへ春をもつては色香に鳴、
梅の曆の根本大經師以春とて、袴いらすの長羽織、家居も京のどうぶくら、諸役御免の門作り、名だ
かき四條烏丸、既に貞享元年きのへ子の十一月朔日、來ル丑の初こよみ、今日よりひろむる古例に
任せ、あるじ以春は未明より、禁裡院中親王家、五攝家清華の御所方へ、新曆を献上し、方々のめで
た酒、嘉例の如く去年の如く、十徳著ながら火燧にとんと高いびき。算用場には手代共、進上曆の折
包、江戸大阪のくだし曆、地うり子共の取さばき、一門振舞祝義の使、竈の霞繪の雪、春めき渡る
摺鉢の音、今日の霜月朔日を、元日とこそ祝ひけれ。

【註】 ○から猫が男猫よぶとて……源氏物語、若菜卷に、六條院の鞠の遊の所に「から猫のいと小さくおかしげなるを、少し大きな猫の追ひつゞきて、俄にみすのつまより走り出づるに、人々をびえさはぎて、そよ／＼とみじろぎさまよふけはひども、きぬの音なひみ、かしましき心地す。猫はまだ人にもなつかぬにや……」とある。女三の宮の猫が、他の猫に追はれ、其時猫を結へた綱の爲に、籠が自然と開いて、女三の宮の姿が、外に見えたので、附そふ人が騒いだといふのだ。前から女三の宮に心をよせてゐた柏木右衛門督は、猫にかこつけて、宮に近づき、やがて宮と通じて薫大將を産ませた。宮は元來光源氏の側室であつて、更にこの事があつたので、その名も女三とおさんと似てをり、宮の行とおさんの行と似た處があるので、先づ全體を暗示する意で引いたのである。○から猫—元來猫は、からから渡つたといはれてゐる。即ち古い名をもつて呼んだのである。○じほらしや—愛らしいかな。○夫ゆえ忍ぶに—夫故につましましやかにするに、といつて、これから、おさんの身の果を先づ此處で暗示するのである。○其身は何と—我身は夫に對して、つましましからぬ行動をして、何とかなりはてるのか、との意から何とから打とつたか。○から打—唐で打つた紐、唐でつくつた紐。から猫といつたから、口拍子で、から打といひ出したのだ。何とかなりはてるか。○綱よりとけぬ契—から打の綱、即ち唐製の綱よりもとけぬほどのちぎり、綱よりもつと／＼かたく結ばれた、容易にはとけぬほどの仲、即ち夫婦の間であるから、縁を切ることが出来ず、死なねばならぬ程の契であるぞの意。○じやれてそはへて—そはへるは關西でふざける意。○手鞠とれ—蹴鞠の遊から引いて、すぐに手鞠歌につづけたので、この處はおんえまで、相の手のやうなつかひ方である。○ま一つ—今一つ。此は手鞠歌で、手鞠歌をかりて、面白く云ひ現はしたので。○なつ八つ—七つ八つの音をのばしたので。即ち意味もなく、只調子の上で添はつたのである。○こゝの—九。○ほんほ—掛聲。○とおんえ—とおは十。んは調子で添はつたもの。えは感歎を表す音。○あゝ—掛聲。○ころ／＼—ころり—こんこまつ、びんびしゆ、などの云ひ方と同じく、ころ／＼は飾りのやうな、強める語。○なつともものが戀ならん—おのれが戀の心から、なつて來るのであらうの意。○それは—火燧云云のことは女三の宮に關係ないことであるから、手鞠のことをいふのだ。即ち手鞠とれ／＼といつたのは、六條院の鞠の遊のことをさして、それはといつたのだ。○女三の宮—朱雀院の第三皇女なる故、女三の宮といつた。帝讓位の後、宮のことを特に源氏に托した。○これはおさんの當世女—これは當世女のおさんをさし、火燧などの、あとの事をいふのである。同じ身をすてるやうなことになるが、おさんの行は、當世風な態度だといつたのである。○春をもつては—以春の二字を、わざと春をもつてと讀み、男盛りの意を示したので、實は本名は意俊と書いたといふ、それを近松

がわざと直したのだ。○色香に鳴る—若い盛りで色も香も名高いといつたのだ。○梅の曆の根本—色香に名高いといつて梅の香に聯想を呼び、山里などでは、梅がさいて、始めて春を知るといふから、梅が即ち曆である意を見せ、更に曆の根本であり發行元である大經師といつたのだ。○大經師—今日は表具師のことを經師屋といふが、昔は表具屋は即ち掛物などをつくり、經師はお經、巻物などをつくりて、此二つの職業は各別になつてゐた。此經師屋の長は大經師とて、毎年陰陽の司土御門家から曆の臺本を受け入れて、之を版にして賣出した。その曆を大經師曆といつた。○袴いらすの長羽織—大經師は武士にもあらず、町人にもあらず、醫師と同じ階級に遇せられた。そして一本さして袴なくして長羽織を着たものだ。○どつぶくら—眞中の胴のふくらんだところ。中心、眞中などの意。四條烏丸が京の目貫の所である意。○貞享元年……天和三年の事なるをかへたものだと。○諸役御免—武家の用を承つた、刀劍師や、曆師のやうなものが、諸種の課税を免除されること。○四條烏丸—事實上此處に大經師の家があつたのだ。○來る丑の初曆—來年丑の年の初曆を十一月朔日より弘める例になつてゐたのだ。○禁裡院中—宮中及上皇の御殿をさす。○五攝家—近衛、九條、二條、一條、鷹司、此等からのみ攝政關白を出した、皆藤原氏。○清華—三公即ち大政大臣、及左右大臣に任せられる家筋にて、源氏の久我、藤原氏の三條、西國寺、徳大寺、花山院、大炊御門、今出川(菊亭)の七家、後に源氏の廣幡、藤原氏の醍醐を加へて九家となる。○十徳—羽織のごとく(五徳)又法衣のごとく見えらといふから十とくといつたもので、素袍のやうな、腋をぬひつめ、胸に紐があり、腰から下に法衣のやうにひだがあり、多くは黒色にて、徳川時代醫師や儒者、繪師などが、着たものである。○地賣子供の取さばき—地賣は即ち、京の土地で賣る子供の部分け手わけなどすること。○竈の雪—煮たきを繁くして、蒸氣が霞のごとく立つ形容。○鱈の雪—昔は魚の肉を切つて作つたのが、後には大根につくり出したから、雪の如く白といふ意。水谷氏説。○元日と祝ふ—元日と同様に此日を祝つた意。

【譯】 猫が男猫を呼ぶとて、薄化粧をするのは可愛らしいことである。猫さへも夫ゆえにはつましましやかにするに、我身は何となり果てるのであらうか。我と夫との間は唐打の綱よりも解けぬほど結ばれた、切ることの出來ぬ縁の夫婦の間であるのぢや。猫よ、じやれて、ふざけて手鞠をとれ／＼、一二三四五六七八九十、あゝ、ころりところんで、火燧の側にしなだれかゝつて、人になつても、猫の心に戀ひ情があるからであらう。ところでじやれてそはえて手鞠をとれ／＼といつたのは、昔の女三宮に關してのことで、ころり火燧にな といつたのは、當世女お

さんのことをいふのである。

夫の名さへ花の盛りの、梅にも劣らず色香の高い、曆の本である大經師以春といへば、袴をつけずに長羽織をつけ家も京の四條烏丸にあり、諸税免除の家として名高きものである。此以春の家にては、貞享元年甲子十一月の朔日に、來年丑歳の曆を、今日此日から世間に發行する古例になつてゐるので、先例によりて、主人以春は、禁裏、院中、親王家、五攝家や三公に任せらるゝ家々などへ、新曆を献上すべく未明から廻り歩いて、方々にて、嘉例の如く去年の如く、めでた酒を頂戴して歸り、十徳を着たまふで炬燵にとんとはいり込んで高いびきをかいてゐる。帳場では手代共が、進上物につかふ曆の折包をつくつたり、江戸大坂へ下す曆、地賣をさせる子供達の部分けをしり、一門一家に對して御馳走祝儀の使を立てるとか、盛に竈に火をたくとか、雪のやうな鱈をつくとか、摺鉢の音などして、春らしくなつて、今日の霜月朔日を正月元旦のやうに祝つた。

おも手代助右衛門、此家のたばね綿わたの小紋の羽織、主も心をあくしまの袴、もと渡りの昆布こんぶの皮、こはばつたる顔付にて、助すけ「ヤ旦那はまだおやすみか。夜の中うちから方々の勤、くたびれはお道理。申しおさん様、茂兵衛めが戻つたら、かはらふと存ずれど、どこにのらをかはくやら、二條むさお屋敷方の、進上曆がおそなはる、一息いそぎに廻つて來ませう。嘉例の通り御一門衆お出でなされう。御臺所みだいどころか姫君の様に、猫ちやうらかしてござつてもすまぬ事。これ玉、同じ様にそれなんじや。奥の臺子だいすもしかさや。庭の小座敷も掃除しや。こたつに火をいりや。違棚ちがひだなのほこり拂ふて、すぐ六ばん將基盤しやうきばん、ごいしの數かずもよんで見て、手水鉢に水入れさせ手拭もかけかや。たばこ盆たばこぼんに切炭きりすすいけて、膳立ぜんだてをして椀ふ

いて、お給仕にさしあはふ、夕めしはやふ食くてしまや」と、一口に千色程、「まだめんどうな其猫め、ぎやあ〜とほへるが能のうで、鼠一疋取りはせず。おねこ見てはびろ〜と、屋根も垣かきもたすらぬ。重ねて屋根でさかつたら、四つ足く〜つて西の洞院どういんへながしてくりよ」と、なんの掛かけも構かまひもなき、猫に迄しぶ口の、茶の間中の間すみ〜見廻し、助すけ「それ久三挾箱はさみばこ、曆くばる家に寄つてお引ひきが出る、只取ると思ふな給分きふぶんに引つぐ、ことはつて置いたぞ」と、打つれ表うちをらに出でにけり。

【註】 ○おも手代―番重要な手代。番頭。 ○たばね綿―つかねた綿、しめくつた綿。此意味から取締りの意にかけ、小紋の綿入羽織を着て、此家の取締りをしてゐる意。 ○奥綿―さんとめ綿即ち唐棧のことにて、もと印度から渡つたと。その赤糸が入つた、堅綿のを奥綿といひ、和製のは京奥綿といつた。紺と淺黄の綿を青手といつた。主人も心をおく即重要視する意にかく。 ○もと渡り―元渡り、古渡り、昔元祿前に舶來の意。 ○昆布の皮―昆布のやうな厚い、古渡地にて製した意。 ○こはばつた顔付―主手代らしき、頑固さうな、ごわ〜した顔付の意。 ○のらをかはく―のらは怠惰、かはくは、爲しつくす。即ちなまけ放題なまける意。 ○二條むさ―二條の城あたりに武家の屋敷が多かつたからいつたのだ。 ○御一門衆―御一門達即ち親族がその中にやつて來られよう。 ○御臺所か姫君―女三宮のことをきかせて、おさんの、お引ずりの風をからかつていつたのだ。 ○ちやうらかして―おもちやにする、ぢやらす。 ○同じ様に―…そちもおさん殿と同様にぼんやりするのは何うしたことか。 ○臺子―茶の湯に用ふる茶器棚。 ○しかきや―しかかけよ。用意せよ。 ○切炭―鋸にて、適宜に切つた木炭。 ○さしあはふ―さしあはる、さしつかへる。丁度一所になつて差支へるだるう、だから先に飯を食つおけといふのだ。 ○まだ―まだその上。 ○びろ〜―なまめかしく、でれ〜とした姿。 ○西の洞院へ流し―西の海へさらりと流すといふ厄拂の語をもちつたものだ。 ○懸も構かまひのない―懸構かまひもない、係かゑりもない、縁ゆかりもない。 ○しぶ口―悪口、にが口の意を、次の茶の間にかけて、茶が濫あふといふ意からいつた。即ち苦口をいつての意。 ○久三―小者などの名として用ひた。 ○挾箱―着物などの着換を入れる箱にて、それに棒をつけて之を

肩に負ふ。口繪參照。挾箱を用意しろの意を略してある。〇お引—引出物の略されたもので、使などにやる謝禮、祝儀。〇給分に引づく—お引を貰つたら、それだけ臨時に収入があつたと思ふな、その収入を給金の中に勘定して差引くぞといったので、助右衛のしみたれた人物を寫したのである。

【譯】 主な手代の助右衛門は、此家の取締をしてゐて、主人も之に心をおいてをり、それが束ね綿の小紋の羽織を着、さんとめ綿の袴も、古渡りの昆布のやうな厚い硬ばつたのをつけ、硬い顔附で、「や、旦那はまだおやすみか、夜があけぬ中から方々へのお勤をなされたのだから、おくれたびれなされたのは道理ぢや。もし、おさん様、茂兵衛めが戻つたら、私が代らうと思ひますが、どこを遊び廻つてをるやら。二條方面のお屋敷方への進上曆が後れる。一散に廻つて來ませう。吉例によつて、追附け、御一族の方々も御來訪があらう。おさん様は、御臺所か姫君なんぞのやうに、猫をからかつておいでなさるが、あれでもすまぬことぢや。これおたま、そなたもおさん様見たやうにそれは何のことぢや。奥の間の茶の湯の臺子も仕度をしやれ、庭の小座敷も掃除をしや。火燵に火をいれよ。違棚のほこりを拂つて、双六盤や將棊盤のほこりも拂ひ、碁石の數を讀み數へて見て、手水鉢に水を入れさせ、手拭もかけかへろ。烟草には切炭を埋めて、膳立をして椀をふいておけ。ぐづ／＼してゐるとお給仕に差支へるだらうから、そのやうな事のないやうに、夕飯を早く食つてしまへ」と一度に限りないほどの用事を云ひつけ、更にいつけて「その上、其猫の女め、面倒な、ぎや／＼と聲を立てるだけが爲し得る所で、鼠を一匹とるではなく、牡猫を見るとでれ／＼と、なまめかしい風である。あれでは屋根も垣もたまつたものではない。二度と屋根で交尾でもしたら、四足をしめく／＼つて、西の洞院邊りへ流してやるぞ」といつて、何の關係もない猫にまで、苦口をのべて茶の間から、中の間と、すみ／＼を見まはし、更に「それ久三、挾箱はないか、曆を配達して家々に行くつと引出、が出る。でもそれを自分のものと思ふな。給料に計算して差引するから、豫めあいさつをしておくぞ」と云ひ、一緒に表へ出て行つた。

おさん玉が顔見合せ、「なんと今のを聞やつたか。同じ物の云様で、茂兵衛の様に物やはらかにいふても事は調ふ。あの人も氣に如才はなさそふなが、ぢたいの顔が憎體に、慳貪に見へるゆへ、詞もあいそがなさそうな。何と助右衛門男にほしいか。肝いつてやらふか」玉「エ、おさん様いやらしい事仰しやんすな。あんな男持ふより、牛に突れたがまし。同じ手代衆の内でも、茂兵衛どの、様な、かりそめに物云ふも、あいそらしうて、いつ腹立顔も見せず。ほんにあの様な男持つをなごは果報でござんす」さん「ほんに云やればそうじや。猫にも人にも合縁奇縁、隣の紅屋の赤猫は、見かけからやさしう、此三毛をよび出すも、聲をほそめて恥かしそうに見へて、こいつが男に、てやりたい。又向の練物屋の灰毛猫は、憎らしいぶとうな顔で、遠慮會釋もなふ、屋根の上を馬せめる様に、怖い聲して此三毛をよび出す。先度も下立賣のか、様と、親子たつた二人ある縁先の藏の屋根で、此三毛をかはいげに、それは見られた事かいの。あんまりにくさに棹竹持つて逐たれば、おれを睨んだ目元の怖さ。こりや三毛よ、わるい男持つなよ。灰毛猫が濡かけたら、一度が大事ふつてのけ。此さんが從者聲、よい男猫添はそゝる。ヲ、かわいや」と猫なで聲。にやん／＼あまへる女猫の聲、もれてやよそに妻戀の、男猫の聲々、三毛はこがれてかけ出づる。

【註】 〇如才はなさう—如才ないは、ぬかりない、手落ない。〇男にほしいか—亭主に望むか。〇肝いつて—世話して。〇牛に

突かれる一牛の角でつかれて死んだがましだの意。○合縁奇縁—心のあつた同士の縁の意から縁次第縁次第の意。○こいつが男……此猫の亭主にしてやりたい。○練物屋—いろ／＼の薬品などを練り合せて、擬物の寶玉などをつくる業。○ぶとうな—無道な、横柄なづら／＼しいなどいふ説もあるが、皆い／＼ころな説明で、ぶとうは不當、即ち不恰好の意である。寶永頃の作「風流曲三味線」を見ると、「佛壇の下より蒲鉾と車鯉のぶとうに切りし肴を出し」とあるにて明に分る。樋口氏説。○馬せめるやうに—せめるとは、ならすことにて、ならす爲に、馬を叱つたりするから、怖い聲といったのだ。○濡かけたら—戀をしかけたら○一度が大事……最初に親しむか親しまぬか、大事だから、振つてのけてしまへ。○從者聲—從者となるべき聲即ちお前の聲として、よい聲をもたさう。

【譯】 おさんはお玉の顔を見て「どうぢや、今の聞いたか、同じ物をいふにも、茂兵衛のやうに、物やさしくいふても用事はすむ。あの助右も、氣前にぬかりはなささうだが、一體から顔が憎らしく見え、慳食相に見えるから自然と詞にも愛想がなささうに思はれる。どうぢや助右衛門を亭主にもちたいか、世話をしてやらうか」といふと玉は「ゑ、おさん様、いやらしい事を仰つしやるな。あんな男を亭主に持たうよりは、牛に突かれて死にでもしたがありました。同じ手代の中でも茂兵衛のやうなは、かりに物をいふにも、愛想があるらしくて、ついぞ腹をたてた顔を見せない。ほんにあのやうな男を亭主にもつ女は果報だと思ひます」といふ。おさんは即ち「本當にさうお前がいへばさうぢや。猫にも人間にも合縁といふものがあり、何事も縁次第ぢや。隣の紅屋の赤猫は、見た所からがやさしく、此三毛猫を呼出すにしても、聲を細くし、恥しさうな風をするやうな。こいつが男にしてやりたい。また向ひの練物屋の灰色の毛の猫は憎らしい不恰好な顔附で、何の遠慮もなく、屋根の上で馬を馴らすやうに、叱りながら怖ろしい顔をして此三毛猫を呼出してゐる。先達も下立賣の母様と私と親子たつた二人を縁先の藏の家根で、その灰毛が此三毛をかはいさうに、ひどい眼にあはせる、その様子がそれは／＼見られた事かいの、見てはをれなかつた。あまりの憎さに棹竹をもつて来て逐ふと、逃げる時に私を睨んだ目元の恐さといつたらなかつた。これ三毛よ、悪い男をもつなよ。灰毛猫が戀をしかけ 来たら、初の一度が大事だから、振つて逃げたがよい。此私

しの從者即お前の聲になるものぢやもの、よい牝猫をもたしてやるぞよ、お、可愛いや」と猫なで聲でいふ。と、にやん／＼あまへる牝猫の聲がもれた爲か、他所で牝猫を戀ふ牡猫の聲がする。三毛はそれに怖れてかけ出ようとする。

さん「ヤイいたづらもの、大勢男猫の聲がする。あの中へいて何とする。エ、氣の多い奴じやな。こりや男持つなら、たつた一人持つ物じや。間男すれば磔刑にかゝる。女子のたしなみしらぬか」と、ださすくめても爪立て、搔つくをあいしたしこ。放せば離れてかけ出る。「ヤイ間男しのいたづら者、粟田口へいきたいな」と、後の我身を魂が、さきにしらせて祝日に、追かけ奥に入りければ玉もついでに立所を、以春むく／＼起あがり、後だきにひつたりと、以「サアうつくしい女猫捕へた」と、乳のあたりへ手をやれば、玉「ア、こそばあ。またしては／＼、だきついたり手をしめたり、一度がぢやう。あさん様につけて、どこもかしこも紫色に成程つめられます。ア、うるさや」とより放す。

【註】 間男—間男をする。○粟田口—其頃京の刑場のあつた所 ○後の我身……後で自分が死なねばならぬことになるのをと、例の作者が此處で豫報をしたのであるが、これあるが故にこそ作劇の上からは、作者は非常に損をしてゐるのである。○祝日—いはひに、いふをかけてゐる。○追かけ—駆け出た猫を追かけて。○こそばあ—こそばゆいの訛、くすぐつたい。○又しては—またも。○一度がぢやう—ぢやうは定。全體で此度こそきつとの意。

【譯】 おさんは即ち「やい、淫奔者奴、大勢の男猫の聲がする。あの大勢の中へ行つてどうする。ゑ、氣澤山な奴ぢやな。これ亭主をもつなら、たつた一人もつものぢや。間男をすると、磔刑にされる。女としてそのたしなみを

知らぬか」といつて、逃がすまいとして抱きすくめるやうにしても、爪をたて掻きつくので、痛や、手を放すと、離れて駆け出てしまふ。おさんは「やい、間男をするいたづら者奴、はりつけ場へ行たいのぢやな」といつて、やがての後になつて、落ちゆく自分の身の有様を、魂の方で先に立つて知らせていふ祝日に、猫を追かけて奥に入れば、お玉も引つゞいて立上る所を、主人の以春はむく／＼と起上つて、びたりと後だきにして「さあ美しい女猫をとつかまへた」といつて乳のあたりへ手をやると、玉は「お、こそばゆい、またしても、抱きついたり手を締めたり、此度こそは、おさん様に云ひつけて、到る處紫色になるほどつめられますよ、あゝうるさい」といつて振りはなす。

以「どつこいやらぬ。本妻の悋氣と餽鈍に胡椒はお定り、なんとも存ぜぬ。紫色はあるか、身中が樺茶色に成るとても、君ゆへならば厭はぬ。むごいぞ多／＼、毎晩々々寢込にお見舞申せ共、一度も本望とげさせぬ。我ゆへに此以春、名をかへて鎌足の大い。玉をとる思案ばかり。今夜こそいやといはさぬ、一つの利劍をぬき持ちて、彼海底に飛入るぞ。應か／＼」とださしむる。玉「どう成とさしやんせ、こちらおさん様にいふ程に、あれおさん様／＼」以「やれやかましい。其外おさん鰐の口、口のついでに口々」と、顔をよすれば門口より、「頼みませう」と、臺にすへたる鯛蚌、玉「あれお客が有る退しやんせ」以「いや大事ない。持參は女中客」と、いふ所へかご乗物、下立賣のお袋様、お出の由を案内す。以「南無三寶しうとめの古蚌、是はならぬ」と云捨てて、逃て奥にぞかけ入りける。

【註】○胡椒—餽鈍には胡椒をかけて食ふ習があるからいつたのだ。○我ゆえに—お前ゆえに。○鎌足の大い—謡曲「海士」や舞の

本「大職冠」などにも出でゐる。即ち海士が名刀を携へて、鎌足の爲に、海底にしづみ、釋迦の像を、何れより見るも同じ面を見せ、決して背を見せることないといふ玉即ち面向不背の玉をとり返し、自分の乳の下を斬り、傷の中にそれを隠してもち歸つたといふ事がある。下女の名がお玉といふから、その名を此鎌足が海底にとつた玉にかけて、いつたのだ。○一つの利劍……謡曲「海士」に「一つの利劍をぬきもつて、彼の海底に飛入れば……」とあるからとたのだが、此處の叙述の様子から見ると、作者例の低級觀衆に氣に入らんが爲に、如何はしい意とふくめていつてゐること勿論だ。○其外おさん鰐の口……謡曲「海士」に「其外惡魚鰐の口のがれがたしや我命」とあり、番神が妨げるのみならず、惡魚に身を妨げられ、鰐の口に噛まれては、我命も助からぬ意。此意から、おさんに此ことを告げられては恐ろしいといつて、以春がおさんの悋氣を恐れる口吻を記し、口といつたついでに接吻を求める意を見せたのである。意味からいへばその外の語はないがよいが、謡曲から引いたことを示す爲に残したのだ。○口のついでに口々—鰐の口といつたから、その口のついでに、接吻をさせよといつたのだ。○蚌持參—蚌をもつて來たのはの意だが、あかがひといへば、近松は兎角女子の性器の意味に用ひてゐる。だから、此處でも女中客といつて、暗にしやれたのだ。○駕籠乗物—乗物といへば必ず駕籠だが、それを重ねて、一層明にする慣用に從つたのだ。○南無三寶—しまつたといふ時に口に出す一種の歎詞の如きもの。○古蚌—蚌持參の項で説明したやうな意があるから、老いた女の意に用ひたのだ。他の作にも此用ひ方時々あり。○ならぬ—此儘にをることならぬ。これはどうもならぬ、たまらぬなどの意。

【譯】以春は、即ち「どつこい、逃しはせぬ。本妻が悋氣をするのと、餽鈍に胡椒をつけて食ふのとは、お定りであるから、何とも思ひはせぬ。紫色はをるか、體中が樺茶色に焦げたとして、お前ゆえであらばそれも厭ひはせ。その様にさへ焦れてをるものを、逃げるとは殘酷ぢや。毎晩お前が寢てをる所へお見舞申すのに、一度も本望を遂げさせてはくれぬ。お前ゆえに此の私は、名を變へて鎌足の大臣とも呼ばれよう、鎌足は海底に面向不背の玉をとらせだが、私は面向不背の玉ならぬ、お玉といふお前を手に入れる思案ばかりしてをる。今夜こそはいやとはいはさぬぞ。海底に玉をさがす海士と同じく一つの利劍をぬきもつて、海底に飛込むぞよ。よいか、應といふか／＼」といつて抱きしめる。お玉は「どうなりとなされませ。私はおさん様に云ひますから。あれい、おさん様／＼」「やれ、喧しい。おさんは鰐の口である、恐い／＼。口といつたついでに接吻々々」といつて顔をよせる途端に門口から、

「頼みませう」といつて、臺にすえた鯛と赤貝をもつて來た。お玉「あれお客様が、のいて下され」「いや心配はない。赤貝持參の主は女客ぢや」といふ處へ駕籠に乗つて、下立賣のお袋様がお出たといふて案内する。以春は「南無三寶、姑の古赤貝が御座らしては、是はたまらぬ」といひすて、逃げて奥へ入つた。

程なくかごをかきいるれば、おさん端迄出むかひ、「かゝ様よふござんした。とつ様はなぜあそい」母「さればいのとつさまは、おとゝひ花の本の連歌の會に夜をふかし、少風氣の有うへに、風早宰相様の朝茶の湯、彌風を引そへ、それでゑござらぬ。先々けふは毎年かはらぬ初曆、商賣繁昌めでたい。以春殿はどこにぞ、悦びであらうの」さん「推量して下さんせ。御所方々御嘉例の九獻に酔ふて、裏の數寄屋にねていられます。サア先奥へござんせ。りんやはつち供太義じや。晩にはこちらから送らせましょ。六尺共往なしや」と、親子伴ひ入りにけり。

【註】 ○花の本―連歌の宗匠の稱號。もと和歌や速歌の集りを花の下の好士などといったが、宗祇法師連歌の宗匠として一家をなし、朝廷から花の本の稱號を賜はり、それから後宗匠のことを花の本といふに至つたのだ。○風早宰相―風氣といつたからその縁で引いて來た。風早宰相といふのは寶永頃即ち此作の四五年前まで生きてゐた中納言風早實種のこと、富士谷成章撰「おほらみのはし」と稱する書にある如く、中納言が、老人でありながら、冷水を多くのんだので、上皇が、そんなことをして病氣になつてはならぬと仰せられた故事を引いていつたのだ。樋口氏説。○九獻―祝の盃は、三獻づゝ三度さすを習とした、即ち九獻といつたが、それから祝ひ酒の意に用ひた、こゝは即ちそれだ。○數寄屋―茶の會を催す爲の小さい庵。○送る―人をつけて見送る意。○六尺―六尺の棒をかくからいつたので、駕籠屋をさす。

【譯】 間もなく駕籠をかき入れると、おさんは端の處まで、迎ひに出で、「かゝ様よくおいで下されました。父様はどうして遅いのです」といへば、母は「さればぢや、父様は一昨日宗匠の家の連歌の會に行つて夜を更かして、少し風氣のところへ、風早宰相様の朝茶の湯に呼ばれて、いよゝ風をひきそへられた、それで得おいでなされぬ。先づ々々今日は毎年の如く變らず初曆が出來て、商賣は繁昌して、おめでたいことぢや。以春殿はどこにおいでぢや。さぞお悦びなされてあらうのう」おさん「推量して下さんせ御所その他方々にて、御嘉例の祝酒を頂いて、裏の數寄屋に寝てをられます。さ、まづ奥へおいで下されませ、おりんやおはつはお供づとめ太儀であつた。晩にはこちらから、人をつけて見送らせませすから、駕籠屋達を歸らせなされ」といつて、親子が一緒に連れて奥へはいつて行つた。

奉公を出過ぬ氣立傍輩の、下手につくも我からの、茂兵衛は早天より、曆くばりてさきゝの、びん美酒の麴の花、ちろく目にて立歸り、「ア、あるいた事かな、七介やすみや。御一門衆お出なら、すぐに袴も著てゐて、こゝで一ぶくたのしみ煙管、さらば酔をさまさうか」と、しばしくつろぎ休みしが、火燵の間より「是茂兵衛こゝへおじや」とよぶこゑはおさん様。はつとゐなをり、茂「たつた今歸り、少し酒氣もござれ共、若急な御用もや」といひければ、さん「さぞくたびれでは有らうが、急に話す事が有る、こゝへ」と、膝もと近く小聲に成り、――

【註】 ○出過ぎぬ氣立―あまり出しやばり過ぎぬ氣前での意。○我からの茂兵衛―古今集「螢のかる藻にすむ蟲の我れからと……」の藻を茂兵衛にかけたに過ぎぬ。我から下手につく茂兵衛は……。○びん美酒―こん小松、こん金堂などの如く、美酒とちよを調子よくいつたのだ。○麴の花―酒は麴の花でつくるから、酒のことをいつたのである。それを更に花の色のやうな赤い顔をしてとかけたのだ。○ちろく―目―ちら―する目、酔つてちらつくのだ。○すぐに―すぐとそのまゝに。○膝もと近く

……近く茂兵衛を呼びよせて小聲になつて。

【譯】奉公大事と働いて、出過ぎたことをせぬ氣立にて、我から朋輩の下手につくこともいとほぬ茂兵衛は、早朝から曆くばりをして、行く先々で美酒のふるまひにあひ、赤い顔をして、目をちらつかせながら歸つて来て、「歩いたことよく、七介休息するがよい。御一族の方がお出でならば、此儘袴も著てをつて、此處で一服樂みの煙草を吸ふて、酔でもさまさう」と、いつて、暫くくつろいで休んでゐたが、そのとき火燵の間から、「これ茂兵衛、此處へ來やれ」といふおさんの聲がする。茂兵衛は、はつと居すまゐるを直して「只今歸りました。少し酔つてをりますが、若しか急な御用でもござりませうか」といへば、おさんは「さぞ疲れたことではあらうが、急に話したいことがある此處へ來てくれ」と膝元近く呼よせて、小聲になつて――

「とつ様の方に面倒な事かできて来て、談合したいといふ事。恥をいはねば理が聞えず。知りやゝる通りの御身體、下立賣の居屋敷を、町衆の加判で、おとし三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家、物入つゝいて此春又町へもかくし、内證で八貫めの質に入れたを、前の銀方が聞付、それとはなしに此月の三日限に、家渡すか銀立つるか、返事次第に五日には目安あげると、足もとから鳥の立様に、俄に町へ届けたといの。いとしゃ、とつ様の家渡すも大事ない。目安付るもかまはぬが、家一間を兩方へ、質に入たが顯はれては、此の岐阜屋道順が一分すたるとて、ほろ／＼泣いてござるげな。それで色々扱ひて此三日迄に、二貫百目の利をやつて、事はすむに極つて其上で銀がな

い。漸と一貫目は黒谷のお寺で借出し、まあ一貫目が打つてもみしやいでもといの。以春様にいふたらば、つい埒は明けけれど、とつ様もかゝ様も、聲に無心云ひかけては、大事の息女にひけが付くと、お年寄の我がつよく、以春様へは鼻息も知らず事が叶はぬ。助右衛門にいふたらば、又例のしかみ顔、眉合に皺よせて、其足で以春様にいふは定。我夫をさしおいて、手代にいふは何事と、結局物に尾緒が付、此月末には去御公家衆の御知行納り、三十兩戻る金が有、是はあれもしつてゐる。二十日程の間のこと、頼むはそなた計り。壹貫め調へて、親達の苦をはらしてたも。エ、無念な、男の身ならば、是式に親達に苦はかけまい。娘生んだ親も損、女ごに生れた身も因果」と、しみ／＼くどき頼みける。

【註】○理が聞えず…物の道理が分らぬだろが。○御身體―御身代。○居屋敷―住つてる家屋。○加判―町内の年寄に證人の判を押して貰ふをいふ。つまり連署連印のことだ。○三十貫目―目方勘定の金は凡て銀の勘定にて、銀六十匁が金一兩と計算する。○昔の株の家―昔から古株、金持と立てられる名家のこととて。○町へも隠し―町の年寄へ知らせず。○銀方―金を貸した人。○銀立つる―銀をかへす。○目安―簡條書きをすることを目安書といふ。即ち簡條書の訴狀の意。あげるはそれを出す即ち訴へる意。○足もとから鳥…俄に催促などする意に用ふ。○一間―一軒。○道順―おさんの父。○一分―面目、男、顔などの意。○扱ひて―仲裁して。○打つてもみしやいでも―打つても、みしやいでも。○ひけ―ひけ目、肩身のせまいこと。○我―我意。○鼻息も知らず…臭も知らせられぬの意。○しかみ顔―しかめ面。○眉合―眉間。○物に尾緒…枝葉がついたりして大げさになり、事が面倒になる。○御公家衆の知行納り―或、公家への祿がはいつて、その爲に三十兩が父の手に戻つて來るといふのだ。○頼むはそなたばかり―助右は相手にならず、さりとて以春との間はうまくいつてゐないから、打あけられぬ。自然と茂兵衛を

たよりにしていったのだ。○是式に―こればかりのことに。式はあて字にて、今も關西ではこればかりの意にこれしきといつてゐる。

【譯】おさんは「父様の方に厄介な事が起つて来て、話し合ひたいといふのぢや。恥をいはぬと道理が分るまいがお前も知つての通りの身代なので、下立賣の住家を町の年寄衆の連署で一昨年銀三十貫目借用の質に入れたさうな。それでも昔から古株の名代の家のことゝて、費用のかゝることがつゞいて、此春、町の役所へも隠して、内々貫の借金の抵當にしたのを、前の貸金主が聞いて、それとなく、此月の三日限りで、家を渡すか、銀を返すか、返事次第にて、五日には訴訟をするからと、足もとから鳥の立つやうに、俄に町役所へ届け出たといふことぢや。可哀さうに、父様は、家を渡しても何でもない、訴訟されてもかまはぬが、家一軒を右と左と兩方へ質に入れたといふことが分つては、此岐阜屋道順の男がすたるといつて、ほろ／＼と涙を出して泣いておいでさうな。それでいろ／＼仲裁して、この三日までに、二貫百目丈け利子を拂つて、事件落着と極つたが、さてその上で銀がない。やつと一貫目丈けは黒谷のお寺で借り出して来たものゝ、もう一貫目が、どこを打つてもひしやいでも出ようがないとさあ。以春様にいへば、譯もなく埒はあくのだが、父様も母様も、聲に對して無心を云ふては、大切な娘の肩身がせまくなるといつて、我意が強く、それで以春様には、臭ひも知らせることが出来ぬ。といつて助右衛門いへば又例のしかめ面をして、眉間に皺をよせて、その足ですぐと以春様にいふにきまつてゐる。すると、自分の夫をさしおいて、その様な大事を手代に話すとは何事ぢや、それには屹度何か譯があるに相違ないといふやうなことになる、結局物事に枝葉がつき大袈裟になつて面倒になる。此月の末にはあるお公衆の家へ祿がはいつて、それで父の手に三十兩丈けが戻つて来るのぢや。これは私も知つてなる。だから二十日ばかりの間のこと、頼むに足るのはお前ばかりぢや。一貫目丈調達して、親達の苦をはらしておくれ。えゝ無念や、男の身であつたら、こればかりの事に親達に苦勞はさせまい。娘を生んだ親も損であり、女に生れた身も因果なことぢやと、しみ／＼と口説きながら頼んだ。

茂兵衛も一盃きげん、はれやれ姫御前と申者はお氣がほそい。五十貫百貫めでも有ることか。仰山うやまそらにそれ程の銀、ぐど／＼おつしやる事かいの。且那の印判一つ問屋へ持つて參れば、江戸爲替かへせ二貫めや三貫目、常住じやうちゆう取やりいたします。物ならたつた二十日の間、お氣遣きつかひなされますな。けふの内一貫目、急度調きつととへ進ませう。私わたくしか少しの間、横道わやどいたせば事がすむ、といふて盗ぬすするでもなく、人の目をかすめる事。よし盗すればとて、身の欲に付かぬは天道あきらかが明なり。おまへとてもお主しゆ、親の恥は娘の恥しやうと舅の恥しやうとは聲の恥、ふたりの主の恥をすゝぐは、畢竟ひつじやうお主の奉公、落つて奥へござりませさん、ア、嬉しい／＼。物はいふて見よふ物。かゝさまにもさゝやいて、お心をやすめう。そなたに任せた頼むぢや。こりやおなご共、お料理がよくば早ふお膳出あしだしませ」と、いさみて奥に入にけり。

【註】○一杯きげん―酒を一杯のんで元氣のよい意。○姫御前―こゝは只氣の小さい女といふ位に用ひたのだ。○江戸爲替―江戸から送つた金の手形。之をもつてやがて金と引かへるのだ。○常住―關西語で、しよつちや又はいつもの意。○物なら―此處では日限といつたらといふやうな意味に用ひたのだ。物の半日とたゝぬ中になど今も用ふ。○横道―道にそれる、横着、ずるいこと、などの意にて、横道な横道者など、關西にて今も用ふ。○身の慾にはつかぬ―自分の身の慾でやるのでないこと。つかぬは、ついてするのでないこと。○親の恥は娘の恥―諺には親の恥は子の恥子の恥は親の恥とある。○お主の奉公―お主への奉公。○出じませ―出しなされといふやうな上品な云ひ方にしたのだ。

【譯】茂兵衛も一杯酒を飲んだ上機嫌であるので威勢よく「やれ／＼女といふものは氣の小さいものぢや。五十貫目とか百貫目といふやうな大金でもあることか、それつばかりの銀を、そんなに仰山らしくど／＼とおつしや

るべきことであらうか。旦那の印判を一つ問屋へもつてゆけば、何でもないことで、江戸からの送金手形で、二貫目や三貫目の銀はしよつちうとつたりやつたりしてをります。それにたつた物の二十日といへば御心配なされますな。今日の中に、一貫目の金を屹度調べませう。只私が暫くの間するをやれば済むことでござります、といつて、何も泥棒するのではなく、人の目をぬく丈けのことです。よし又盗棒したにしろ、自分の身の慾の爲にせぬのであることは天道様が證明して下さるし、それにあなた様とて私の御主であります。そして親の恥は娘の恥であり、舅の恥は掣の恥であるからには、娘と婿とのあなた方お二人の恥をそぐといふのは、つまりは御主人への奉公でござりますから、屹度引受けました。安心して奥へおいでなされませ。」おさんは「あゝ嬉しい。物は言ふて見るものぢや。うまくいつた。母様にも内々知らせて、安心させよう。そなたに萬事まかせ。頼むぞや。これ女どもお料理が出来たら早くお膳を出しなされ」と勇氣づいて奥に入った。

茂兵衛とつくと思案を極め、他人さへ頼まるゝ、つまる所が主のため。たとへしわざは曲る共、心はさつぱり。ぬぐひ漆の刀かけ、主人以春の巾着を、明て奪ふも紫ぶくさ、印判そつと取出し、いつの間にかは助右衛門、戻つて後に有るぞとは、見ず白紙を押ひろげ、茂「文言銀目は跡にも書け。先印判を」としつかとおす。背中に目のなさうたてさよ。助「茂兵衛それ何する」と、聲かけられてびつくりせしが、茂「ハア、助右衛門か。天道は恐ろしい、見付けられてのけた。壹貫目程入用有つて、旦那の名代で銀をかる。此月中にあてが有る。二十日程の間、ねぶつてたもるか。そなたの氣では傍輩の首切らるゝもいとふまい。茂兵衛が科は極つた。くゝり成と殺し成と勝手にしや」となげ出す。

【註】○他人さへ頼まるゝ何でもない他人からさへ頼まれたら、自分は引受けるにきまつてゐるに、まして吾を見込んで主人から頼まれるからにはの意。○ぬぐひ漆の刀かけぬぐひ漆といふものがあるのではなく、ざつと拭いたやうに薄く漆を、けた意。○明けて奪ふも「紫ぶくさ……論語の「紫の朱を奪ふを惡む」からの語で、刀かけから巾着をとり、その中にあつた紫袱紗に包んであつた印を取り出したのである。○うたてさよ「つまらなさよ。○名代判をかり名をかりて。○目ねぶつて「目をつぶつて、しらぬふりして。」

【譯】茂兵衛はとくと思案し腹をきめて、自分は縁もゆかりもない他人の頼でさへ引受ける。まして、自分を見かけて頼んだ、つまりが主のためであるから、やらすにはおけぬ。例へやり方は曲つてゐても、心は少しも疾しいところはなく奇麗さつぱりとしたものであると思ひ、ざつと拭いたやうに、薄く漆をかけた刀かけにかけてあつた、主人以春の巾着をあけて、その中に入れてあつた紫袱紗から印判をそつと取出して、いつか知らぬ間に、助右衛門が戻つて来て後に居るとは、目に見ないので、知らないで白紙をひろげて、「文言や金高は後でもかける、先づ印判を押さう」といつてしつかりと押した。ところが背に眼のない、情けなさ、つまらなさよ。「茂兵衛、それは何をやるのだ」と、助右衛門から聲をかけられると驚いて、やがて茂兵衛は、「はあ助右衛門か、天道は恐ろしい。罰があたつて見つけられてしまつた。一貫目程入り道があつて、旦那の名をかりて銀をかるのだ。返すのは此月の中に目當てがある。二十日ばかりの間眼をつぶつてゐてくれるか、どうか。いやそなたの氣實では、朋輩が首を切られる時だつて、平氣であらう、して見ると茂兵衛の罪はきまりがついた。縛るとなりと、殺すとなりと、勝手にするがよい」といつて身を投げ出した。

助「ヲ、いきさず奴勝手にせいであかふか。男共皆おじや。旦那お出なされ」とよばはれば、家内の上下何事やらんと立さはぐ。助右衛門鼻をしかめ、「旦那是御らんなされ。おまへの印判盗出し、白紙におす曲者、大經師の家をくつ返し、主を賣らふもしれぬやつ。」請人に預けてのくゝしあげての、

とひしめけば、おさん親子ははつと計、肝にこたへ胸にしみ、色ちがへする計なり。以春大きに驚き「扱々日比程にもない見ちがへた根性。惣じて所帯がたあきなひ事、二人にまかせ置くからは、事によつて主の印判、おすまひ物ではなけれ共、助右衛門にも知らさぬは私欲有るに極つた。どふした心で印判ぬすんだ。助右衛門それいさせて聞きや」助「エ、なまぬるい旦那殿と、たぶさを取つてさういから、二三十くらはせ、「サアぬかさぬか」と睨めつくる。

【註】 ○いきずり奴―物摸奴といふぞ強いはんが爲に、いきとかどうとかをつける習がある。一卷天の網島四二〇頁註参照。○鼻をしかめ―顔をしかめ、鼻の通りに皺をよせ。○請人―保證人。○請人に預けての…此語から次の、「くしあげて」までは、有朋堂本にあるが如く、助右一人の語といふやうに見ては悪い。預けてのなど、の字のある處から見ると、どうしても此邊は頂けるといふもあれば、又くより上げてやれなどいふもありの意にて、地の文であるのだ。助右の語は奴で切れてるのだ。○ひしめく―さわぎ立つ、大勢が云ふからさわぎと書いたのだ。○色違する―顔色をかへる程。○日頃程にもない―日頃信用してゐた程にない。○所帯がた―世帯向のこと。○たぶさ―かみの髻。○さういから―握り拳がさういひの鼓のやうに見えるからいふ。

【譯】 助右「お、此拘摸奴勝手にせいでおくか。男ども皆やつて来い。旦那もおいでなされ」と、呼ぶと、家内の上も下のものも何事であらうと思つて騒ぐのである。助右は鼻の邊に皺をよせ「旦那殿御らんなされませ。あなたの印判を盗出し、それを白紙におすといふ曲者であるからには、大經師の家をひつくりかへし、主人を賣ることもやらぬとも限らぬ奴である」といへば、他の者共は引受人に預けるだとか、括りあげてやれなどといつて、騒ぎ立てると、おさん母子は、はつとばかりに驚き、それが肝にこたへ胸にしみこんで、顔色も變る程であつた。以春は大に驚き、「さて、日頃の態度とちがつて、見ちがへた根性の奴ではある。一體で世帯向のことや、商賣の方の事

一切を二人にまかせてをるからには、場合によつては主人の印判を押すといふことのないものでもないが、助右にも知らせんでやるといふからは、私慾の爲の企み事ときまつた。一体如何なる心で印判をぬすんだのだ、助右それを白狀させて聞けよ」助右は「え、生ぬるいやり方ぢや旦那殿」といつて髻をとつて、拳骨二三十回も食はせて「さあこれでも白狀せぬか」といつてにらみつけた。

茂兵衛髪も解きむしられ、茂、ヲ、まだぶて、ふんでくれ。主の印判ぬすむとは、だいそれた此茂兵衛、去ながら今日迄茶屋の見世へ腰かけず、かるたの打様存ぜず。人なみに著がへは持、足手まとの妻子はなし。何を不足に私欲をせう。からだは粉にはたかれても、茂兵衛が口から云わけせぬ。おさん様お袋様、詫言などあそばしたら、未來迄のお恨。ヤイ助右門門、天道が物をおつしやればおのれがつらをぶち返し、ゆるして下され茂兵衛様と、おがませいで無念なわいくちおしいわ」と齒ざしめし、顔をかたひけ泣きぬたり。

【註】 ○ふんでくれ―踏みつけてくれ。○茶屋―色茶屋即ち遊女屋のこと。○かるた―かるたは羅典語のカルタ、西班牙語のカルト等の語から来たもので、足利時代の末耶蘇教と共に入り、寛永の頃長崎に行はれ、其頃の草紙にも載つてゐる。當時のカルタは、盃、劍、玉、香の四種各十二枚づゝ、凡て四十八枚にて、今日の ترامプ が十三枚づゝあるのは少しちがつてゐる。和蘭人のもつて来たもので、此當時早くも京阪地方に傳へられて流行したものと見える。○着かへはもつ―着がへの着物はもつてゐる。○はたかれても―碎かれても。○天道が物を…天道様がこの茂兵衛に代つて言を發するとすれば。

【譯】 茂兵は髪も解かれむしられ、「お、まだ打て、踏みつけもしてくれ、主人の印判を盗むといふ大それたことをした茂兵衛であるからには、何とされても仕方はない。だが今日まで色茶屋の店へ一度も腰をかけたことがな

く、當時流行のカルタの打方も知らず、入並に着かへの着物はもつてゐる。足手まとひになる妻子はもつてゐず、何の不足があつて、私慾の爲に悪事をするやうなことがありませう。體は粉に砕かれても、茂兵衛の口から辯解などはしませぬ。おさん様お袋様、私の爲託言といひなると未來までお恨申しますぞ。ヤイ助石衛門、天道様が此茂兵衛に代りて口をきかれるとならば、そこの面を打ちかへして、許して下され茂兵衛様といつておがませんではおきはせぬが、今それが出来ぬが無念である口惜しい」といつて齒ぎしみをなし、顔を傾けて泣いてゐた。

以春もさすがなじみの下人、以いか様二十年見落しもない奴が、俄に悪心有る筈なし。云ひわけせし〜と、いへ共さらに返答せず。中居の玉はかねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨てんと思ひこむ、心ざしをや顯しけん。主人の前に手をついて、「是皆私が頼みし事、茂兵衛殿に科はなし。岡崎にゐられますわたくしがおぢ様、牢人のいとなみにくらしかね、五百目餘りの借錢にこひつめられ、腹を切るとの便あんまり悲しさ、あのお人を頼みまし、銀才覺してもらひます。慈悲心あまつて身の難儀まつびら御免成ませ」と、誠しやかにいひければ、おさん親子は幸ひと、「玉出来しやつた。有様によふいやつた。人のためのしぞこなひ、殊に大事の祝日、つれそふ女房 姑が一生の託言、ゆるしてやつて下され」と、手を合せても合點せず。

【註】○下人―召使。○いか様―成程。○見落し―ぬかり、失錯、手落にて、見落しなく、ぬかりなく注意して来た奴がの意。○中居―仲居。幕府の大奥にて料理、献立煮焚など一切をせし女中。又京坂地方で遊女屋料理店などで客に接し用をする女中のことをいふ。○岡崎―東山黒谷の附近。○おぢ様―後に出て来る講釋師梅龍のこと。○牢人―浪人、近松は常に此あて字を用ひた

○こひつめられ―早く返せ〜と乞ひ詰められ、せがまれた意。○才覺―工面、工夫。○慈悲心餘つて……慈悲心があつて、私の伯父を救はうとして自分の身に難儀を着られたのだから……。○幸と―これはよい仕合せと。○有様に……事のあるがまゝに正直に。○人の爲の……他人の爲を思ふての上の失さく。○祝日―初曆の賣出しの祝日。

【譯】以春もさすがに、馴染のある下人のことではあるし、「成程二十年といふ長い間、手ぬかりもせず、注意周到でやつて来た奴が、俄に悪心起す筈はない、云譯をしろ〜」といふが、それには少しも返答をせぬ。仲居のお玉はかねてより茂兵衛に心をかけて、命も捨て〜もと思ひ込んでゐたのであるから、これを見ると、その心根を現はしたいのか、主人の前に手をついて、「これは皆私が頼んだことで、茂兵衛殿に何の科はありませぬ。實は岡崎に居る私の伯父が浪人の暮しをくらしかねて、五百目餘りの借錢をなし、その金を強ひて請求され、腹を切るとの便りがありましたもの、あまりの悲しさに、あの茂兵衛殿におたのみして、銀の工面して貰つてをります。それで慈悲心を起して工面して下さる最中に、あゝした自分の身の難儀に出逢はれたのでござります。眞平御免しなされてあげて下されませ」と、さも誠らしういふと、おさん母子は、これは仕合せと思ひながら「玉よ、お前は出かした、よくも正直に有るがまゝにいつた。茂兵衛の行は他人の爲の過であるし、殊に今日は、大切な祝ひ日である。連れ添ふ女房と姑が、一生にこれ切りのお詫でござりますから、許してやつて下され」と手を合せて頼んでも以春は承知せぬ。

以春彌腹を立て、「扱はうぬらは密通か。此大經師は禁中のお役人、侍同事の町人。不義のうへに主の印判盗おす大罪、けふは早日もくれる、あす請人を呼よせ、段々せんさくする事有。ヤイ男共、隣の明屋の二階へぼひ上げ下に急度番をせい。油断するな」といひつくる。おさん親子は有やうに、いふてよかるかわるかるか、心定めぬうさ草の、茂兵衛は下々にひつ立てられて、わるびれぬ性根たゞし

く哀なり。以「女共もさびしからん、お袋こよひはお泊なされ。舅殿の氣色見舞がてら、我等下立賣へ参つて、萬事つぶさに話ませう。それ女房共頭巾おこしや。是助右衛門、戻りは定めて夜がふけう、皆早ふやすませ、門もしめて火の用心。傳吉提灯七介こい。隣の明屋に氣を付よ」と、いひ付け表に出でければ、助右衛門は方々の、かけがねしめて部屋に入り、臺所には有明の、四角行燈六角堂の、鐘こうくと三重ふくる夜や。

【註】○密通—お玉茂兵衛が、朋輩であつて密通するは不義だといつたのだ。古來朋輩の密通を許さぬ風がある。○禁中—宮中○同亭—同様。○ほひ上げ—ほうりあげ。○有やうに—正直にあるがまゝに。○浮草の—ふはくしてゐる中に。○茂兵衛—茂を藻にかけ浮草の縁で出した。○わるびれぬ—應せぬ。○あはれなり—氣の毒。○女共—女房のことをさす。○おこしや—よこせ、出せ、出してくれ。○傳吉提灯七介こい—傳吉提灯を出せ、七介それを此處へもつて來いの意。近松の表白法は此流だ。○有明の四角行燈—有明まで即ち曉までつけておく四角な行燈の意で、此有明は、夜中つけ通しの意をもつてゐる。だが例の八間とはちがひ、此全體で一つのものをさすのだ。○六角堂—三條烏丸にある寺。

【譯】以春はいよ／＼腹を立て「さては汝等は密通してゐるのか。此大經師は禁中のお役人で、侍同様の町人である。その家にて、不義をした上に主人の印判を盗んで押す大罪を犯すとあつては承知ならぬ。だが今日ははや日も暮れるから、明日保證人を呼寄せて、段々詮索することにする。やい男共よ、隣の空屋の二階へ放りあげて、下にて屹度番をしてをれ。油断をするな」と云ひつける。おさん母子は、正直にいふてよからうか、悪かろかと思ひながら心は浮き草のやうにふわ／＼してゐる中に、茂兵衛は下のものにひき立てられて行つたが、少しも臆しない心の正しいのは氣の毒であつた。以春は更につゞけて「女房も淋しからう、お袋様今夜はおとまりなされい。舅殿の氣分を見舞がてら私が下立賣へ参つて、萬事詳しく話ませう。それ女房ども頭巾をよこしてくれ。これ助右衛門や、／＼と鳴つて夜が更けた。

おさんは母御をねいらせて、心もしめるねまきの露、王が常の寢所の、蒲團も薄き茶の間の角、四尺屏風を押のくれば、玉はねもせず寢所に、只つ／＼ぼりと起むたり。玉「ハアこれはおさんさま、御用が有るならおねまから、お手をならしはなされず、見ぐるしい寢所へ何の御用でござります」さん「ムウそなたもまだねやらぬの。別に用はなけれ共、茂兵衛の難に逢つたは、皆此さんが頼んだ事。それをどふして知つてやら、岡崎の伯父にかて付け、我身の上を取なし、いひ分してたもつた心ざし、あんまり／＼嬉しうて、禮いひに來たわいの。さきの世の姉か妹か、死んでも思は忘れぬ」と、はらく／＼涙をこぼしける。玉「是がまあ勿體ない、お禮うけう覺えもなく、おまへのお頼みなされたやら、どふしたわけやら存せね共、さつきの様に申せしは、わたしが心有つての事」さん「いや／＼わけをしらずには、そばから出ていひわけしやる筈がない。」

【註】○心もしめる……心も愛にしめりがちに寝まきを著ての意。○露、玉—しめるといつたから、露といひ、露の玉といひかけて、お玉を引いたのだ。○薄き茶の間—薄茶の意をふくませた。○四尺屏風—高さの四尺ある屏風。○つつぼり—物思にく

れて獨り立ちたる様。しよんぼりの様。樋口氏説。〇難に逢つた―茂兵衛が災難に出くはしたのは。〇我身の上にとりなし―お前自分の身の上のことにとりて。〇さきの世の姉か妹か―お前は前世にて私の姉か妹であつたのか。〇心有つてのこと―胸に考があつてのこと。

【譯】おさんは自分の母親を寝入らせて、心も悲にしめりながら寝まきを着て、お玉がいつもの、寢所の蒲團も薄いものを着てゐる、茶の間の角に行つて、四尺屏風を押のけると、玉はそこに寝もしないで只物思にくれて、よんぼりと起きてゐた。玉は「はあこれはおさん様、御用があらばお寢間からお手をおならしなさればよいに、それをなさらず、見苦しい寢所へおいでは、何の御用があつてござります」。さん「お前もまだ寢ないのぢやな。別に用といふほどの用ではないが、茂兵衛が災難に逢つたのは、皆此の私しが頼んだ事から起つたのぢや。それをお前がどうして知つてゐるのやら。岡崎の伯父さんにかこつけて、お前が自分の身の上のことにとつて、言ひ分けしてくれた志が、私はあまり嬉しうて、禮を云ひに來たのぢや。お前は前世では私の姉か妹でもあつたのか、死んでもお前の恩は忘れはせぬ」といつて、はら／＼と涙をこぼした。玉は「これはまあ勿體ない、何もお禮を受ける覺えもなく、あなたが頼みなされたことやら、どうした事やら、譯は存じませぬが、先程のやうに申したのは、私しが考あつてのこととござります」。さん「いや／＼、何も譯を知らないで、側から出て云ひ譯をしなざる筈がない」

玉「御尤々々、御不審の立はづ。そんなら懺悔いたしましよ。地體わたしがあの人、骨身に染んで惚まして、二年此かたんどけ共、器量に似合ぬこうとうな、かたくろしい偏屈な生れ付、奉公の内いかな事、女ごの手をも握らぬの、女ごの顔は明いた目で、みる事もいやじやのと、愛想づかしばかりで、やさしい詞もかけられず。エ、聞えぬさらはれた、にくい／＼と思ふやささ、さつきの難儀見や

つたの。玉がばちがあたつた、よい氣味とは思ひしが、いや、そうでない。恨といふも戀からおこつたにくしみ。戀こそは叶はず共、惚れたは定よ。こゝで心底見せいでとは、我身を捨てた此玉を、また不便共思やるまいと、ほんに恨めしうござんする。それにまあおさんさまの前たれど、さもしいきたない、卑怯至極な旦那様のお心。茂兵衛殿へのあたりは、皆格氣から起つた事。わたしにきつうほれたとて、すきさへあれば抱ついたり、袖ひいたり隙を取つてこゝを出よ、餘所にそつとかこふて、在所の親もやしなはふ、小袖やらふ銀やらふ。うるさやいやや、聞共ない事ばかり。わたしが身さへ清ければ、御夫婦いさかひさせまいと、今ならでは申しませぬ、餘所の夜話しにわざと夜をふかして、表の男部屋の二階から、此やねづたひに、あれあの引窓の、繩を傳ふて、わたしが此ね所へ、大かた毎夜さござんする。あんまりで腹は立つ、見かざりはてた旦那殿、しつかり盗人の行義か。おさん様へ知らせまし、町中へもこゝとはつて、でんどうで恥をかかせます。必恨みさつしやるなど、此女ごにしかられて、すぐ／＼と我家の中戸を、内からたゝいて、戻つたぞよ／＼と、おねまへござる後付、おかしいやら憎いやら、かゝつた事ではござんせぬ。所にわたしが茂兵衛殿の肩を持つたゆへ、扱は二人が密通か。禁中のお役をして、侍同然の大經師が家で、不義者めとにくしみは、格氣の當り丁度割符が合ひました。今夜も慥に忍ばつしやるは知れた事。今宵こそ聲立てて、おまへに告うと覺悟を極め、

帯も解かずに此通り、おまへも嘸お腹立、いかに家來なればとて、侮あなづつた惚ほれ様じやと、思へば腹が立ちます」と、涙をながし語りける。

【註】○地體一體で。○骨身に染んで可愛さが骨身に染みるほど惚れて。○こうとうな一じみな、實着な。○さつきの難儀見やつたの—先刻の難儀に遇つたのだ、それ見たことかの意。難儀で、文が切れると見たがよい。○定よ—ちがいない。○我身を捨てた……自分の身をすて、あのやうなことをいつた私を。○さもしい—あさましい、いやしい。○在所—郷里、田舎。○今ならては申しませぬ—いゝ決心して、その通りにして来たことも、今だから申しませんが、これまで隠してゐましたが、の意に後にかゝる。○餘所の夜話—他人の家で、雑談に夜をふかして。○引窓の繩—下から窓を開閉する爲に、綱が引つばつてあるのだ。此繩を傳つて下りて来るのは、盜賊のやることである。人形芝居としてはかうしたことをやつたら殊に面白からう。○見かぎり果てた—見さげはてた。○しつかい—すつかり、まるで。○盜の行儀か—盗人でもしうな仕業かと思はれますの意。○こととはつて—知らせて。○でんど—公衆の前、人中。○中戸—中庭へ通する戸。○かゝつた事—口にも箸にもかゝつたことではござりませぬ。即ちこの意から、言語に絶した意になるのだ。○愷氣の當り—愷氣の爲のあたりちらし方。○割符が合ふ—びたりと前後の事情が、割符を二つ合せることと合ふ。割符とは二つの木片にてつくり、合せるさ何か意をなす文字をかいたものにて、左の片をさめおさ、他人に右の片を興へて、他日双方合せて證據としたものである。口繪参照。

【譯】玉は「御尤もでござります。御不審の起る筈ぢや。では懺悔いたしませう。一體私しはあの人に、可愛さ骨身にしみるほど惚れて居りますので、二年以來口説いてをりますが、顔に似はぬ、じみな、堅くるしい、偏屈な生れ付て、奉公してゐる中は、どんなことがあつても、女の手を握らぬだの、女の顔は眼をあげて見ることもいやぢやのと、愛想づかしのことばかりいつて、やさしい言葉一度もかけてはくれぬのでござります。え、分らぬ人ぢや、私は嫌はれたのぢや、憎や〜と思つてゐる矢先に、先刻の難儀、それ見たことか。玉があれ丈惚れてるに對して、あんな態度をとるから罰があつたのだ、よい氣味ぢやとは思ひましたが、いや、よく考へて見ると、さうではな

い。恨むといつたところで、もとは戀から起つたのぢや。戀が叶はぬにしても惚れたのにはちがひない。此處で心底を見せないではならぬぞと思ひ返して、我身をすて〜かゝつて、あのやうなことをした此玉を、まだあの人には不便とは思はないでせうが、さう思ふと、ほんに恨めしうござんする。

それに、まあおさん様の前で申すのも變なことでござんすが、卑怯至極な旦那様のお心といたつら、何といふあさましい、さたないこととござりませう。茂兵衛殿へのあの無情なあたり方は、皆愷氣から起つたこととござんす。此わたしにひどく惚れたといつて、隙さへあれば抱きついたり袖をひいたりして、暇をもらつて此家を出て行け、密かに他所へかこつておいて、田舎の親を養うてやらう。やれ小袖をやらうの、銀をやらうのと、さてもうるさや、いやなことや、聞き度くないことばかりいはれる。だが私しの身さへ清淨であれば、御夫婦に争をさせるやうなことはないから、決してそんなことはさせまいと決心し、今ぢやから申します、これまでは決して申しませんでした。が、他所へ行つて夜話をして、わざと夜ふかしをして歸つて、表の男部屋の二階から、此屋根傳ひに、あれあの引窓の繩を傳うて、わたしの此の寢所へ、大抵毎夜のやうにおいでなされます。あんまりのなされ方に腹が立ちます。見かぎりはてた旦那様の行ひは、まるで盗人の仕業かと思はれます。その様なことをなさると、おさん様へお知らせ申し、町ぢやへもふれて、人中で恥をかゝせませう。必ずお恨みなされませうと、此女の私しに知られて、す〜と、逃げて、我家の中戸を内からた〜いて、戻つたぞよ〜といひながら、お寢間へおいでなされる後恰好はをかしいやら憎いやら。

そこへ私が茂兵衛殿の肩をもつたから、さては二人が密通してゐるのか、禁中のお役をして、侍同様の身分である大經師の家で、その様は何ことか、この不義者奴といつての御憎しみの言葉は、愷氣から出た當り散らし方で、丁度割符があつてをります。今夜も屹度忍んでお出でなさるは知れたこととござんす。今夜こそ聲を立て、あなたにお告げ申しませうと覺悟をして、帯も解かないで、この通りにしてをります。あなたもさぞ御立腹でござりませう。いかに家來に對してとはいへ、人を侮つた惚れ様をなさることぢやと思ふと腹が立ちます」といつて涙を流

して語つた。

おさん溜息横手を打ち、「扱も扱も今の世の賢女とはそなたの事。男畜生とはつれあひ以春殿。女房ひとりまぶつてゐる男とてはなけれ共、あんまり女房をあほうにした踏付た仕方、涙がこぼれて腹が立つ。なふ此うへに無心が有る。そなたとおれと代つて、こゝにおれをねさせてたも。いつもの格で以春殿がござるとき、泣つ恨みつくどかせ、今宵は玉のなびきやる顔で、夜のある迄だいてねて、内との者の見るまへ、幸ひ母様泊つてなり、いき恥かゝせて本望とげたい。そなたのねまきのおひゑもかして寝替はつてたもらぬか」玉「それはおやすい事なれど、召付ぬ木綿夜著、お肌が冷へてたまるまい」さん「エイなんのいの。昔の井筒の女とやらは、妬のほむらに鏡の水が湯となつた。男の恨に身が燃へて、寒さ冷たさ厭はぬ、ひらに頼む」玉「そんならばごもかくも、随分ぬからしやんすな」と、名を引つゝむ此屏風、火を吹消して鳥羽玉の、玉は奥にぞ入りにける。

【註】○横手を打ち―左右から両手を打合せること。○男畜生―畜生のやうな男の意で、男の薄情をの、しつた語。女ごくなどと對す。○まぶつて―守つて。○あほうにした―馬鹿にした。○いつもの格で―いつもの調子で。○内との者―内の者の意。こちの話とのふ時に關西ではこちの話といふ。内とのさはその時のさと同じである。○いき恥―現世にての恥。生きてゐる間の恥。○おひえ―木綿のぬの。又は木綿の夜着のこゝを女の用語としていふ。身がひえる意から來たものだ。○井筒の女―業平高安通ひの傳説からとつた狂言に、井筒姫は、嫉妬の胸の焰によりて、提子の水を湯にしたといふことがある。近松作「傾城佛

が原」の始にも「悪性通ひの面にくや提子の水は湯となれど、まださめやらぬわが思ひ、つらし妬しあら腹立と……」とある。此歌の文句からとつたものだ。○提子―酒を盛る器にてさげるやうにつるがついてゐる。口繪参照。○名を引つゝむ……後から見ると、これは實に汚名をつゝむ屏風になつたから、その頭で書いたのだ、名は汚名なのだ。○鳥羽玉の玉―鳥羽玉の奥に入つた、火を消して暗い奥に入つたといふのを、玉の名をかりて玉の字をかさねて面白くいつたのだ。

【譯】おさんは溜息をつき手を打つて、「さてもく今世の賢女と、ふのはお前のこと、それに反して男畜生といふのは、わがつれ合の以春殿のことぢや。世の中に、女房ひとりを守つてゐる男とてはないが、餘りにも女房を馬鹿にした、踏付けたやり方で、腹が立つて涙がこぼれる。なう此上にもお前に願がある。お前と私と入れ代つて私を此處に寝させておくれ。いつもの調子で、以春殿が此處へやつてこられるとき、泣いたり恨んだりして口説かせて、今宵はお前が靡びくやうな振りで、夜の明けるまで共寝をして、幸ひ母様は泊つてをれるし、内の者の見る前で、此世での大恥をかゝせて日頃からの望を遂げたい。お前の寝巻の木綿の布子も私に貸して、床をかへて寝ておくれではないか。」玉は「それはおやさしいことござんすが、お召しつけなさらぬ木綿の夜着をお着なされては、お肌が冷えてたまりますまい。」さん「え、何のそのやうなことがあるものか、昔の井筒姫とやらは、嫉妬の焰で、提子の水を湯のやうに熱くしたといふことぢや。私しだとして夫に對する恨の爲に身が燃えてゐるから、寒や冷さなど厭ひはせぬ。ひらにたのむ」玉は「そんならば、兎も角もさうしませう。随分ぬかりのないやうになされませ」といつて、汚名をつゝむ屏風をたて、火を消して、玉は鳥羽玉の闇の奥の間へと入つて行つた。

科なき科に埋もれし、茂兵衛はつくくと、思へば玉が心ざし、日比つれなき此男を、女心に恨みもせず、仇を思なる詞の情、恥しし共面目なし。たとへ此まゝ死する共、一生に一度肌觸れて、玉が思ひを晴させ、情の恩を送らんと、目計り出すふか頭巾、明屋の二階忍び出で、おもやの屋根を四つば

いの、姿を人にとがめられ、又此上に盗人と、名をやうづまん柿ぶき、きのふの雨のかはかぬに、今宵の霧の浅じめり、足のふみどもうはすべり、そろり／＼と引窓の、下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見へぬ共、家の勝手は覺へたる、それを心の力なは、たぐる心も細引と、共にきれ行く心地なり。

【註】 ○科なき科―密通などいふ罪のない罪に埋められた。○日頃つれなき―平生無情な態度でもてなした自分を。○ふか頭巾額を頭巾に深くつゝんで目ばかり出して。○名をやうづまん柿ぶき―柿茸は木片ぶきのこと。こけらのこけを苔にかけて、苔の下に名を埋めてしまふかも知らぬ意にかけた。○ふみど―踏む所。○しやうど―あてど。○心の力なは―心の力として繩をたぐる。○たぐる心も…繩をたぐる心の糸も切れ細引もきれる。

【譯】 罪といふほどの罪ない罪に埋められてしまつた茂兵衛は、つく／＼と考へて見ると、玉の志に對して日頃からつれなくした此吾を、さなきだに執念深い女心に恨みもしないで、仇を恩にした情のある詞をかけて呉れたことは、恥かしくも面目ないことである。たとへ此まゝ死んだとて、一生に一度なりと、肌をふれて、玉の積る恩を晴させ、情ある恩を返さうと、目ばかり出る深頭巾をかぶつて、空屋の二階を忍び出で、おもやの屋根を四這になつて進みながら、此を人に見とがめられて、此上更に盗人と呼ばれて名を苔の下にうづめてはならぬぞと思つてゐると、柿茸の屋根は昨日の雨のまだ十分に乾いてをらぬのに、今宵の霧の爲に薄じめりして、足の踏所もうはすべりがするので、そろり／＼と歩んで、やつと引窓の下をのぞいて見ると、眞暗闇の中に、何のあてどもわからぬけれども、家の勝手は覺えてをるので、それを心の力として、繩をたぐれば、危さに心も千切れ、細引も切れてゆくやうな心地がするのである。

足音餘所に知られじと、柱をさすり壁をなで、目は明ながら盲目の、杖を失ふ如くにて、敷居を一つ

二つ越し、三つ曆の細工所の、次の茶の間に玉は寢る。疊はいづく摺足の、屏風にはたと行當り、びつくりしたる膝震ひ、おさんもはつと胸さはぎ、身もふるはるゝ空ね入り。屏風そろ／＼押やりて、よぎにひつしと抱き付き、ゆりおこしゆり起し、ゆり起されて驚きの、今日の覺めし風情にて、頭をなづれば縮緬頭巾。さん「サア是こそ」とうなづけば、男はけふの一禮の、聲を立てねば詞なく、手先に物をいはせては、ふしおがみ／＼、心のたけを泣く涙、顔にはら／＼落かゝる、其手を取つて引よせて、肌と肌とは合ひながら、心へだたる屏風の中、縁の始は身のうへの仇の始と成りにける。既に五更の八聲の鳥、門の戸けはしくとん／＼、「旦那お歸り」はつときへ入る寢所に、汗は湖水を湛へたり。「やい／＼戻つた明やい」と、よばはるは以春の聲。助右衛門めをさまし、「どいつらも大ぶせり」と、提て出でたる行燈の光、顔を見合す夜着の内、「ヤアおさん様か」「茂兵衛かはあはあゝ」三重

【註】 ○三つ曆の細工所―曆に越えとかけて、一つ二つ越え、三つ越え曆の細工をする所即刷つたり製本などをする所。○疊はいづく―板敷の細工所から疊は何處にあるかとさぐるのである。○膝震ひ―膝をふるはすと。○ふるはるゝ空ね入―身も自ら震ひながら寝たやうなふりをしてゐる。○是こそ―これぞ我夫だと思ひて。○手先に物を云はせて―手の先でいろ／＼な仕ぐさをして物をいふ代りとするのだ。○心のたけ―思ひのありたけを涙にして表はすのだ。○心隔たる―肌は合つても言葉をかはさぬ故胸の思ひは各相手をまちがへてあべこべのことを考へてゐるから隔たるといつたのだ。即ち隔つたことを思ひながら。○屏風の中…屏風の中で結んだ縁の始は…○身の上の仇の始―身を亡ぼすに至る事の始の意即ち此悲劇を此處に暗示したのである。○五更―一夜を五更に分けた時の一つにて、午前四時頃。○八聲の鳥―明け方に盛に鳴く鳥の意にて、即鶉の異稱。○はつときえ

入る寢所―はつと驚いて、魂を消してをる寢所。寢所へははいるのではない。○大ぶせり―大いに寝込んでゐる。

【譯】 足音を他に知られまいとして、柱をさすり、壁をなでながら、目はあいてゐても、盲人が杖を失ふたやうにて、敷居を一つ越し、二つ越し、三つ越えて、曆の細工所の次の茶の間には玉が寝ることになつてゐるので、疊はどこにあるかと、摺足して進む折しも、屏風にはたと行き當つてびつくりして膝震ひすれば、おさんもはつと胸さわぎがし、身もふるはして寝たふりをしてゐる。即ち屏風をそろく、押退けて、夜着にひしと抱きつき、ゆり起し、ゆり起されされて驚き、目が今覺めた風にて、頭をなで、見ると縮緬頭巾をかぶつてゐる。さんは「さあこれこそわが夫ぞ」と思ひてうなづく、男は今日の一禮の挨拶をしながら、聲を立てず詞を口にせず、手先で身ぶりをしては、伏し拜みくして、思ひの有りたけを泣いて現はせば、涙は流れて、はらくと顔に落ちかゝるのである。さんは即ちその手をとりに引よせると肌と肌とは合ひながらも、互に相手を思ひちがへてゐるので、心は隔つてをるものゝ、屏風の中に結んだ縁の始は、やがて身を亡ぼす仇の始と成つたのである。既にして五更に及びて、鶏の鳴聲盛なる頃、門の戸を烈しくとんとく、とたきて、「旦那のお歸り」といふ従者の聲がする。それをきいて、はへと魂もきえ入る思ひでゐる寢所には、汗が湖水の水を湛へた如くに流れ出るのである。「やい、戻つたぞ、戸を明けろ」といふ聲は以春の聲である。助右衛門は目をさまし「どいつもこいつも大に寝込んでゐる」といつて、提けて出た行燈の光にて、夜着の内の二人は顔を見合せて、驚いて、男は「やあ、おさん様か」といへば、おさんは「茂兵衛であつたか、はあはあ」と呆れていつた。

中之卷

京ちかき、岡崎村に分限者の、下屋敷をば兩隣、中に挾るしよげ鳥の、牢人の巢のとりぶさやね、見

るかげほそさ釣行燈、太平記講尺赤松梅龍としるせしは、玉がためには伯父ながら、奉公の請に立、他人むきにて暮しけり。講尺果つれば聞手の老若、出家まじりに立歸る。衆「なんと聞事な講尺、五錢づつにはやすい物」あの梅龍ももう七十でも有ふが、一理窟有る顔付、ア、よい辯舌、楠湊川合戦面白いどう中、仕方で講尺やられた所、本の和田の新發意を見る様な、いかひ兵でござつたの。いづれも明晩々々と、散々にこそ別れけれ。

【註】 ○分限者―金持長者。○下屋敷―別邸。○しよげ鳥―落膽しがつかりした鳥の意。しよげた鳥の如くに。○牢人―近松一流の用方で、浪人のあて字。○とりぶさ屋根―所謂そぎ即木片ぶきのこと。○太平記講尺―講尺は講釋今の講談にて、太平記を面白く讀んできかせるのだ。○梅龍―比當時浪花に梅龍、江戸に青龍軒といふ名釋ありたるを、その名をかりたのだ。○他人向―親類ではなき様子にて。○聞事な―見事なに對する聞事なにて、聞く値ある即ちすばらしく上手な。○五錢づつ―五文。錢はゼニの意で支那の字をかりたのである。又文は匆にて、一匆が一文の勘定であつた。匆は文目にて、「和訓栞」に詳し。又匆の字は漢字にあらず、草書の文の字の中へ、片假名のメの字をはめ込んでつくつたものだとは和田博士説。○面白いどう中―どう中は、洞中、真最中の。○仕方で講尺…いろ／＼な身振りて物語をした。○新發意―三位以上にて佛門に入つたものを入道、以下の入門者を新發意といふ。和田賢秀若くして剃髮し和田新發意といふ。正行と共に四條畷に戦ひ正行戦死の後、師直を討たんとして、敵軍に入り發見されて戦死した。

【譯】 京の附近、岡崎村の、さる金持の別邸を左右兩隣にして、中にはさまつて、しよげ鳥の巢のやうな、こけらぶきの屋根に住つた一人の浪人がある。見る影もほそい釣行燈をつりて、太平記講尺赤松梅龍としてゐる。彼はお玉の爲には伯父であるが、お玉の奉公の引受保證人になつて、他人であるやうな風で暮らしてゐる。今しも講釋が終ると、老若の聽衆は出家までまざりて歸つてゆくのである。「何と素晴らしい聞く値のある講釋ではないか、たつ

た五文では安いものぢや。あの梅龍老も最早七十歳位であらうが、何かにつけて理窟云ひさうな顔付をしてゐる。ああうまい辯舌ぢや、楠氏湊川合戦の面白い眞最中で、仕ぐさ入りでせられたところは本物の和田の新發意を見るやうだ、ゑらい武士であつたな、何誰も又明晩お目にかゝります」といつて、ちり／＼に分れた。

大經師助右衛門駕をさきに押立、「梅龍宿においやるか」と、あけんとすれば、門の戸ははやしめたり。助「ハテ門しめたしめぬとて、盗入に取らるゝ物も有まいが」と、わるゝ計に戸をた／＼。梅龍内よりつこど聲、「かしましい何者ぢや。此の家に響はない。講尺なら明日来い／＼」助「イヤ講尺聞たふない。大經師以春手代助右衛門ぢや。急に逢ねば叶はぬ」と、しきりにた／＼けば、梅「せわしなしい。あくる間も有物」と、によつと出たる糟尾の兀僧、紙子の廣袖革柄の大脇差、梅「ヤア助右殿夜中にけわしい、なんの用でござる」といへば、助「何の用とはおさめ過ぎた。此中毎日人を越、そなたが請に立つた玉が事に付き、用が有るといへ共、酔のこんにやくのと我がまゝいふて、顔出しもせぬ請人が、どこの國に有る事。此月朔日あくれば二日の曉、旦那外より歸りの門口、すりちがふて手代の茂兵衛めが、内儀おさん女郎をそゝのかし走出で、やれ／＼といふ内に行衛がしれぬ。内を詮義すれば、玉めが寢所におさんじよると茂兵衛めがねた體にて、玉めはおさんの寢間に入かはつてねてゐた。しかれば主人の内儀の、問男の中立した玉めなれば、同罪はのがれぬ。おさん茂兵衛を尋出す

迄、請人といひ内證は伯父姪じやげな。そなたに急度預けに來た。ふたりの者がはり付なれば玉は獄門。慥に預けた。そりやかご入れ」と、

【註】 ○しめたじめぬとてしめたとて、しめぬとて。○つこど聲—尖り聲。けんどんな聲、つきごと聲、即ちつくやうな聲の意。○せわしなしい—忙しい。何をそう急ぐのだの意。○あくる間もあるもの—あけるにだつて少し位ひまがかゝるに、何をいそぐのだ。○糟尾—半白の頭髮をいふ。○兀僧—總髮の意。○廣袖—どてらのこと。○革柄—つかを革にて巻いたもの。○けわしい—けたまゝしい、やかましい。○おさめ過ぎた—落つき過ぎた、落つき拂つて。○此中—此間から。○請に立つた—保證人になつて。○すのこんにやくの—何のかのの意。○おさん女郎—只おさんといふ女位の意にて女郎に深い意なし。

【譯】 大經師の手代助右衛門は駕籠を先頭に立て、來て、「梅龍在宅か」といつて開けようとする、門の戸は最早しまつてをる。助右「はて、門をしめたとて、しめぬにしても、何れにしても盗人にとられるものもあるまいに」といつて、割れんばかりに扉をた／＼。梅龍は家の中から尖り聲にて「やかましい、何者ぢや、此家に響はをらぬ、講釋きたくば明日來るがよい」といふ。助右は「いや講釋をき、度くはない、大經師以春の手代助右衛門ぢや、至急に逢はなくてはならぬ」といつてしきりに扉をな／＼と梅龍は「せわしいことぢや、戸をあける間だとしてあるではないか」といつて、によつと出た半白の總髮男は、紙子のどてらに革柄の大脇差をさしてゐる「やあ、助右殿、夜中に、八ヶ間敷い、何の用事ぢや」といふと助右は「何の用があるとは落つき拂ひ過ぎたものぢや。此間から毎日人をよこして、そなたの保證されたお玉の事について、用事があるといつても、何のかのと、我儘ばかりいふて、顔出しせぬ。そんな請人がどこの國にある事ぢや。此の朔日、あけて二日の曉、旦那が外からお歸りの門口をすり違ひに、手代の茂兵衛奴が内儀のおさん殿を誘惑して走り出てしまつて、やれ／＼といつて中に行衛が分らなくなつた。家の内を詮議すると、玉の奴の寢所におさんさんと茂兵衛の奴が寢た様子で、玉の奴はおさん。寢間に、代つて寢てゐたのぢや。して見ると、主人のおかみの問男の媒をしたのだから、玉も同じ罪をのかれるわけには行かぬ。

おさん茂兵衛の二人を尋ね出すまで、證人といふものゝ、内證は伯父にあたるさうなそなたに、玉を屹度預ける爲に來たのぢや。此二人が礫であるとすれば、玉は獄門にかゝることは請合ぢや、確に預け申した、それ駕籠をいれよ」といふ。

昇込所を梅龍棒はなつかんで、二三間押戻し、是手代、此赤松梅龍が姪などを、むざと前垂奉公などに出す物ではおられない。二親もないやつやうく伯父が太平記の講尺、暮六つから四つ時分迄、口をたゝいて一人に五錢づゝ、十人で五十錢の席料をもつて露命をつなく、すらう人の伯父が力には、絹氣をひつばらせて腰元奉公に出す事もならぬ。大經師の家は常の町人とはちがひ、國王大臣も一年の鏡となさるゝ曆の商賣、月日のめぐりを明かにしるす物なれば、ひつきやう月日に奉公すると觀念して、大經師御手代衆參る、奉公人たま、請人赤松梅龍と判をすへたは、姪が不便なればこそ。國元では人なみに武士のまねをして、鉢坊主の手の内程、米も取つた此梅龍、預け者には請取渡しの作法が有る。此家わづか三間にたらぬ小借屋、めぐりにほそ溝ほるやほらず、薄壁一重ぬつたれ共、身が爲の千早の城廓、六波羅の六萬騎にも、落されまいと思ふ所に、どこへ見ぐるしい駕籠が泥甕。サア改めて渡せ」と、辯舌は講尺、事の道理は太平記、かたちは安東入道が、理窟をこねるもかくやらん。

【註】 ○棒はな一棒の先。○前垂奉公一女中奉公。○おられないの意。○暮六つから四つ一夕六時から十時迄。○五錢、五十錢一五文、五十文。錢の意味については、中の巻始の五錢を見よ。○す浪人一すは素。本の浪人。○お手代衆參る一手代殿の意。○鉢坊主一托鉢僧。○手の内……手の内に入れてもらう物、即ち乞ふてあるく米ほどの僅かな知行。○千早の城廓一楠氏の城であるが、最初に湊川合戦の事をいつたから出して來た。自分にとつては千早城にも等しい此家の意。○どこへ……泥甕一これほどの城の中へ、見苦しい駕籠昇が、どこへ泥甕を入れようといふのだ。○辯舌は講尺一辯舌の調子は講釋風にすらくとやりの意。○道理は太平記一物事の道理は大平記に記されたやうにの意。○安東入道一新田義貞の妻の伯父にて、敗北自殺せんとするとき、義貞の妻が諫めると、彼は怒つて彼女を説破したが、その理窟ぶりは太平記に載つてゐる。

【譯】 即ち駕籠昇が駕籠をかき込むところを、梅龍は棒の先をつかんで、二三間押しもどして「これお手代、この赤松梅龍は、自分の姪などをむざくと前垂奉公などに出すものではない。お玉は不幸にして兩親もない奴で、やつと太平記の講釋をして、夕方から十時頃まで口をだゝいて、一人毎に五文づゝ、十人で五十文の席料を得て、それをもつて露命をつなぐやうな、素浪人の伯父の力には、絹物などを引ばらせて、腰元奉公に出すことも出来ない。ところで大經師の家は普通の町人とはちがつて、國王や大臣までが、一年間の鏡となさるゝ曆の商賣をするのぢや、曆といへば、日月の運行を明にしたものであるからには、此家に奉公さすのは、つまり月日に奉公させるも同様ぢやと思つて、大經師手代殿、奉公人たま、請人赤松梅龍と判を押して差出したは、姪が可哀相なればこそであつたのぢや。私は國元では人並相應な武士の眞似をして、托鉢坊主が乞ひあるいて貰ふ程の僅かでも、兎に角知行はとつた梅龍ぢや。その男が預けたものであるからには、つい投出されるわけにはゆかぬ。凡そ預け物を受取るにも渡すにも相當の作法がある。此家は間口僅に三間に足らぬ小さい借屋で、周圍には細い溝も堀るや堀らずで、薄い壁一重をぬつたに過ぎないが、私し自身にとつては楠氏の千早城廓も同然で、たとへ正成を攻めた六波羅の六萬騎の兵ほどのものが攻め寄せても、よも陥落などすまいと思つてゐるところへ、見苦しい駕籠昇風情が、どこへ泥甕を入れようといふのだ。さあ渡すとあらば受取らうから、改めて渡すがよい」といふ辯舌は宛然講釋といつた風、物事の道理は太平記式、恰好は又安東入道が理窟をこねるのもかくもあつたらうかと思はれる風であつた。

助「あた子細らしい威しだて、おいてもらを。武士でも侍でも此助右衛門はなん共ない。あらためて請とれ」とかご打明け、高手小手のしぼりなは、ひつ立て引出す。玉は涙に目も顔も、水より出でたる如くにて、「伯父様面目もござらぬ」と、わつと叫びし顔を見て、鬼の様成る梅龍も、涙を咽につまらせ、齒嚙をなすぞ道理成る。玉は恨の身をふるはし、玉「是助右衛門、物には了簡品も有る。おさんさま茂兵衛殿、一所にのいての上なれば、間男でないといふ云ひわけはなけれ共、かう成下つた始りは以春様の悪性と、そなたの心の倭人から、おさん様に惚た間男といふはそなたじや。腰元のかやをだまして、何やかやとらせて頼んだを知つてゐる。もういをふ／＼と思ふたれど、いや／＼人のそこねる事。とかくおさん様に疵さへつけねばよいと思ふて、此玉が急度目になつて、おさんさまのそばを一寸も離れぬ様にしたによつて、かやめもいひ出す折がなかつたやら、わしをけぶたそうにして、そなたの文を焼いて捨ておつたも見てゐる。それをねたに思ふて、針を棒に取なして、此様にしなした。おのれを磔にかけ、かやめがまづ此様に縛られ、獄門にかゝる奴なれど、此玉が慈悲心ひとつで助かつた。此比是をいはふとすれば、いひけし／＼人でなしめ、慈悲が仇になつたか」と、かつばとふして泣きければ、助「ふんばりめ血迷ふて何ぬかす。請人慥に預けた」といひ捨てて立歸る。

【註】 ○あた—あたぶの悪いなどのと同じく、一種の助勢語に過ぎぬ。○高手小手—高手籠手と書くが正しい。罪人をしぼる本の方法のことで、最も厳しいしぼり方、即ち手を後ろに廻して、手の先をうなじから三寸のところまでもちあげるしぼり方をいふ。「與作」の中巻終近くにも出づ。○水より出でたる—一面涙にぬれてゐる形容。○了簡品もある—しんしやくすべき場合もある。了けんすべき時もある意。品は關西の行きしな、歸りしななどの如く、場合又別の意。樋口氏説。○一所にのいての上……一緒に駈落して上でのことなら間男したのでないといふ云ひわけは立たぬが、先づかけ落した上で起つたことでないから云ひ分けが立つ意。○心の倭人—心のねぢけ者の意。○頼んだ—おさんに取もてたのんだ。○そこねること—損失を受けること。○目になつて—監督し、見張をして。○ねたに思ふ—恨に思ふて、ねたんで。○言ひ消し／＼—こちらの言葉を妨げて、自分の言葉で消すやうにする意。○ふんばり奴—與作の中巻中程にはふりばりめとある。女を罵つていふ語にて、一説には腰の強い奴といふ意とあるが、樋口氏によれば、關西でいふ糞たれ奴の意。

【譯】 助右「さも仔細あげた威し方をすることはやめてもらはう。武士であらうが、侍であらうが、此助右衛門にとつては何ともない。改めて請とれ」と駕籠をあけて、高手小手にしばつてあるお玉を、繩をとつて引出した。玉は眼も顔も涙にぬらして、まるで水の中から出たやうで、「伯父様面目次第もござりませぬ」とわつと泣き叫ぶ顔を見て、鬼のやうな荒男の梅龍も、咽に涙をのみ込み、それで咽をつまらせて、齒を食ひしぼるのはまことに尤もなことである。玉はまた恨みの爲に身ふるひして、「これ、助右衛門、物には了簡品も有る。おさんさまと茂兵衛殿とが、一緒に立退き駈落しての上の事であるといふれば、二人がもとから姦通でなかつたといふ云ひわけは出来ぬ筈だが、それでないから間男ではないといへる。それにかういふことになつた最初の起りは、以春様が放蕩であるのと、そなたの心が曲つてゐるから起つたので、おさん様に惚れた間男といへば、むしろそなたぢや。現に腰元のおかやを欺して、何やかと、色々なものをやつて、そなたが取もちを頼んだのを私はちやんと知つてゐる。これまでもなく、もう言つてしまはうか／＼と思つたが、いや／＼人の損をすることぢやと思ひ、又とかくおさん様に疵をつけさへせねばよいと思つて、此私しが目附役になつて、おさん様の側を一寸も離れないやうにしたによつて、おかやの奴もおさん様に話を切り出す機會がなかつたものか、わたしを烟たさうにして、そなた

から預つた文を焼いて捨て、ををつたのも見て知つてをる。それを恨に思ふて、針程のことを棒程に云ひなして、そなたが此様なことにしてしまつた。そなたを磔にかけ、おかやの奴が先づ第一に此やうに縛られ、獄門にかゝるべきものであるが、此私しの慈悲心一つで、それも助かつてしまつた。此頃此事をいはうとすると、妨げて、人の言葉を打消しくした、人非人奴。慈悲をかけたのが却つて仇になつたか」といつて、がはと伏せて泣けば、助右衛門は「此畜生奴！血迷つて何をぬかすのぢや、請人よ、よいか、確に玉を預けたぞ」といひすて、歸らうとする。

梅龍とびかゝり、盆のくぼ引つかんで引あげれば、足をつま立て、助「是なんとする」梅「何とすると
はしぼるさへ有るに、町人の分でなぜ本繩に縛つた。急度訴へて處刑にする奴なれど、御免なれとぬ
かして解きあるかく」としめつくる。助「あいた、只の町人と違ふて、禁中のお役をすれば、本
繩にかけても大じない。解いてほしくばそつちで解け」梅「ヤアうぬめは繩付で預るさへ、昔からな
い作法に、禁中の御用を聞く町人は、本繩かけても大事なことは、どこから出た掟じや。上をかるし
めた慮外者、どふしても大事な」と、かごの棒引ぬいて、力に任せ七つ八つ、かた息に成程ぶちの
めされ、助「おのれ助右衛門をぶつたぞよ」梅「ヲ、ぶつた、身がぶつたがあやまりか、町人の分
本なはにかけたがあやまりか、御さばき所で埒あけう。サアうせう」とひつたつれば、助「そんなら待
あれ、解いてくりよ」梅「ヲ、とかせいでおかふか、まひとつ棒をくらふか」ときめ付られてふしや
う／＼になはひつぼどき、助「こりや慥に預けた。所の庄屋にもことはつて歸るぞ。一寸でも取りにが

したら、請人共に首がとぶが合點か」梅「まだおとがひを聞あるか」と、ほうげた三つ四つくらはせ
て、玉が手を引き内に入れ、かけがねはたとしめにけり。

【註】○盆のくぼ―頸の背面の中央のくぼんだ所。○しぼるさへあるに―しぼり方もあらうに。○本繩―私の時の縛り方、即假
繩に對する語で、本繩は公けの時用ふ。罪人を本當にしぼる縛り方、例の高手籠手のことにて、首から三寸下のところに手の届く
やうに、後ろに手をつり上げるしぼり方。○おきめ―處刑。お定通りの罰にする、即ち處刑する意。○御免なれと―御免下され
と、おわびをして。○解きあるか…繩をとくかどうか。○お役をすれば―お役をする身分の者故、本繩にかけて縛つてもさしつ
かへない。○大事な―差支ない、かまはぬ。○うぬめは繩付で預るさへ―あ、汝は何をぬかす。繩をつけた儘で預るさへの意。
○慮外者―無禮者。○かた息―やつと息をすること。半死半生の意。魚などの死にかゝたのをかたいきといふ。○さあうせふ―
さあこい、を罵りていふ云ひ方。○きめつけられ―叱りつけられ。○おとがひを聞あるか―あごをたたく、おとがひを動かす、
へらず口をたたく、よけいな口をきくをるかなどの意。口をたたくを、口をきくといふ。

【譯】梅龍は飛かゝつて、背の頸の凹みをつかんで引つぱり上げると、助右衛門は足をつま立て、「これ何うする」
梅龍は「何うするとは何だ。縛り様もあらうに、町人の分際で、何故人を縛るに、罪人を縛るやうな、縛り方をす
るのだ。ちやつと告訴して、處罰させるべき奴だが、それとも御免下されといつて、繩を解くかどうか」としめ
つける。と助右は「あいた、只の町人とは違つて、宮中のお役をするのだから、本繩にかけて縛つたとて差支へは
ない。解いて欲しいといふなら、そちらで解くがよい」。梅龍「やあ、汝はまあ、何をぬかす。一體繩付のまゝで預
るさへ昔からない作法であるのに、禁中の御用を承る町人は、他人を本繩にかけて罪人扱にしても差支ないとは、
それは何處から出た掟であるのぢや。そのやうな口をきいて、お上を輕しめをる無禮者は、どうしたつて差支ない」
といつて、駕籠の棒を引ぬいて、力にまかせて七八つばかり、半死半生になり、やつと息をする程になぐりつけ
ると、助右衛門は「おのれ助右衛門を打つたな」梅「お、打つた。おれが打つたが誤りか。町人の分際で、他人に本繩
をかけたりの誤りか、公けの裁き所へいつて始末をつけよう。さあ來い」と引きたると、助右、それではま

て、解いてやる」梅「お、解かせずにおくか。今一つ棒で打つてやるか」と、叱りつけられて、ふしやうぶしやうに繩を引ほどき、助右は「こりや、たしかに預けたぞ。土地の庄屋にも、さういつて歸るぞ。一寸の間でも取逃してもしたら、保證人のそちも一緒に首が飛ばうが承知か」梅「まだへらす口を叩きをるか」といつて、頬桁を三四度打つて、お玉の手をひいて内に入れ、饌をはたとしめた。

かごの者共笑止がり、「今のはいかふ痛みませう、かごでお歸りなされ」といへば、助右衛門顔をかへ、「此はづ〜。今年はこのが金神に當つた。それで是ほうだ〜り、殊にけふは土用の入、それでか跡がさつうどよむ。曆の事はあされぬ」と、減ず口して歸りけり。

【註】○笑止がり―氣の毒がかり。○此はづーこんなことのあるはず。○金神―陰陽家の祭る神にて、此神のある方に對して物事をなすは不吉としてある。此神ある方角は時によりて異るとされてある。○ほうだ〜り―方角が祟るのを頬をやられたとかく。○どよむ―鳴りひびく、即いたむ、疼痛がする意。土用の訓にかけたのだ。○おされぬ―押し切つて争はれぬ。

【譯】駕籠昇どもは氣の毒になつて、「今のはひどく痛むでせう。駕籠に乗つてお歸りなされ」といへば、助右は、顔をかへるやうにして、「このやうなところのある筈ぢや、今年はこの方角が金神に方つてゐる。それで此頬がた〜り、方角がた〜られた。殊に今日は土用に入つた日である。その爲か、打られた後がひどく疼痛がする。曆にかいてあることは、なか〜押し切つて争ふことの出来ぬものぢや」と減らす口をた〜いて歸つた。

むすぼれて、なまなかつらきみだけ草の、おさん茂兵衛は夢にだに、戀せぬ中の戀と成り、つれて走りし其日しも、茂兵衛が肌の紙入に、たつた三步のかねてより、思ひもあへぬ旅の道、おさんの肌著代なして、白むく一重憲房に、裾模様有る蘆に鷺、足に任せて奈良堺、大津伏見をうか〜と、夫婦に

あらぬ夫婦のさま、神佛にも人間にも、うとまれはてし身の上やと、たがひの心恥しく、顔打あげて顔と顔見合せ、顔をあかめて涙の外に詞なし。

【註】○なまなかつらき―戀してゐなかつたのが結ばれて、なまじつか、つらいこととなり。○みだけ草―みだれた麻。○戀せぬ中の戀―夢にも戀してゐなかつたのが、戀を結ぶこととなり。○其日しも―しもは助詞にて意味なし。○三步―三分。金一兩の四分の三。四分が一兩。○かねてより―三分の金をもつて、かねてよりにかく。○代なして―賣拂つて代金にして。○白むく一重憲房に―憲房は、その頃京に流行した吉岡憲房の始めた憲房染のこと。黒茶色の染め方にて、紙子に應用して紙子染といつて名があつた。即ち白無垢一枚と黒茶の憲房染と、もう一つ裾模様と三つを着てゐるのだ。○裾模様有る……巻頭の寫眞参照のこと。三回も引出されてゐるのを見ると、時の人にもはやされたものであらうといはれ。

【譯】戀してゐなかつたのが、ふとして結ばれることとなつて、なまじつかつらい心が、みだれた麻の如くになつたおさんと茂兵衛は、夢にも戀してはをらぬ間であつたのが、戀に結ばるゝ身となつて、打連れて逃走した其日茂兵衛が肌につけてゐた紙入に、たつた三分の金しかなく、それでもつて、かねてから思ひもせぬ旅に出ることとなつて、おさんの肌着を賣つて、白無垢と憲房染と蘆に鷺模様を着て、足にまかせて、奈良から堺へ、伏見から大津へと、まことの夫婦でなくも夫婦のさまにて旅し、神佛にも人間にも疎まれてしまつた、なまけない身の上であると思ふと、心恥しいので顔をあげて、互に見合せても顔をあからめては泣くばかりで詞も交さなかつた。

さん「なふ茂兵衛殿、とてもわしらは今日あつてあすない身、命を命と思はぬ共、いとしや玉はどうなりやつたと、案ずるは是ばかり。只ゆかしいは父様母様、なんぼ思ひあきらめても、あひたふござる」とむせ返り、歩みかねて泣きければ、茂「ヲ、あひたいはお道理、我とてもあめかけられしお主筋、お名残あしさは同然。こゝは彼玉が在所岡崎、あれあの行燈の出た所が則ち伯父の宿。是にたよつてお里

の便宜玉が噂も、聞ふと存じ参りしが、内の首尾を聞合せず、案内するも鹿相也」と、軒に立寄りうかゞへば、内には玉が泣く聲の、譯も聞えずくどき事。

【註】○命を命と思はねどこの命をまことに自分の身の命と思はぬが。○在所一郷里。○お里の便宜一お家元の様子。○首尾を聞合せず一此家の事情都合を聞かないで、即ち知らずして。○譯も聞えず口説き事一泣き聲であるが爲に、くどき事はしてゐるが、何のことか譯はきこゑない。

【譯】おさん「なう茂兵衛、とてもわしらは、今日あつてあすはないかも知れぬ身である。従つて此命をわが命とは思はぬが、可哀や玉はどうしたらうかと、心配するのはこればかりだ。只なつかしいのは父様母様で、幾ら諦めても遇い度い」といつて、涙に咽せかへり、歩みかねて泣けば、茂兵衛はまた「お、遇ひたいは御尤で、私とても、目をかけて下されたお主筋であるからには、お名残惜しいのは同じことござります。此處はあのお玉が郷里の岡崎であれあの行燈の出てる家が、則ち伯父の家だ。之にたよりて、お家元の様子や、玉が噂も聞かうと思つて來ましたが、此家の都合事情も承知せず、案内乞ふのも鹿相である」といつて軒下に立つて様子を伺ふと、内には玉の泣聲がきこゑる、何かくどくどといつてゐるやうだが、何のことか譯はきこゑない。

伯父梅龍が聲として「ヤイ玉、此本は是伯父が毎夜講尺する、太平記二十一卷目、尊氏將軍の執權、高の師直といふ大名鹽冶判官といふ、これも歴々の武士の妻に心をかけ、末代迄悪名を残し、鹽冶判官もそれゆへ命を失ふたは、もと侍従といふ女が中立からおこつた事、おさん殿と茂兵衛と眞實の間男でないに極つても、ふたりつれて欠落めさつたは定よ。此二人いづ方であふたり共、萬一こゝへ尋ねてござつた共、必ずく物いふな、見ぬ顔せい。かういへばつれない水くさい様なれど尋ねてない。

男といふうき名のたつた二人の中へ、中立といはるゝ其方と三人よつた、そゝも成共人に見られては、そりや一つ穴のいたづら狐、一所によつたは、扱こそ玉が中立で、おさん茂兵衛が不義は極つた、といひ立られては彌科がおもふ成。こゝをよふ合點せい。つれなふあたるはおためじやぞ。此事ゆへにそちもなはめの恥にあひ、此如く預けられた。しかれば同罪はのがれがた。首を初られ手足をもがれ、ためし物に成るとても、主と頼んだ人ゆへ、命おしむな梅龍が姪じやぞ、最期を清う死んでくれ」と聞ゆれば――

【註】○高師直一尊氏の執事にて鹽冶高貞の室に懸想し、之を奪はんとして高貞夫妻を殺した。○欠落めさつたは定一定はまぢがいないこと、争ふことは出来ぬ、などの意。○うき名一浮き名と憂き名をかく。○一つ穴のいたづら狐一同じ穴のむじな、などいふと同じく、同じ悪仲間、同類の意。○不義は極つた一不義は間違ないにきまつた。○おためじやぞ一情れなくおさん等二人にあたるは却つて、爲を思ふことになる意。○なはめの恥一縛られるといふ恥。○ためし物一ためし切になるもの。昔は刀の切味をためしたりする爲に、罪人を切つた。そしてその試に切られたをためし者といつた。○主と頼んだ人ゆえ一主人と仰いでたよつた人の爲に。

【譯】伯父梅龍の聲としては「ヤイ、玉よ。此本はこれ、伯父さんが、毎晩講尺する太平記、その二十一卷目に、尊氏將軍の執權である高師直といふ大名が、これも歴々の武士なる鹽冶判官の妻に懸想し、末代までも悪い名を残し、それ故鹽冶判官も殺されてしまつたのも、もと侍従といふ女が中に立つたが爲におこつた事だである。おさん殿と茂兵衛とが眞實に間男したのでないに極つても、二人が連れ合つて駈落なされたことには間違はない。この二人に何處で出遇つても、萬一此處へ尋ねて來れたにしても、必ず言葉をかけるなよ。顔も見ぬやうにせよ。かうい

ふと無情な、水くさい様に思へるが、實はさうではない、間男といふ憂き名の立つた二人の中へ、中立したといはれる其方が入つて、三人寄り集つたそぶりでも他人に見られては、それ、一つ穴のいたづらな狐と一緒に寄つたからには、さてこそ玉が中立をして、おさん茂兵衛が不義をしたことは間違ないと云ひたてられるにきまつてゐる。さうすると、いよ／＼罪が重くなる。此處をよく合點しろ。だから無情のやうに見えても、つれなくするのは却つておさん様への爲ぢやぞ。此事の爲に、そちも細目にかゝるといふ恥を受け、このやうに私に預けられてしまつた。して見ると、二人と同罪に陥ることは免れにくい。首を切られ、手足をたゞれ、試し切にされても、主人と頼んだ人故のことだから、命を惜むやうなことをするな。梅龍の姪であるぞ。最後をきよく死んでくれ」といへば――

玉が聲、「それは氣遣さしやんすな。とうから覺悟極めてゐる。伯父ひとり姪ひとり、わしが死んだら伯父様の、さぞ便なふおぼしめそ、茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん様、どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な、心をしつた私なれば、何かに思ひやります」と、泣入れば梅龍も「ヲそちがいとしいはおさん殿、身は下立賣の親御達の、歎が思ひやらるゝ」と、内に伯父姪くどき泣外に二人が立聞いて、涙をもらす戸のすきま、聲なき冬のきり／＼す、壁にすがりて泣きあたり。

【註】 ○さぞ便なふ……さぞ淋しくたのみ少いと思はれるであらう ○はかない……もろい、弱い。○身は――おれは。○くどき泣き――くどく／＼と云ひながら泣く。

【譯】 玉が聲として「それは氣遣なされますな。早くから覺悟をきめてをります。だが伯父一人姪一人の間であるからには、わたしが死んだら、伯父様には、さぞ淋しく、頼りなく思はれることでありませう。茂兵衛殿は、どうしてをられるやら。可愛いはおさん様、どこにどうしておいでやら。平常から弱い、正直なお心であることを知つてゐる私のこと故、何かにつけて思ひ出します」と泣き入ると、梅龍も「おゝそちが可愛いのはおさん様であらうが、おれにはまた、下立賣の、おさん様親達の歎が思ひやられる」といつて、家の内には伯父姪が、くどく／＼といつて泣いてゐる。外にはそれを二人が立聞いて、涙をもらし、戸のすき間からのぞいて、聲をたてることの出来ぬ冬のきり／＼すのやうに、壁にすがりて泣いてゐた。

血筋がむすぶ親子の契り、おさんの親道順夫婦、娘の浮名かくれなく、命がづらき老後の恥、人に面もあはされず、月出ぬさきの心の闇、黒谷の菩提所へ、かちの夜道の夫婦連、小嬢がさげし風呂敷や、つゝむ涙にとぼ／＼と、行過る軒の下、二人しく／＼泣く聲の、耳にとまれば立とまり、道「おぼ、あれ合點のいかぬ何者やら」と、うとき老眼すかして見る。行燈の影に茂兵衛見付け、「あれおさん様下立賣のおやぢ様」さん「ナフ父つさまかいの」と走り、取付く所をついととき、父「ヤイ畜生にとつ様と、云はるゝ覺えはないわいや」と、わつとなく／＼ふりあげて、うたんともがく杖の下、母はあこがれ火を吹消し、娘を袖におしかこひ、母「なふおやぢどの、おさんめは逃ました。もうこらへて下され」と、影をかくすは母の慈悲、打つ杖は父の慈悲、心かはると子や思ふ、哀はおなじ涙の闇、まよひのうへの迷ひなり。

【註】 ○命がづらき……長生きしてることが却つてつらい心地する老後の恥かしさにの意。○月出ぬ先の心の闇――まだ月の出ぬ先の闇路に、子故に迷ふ暗い心を抱いての意。それから更に黒谷とうけて、意を強めたのだ。○菩提所――旦那寺。○かち――徒歩。○小嬢……小娘 ○包む涙――風呂敷を出したから、包むといつたのだ、即ち涙をかくしての意。○うとき老眼――遠い老眼、

即ち老いて眼の見えぬをいふ。〇ついととき一つと退いて。〇母はあこがれ一娘にあひたくて。〇影をかす一娘の影を、袖の下にかこつてかくすのである。〇心かはると一杖で打つのも、袖の下に隠すのも、ともに、慈悲から出たものであるが、それの子の方では、父と母とは、各心がちがつてゐると思ふであらうが。〇哀は同じ涙の闇一同じ哀憐の心から出た涙の爲に生じた闇の中の、心の迷の上の迷ひの行ひである。

【譯】 血筋が結んでゐる親子の契の間柄であるおさんの親の道順夫婦は、娘の浮き名が高く立つたので、命ながらへてゐるのもつらき心地のする老後の恥しさに、人に面をあはす事が出来ず、月の出ぬ先の闇路に、子故に迷ふ暗い心を抱きながら、黒谷の且那寺へ参るべく、夜道を徒歩にて二人づれで、小娘に風呂敷をさげさせ、涙をつゝみながら、とぼくと、通り過ぎてゆく折しも 軒下にて、二人の男女が、しくくと泣く聲が耳にとまつたので、立とまつて、道順は「お婆々、あれを見やれ、合點のいかぬことぢや、何者であらう」といつて、よくは見えぬ老眼にすかして見る。それを行燈 蔭に茂兵衛は見つけて「あれ、おさん様、下立賣のおやぢ様が」といふと、さんは「のう、父様かいな」と走り寄つて、取付かんとする所を、父はつと退いて「やい畜生に父様と云はれる覚えはないが」といひながら、なくなく杖をふり上げて、打たうとしてもがいてゐる杖の下で、母親は娘戀しさに火を吹きつけて、娘を袖の下におしかくし、「のふ、親爺殿、おさんはもう逃げました。こらへて下され」といつて娘の姿をかかす。それは母の慈悲であり、杖で打たうとするのは父の慈悲である。父と母では、心がちがふと子は思ふであらうが、同じ哀憐の情から出た涙の爲に生じた、闇の中の、心の迷の上の迷ひの行ひである。

道順不覺の涙にくれ、「道順が未來もはやしれた。ひとり娘の事なれば、聲を取つて家を繼する筈なれど、近年諸國の銀もすまず、家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此跡を娘に渡し、苦勞さする可愛さに、一代切に家を捨て、嫁入させた親心、ささとてもその合點、道順が娘なれば、拵いらぬみやげ

もいらぬ、そだてた親に見こみが有、娘の心が土産じやと、したはれた根性に、ちく生の魂が、いつのまに入りはつた、うらめしや情なや、池にすむ鴨や鴛を見よ。軒に巢をくむ燕も雌一羽雄一羽女夫つがひは生ある物のならひぢや。父親さまの毛色をうむは、犬猫ならどこに有る。親は犬には生付けぬ、猫になれとはたが育てた。畜生に對して詞は交さぬ。是は我ひとり言、とてもかう成からは山の奥にも身をかくし、のがるだけはのがれもせず、京近邊をうろたへ、今のまに召捕られ、洛中を引渡され、親が大事に生み付けて、撫で育てた體を、鎗で突れて死にたいか、からだにも恥が搔きたいか。生うが死ふが此道順は、悲しい共思はねば、涙一滴こぼれねど、ばのなきやるが悲しい」と、わつと計にこらへかね、余所をも恥ず大聲あげ、めをとほ老の息切に、むせ返りてぞなげかる。

【註】 〇不覺の涙……不覺悟の涙の爲に心が暮くなり、即ち覺れぬ涙の爲に物が分らなくなつて。〇諸國の銀もすまず一諸國から集る筈の金も決済が出来ず即ち集らず。〇通勢一佗住居、落魄の意。幕府時代には、士族以上の刑の名にて、閉門より少し軽く謹慎より少し重いものであつたが、この意から、佗住ひの意に用ひる。〇拵いらぬ……身ごしらへもいぬ。〇したはれた根性に一戀ひしたはれた娘の性根に。〇女夫つがひ一女夫の組合せ。〇父親さまの毛色一父親がいろ／＼あつて、その毛色に従つて色々の子を生むのは。〇引渡され一渡すは通すの意即ち引廻す意。

【譯】 道順は不覺悟の涙の爲に心がぐらみ「道順が未來も最早分つた。一人娘のことであるから、聲を迎へて家を繼がす筈だが、近年諸國からの懸金も集まらず、家屋敷までも人手に預けるといふ落ぶれた身であるから、此後を

娘に渡して、苦勞さすのが可哀さに、一代切りにて家をつぶす覺悟で、嫁入をさせた親心を、先方でも合點して、道順が娘とあらば何の身づくろひもいらぬ、持參物もいらぬ。娘をそだてた親に見込がある。娘のいゝ心が立派な土産ぢや、といつて、聲から慕はれた娘の心に、いつの間にか畜生のやうな魂が、入れ代つてはいつたのぢや。恨めしい、情けない。池にすむ鴨鴛鴦を見るがよい。軒に巢をくふ燕でも、皆雌一羽に雄一羽で、女夫が一緒になつてゐる。その結ばれ方は、生きてゐるものゝ習慣ぢや。父親となるべきものを幾つももつて、その父親の毛色の色々あるほど、幾通りもの子を生ませるは、犬猫ならどこにあることか。親は娘を犬には生み附けはせぬ。また、それが猫になんかなれといつて育てた。だから畜生に對して詞は交さぬ。ところで、これはわが獨り言ぢやが、一層かうなるからには、山の奥へでも身を隠し、逃得る丈けは逃げもしないで、京附近をうろたへまはつて、今の中に引捕へられ、京中をそれからそれへと引廻されて、親が大切に生みつけ、撫で育てたりした體を、鎗でつかれて死にたいといふのか、體にも恥がかきたいといふのか。たとへ死なうが生きようが、此道順は悲しいとも思はぬから涙一滴こぼしはせぬが、婆の泣きやるが悲しい」といつて、わつといふ計りで、堪らなくなつて、他所であることも恥ぢず大聲あげて、老夫婦は、息を切らして、むせ返つて泣いた。

茂兵衛はひれふして、とかふの詞なく計り。おさんは母に抱き付き、「ふたりに不義のあやまりは、みぢん程もなけれ共、ほんに因果のまはりあひ、云ひわけたゝぬ品と成、京洛中に畜生の名をながし、罰のあたつた此上に、誓文立てん様もなし。とつ様のお腹立、かゝさまのお恨も、私可愛ひ上なれば來世をかけて形見の詞、我々は天の網、とても遁れぬ命の内、親達に逢ふからは、木の空にさらされて、かばねを鎗でつかれても、思ひ置事ござらぬ」と、くどき歎けば「父、未だぬかす。其鎗でつかせ

ませ、木の空へあげまいと、思ふてむねをこがすはや」と、又たへ入りて泣沈む。

【註】 ○詞なく計—詞なく泣くをかく。○品—時。場合。關西で行く時、歸る時の意に行しな、歸りしなといふ。○誓文たてん……間違ない汚れた身ではない、その爲にはどんな罰でもあたるがよいといふ誓をたてるのが通例だからいふ。即ち今更誓言のしようもない意。○來世をかけて形見の詞—私し可愛きにはれる詞であるからには、それは來世までかけての形見の詞であつての意。○天の網—罪を犯したものが、にげて必ず引かゝる天の網。○遁れぬ命の内—とても遁れられぬ身であつて。○木の空—磔にあふをいふ。○こがすはや—こがすのぢやわいやあにて、はやは感嘆を表す。○たへ入つて—息のたえるほどの意。

【譯】 茂兵衛は平伏して、とやかうといふ詞もなく、只泣くばかりである。おさんは母にいだきついて、「私達二人に不義のあやまりは少しもないけれども、ほんの因果の廻り合せで、云ひわけたゝぬ場合となつて、京の町中に畜生といふ憂き名を流し、既に家に居ることも出來ぬといふ罰のあたつたからには、此上に更に誓言のたてようもない。父様のお腹立ちやとて、母様のお恨ぢやとて、皆私しが可愛い上でのことであるから、來世にまでも及ぶ形見の詞である。又我にはどうせ天の網を遁れることの出來ぬ身でありながら、命のある内に、親達に出逢つたからには、木の上に吊り上げられ、晒物にされて、鎗でつかれ磔にされも、思ひ残すことは何もありません」とくどくといつて歎げくと、父親は「まだ、しやべりを。その鎗でつかれるやうなことにならずまい、磔刑にさるべく、高く木の上に吊り上げられるやうなことのないやうにと思ふて、其れで胸を焦すのぢやわいやい」といつて、また息のたえんばかりに泣沈んだ。

母は涙の數珠袋、ふくさ物取出し、母「是一步二つ白銀もすこし有る。いとしいかふ肌うすな、路錢に盡きて脱ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して、駕に乗せて京の地を、一足も早ふ立ちのいて、必ず必ず悲しい事、聞かせて泣かせてたもんな」と、泣々わたせばおしいたゞき、さん「忝なふござんする。

に著た淺黄縮緬は、奈良の町でうりはなし、此うへに著た蘆に驚、此秋おまへの下されて、未來迄かゝ様の、形見と思ふて著ますれば、寒い共覺えず。見付けらるゝをそれぎりの、命の内は袖乞でも頼みないは後生の事、これはそのまゝ留置いて、死んでの跡の弔ひに」と、歎けば母も「ア、悲し。また死用意ばかりを」と、つきぬ涙の露霜の、白きを見れば夜も更けて、出たる月は冴へながら、親子の袖ぞ時雨れける。

【註】○涙の數珠袋―涙の珠をつないでこしらへた數珠を入れた袋からの意。つまり泣く／＼袋からの意。○一歩二つ白銀―一歩は一分。一分金が二つに、銀貨も少々ある。四分が金一兩。一分金は江戸では此頃なくなつてゐた筈だが、京坂にはまだ残つてゐた筈だ。即ち、近松は天の網島にも、曾根崎心中にも一分小判の語を用ひてゐる。○蘆に驚―此模様の着物にて、少し前にも出づ。巻頭圖参照。○袖乞でも―乞食でもするがの意。袖乞は、もと托鉢僧が、袖に鉢をのせて、米を乞ふことから起つたが、今は物貰ひの意に用ひられてゐる。○これはその儘留めおいて―此金はその儘残しておいて、死んだあとで弔におつかひ下され……の意で、これといふのは可成に不明だが、矢張母からわたした路銀のことをさすと見るが穩當だ。着物をさすとしては、どうも一層の無理がある。路銀をさして、矢張途におさんがもつて行つたと見てよからう。○白きを見れば―百人一首の「鶴の渡せる橋に……」の歌からとつたのだ。○つきぬ涙の露霜―つきず流れる涙の露が霜と凝りて。

【譯】母は泣く／＼數珠袋から袱紗をとり出し、「これに一分が二つと、銀貨も少しある。可哀想にひどく、薄着らしい。旅費がなくなつて、着物をぬいだな。此金を茂兵衛に手渡して、自分も駕籠にのり彼も乗せて、京の土地を一足も早く立退いて、必ず、捕はれたなどいふ悲しいことを聞かせて、私し等を泣かせてくりやるな」といつて、金を渡すと、おさんは頂いて、「忝ふござんす。中に着てゐた淺黄縮緬は、奈良の町で賣りはなし、此上に着た蘆に驚の模様の着物は、此前の秋、母様から下されたものであるから、未來までもおかたみと思ふて着てをります故ながら、親子の間には、袖に涙の雨が時雨れてゐた。」

茂兵衛は搔くれて物をもいはずゐたりしが、「我等男のつらさをさげ、斯様のわざを仕出し、のめ／＼ながらへ有事も、おさん様のお命を、何とぞと存ずるゆへ、お宿もとへおさん様を御同道なされ、御命助け下されば、科を私ひとり受け、物の見事に死なしたい。御了簡頼上げます」と、手を合せ泣きければ、さん「おろかしい事いふ人ぢや。我一人生きながらへ、いひわけが立程なれば、ふたりいきても同じ事。取違ふうがどふしやうが、以春といふ男持ちながら、そなたと肌ふれ寝たは定。かたちは生れ替つても、此悪名は削られぬ。そなたはいかふうろたへが來たそうな」と、恥しめられて茂兵衛も、「アツアそうじや。ハアあれは三條通の車の音、夜明といふて程もない。行先あてどはなけれ共私

在所、丹波の柏原迄落ちて見る計。サア暇乞なされませ」と、いへ共親子一生の、生死をあらそふ今はの別れ、月出ぬ先は顔見えず。いつそ思ひ切るべきに、見かはす顔は見きられず。なまなか月もうらめしく、母はもだへて「是ぢや殿。脈のあがつた死に病も若しやと薬はもつて見る。天にも地にもた

つた一人の大事の娘、見付けらるゝと殺さるゝと手ばなしてやられうか。ござれ翁媪おぢうばつきそふて、しなば親子いちしんき一時に」と、氣も狂亂のくどきごと。

【註】○搔かきくれて―搔かきは暮れる意を強めた語。涙の爲に目が見えず暗くなること、日が暮れるごとき意から出たのだ。○のめく―おめく、厚顔な様。○死にまじたい―死に申したい。○取違ちがえうか…自分の夫と間違へようが。○あてど―目的。○見みきられず―きつぱり見限られず。○脈いんのあがつた―脈のだめになつた。○見付けらるゝと…脈のだめになつた患者でも、若しや生もどりはせぬかと思つて、薬をもつて吞ませて見る位だから、大事の一人娘を、見つかつたら殺されるときつてると思へば、手ばなして行かされうか。

【譯】茂兵衛は涙に月も暗くなつて、物をもいはず黙つてゐたか、「私は男の面をして、かうした事をやり、おめく、と厚顔にも生きながらへてゐるのは、おさん様の命を何とかして助けたいからだ、だからお家もとへ、おさん様をおつれなされ、お命を助けて下さらば、罪を私一人に引受け、物の見事に死に申したい。御承諾を頼みます」といつて手を合せて泣けば、おさんは「あゝ馬鹿なこといふ人ぢや、私し一人生きてゐて、云ひわけが立つほどなら、二人とも生きてゐたとて同じことぢや。よし誤つて自分の良人ととり間違へようがどうしようが、以春といふ男をちやんともつてゐながら、そなたと肌をふれてやすんだことには違はない。してみれば形は生れ替つたにしても、悪名丈けはどうしても削除けることな出来ぬ。そなたはひどく狼狽ろうたいめされたらしい」といつて、恥しめられると、茂兵衛も、「あゝ全くさうぢや。はあ、あれは三條通りの車の音ぢや。夜があけるのも間もない。行先に目的はないが。私の郷里 丹波の柏原かしはらまで落のびて見るばかりぢや。さあ暇乞なされませ」といふが、親子一生の、生死を争ふ今はの別れに臨んで、月が出るまでは顔が見えず、一層思ひ切るべきでありながら、互に見かはす顔をきつぱり見限られず。なまじつか月もうらめしく、母は即ち悶えて、「これ親爺殿脈のだめになつた死病のものも、もしか生きもどりはせぬかと思つて、薬はのませて見るのが人情ぢや。それに天地にたつた一人の大切な娘であつて

それも見付られると殺されるといふのを、手放してやれるだらうか、行きませう翁媪が一緒につきそつて、死ぬなら親子一時に死にませう」といふ氣も狂亂きやうらんじみて、くどくといふのであつた。

道順も堪たへ兼ねて、「それはあしやる迄もない。いか成大病難病なまびやうでも、薬一味の加減にて、助かるも有ならひ 息の絶へた死人でも、二十四時は待つて見る。唐天竺から日本國にっぽんの名医めいの薬を浴あびせても、天下の法をそむくといふ、大病には叶はぬぞや。たつた一つの頼みには、以春の方へ手を入れて、心をなだめ見る計はかり。もし其内召めしやう捕れ、すは最期さいごといふ時は、白髪しろがあたまを大地の底へすり付けて、命乞いのちごも身がはりも、願ふといふは其時よ。なまじい親がかくまふと、聞えてはさきに我が立つて、許したふても許されぬ。親下人にも見はなされ、憂目うれめをすると聞えては、げには先まにあはれみ有り。ヤイおさん、畜生よ犬猫よと叱るとて恨むるな。願ねんかけぬ神もなく、祈らずといふ佛もなく、三光天くわうてんを拜まむとて、七なな十じゅうに成道順なるが、朝あ毎まい垢離ごとしりを取る時は、惣身くみの骨はこほれ共、娘が處刑おさまめにあふならば、此くるしみを百千萬、かさねても物の數かはと、こらへて月日を拜するは、あの月天子ぐわつてんしの照覽せうらん有、利生りしやうは無下むげにはよも成まい。茂兵衛たのむ煩わづらはすな。是こゝに銀子一貫目、家質かぢちの利足りそくのたし銀に、黒谷の和尚様より借つたれ共、世間張つて何にせん。家を町へつき出し、寺へ返す此銀、遣るといふてはやられぬ、貰ふといふてはもらはれまい。道順が涙にくれうろたへて落おいたぞ。落した物はひろい徳、罰ばちがあたれ

ば落した者、ひろふた者に罰はない。おば、おじや歸らふと、夫婦せきあげむせび入、二あし三足立されば、

【註】○二十四時—死人埋葬許可のあるのは、今日は二十四時後だが、昔は十二時である筈だ、それをわざ／＼二十四時とあるからには、昔は二日間まつたものと見えると解すべきだ。○さきに我が立つて—役人の方で、先づ意地が出て。此さきにはまづの意。○親下人—親や召使などにも。○げには先に—如何にも先方に、此さきは先方である。○願かけぬ…私か願をかけぬ神なく、祈らぬ佛なく、八百万の神佛に願をかけ祈をして。○三光天—日月星。○垢離をとる—冷水を浴みて身を清め祈禱すること、眞言宗の行。○月天子—お月様。○利生—利益衆生の語から出たので、お月様の御利益をさす。○無下—最下、最底の意、から、無駄の意。○煩はずな—病氣をさすな。○黒谷の和尚—これが後に出て来る東岸のこと。○世間張つて—世間體をかざつて。○家を町へつき出し—處分を仰ぐべく家を差出して。○せきあげ—咳上げる、しゃくり上げる。此親の慈悲描き出して妙。

【譯】道順もたまらなくなつて、「それはいふまでもない。どの様な大病でも難病でも、薬一品の加減にて、助かることもある習である。息切れた人間だとて、もどりはせぬかといふので、二日間はまつて見ることになつてゐる。だが唐天竺日本の名醫の薬を浴せかけても、天下の法にそむくといふ大病の役にはたゝぬぞ。只一つの頼みとしては、以春の方へ手を入れて、彼の心をなだめて見るばかりである。もしその中にも捕へられて、いざ最期といふ時には、その時こそは、白髪頭を大地の底へすりつけて、命乞もし、身代りも願つて見よう。だが、なまじ、親が隠してをると世間へきこゑては、役人に先づ意地が出て、許したくてもゆるせぬことになる。親にも召使どもにも見はなされて、憂い目を見てゐると聞えると、如何にも、先方に憫みの情が出るものぢや。やいおさん、畜生よ、矢猫よと叱つても、恨んでくれるな。決して私がそなたの爲に願がけをしない神はなく、祈つてをらぬ佛もなく、有りとする神佛に祈りて、又月月星の三光天を拜むといつて、七十歳になる此道順が毎朝垢離を取るに方りては、全身の骨も凍るほどであるが、娘が處刑されるといふことであらば、此等の苦みを幾千倍重ねたとて、物の數でも

ありはせぬと我慢して、日月を拜する様子は、あの空の月が明に御らんなされてをる。お月様の利益は、よも無にはなるまい。茂兵衛たのむ、病氣をさせてくれるな。これ此處に、銀貨が一貫目ある。家を質に入れての借金利息のたし金にするとして、黒谷の和尚様から借りはしたが、世間體をかざつたとて何にしませう。思ひ切つて家を町へつき出すことにして、寺へ返すつもり此銀を、そなたにやるといふてはやらぬ。又そなたも貰ふといふては貰はれまい。一層道順が涙に目がくらんで、うらたへて落したことにするぞ。落したものは拾つたが徳で、罰があるとなれば落したものに於るので、拾つたものには罰はない筈ぢや。おば、來やれ、歸らう」といつて、夫婦はしゃくり上げ、むせんで、二足三足立去ると—

おさん茂兵衛は、わつと泣き銀取上げて額に當て、さん、あんまり深い親の慈悲、返つて冥加が恐ろしい。なふとつ様か、様」と呼かへせばふり返り、親「何にも云ふな何にもいふな。さらば／＼」の泣別れ、父が歸れば母がとめ、母が歸れば父がとめ、おさん茂兵衛は歩みかね、名残おしさに立どまり小高き土手に伸上り、二人見送る影法師、賤が軒端の物ほしの、柱二本に月影の、壁にあり／＼うつりしは、うさ身の果は捕はれて、罪科遁れぬ天の告、母は驚き「なふぢい様、情なやこゝに磔が」父「悲しやおば、おさん茂兵衛が影法師、天道の力にも叶ふまいとのしらせか」と、又堪かねて泣く聲に、内より玉はくゞり戸明け、顔差出す其影の、同じく壁にうつりけり。「あれ又こゝに獄門が」淺ましや此首の、其名は誰と白露の、「玉ではないか」玉「おさん様」さらば／＼の聲の中、はや黒谷の後夜の鐘生滅々と響き來る、果は寂滅爲樂ぞと、名残悲しき 三重

【註】○額にあって―頂くのである。○冥加―神佛の加護。○二人見送る…父母を見るおさん等の影法師か。○柱二本に…引掛つて、月に照された壁にうつり。○磔が―二人の影を見て、磔にされた姿を思ひ出すのであつて、此邊の形容妙を極む。○堪かねて―たまりかねて。○獄門が―お玉の姿が月影にうつたのを、獄門にあげられたやうに、幻に見るが如くに、寫したのである。○白露―知らぬにかけ、白露といつたのは玉といはんが爲である。○後夜―昔は夕より夜半まで、あつたが、後には夜半から朝までをいふ。こゝは佛教の後夜なれば、夜半よりの勤行のことに、その爲に打つ鐘のことをいふ。○鐘―謠曲「三井寺」に「まづ初夜の鐘をつく時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘をつく時は是生滅法と響くなり。晨朝の鐘は生滅々已、入相は寂滅爲樂と響きて…」とある。○生滅々―生滅滅已のことで、生と死とが滅びやみて存在せぬこと。○寂滅爲樂―煩惱の世界を脱して生死ともになくなつて無爲靜寂の境、即ち涅槃の境、かゝる涅槃の境に至つて始めて眞の樂みあるといふを爲樂といふ。

【譯】おさんと茂兵衛とは、わつと泣いて、銀をとりあげて額にあって、頂き、おさんは「あんまり深い親の慈悲の爲に、却つて、神佛の加護が恐ろしい。なう父様母様」と呼かへすと、二人はふり返り、道順は「何もいふな、／＼さらば／＼」と泣き別れをしつゝ、父が歸らうとすれば母がとめ、母が歸らうとすれば父がとめ、おさん茂兵衛は即ち歩みかねて、名残り惜しいので立どまつて、小高い土手に上つて伸び上り兩親を見送つてゐる。すると、おさん達二人の影法師が、賤しき家の軒端の物干の柱二本にもつれて、月の照つてゐる壁に映つた様を見ると、憂い身の果には捕へられて、罪を遁れることは出来ぬぞといふ天のお告であると思はれて、母親は驚いて、「なうぢい様、情なや、此處に磔がある」といへば道順は「悲しやおば、おさん茂兵衛の影法師が此様に見えるのは、幾ら願をかけても、天道様の力でもどうすることも出来ぬといふ知らせか」といつて、また堪りかねて泣く聲を聞いて、玉は内から出て潜り戸をあけ、顔を差出す。その影はまた同じ壁にうつつた。二人は「あれまた此處に獄門がある」といふが、淺ましや、此首の主の名が誰であるかを知らぬおさんは「玉ではないか」といふと、お玉は「おさん様」といつたきりで、さらば／＼の別れの聲の中に、はや黒谷の寺の後夜の鐘が生滅滅已と響いて来る。やがては此鐘が寂滅爲樂と響くかと思ふと、名残は悲しいことである。

下の巻

春たつと、去年の雪げを其まゝに、霞むも山の奥丹波、軒のつらゝも解渡り、谷の水音しつたん／＼ぼん／＼／＼となる鼓、萬歳徳若に御萬歳と、御代も榮へましますありきやう有るあら玉や、年立歸るあしたより、水もわかやぎ木の芽もさし榮えけるは、誠にめでたふ候ひし。京のつかさは關白殿、ありゐのみかど日のもくだいり。王は十善神は九ぜん、よろづやす／＼、浦やすが木のもとにて、正月三日の寅の一天、誕生まします、若るびすあきなひ神と、顯れ給ひて、あきなひ繁昌護らせ給ふは、誠にめでたふ候ひける。やしよめやしよめ、京の町のやしよめ、うつたるものはやしよめ、うつたる物は何々、大鯛小鯛の大魚鮑さゞい、はまぐりこ／＼、はまぐりこ／＼、うつたるものはやしよめ、京の町のやしよめ、そこをば打過、そばの棚見たりや、そばの棚見たりや、豆に小豆、大根蕪、加賀の牛蒡毛牛蒡、からしの粉山椒の粉、辛い胡椒めさいの。やしよめ／＼、京の町のやしよめと、賣りためて千貫、繫ぎたて、萬貫、惠方の御藏づつしり、納めて家も福々、ぢい様ば、さまと、様か、様、わ／＼様ひめごぜ、産ならべてふく／＼、ふく／＼ほ／＼んぼんとぞはやしける。

【註】○去年の雪けをその儘に―解けのこつた去年の雪をその儘にして、春が立つたので、山には霞がかゝてをる。○奥丹波―丹波の山奥の柏原の住居の場である。○しつたん―水音の形容にて、鼓の音に續けて、萬歳の來たのを面白く導いたのである。○徳若に萬歳―「夕霧阿波鳴渡」にも出したと似た萬歳歌をもぢつたのである。萬歳歌には多少異なる所あるが、此處に引用された萬歳歌に比べる爲、一例を示すと、「徳若に御萬歳と御代も榮へまします。あいきやう有りける新玉の、年立かへるあしたより、水も若やぎ、木の芽もさきさかへるは、まことに目出度ふさふらひける。京の司は關白どの、おりの御門ひのもたはいり、王は十善神は九ぜん。よろづ安々うらやすの木のもとにて、正月三日寅の一天誕生まします若恵比須あきなひ神といはれ給ふ。あきなひ繁昌と守らせ給ふは、まことに目出度う候ひける。やしよめ、京の町のやしよめ、うつたるものは何々大鯛小鯛ぶりの大魚あはびさゝぬ、蛤子―はまぐり始めさいなと、うつたるものはやしよめ、そこを打過ぎ、そばの棚見たれば、金らん緞子緋さや緋縮緬、しゆす緋緋子縮緬子朱珍、いろく結構、飾り立て、候ひしが、町々の小娘や、お年の寄つたるうばたちまで、賣り買ふ有様は、げにも治まる御代なり時なり、恵方のみくらにずつしり、寶をさむる門口には門松、せどには背戸松そつちもこつちも、幾ねんの御祝ひ、御代ぞめでたき」○徳若―常若、いつもわかい意のあて字。○ありきやう有―萬歳唄は解釋がまだ出來て居らぬものが澤山あり、これもその一つであるが、あいきやうの訛だらうといはれてをる。愛敬ある姿で、年も若やぎての意で人を祝ふのである。○さし榮えける―さしはめざす即ち木の芽が出る意。○京の司―京のかしら。○おりのみかど―太上皇。太上皇でありながら、まだ内裏にゐて院政を遊ばす意。○日のもく内裏―これも不明語の一つで、日のもくは日の本の訛だらうといはれる。○王は十善―殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴の十惡を犯さざるを十善といひ、十善のものは來世に天子に生ると佛經に説く、即ち王を十善といつたのである。○神は九ぜん―王は十善であるに、神は九善であるといふのは、日本では神よりも天皇が尊い意に用ひたのだといふ説がある。○浦安―日本の國のこと。○木のもとにて―日の本であらうといはれてゐる。○誕生―王が誕生まします意。○寅の一天―一天は一點にて、一時即ち二時間を四刻とし、最初の一刻を一點といふ。寅は午前四時にあたる。○若夷―上方では元日の早朝夷の像をかいたものを賣りに來た、即ち此夷像のことを若夷といふ。つまり正月の恵比壽神のこと、恵比壽神が商の神として現れる意。○やしよめ―元來、やさし女の意ながら、此處では單に拍子に用ひたものであるが、次では又元の意に用ひてゐる。○うつたる物―賣るるもの。○はまぐりこ―こは印判を判こといふが如き添へ語。○そばの棚―棚は店、即ちたなにて、京の町の前ものを賣つて所を過ぎて、

その側の店を見るところの意。○かゝの牛蒡―加賀は牛蒡の名産地だからいふ、鬚牛蒡は細いひげが多いのをいふ。○めさいの―召せ買ひなされの意。○繋ぎたて、万貫―此頃通用してゐた錢即ち穴のあい青銅錢は、繩につないでゐたから繋ぎたてたといつたので、千文が一貫即ち一兩の四分の一、即ち金一分にあつた。○恵方の御藏つしり―恵方は吉方の意にて、づつしりは澤山どつさり。吉方の御藏にどつさりの意。○ほんほん―鼓の音。

【譯】春が立つと、去年の解け残りの雪をその儘にして、山も霞んで來る奥丹波では、軒の水柱も解け、谷の水音はしつたん―と鳴る頃、ほん―と鼓を鳴らして萬歳が來て「年若々と、いつまでも御代も榮え、愛敬ある新玉の年の新に立返つた朝から、水も若やぎ、木の芽もめざし榮えるのは、まことにめでたいことである。京都の政治の長は關白殿であり、太上皇は日本の内裏にゐて院政を行はれる。天皇は十善に、神は九善であつて、萬安らかに、浦安の日の本にては正月三日の寅の一點の刻にその天皇が誕生まします。恵比壽神は商の神として歌はれ、商ひを繁昌するやうにと守るのは、まことにめでたいことである。やしよめ、京の町の優女が賣つてをるものは何々であらう。大鯛に小鯛に鯛の大魚と鮑とさざいと蛤で、それを賣つてゐるのは優女、京の町の優女である。そこを通り過ぎて、側の店を見ると、そばの店を見ると、豆に小豆、大根、蕪、加賀の牛蒡毛の多い牛蒡、辛い粉山椒の粉、辛い胡椒ぢや、召せ―買やれ、京の町のやしよめ―といひながら、賣りためて千貫、繩に繋ぎたて、万貫、恵方の藏にどつさり納めこんで、家も福々、ぢ―様ば、様、父様母様、和子様姫御前と子澤山に生みならべて福々なことぢや」とはやし立てた。

さん「ア、めでたい、よふ祝やつた。と、様か、さま御無事な萬歳祝ひましよ、猶御壽命は百包、盆に入てさし出す、おさんの顔を不思議そうに、萬「ハア是は奥様、お久しぶりござりまする。御さげんよふ、かはつた所で、正月をなされまする」さん「ア、つがもない、わしは萬歳に近付はないわいの」

萬「なんの私らを見覺へはなされますまい。毎年お庭で舞ひまして、おまへはおうへに結構な蒲團敷いて、腰元衆づらりと並べて、御見物なされました京烏丸大經師のおく様、よふ覺えておりまする。田植が御すきでござりました。なんと一つ舞ひましょか」と、いへばおさん胸驚き、さん「目角の強ひ人じやの、毎年の事でもこちはすきと覺えぬ。必々いづかたでも沙汰してたもんな。わしが里の父様、此所へ去年から逼塞してござるゆへ、此比やうく見舞に來た。此在所でわしは島原の傾城が、請出されて來てゐると、庄屋にも誰にもいふて置く。若し人がとふたり共、島原で見た女郎じやといふても。少様子も有るほどに、京ではなを沙汰なし、頼むぞや。さらばまぢつと祝はふ」と、錢ざしぬいて五六十、半紙二枚にもらすなど、わが名を包めば惜からず。

【註】○御無事な萬歳—父様母様御無事なれと祈つてくれた萬歳を祝つてやりましょ。○猶御壽命は百包—御壽命は百までもついでやうにと、百包即ち百文の金を……。○つがもない—途方もない、他愛ない、不都合な。○おうへ—主婦の居る所。庭などに對し座敷をいふ。○田植—萬歳の田植唄にて、近松の作「平家女護鳥」の第三の始に近く見えてゐる。○目角の強い人—目角は目の稜にて、鋭く物を見る人の意。○すき—すつかりとんと。○逼塞—中の巻に出づ。零落して住居の意。○庄屋—今ていふ村長のやうなもの。○様子がある—事情がある。○沙汰なし—沙汰をせぬやうに、内證に、たのむぞや。○錢ざし—孔あき錢をつないだ繩のこと。○五六十—五六十文。千文が金一兩の四分の一。○二枚にもらすな……二枚に包んで、洩すなど、自分の名をもかくし包むからには、その金も惜しくない。

【譯】おさんは「お、目出度い、よく祝つてくれた。父様、母様御無事にと祝つてくれた萬歳を祝つてやりませう、なほ兩税の壽命は百までなれ」といつて、心に念じつゝ、百文の錢を盆に入れて差出すおさんの顔を、不思議さうに見ながら、萬歳は、「はあ、これは奥様、お久しうござります。御機嫌よく、變つた所で、正月をお迎へなされます。」「さんは「あ、途方もない、わしは萬歳に近づきをもつてはをらぬわいの。」「萬歳、どうして私しらを見覺えはなされますまい。毎年お庭で舞をいたしましたして、あなたは座敷に結構な蒲團を敷いて、腰元衆をずらりとならべて、御見物なされました所の、京は烏丸の大經師の奥様でござりませう。よく覺えてをります。田植歌がお好きでござりましたな。如何です、一つ舞ひませうか」といふと、おさんはびつくりしながら「目利の敏い人ぢやな。毎年のことでも、こちらは、とんと覺えない。必ず何處へも知らせないでおくれ。わたしが里の父様が、去年から此所へ佗住居をしておいで故、この頃やつと見舞に來ました。此田舎で、私は島原の傾城が請出されて來てゐるのぢやと、庄屋にも誰にもいふてある。若し人がたづねても、島原で見た女郎ぢやといふておくれ。少し事情もあるから、京ではなほと沙汰せぬやうに頼むぞや。それでは今少し祝つて遣はさう」といつて、錢を差し貫いた繩からぬいて、五六十文を半紙二枚につゝみて、わが名を洩らしてくるなといひながら、我名と共に包み込むからには、それも惜しくはなかつた。

萬「ハアかさねくちめでたい。二三日中に京へ出ます。烏丸へも参り、御嘉例の如くお手代衆、助右衛門様茂兵衛様とおさかづき致しませう。御ぶじな通り話しましよ」と、出でんとすれば、さん「なふ是々、その烏丸で猶かくしたい。ア、酒に酔ふたら忘れて、ひよつと云やればわるい。此春はもう烏丸へはいかしやんな。來年めでたふわしがのぼつて祝ひましょ。烏丸の代にこゝで盃出したいが、ありしも酒をさらした。是で吞んで下され」と、二三夕の豆板二つ、吞ませぬ樽の口ふさぎ。萬「ハアなんの是で申しませう。本の樽より結句木樽に酔ひました」と、うまひめにあふ萬歳の、舌つとみう

つて出でにける。

【註】 ○お盆致しましよーお祝をのべてお盆を頂かうの意。○御無事な通りー御無事であるが如くに、お變りないといつて。○二三匁の豆板二つー豆板は豆銀、豆板銀、銀玉、小玉銀、又粒銀ともいひ、小塊の銀貨のこと。二つは二個、又は二枚の意。目方で通用した。二三匁とぼんやりいつたのは、作者が想像していつたからで、寫實主義からいへば何匁とかくところだ。○香ませぬ樽の口ふさぎー酒をのませず、從て樽の口をあげぬ意と、萬歳の口留をすることをかけた。○卒の樽より木樽ー本樽は酒樽。木樽は酒のない、木ばかり即ち空の樽。即ち酒をのまずして金に酔ふ意。○舌鼓を打つーうまい物をくつた時舌を打つをいふ。だが此處では心の舌鼓をうつのだ。

【譯】 萬歳は「はあ重ね〜おめでたい、二三日中に京へ出ます。烏丸へも参上して、御嘉例通りに、お手代衆の助右衛様や茂兵衛様にもお祝申しあげてお盆をいたゞきましよ。そして御無事なやうに有の儘を話させよう」といつて出てゆかうとすると、おさんは「なうこれ〜、その烏丸には、なほ更私のことを隠しておきたい。あゝ酔うてうつかりして、口を江べらされては悪い。此春はもう烏丸へは行きなざるな。來年私しが目出度く上京した時祝つてあげよう。烏丸での祝の代りに、此處で盆を出して酒を飲ませたいが、丁度酒を切らした。此れで飲んで下され」といつて、二三匁の價の豆銀を二枚やつて、樽の口をふさぐと同時に、酒を吞ませないで口留をした。萬歳は即ち喜んで「はあ、どうしてこれで申しませう、何も申しませぬ。本物の酒よりも、却つて空の樽に酔ひました」といつて、うまい目にあつた萬歳は、鼓でない舌鼓を、しかも心で打ちながら出て行つた。

おさんもうき世恐ろしく、うつかりと成所へ、茂兵衛も色青ふして立歸る。さん「エ、さり〜戻りはせず、此身に成て恵方参り所か。たつた今毎年京へ來る、得意の萬歳か來て、不思議立てたを、につこらしう嘘ついて、いなせ事はいなせたが、どふやらこゝにも怖氣が立つて、長ふ居らりよと思はぬ」と、かたれば茂兵衛もあされはて、茂「サア〜盆も正月も一時に來ました。天しる地しるでこつちこそ見しらね、今の萬歳の格で、栗賣の柴賣のと、丹波から京へ出る者は多し。あれが云ひ是が聞き知れたも不思議でござらぬ。助右衛門めを始、旦那の一家が隣在所に宿取つてゐるげな。其上たつた今但馬の湯入を乗せて通る駕舁が、めいよな事を云ひました。大經師のおさんが、おく丹波にかくれてゐる様子がされて、京のお役所から、こゝの代官所へ解狀がついて、在々を尋ねる、其使の早駕を乗せて、おいの坂のあり口から、二里の間を一貫四百、七百づつあたゝまつたと、たつた今いふて通りました」と、身を慄はしていひければ、

【註】 ○うつかりとなるー茫然として心空になる。○きり〜さつさと、早く。○此身になつてーこんな境遇になつて。○恵方参りー恵方は吉方にて、歳徳神が其年にあるとされる方角をいふ。正月に総起を祈つて参詣する。○得意の萬歳ーお得意、なじみの萬歳。○不思議立てたをー不審を起したのを。○につこらしうーにつこはにつく、似てゐるにて、まことしやかに。○いなせ事…いなせたことはいなせた、歸せはしたがの意。○盆も正月も一時ー同時に兩方が來て忙がしき意。○天知る地知るー天知る我身知るの諺から、悪事は直ちにばれる意。○萬歳の格でー萬歳と同じやうに、同じ調子で。○隣在所ー隣村。意。○但馬の湯入ー但馬域崎に温泉がある。之へ入湯する客。○めいよなー名譽の意は奇妙、即ちそれから不思議な、面妖な、變な意。○代官所ー武家時代の將軍又は諸侯の直轄地の年貢、公事其他の民政を司つた役所。○解狀ー罪人逮捕狀。○在々ー在所々々、村々。○早駕ー急使を乗せた駕。○おいの坂ー老坂。○一貫四百ー駕舁が二人でもらつて、七百目づつ分配したのだ。○あたゝまつたー懐中があたゝまる。即もうけた意。

【譯】 おさんも浮世が恐ろしくなつて、茫然としてゐる處へ、茂兵衛も眞青になつて歸つて來た。おさんは「え、

さつさと歸りはせず、此境遇になつて、惠方参りなど香氣なことがしてをれるものか。たつた今のこと、毎年京へ上つて来る、馴染の萬歳が来て、不審さうに怪んだところを、まことしやかに嘘をいつて、歸らせることは歸らせだが、どうやら此處にも怖しくなつて来て、長く居れさうにない」といへば、茂兵衛も事の成行に呆れはて、
「さあ、盆も正月も一時に來たやうに忙がしくなりました。天知る地知るの諺のやうに、こちらこそ見知らぬとしても、今來た萬歳の調子で、栗賣だの柴賣だのと、丹波から京へ出るものは多いのであるから、あれが云ひこれ
が聞きして、自然と人に知れ渡つたのも不思議ではありませぬ。それが爲に、助右衛門奴を始として、旦那の一家の人々が隣村へ宿をとつてゐるさうな。其上たつた今のこと、但馬の温泉客を乗せて通る駕籠昇か不思議なことを云ひました。大經師のおさんが、奥丹波に隠れてゐる様子が知れて、京のお役所から、此地の代官所へ逮捕状が届いて、在所へを尋ねる其使の乗つた急ぎの駕籠をかついで、老坂の下り口から、二里の間を一貫四百目でやり、七百目づゝ懷を収められたと、たつた今いふて通りました」と身を慄はせながらいふと――

さん「ハテなんとしよう、今迄がふしぎの命。され共とつ様か、様の、歎の程がおいとし。一日でもながらへるが孝行、今夜のうちに退かふては有まいか」茂「いかにもいかにもかのお心ざしの一貫目二百目つかふて、残る八百目此家ぬし助作に預置きました。大事のお慈悲の此銀を、こなたとわたし
が急度抱へて死ねばとて、人の實になす事は、冥加に盡ると思ひ、今寄つて申したれば、追付持つて
いかふと申。此銀を腰に付け、丹後の宮津に兄弟同然の者が有る。そこ迄どふぞのきませう。それ迄
に運つきて、死ぬる期に極つたらば、日比申通り、悪縁と思ふて下されませ。私ゆへに大事のお身を
捨させました」と、涙ぐみ打しほれて見へければ、さん「又おなじ事計。それは互の因果づく。只わす

れぬは二人の親、扱いとしいは幼馴染の以春様、こなたもわしも微塵濁らぬ此心、いひわけして死にたい」と、又さめくとぞ泣むたる。

【註】○いとしい―可愛らしいの意から轉じてあはれ、ふびんの意に此處は使つた。○退かうてはないか―立のいて、更によりよき隠れ場を見出さんとするのだ。○八百目―此八百目はいざといへばもつて逃げるべき金である。それを預けるといふのは如何にも拙策である。丁度此と同じ類型が、曾根崎心中の徳兵衛にもやられてゐる。無理といへば多少の無理でもある。○死ぬるとして―抱いて死んだにしても、自分達の身につけ、もつて逃げるべきで、むざ／＼と他人の實とすることは……○冥加に盡きる―神佛の加護が盡きる、即ち罰があたる。○どうぞ―こゝは何卒の意。○死ぬる期に―もう最期だといふことに。○いとしいは幼馴染―慕はしい子供の時からの馴染の夫。此所に及んで始めて、人のことを云ひ出したのであるが、これは良人を思ひ又茂兵衛を思ふ爲といふよりも、茂兵衛との間は、その後はどこまでも潔白な間柄と見、肉はともかく、心の上では少しも良人に對する情愛に變りなく、良人を良人としてゐる心を表はしたのであるか、さうとすれば逃げ出すのが分らぬといふ理窟にもなる。議論の起る所である。

【譯】おさん「はてどうしよう。今迄生きてゐるのが不思議といへば不思議である。けれども父様や母様の歎を思ふと、ふびんである。兎に角一日でも長らへるが孝行であるとすれば、今夜の中に、此處を立退かうではないか。」茂兵衛「いかにも、その通りにいたしましたよ。かの父母のお志として下された一貫目は、二百目つかつて、残りの八百目は、此家主の助作に預けて置いた。大切な、お慈悲で下された此金を、あなたと私とが、たしかに抱いて死ぬにしても差支ないが、むざ／＼と他人の實としてしまふことは神佛の罰のあたることと思つて、今立寄つて話をすると、追つてもつて行かうと云つてゐた。此銀を腰につけて、丹後の宮津に兄弟同様のものがあるから、そのまま何卒立退きませう。もしそれまでに運がつきて、いよ／＼死ぬべき最期ときまつたら、日頃から申す通り、悪縁だと思ふて諦めて下さりませ。私のせいで、大切なお身を捨てさせてしまひました」といつて涙ぐんで、打しなびて見えたので、おさんは「又同じことを繰返していひなさる。それはお互の因果づくではないか。只忘れられぬは

二人の親のことである。さて又慕はしいは幼馴染の以春様である。そなたも私も微塵も濁らぬ此心の中を、云ひわけをしてから死にたい」といつて又さめく泣いてゐた。

家主の助作、案内もせずつゝと入、「ヤア新六様、さつきは御出なされた、預りの八百目只置くよりはと、少し手まはし致し、急にはどふも調はぬ、一兩日待つてもらひましょ。こなさまもあんまりな、あの様な傾城殿請出した上に、銀つかふといふ様な、むかしの心お止めなされ」と云ひければ、さん「いや是助作さん、あのさんの入用ではないわいな。皆わしが入用じゃ。勤の身はな、全盛する程世間が張つて、辛い物でござんす。念比な客から借つた銀で、今宵中に返さねばわけが立たぬわいな。其代りにあのさんの勘當がゆりて、大坂へ往なんしたら、夜でも夜中でもいふてござんせ。八百貫目や八千貫は、誓文くつされ、利なしでやんす」といひければ、茂「あの通りく」。近比御苦勞千萬ながら、どふぞ頼み存ずる。助「ム、いかにも聞きとどけた。それ程急なと知らなんだ。七つ過暮迄に急度持つて來ませう。女夫の衆の請取とる、必ず内にござれや」二人「ヲ、いごさもしませぬ」と約束堅き、銀が敵としらざりし、身のなるはてぞ淺ましき。

【註】○新六様―茂兵衛が此の名に變て身を忍んでゐるのだ。○手廻し―つまり借付ける意。○あのさん―茂兵衛をさして傾城らしい詞でいつたので、あの人の意。○全盛するほど―人氣があつて、流行るほど。○世間が張つて―世間づき合即ち實際の費用が高まつて。○ごんす―ござんす。○念頃な客―親しい客。○譯が立たぬ―理窟がつかぬ。義理がすまぬ。○八百貫―銀六十匁

一兩と算する故、一萬三千兩餘。○誓文くつされ―誓文をたてる、體が腐つてもこの意にて、誓の詞。○利なしでやんす―利子なしで貸す意。やんすは傾城詞の語尾。○聞届けた―承知した。○七つ過―今の四時。○請取とる―請取證をもらうから在宅せよとは、役人をつれて來る爲の前置の企みである。○約束堅き―堅き約束をするのは。○銀が敵―銀をまつてる間に破滅に落ちるから銀が敵といつたのである。又此表白によりて劇的効果は失はれることが甚しい。近松特有の弱點である。

【譯】家主の助作は案内もしないで、つと入つて、「やア新六様、さつきはおいでなされたが、例のお預かりの八百目の銀は、預かつた儘に打やつておくよりかと思つて、少し貸付けましたので、急にはどうも調ひませぬ。一日二日まつて下され。あんたもあまりに無考な人ぢや。あの様な傾城殿を身請けして其上に、まだ銀をつかふとは何といふことぢや。以前のやうな、そんなだらしない考はおやめなされ」といへば、おさんは「いや、これ、助作さん、あの人が入用なのではないわいな。皆わしが入用なのぢや。勤の身といふものはな、榮えれば榮える程、世間づき合ひがかさばつて來て、つらいものでござんす。親しい客から借りた銀で、今宵の中に返さないと義理がすまぬわいな。その代りあのの勘當が許されて、大坂へ歸らしやつたら、夜でも夜中でも云つて來なされ、八百貫や八千貫の金は、誓文するが、どんなことがあつても利子なしで貸しましょ」といへば、茂兵衛も「あの通り間違ない。近頃御苦勞千萬なことながら、お頼み申します」助作「む、如何にも、承知しました。それ程急なことゝは知らなんだ。四時過ぎ、暮れるまでには、屹度もつて來ませう。したら女夫衆の請取證を貰ふから、必ず家の内においでなされよ」二人は「お、動きもしませぬ」と堅い約束をして、銀が敵と知らず、その金の爲に身を亡ぼすのは淺ましい身の成る果である。

茂「扱々とろりと一ばい參らせた。今の傾城の物眞似芝居御すきの一徳。銀請とるとそのまゝ、かけ出して急いだら、夜の中に七八里は心やすい。宮津に落付、切戸の文珠の法印様に母方の縁あれば、頼むに引はなされまい。そろ／＼用意」と帶しなをし、身拵へする中に、かな棒の音、人足しきりに近

付きたり。茂「ヤア氣味わるひ。ハア南無三寶口惜しい。助作めに出しぬかれた。おさん様もう遁れぬ。未練なはたらき遊ばすな」さん「ヲ、覺悟した合點じや」と、表を見れば取手の役人、助作を先に立て「とつた〜、とつた〜」とみだれ入る。

【註】○一はい夢らせ〜うまく一ばい欺した。○物真似芝居〜つまり人事の真似をする芝居即ち、芝居の意であるが、もと風俗を亂るといふ理由の下に、承應元年六月、若衆歌舞伎が禁せられた後、翌年三月、「役者物真似狂言盡し」の名で京坂に芝居がゆるされた。その語をとつたものである。此物真似は聲色だけでなくつまり芝居である。○お好きの一徳〜平常その物真似芝居が好きであつたが爲に、自ら此物真似をやつて、うまく助作をだました意である。○心やすい〜容易なこと。○切戸の文珠〜丹後、天橋立南端の海峡にあり、一名九世戸の文珠ともいふ文珠菩薩を祭れる寺。○法印様〜僧正相當の僧位、又山伏の官名。○引はなされまい〜頼んだら、後へは引きはなさるまい。○南無三寶〜もと佛法僧の三寶に歸依することをいふのだが、此處では「しまった」といふやうな意。○出しぬかれた〜欺された。○合點ぢや〜承知ぢや。

【譯】茂兵衛「さて〜、とろりとうまく一杯食はせてやつた。今の傾城の物真似芝居はあなたが芝居好の一徳と申すもので、これから銀を請とるとすぐにそのまゝ駈け出して急いだら、夜間に七八里行くのは容易ぢや。宮津に落つて、切戸の文珠の法印様は、私しの母方の縁のある坊さんだから、頼んだら、あとへ引きはなされまい。そろ〜用意なされ」といつて帯を締直し、身仕度をする中に、もう金棒を引いて来る音がして、人足がしきりに近くなつて来る。茂兵衛「やア氣味が悪い。はあ南無三寶しまつた口惜しい。助作の奴に出しぬかれてしまつた。おさん様もう遁れられませぬ。未練な振舞は遊ばすな。」おさん「お〜ちやんと覺悟をしてゐる。承知した」といつて表を見ると捕手の役人が、助作を先頭に立て「捕へた〜」といつて亂入する。

茂兵衛慮せず〜と出で、「見苦しいお侍、合口一本さ、ぬ町人、手向ひはいたさぬ。悴の時よりやはら

あて身を稽古して、すはといは〜腕は細く共、お侍の五人や七人は慮外ながら、きやつといはせてのめらせ様もしつたれ共、もとのおこりは主人の勘氣、主人に手向ふ同然と思ひ、手向は仕らぬ。此女中に付、申わけあれ共それもいらぬ物。不義ならば不義にして、サア尋常に括れ。捕とつたとつた」と引伏せ〜高手小手、顔色變せずしばられし、男も女も健氣さに、取手の武士は我を折つて、哀といはぬ人もなし。

【註】○合口〜鐔を用ひないやうに作られた短刀。○やはら〜柔術。○あて身〜柔道の上で、突いて氣絶させ得る法又は急所。○慮外ながら〜失禮ながら。○のめらせ様〜斃し方。○勘氣〜尊長の人の不機嫌を蒙ること、勘當。○いらぬもの〜餘けいなこと。○高手小手〜罪人をしはるしはり方、中の巻始の方に説いた。○我を折つて〜頑固な感情を曲げて。

【譯】茂兵衛はびくともせず、つと出で、「見苦しや、お侍、合口一本さ、ぬ町人の私は手向ひなどはしませぬ。若い時から、柔道やあて身の法を稽古をして、いざといは〜、細腕でも、お侍の五人七人は、失禮ながら、きやつといはせて、その儘斃してしまふことも知つてはをるが、駈落の元の起りは主人の勘當からであるから、お侍に逆ふのは主人に手向ふも同然なことと思ふゆえ、手向ひは致しませぬ。此婦人についても申譯はあるのだが、それも餘計なこと。不義といはれるなら不義といふことにして、さあ尋常にく〜るがよい」。捕手の役人は即ち、一捕つた〜といつて、引伏せ〜高手小手に結へたが、顔色もかへすしばられた男女の健氣な態度に、捕手の武士どもは、我意を折つて、氣の毒といはぬものはなかつた。

おさんす〜しき目の中にて、助作をはつたと睨み、「エ、さもしい土百姓、おのれ少シの欲にめでて、よふ訴人しおつたな。申し殿様あいつに八百目のかねを預け置ました。かうなつた身に金銀はいらぬ

共是は親のなさけの銀、京へのぼして黒谷へ上げて下されませ」と、いひもさらぬに助作まが「しき顔付にて、「ア、恐ろしい女め。いつおのれに粒三文もかつた覚えはない。五十日計り家賃して、宿賃の米の味噌のと算用したらば、二三百目も来る筈じや。八百目預けたとはいさがたりめ」と、あらがふ所を茂兵衛は取引立、助作が横腹はつたと蹴倒し、茂是式の目くさり銀おのれ風情に偽をいはふか。よい／＼おのれにくれた。八百目の銀うぬが根性相應に現世は長者と悦んで、閻魔の前で算用せい」と、つらぼね三つ四つ踏付け／＼、さらぬ顔にてゐたりけり。

【註】 ○さもしいいやしい、あさまし。○めで、變して、欲して、好んで。○訴人―訴へ。○殿様―役人に對して丁寧なあいさつをしたのだ。○黒谷―前にあつた黒谷の菩提寺のこと。○まが／＼しき―まことしやかに。○粒三文―粒銀三つも。○いきがたり奴―騙り者奴、いきはいけずり奴などいふ時の如く語調を強める語。○あらがふ―争ふ。○繩取引立て―本繩に結へられてゐるのだから、これは不合理な表白で、うっかりした儘にのこつてるのであらう。○これ式の目くさり銀―これつばかりの僅かな金。○おのれ風情―汝など。○うぬが―汝が、○算用せい―死んだら閻魔の前にてはつきりと勘定をしる。○つら骨―面の骨、頬骨。○さらぬ顔―不然顔、何事もない顔。

【譯】 すゝしい目のおさんは助作をけたと睨んで、「えゝあさましい土百姓奴、おのれは僅かばかりの慾をしようとして、よくも訴へをつたな。申し、お役人様、私達はあの奴に八百目の金を預けておいたのです。斯のやうになつた身には金銀は不用だが、之は親が情をかけてくれた銀であるからには、京へ送つて、黒谷の寺へあげてくだされませ」と云ひも切らぬ中に助作は、さも誠しやかな顔付で、「あゝ恐ろしい女奴、いつそちに粒銀三つも借つたことがあるか、その様な覚えはない。五十日ばかり家をかして、あの間の宿賃だ、米だ、味噌だと勘定したら、二三百目もつりが来る筈ぢや。八百目預けてあるとは何といふ騙りだ」といつて争ふ處を茂兵衛は繩をとり引立て、助作が横腹をはつたと蹴付し、「こればかりの目腐れ金について、汝風情に嘘を誰がいか。よい／＼汝にやる。八百目の銀を、ごまかしてとりこんで、汝があさましい根性相應に、現世では長者になつたと喜んで、やがて閻魔の前へ出て算用をせい」といひながら、頬骨三四度ふみつけ／＼して、何事もなさうな顔をしてゐた。

かくと聞くより助右衛門嬉しげに走付き、「私は此度お願ひ申しあげし御領内助作がいとこ、京大經師以春手代助右衛門と申者。御苦勞千萬に、おさん茂兵衛御からめ下され、我々主従本望大悦仕る。繩付二人請取早々上り申たし。お渡しなされ下され」と、謹んで述べければ、役人氣色をかへ「そいつ引のけ。推參至極な繩付を渡せとは、おのれに頼まれ捕りはせぬ。京都より解状によつてからめ捕る。すぐに京のろう屋へ引渡す。殊にだん／＼詮議有るもの、慮外をぬかしたらおのれも共にからめる」と叱られて助右衛門、もみ手をしてのく所へ赤松梅龍、早駕にて駈付け、首桶提げつか／＼と出て、梅「われらは大經師以春が下女、玉と申す者の請人、すなはち伯父赤松梅龍と申もの。此度おさん茂兵衛駈落の事、ゆめ／＼兩人の不義はなく、此玉がよしなきことばを聞ちがへ、嫉妬の心あまつて、聞ちがひのあやまりにて、おもはず不義の虚名をとる事、せんずる所玉めが口からなすわざ、科人は一人、すなはち玉が首うつて參るからは、兩人の命御助け下さるべし」と、ふたをとれば玉が首、おさん茂兵衛は一目見て、「はや先だつたか、はかなや」と、きへ／＼とこそ成りにけれ。

【註】 ○本望大悦―本望を達して悦ばし。○繩付二人―罪人二人。○慮外―無禮。○よしなき―わけもなき。○早駕―急便の駕

籠。○虚名をとること—實なき名をとらせること。○きへ〜魂もきえんとするほど。

【譯】二人捕はれた話を聞くなり、助右衛門は嬉しさうに走りついて「私は此度御願申あげた御領内の佳人助作いとこ、京の大經師以春の手代助右衛門と申者。御苦勞千萬にもおさん茂兵衛を御逮捕下され、我々主従の本望が達し大悦に存じます。繩をつけられた罪人二人を請取つて、早々上京仕りたし、お渡し下され」と謹んでいへば、役人は顔色をかへ「そいつを引のけよ。繩付を渡せとは推參至極な奴、汝に頼まれて逮捕しはせぬ。京都から解状があつたからこそ、からめ捕つたのぢや」と叱りつけられて、助右衛門は、兩手をもみながら退却する所へ、赤松梅龍が、早駕籠にて駈つけ、首桶を提げてつか〜と立出で、「私は大經師以春の下女、玉と申すものゝ引受人、即ち伯父梅龍と申すもの、此度のおさん茂兵衛の駈落の事については、ゆめにも兩人に不義の事實はなく、此玉がわけもないことを聞きがへ、嫉妬心のあまりに、あやまりて、おもはず不義といふ、ありもせぬ名をとらせたのであつて、つまりが玉奴の口がなす業である。だから罪人は一人で、玉がその罪人である。即ち玉の首を打つて参つたから、兩人の命はお助け下され」といつて桶の蓋をとると、確にお玉の首がある。おさん茂兵衛は之を一目見て「もう先に死んだか、はかないことよ」といつて魂もきえ〜になつた。

代官の役人手を打つて、「ハア、早まられた梅龍。此兩人のめしうどは、科の實否定まらず、京都において中立の女、其玉を證據に詮議あらば、事の次第明かにははれ、兩三人共に助かる事も有べき物を、肝じんかなめ證據人の首をうつて、何を證據にせんぎ有るべきしるべもなし。残念々々二人の罪科極つたり。首も一所に京都へわたせ。早々罪人引きませい」捕手「うけ給はる」と引立つれば、梅龍つゝ立ち地團太ふみ、「エ、〜早まつた仕損じた。七十に及ぶ梅龍が、出來しだてして一生のあ

やまり。むだ〜と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がなほしやなあ。ヤア助右衛門よい相手、己れを切つて人を殺したあやまりと、共に罪科に行はれん」と、するり抜いて打付ければ、まつかうをしてやられ、あけに成て逃げたりけり。梅「首をとらずにおかふか」と、かけ出るを大勢取付き、「狼藉させぬ粗忽させぬ」と抱とむる。梅「狼藉合點じや、はなせ〜」と、かけ出すもとまるは老の力にて、とまらぬものは科人を、引行く駒も目に涙、轡にかゝる白泡の、哀を残す 三重

【註】○代官の役人—代官、即ち代官所の役人。○めしうど—逮捕されたもの。○しるべもなし—道しるべもない。○引ませい—引け、といふをやさしくいつたのだ。○地團太—口惜しさに足をばた〜いはせること。○出來しだて—首尾よくやつたつもの計らひ。○共に—おさん等二人と共に。○罪科に行はれん—處刑されん。○まつかう—頼の真中をやられた、切られた。○あけに成つて—眞赤になつて。○かけ出すもとまるは…駈け出してゆくのも、又他人から妨げられて、それを刎ねとばしてゆくことが出來ず止まるのも、老人であるからのことでの意。後のとまらぬを、おさん爲に、とまるはといつたのだ。○引行く駒も—罪人を引いてゆくものも駒も目に涙を浮べ。○轡にかゝる白泡—これはあはれといはんが爲に白泡といひ、馬のことから轡に白泡がかゝると、前を受けていつたので、此句に深き意味はない。

【譯】代官所の役人は手を打つて「はあ早まられた梅龍、此兩人の召人は、まだ罪の事實がはつきりせず、京都にて中立をした女である、その玉を證人として詮議があると、事の次第が明になつて、三人一緒に助かるかも知れぬのであるに、肝心な證據になるものゝ首を打つて何を證據に詮議が出來よう、その道しるべもない。残念々々、二人の罪は自然に決つてしまつた。玉の首も一緒に京都へ送れ、早速罪人を引立てい」といふと「承知しました」といつて捕手が引立てると、梅龍はつき立ち上り地團太をふんでくやしがりながら「え、早まつた、しまつた。七十にもなつたこの梅龍が、うまくやつたつもりでやつて一生の誤をした。徒らに腹を切つても狂人のやうに見える。相手が欲

しいなあ。やあ助右衛門こそよき相手ぢや。汝を斬つて、人を殺したあやまちとして、おさん等二人と共に處刑をされよう」といつて、すらりと抜いて打ちつけると、助右は眞額をやられて、血だらけになつて逃げた。梅龍「おのれ、首をとらずに置くか」といつて駈けつける處を大勢が取りついて、「亂暴はさせぬ、粗忽はさせられぬ」といつて抱きとめる。「亂暴は承知でやるのぢや放せ〜」といつてかけ出すのも、老人のことであるからには、すぐに他人に妨げられて止まるのはせんないことで、とまらぬものは涙である。罪人を引いてゆく人も駒も目に涙をた〜へ、轡には白泡がかゝて、あはれを止めることである。

おさん茂兵衛こよみ歌

乗る人も乗せたる駒も、つゐに行く道とはしれど、最期日の今日か明日の我身には、我のみさゆる心地して、あまたの人の命乞、それを杖共柱ごよみの紙やれて、向ふ其方は都の惠方、二人が身には金神と、思ひ返せば胸塞り、月ふさがりの駒の足、隙行く駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と廿五の、名残 霜と見あぐれば、空にしられぬ露の雨、はら〜ほろ〜繩目に傳ひ、鞍坪に傳ふ涙の十方ぐれ、泣々引かれ行く姿、よその見るめも哀れなり。

【註】 ○つゐに行く道―人も馬もいづれ死んでゆく意。道は、死んでゆく道。伊勢物語業平の歌「終にゆく道とはかねて知りしかど昨日今日とは思はざりしを」からとる。 ○今日か明日か―既にどうせ今日明日の中には殺されると思ふ意。 ○杖共柱曆の：杖とも柱ともたのむ身ながら、その頼みがやぶれての意を、柱曆がやれてとかけたのだ。又こよみはたのみにかけたのだ。 ○其方は

は都の惠方―向つてゆく其方向は、都の吉方でありながらの意。惠方の説明は此作に度々のべたる如く、之に向つて何事をしても福があるといふ方角。 ○金神―凡ての物を枯殺する神にて、此のある方に向ふと災厄があるとさる。十二支のうち此金神のある方角は至つてするどく、従つて之を用ふるを恐るべしと曆に記してある。 ○月ふさがり―曆の上で悪い日とさる。運のふさがる月となつての意。 ○駒の足隙行く駒…駒の足隙行く駒とは、隙行く足早い即ち光陰の速く過ぎゆくことで、莊子に、光陰は白駒の隙を過ぐる如しの語からとる。光陰が早くたつといふいつもながらの意。 ○八十八夜―正月の前即ち立春より八十八日目の日。春の霜は此日で最後であるので、此日の霜を別れ霜とか名残の霜ともいつてゐる。これも曆の縁で出した、そして更に此八十八を八十八歳の米壽にかけ、早く日はたつが、八十八の米壽はとも及びもないこと、況んや十九と二十五では…といつたのだ。 ○及びなき―前述の如く八十八歳でんかとも及びぬことと解せぬと、及びなきの語が意をなさぬ。 ○十九と二十五―女は十九、茂兵衛は二十五であつたのだ。此數は共に厄年とされて、曾根崎心中の年も之と同じである。 ○名残の鞭―八十八夜の霜のこと、それと二人の名残の別れの意とかく。 ○鞍つぼ―鞍の凹んだ所、即人の乗る所。 ○十方ぐれ―庚申の日から、癸巳まで十日の間を云ひ、此間は十干十二支相剋して、天地八方共に曇がちなる故に十方暮といふ。此間は何事にも悪いとされ、殊に和合相談旅行門出などには深くいむべしとされてゐる。即途方にくれの意にかく。

【譯】 駒に乗る人も、乗つた駒も、いづれは同じく行くべき道であるとは知つてゐても、此世に於ける最後の日が、今日か明日と迫つてゐる我身にとつては、自分ばかりの命が消えるやうな心地がして、あまたの人の命乞をしなくては、向つてゆくその方角は都の吉方であつてくれるのを杖とも柱とも頼みにしながら、そのたのみは破れてしまつて、向つてゆくその方角は都の吉方であつても、二人の身にとつては金神であると思ひ返して見ると、胸が塞がつて、運のふさがつた月となり、隙ゆく駒の例への如く、月日はどん〜と早くたつてゆくもの、八十八歳の米壽など迎へんことは及びもつかぬことで、年は未だ十九と二十五なるに、既に二人の名残の霜の日即ち別れる日であると思あけると、空には分らぬ涙の露の雨が降つて、それがはら〜ほろ〜と、二人を結んだ繩目を傳つて鞍坪に傳はり、二人が途方にくれて泣きながら引かれてゆく有様は、他の見る人の目にもあはれであつた。

人目盗みてあらはれて、不義じやのなんの庚申かのえさる、今日はあしたの甲子きのえと、知らであふ夜の其むくひ、世上の口にうたはれて、合せて見ても合はぬ中、丸い苧桶まごけに角の蓋ふた、眞苧まごうみためて緇あひま交せて、今は我身の縛り繩しば、謗そしりを受けん情なや。祭文おさん茂兵衛にいふやうは、「よしなき女の悋氣りんきゆへ、何んの科かなきそなた迄、あれ不義者とあやぶ日、終に命のほろぶ日、湯殿始に身を清め、新枕にひまくらせし姫始ひめじ、かのきそ始引かへて、ひかる、駒のくらびらき、思へば天一天上の、五すい八せんま日もなし。只何事も坎日かんにち」と、聲も涙にかさくる。」

【註】○何の庚申—何のかのといはれにかく。○甲子—今日は明日の昨日と、きのへ、木の上にかく。木の上は即ち磔はりの時のことを思つていつてるのだ。今日は木の上にあげられるを知らずの意。○其むくひ…むくひとして、世間の人の口に浮名を歌はれたの意。○丸い苧桶…苧桶は麻糸を入れておく桶。此句の意はちぐはぐで、びたりとらまくあはぬ。即ちおさんと茂兵衛が戀中でないから、一寸釣合ぬといつたのだ。○眞苧うみためて…麻糸を長くつぎ合せて。眞苧は間男にかく。麻糸をつないでそれを縛つて、繩として、我身をしばつたといふ謗を受けるのが情けない。○おさん茂兵衛に…此處からは大体祭文の詞を引いたので、筆につらねて末の世に語りつゞけて「あたりまでがさうだ。○よしなき—譯もない、他愛もない。○女の悋氣—おさんが良人以春にさんく、恨み言をいはうとして、お玉の床に、代つて寝たことをいふのだ。○あやぶ日—此日は家つくり、たねまき、酒をつくり神を祭り、木を伐り婚禮によきも、山へ上り船に乗り、其他夜歩き等に悪い日とされてゐる。「不義者といはれるまで、危き目に合せたにかく。此等は皆昔の曆に出て来るものにて、昔曆といふ題にちなみて、以下曆に關した語が澤山ならべてある。○ほろぶ日—滅日、滅門日のこと、此日に事をなせば其家亡ぶとされ、大禍、狼籍と共に三悪日とされてゐる。○湯殿始—文化五年の劉子著「増補曆略註」の増補追加たる文政十三年版を見ると、次に出て来る湯殿始、姫始、きそ始、藏開、などの語がはつきりしてゐる。之によると湯殿始とは「正月九日の仕初めの一つにて、朝早く湯浴をして、古き垢を除き

身を清めて、春陽の目出度き氣を身にまねき入れ、恵方に向ひて拜禮をなせば、其年中の疫氣を受けず、悪しき病難等をさくる祝事なる故、湯殿なき家にては、若水を湯にわかし湯浴をすべし」とある。今日の初風呂とは、もつと深い意味をもつたものである。○新枕せし—初めて枕を交した、始めて同衾した意。○姫始—新年始めて同衾すること、か、馬の乗り始めとか、いろ／＼の本によりて諸説があるが、上記「増補曆略註」の増補追加によると、「さまざまの説あれども皆とり用ふる事なかれ、衣食住の三つの中にて、衣服は至つて大切なものなり…其衣服の裁縫するは皆々女子の役なる故に、諸侯方の御婚禮にも絹ばり等の縫針わざのお道具をもたせしめる事は、神代の遺風なり、縫針わざは女子の手業なるが故に縫物等をするを姫始といふ」とあつて、それも正月元日の仕初めの事の一つに數へられてゐる。けれども近松が此處に用ひたのは、始めての同衾の意であることは確實だ。○きそ始—これもやはり正月元日に、仕初めとして行ふことの一つで、着衣始のことである。そは衣のことである。増補曆略註の増補追加に「古き衣服をぬぎ捨て、新しき衣服を着して、其年の恵方に向ひて、拜禮をする、目出度青陽の氣を招く祝事」とある。○引かへつて—新年に始めて新しき着物を着るに引かへての意。○藏開—例の増補曆略註追加によると、これも正月元日の仕初めとあり、他の本にはこれは正月十一日の行事とあるが、前説が正しいやうだ。要するに鏡餅をそなへ新年に始めて、藏を開いて新しき氣を招き入れ、吉事を祈る祝事をいつたのである。藏を鞍にかけ、きそ始に引きかへ、鞍にまたがり駒に乗つて引かれてゆく意。○天一天上—天一星といふ水の神が、四十四日の間八方をめぐる、やがて天に上る日といふ。此星である神が、上天の日から十六日の間は天上にゐて、十七日目に巳酉の日にまた下界に下り、それから癸巳の日に上天し、戊申の日まで十六日間又天上にゐる。此星は長神ともいひ、此星の巡つてゐる間は、その方角は塞つてゐて宜しくないが、此星天上にある間は吉とされてゐる。此説明にも種々あるが、これは増補曆略註によつたものだ。なほ此處は水谷氏の説によると「大經師歌祭文」にある「吾を戀ひ路に思ひ寢の富士の高根にます思ひ、つもる天一天上の、五すい八專間日もなし、かゝる心の中日を、せめてごげんにくどかんと、いろ／＼かん日めぐらせて、たま／＼遇ふ夜はかのへさる、てんくわう、らうしやく、地火大過、燃ゆるくゑ日に…」の文句によつたものだ。○五衰—論曲「羽衣」にも「天人の五衰も目の前に」云々とある如く、天上の生活は無上の如くなるも然らず、天人にも五種の大衰相がある。一は衣服の塵垢にまむこと、二に頭上の花の萎むこと、三に兩腋下に汗の出ること、四に、身體に臭穢しみ入ること、五に本座を樂まざることと俱合論に見ゆ。○八專—壬子の日から癸亥に至る十二日間をいふ。ところがその十二日の間に、丑辰午戌の四日を間日といふ。之を除くと八日になる。即ち八專の名

の起る所以である。一年に六回ある。之は十干十二支共に、同じ性の日八日づゝである。家を建てるにはよきも、結婚、賣買、家米をかへること其他物を始めるには悪いとさる。○間日―前の八專の註參照。ひまもなしの意にかく。ところで「天一天上……間日もなし」の意は、天上にすら衰亡の日があるのであるから、地上にあるものゝ亡ぶのは暇もないこととて、自分達の亡ぶのも免れぬことだといふのだ。○坎日―外出を思む日にて、勘忍にかく。○聲も涙―聲もたてずに泣くのだ。

【譯】人目を盗んでしたことが露見して、不義ぢやの何のかのといはれ、今日は木の上上げられると知らず、遇ふた夜の報として世上の人の口に浮き名を歌はれたので、合はせて見ても合はぬ中であることは、丸い苧桶に角い蓋をしたやうに、ちぐはぐてびたりとうまくゆかず、結局眞琴をつないで縛ひ交せて、それを今は我身を縛る繩としたといふ謗を受けるやうな情ないことである。おさんは茂兵衛にいふには、「他愛もない女の悋氣ゆえに、何の科ないそなたまでを、あれ不義者といはれるまで怪ぶませ、遂に命の亡ぶやうなことになつた。湯殿始に身を清めて、新祝をかはし、きそめの祝をするに引かへて、かうして駒の鞍に乗せられて引かれてゆくなさけな。思へば天上にある天人だつて五衰の日があるのであるから、此地上に於て衰亡に暇なきはいふまでもなく、自分もがては亡びるのであらう。只何事も堪忍一つぢや」と聲もなく泣きくれるのであつた。

茂兵衛やうく顔をあげ、「こはおろか成るおさん様、火に入り水に入る事も、さだむ因果とあきらめて、せめて未來のくる日を遁れ、二季の彼岸に到らんと、念じ給へや南無阿彌陀、なむ阿彌陀ぶを帆にあげて、共に弘誓の船のりよし。紅蓮の井戸ほり焦熱の、地獄の釜ぬりよしなや」と、急がぬ道をいつのまに、こゆる我身の死出の山、しでの田長の田がりよし。野べよりさきを見渡せば、過し冬至の冬枯の、木の間く／＼にちら／＼と、抜き身の鎗の恐しや。茂あれでそなたの身をつくか」さん「是でそ

もじを殺すかや」茂「ちいみも今はいつはり」と、二人は顔を打合せ、くどき焦れて泣く涙、馬の尾がみや浸すらん。

【註】○さだむ因果―さだまつた因果、宿命の因果の意。さだむは曆の内にて第一に用ふべき日とされてゐる十二直の一、家つくり、元服、婚禮、賣買等によく、訴訟事、出行き植替等にあしき、小吉の日とされてゐる。○黒日―曆の中にて●の印を置きてある日にて、最も悪い日とされ、死を受ける故、諸事に用ふべからずとてある。未來の苦勞にかく。○二季の彼岸―春秋二季の彼岸。二月(今の三月)中より六日前と、八月(今の九月)中より一日前、彼岸に入りて七日の間にて、晝夜等分の節とさる。つまり春分秋分の中日の前後三日づゝのこと、ところが佛教では、生死を此岸、煩惱を中流、菩薩無相の智慧をもつて誓の舟に乗つて、未來の世に到達すべき淨土を彼岸といふから、その意にかけ次に弘誓の船と出したのだ。○帆にあげて―帆をあげるのではなく、只次に船といふから帆といつたまでだ。南無阿彌陀佛とか、南無阿彌だぶのだぶは太布の意にかけ、布から帆といつたのである。○弘誓の船―曾根崎心中の始の處でも説いたやうに、佛か大慈悲心によりて一切衆生を弘く救ひて淨土に導かんとする誓が弘誓にて、衆生の命が終る時、觀音を始めとして二十五菩薩か、極樂から弘誓の船に乗つて來り迎へるとされてゐる。○船のりよし―昔の曆には溝ほり悪し、船乗りよし、といふやうに、日によりて運星がかいてあるのをすぐにとりて、弘誓の船に乗り、淨土に行くによき日であるといつたのだ。○紅蓮―佛教で八寒地獄の第七、鉢特摩即ち血の池地獄の事。罪人が此處に來ると、寒さの爲めに體が裂けつづれて、紅の蓮華のやうになるとされる。紅蓮地獄の略。○井戸ほり―昔の曆の中に、井戸ほりよしと書いてある日がある、それをうけて、紅蓮地獄の井戸ほりよし、いやよしなことぢやといつたのである。○焦熱の―八熱地獄の一。此處に落つるものは、猛火のもゆる。城又は鐵室に入れられ、焦げたゞれても死ぬことが出來ぬとされてゐる。○地獄の釜ぬり―昔の曆の上にて、釜ぬりよし、と書いてある日のことをうけて、紅蓮地獄の井戸ほり、焦熱地獄の釜ぬりよしといひかけてその終りを、由ないこと、いはれないことといつてよしなやといつたのである。○死出の山―逝きて返らぬ道。死んでたどりゆく山。冥土。いつの間にか我身は死出の山を越えつゝあるがの意。○死出の田長―ほととぎすの異名。死出の山から同音で受けて出し、杜鵑の鳴く頃田を刈るはよからうとの縁で、田刈よしと出したのである。○田刈よし―やはり昔の曆に田に植

えた麥刈によき日と記してあるをさす。○野邊よりさき―野邊は野邊送りなどの野邊にて墓地までの間。それより先とは即ち針の山剣の山なる地獄をさすのである。即ち野邊より先を心の眼で見れば、剣の山針の山がちら／＼と見え、今の肉眼で野邊より見渡すと木の間に槍がちら／＼見えるのだ。○過ぎし冬至の冬枯―過し冬至に冬枯れになった。○血忌―昔の曆の下段に記された日の一日にて、生物の命をとり、針灸灸灸結婚等に悪い日とされる。これでは血を忌む日といつても偽りぢや、われ等が命をとるいふからには、の意。○馬の尾がみ―馬のたてがみのこと。

【譯】 茂兵衛はやうやく顔をあげて「これは愚かなおさん様よ、火の中に入り水の中に飛込むことがあつても、それは皆定まる因縁事とあきらめて、せめて未來の苦勞をのがれ、彼岸の淨土に到らうと念じ、南無阿彌陀佛／＼と唱へられよ。そして共に佛の救の誓の船に乗ることはよいことである。紅蓮地獄の井戸ほりや、焦熱地獄の釜ぬりはいはれないことである」といひながら、急がぬ路とはいへ、いつの間にか、我身は死出の山を越えつゝ、杜鵑の鳴く頃、田を刈るはよからうと思ひ、心に野邊から先を見れば、地獄なる針の山剣の山を見、眼のあたりの野邊を見渡すと、去年の冬至の日に冬枯になった木の間に、ちら／＼と抜き身の槍の見えるのは恐ろしいことである。茂兵衛は「あれでそなたの身を突くのかなあ。」おさん「これでお前を殺すのかなあ」「して見ると、生き物の命をとり血を流すに悪い日として、忌み嫌はれる日といふのも偽ぢやなあ」といつて、二人は顔を合せ合つて、くどきながら、互に焦れて泣く涙に、馬のたてがみも濡れることであらう。

またさへ返る夕嵐、雪の松原此世から、かゝる苦艱に往亡日、島田亂れてはらく／＼、顔にはいつの半夏生、しばらくし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞゆびの爪取よし、袖に氷をむすびけり。つく／＼物を案ずるに、茂「我は劍の金性の、刃にかゝる約束か」さん「わしは土性墓の土、何とて墓に埋まれば、茂「ついに木性の木の空に」さん「骸を曝し、名をさらし」なんと小唄につくられて、強さ

處刑にあはだぐち。蹴上の水に名を流す、おさん茂兵衛が新精靈、恥かしながら手向草、おなじ罪科の下女が名の、玉は冥途に通へ共、魂魄此世にとゞまつて、共に浮名は下す共、冥途は主従一所にて娑婆て手馴し玉がわざ、無間の釜で茶を沸し、ゆきゝの人の回向請、我身の悟ひらく日。

【註】 ○さへ返る夕嵐―さへ返るはさむくあるにて、晴れるのではなく寒い意。月冴えるなどは寒く見える形容である。だから寒い夕嵐が吹いての意。○雪の松原―松原には雪が降つて。○往亡日―旅行や婚禮など、物事を出すに悪いとされる日、往の音に逢ふとかけたのだ。○いつの半夏生―いつしたのか分らず、化粧がはげて、半化粧の體になつた意にかく。半夏生といふのは夏至から十一日目に、大陽曆で七月二日の頃。此頃農家では田植を終る。○我身一つの寒の入―縛られた手の冷たいので、我身一人だけに對して寒の入の日が来たやうに思はれる。○涙ぞ指の爪取よし―爪取よしとは、又曆にかいてあつた日に、涙指に傳はり爪を經て袖をうるほすの意にかけた。○氷をむすび―涙が流れて袖をぬらし、それが氷つた。○何とて墓に―…あたり前に墓の中にうづめられずして、何とて木にかけられるのだ。即ち土性にして木性にかはるといつたのだ。○木の空に―高く木の上にかけて刑に處せられるをいふ。○おはた口―近江の栗田口の刑場に逢ふをかく。○蹴上の水…逢坂山にある名水。栗田口の附近にあり、事實は二人がそこで磔刑に處せられたから、その附近の水に流すといつたのだ。○恥しながら手向草―二人の新精靈に對して手向草として…と、先の茶をわかすに引かゝる。恥しながら同じ罪科の下女にかゝる。○下女が名の玉は―玉は魂にかく。○魂魄―魂は天に通じ、魄は地に歸すとされてゐる。故に魂は冥土に通ひ、魄は此世に残るといつたのだ。魄の上には魂の字を残したのは勢だ。○玉がわざ―茶をわかすことなど、玉は下女として手に馴れてゐた故いふ。○無間の釜―苦痛の止む間なきといふ無間地獄の釜。○回向―こゝは念佛をとまへ冥福を祈ることに用ふ。○開く日―曆のひらくといふ日と、悟を開くとをかく。半吉の日にて門をたて、井を掘り、種蒔、家造り、婚禮、元服等さはりなく、葬禮等不祥の事には悪しとさる。

【譯】 またひどく寒い夕嵐が吹いて、松原には雪がふる。此からかゝる苦患に遇ひ、島田亂れてはらく／＼となり、顔には何日の日にしたかわからぬ化粧が半ばのこり、縛られた手の冷たいので、我身のみ一つが寒の入りに出

遇つたが如く、涙は指を傳はり爪から袖に傳はり、袖に結氷したのである。つく／＼と物を考へて見ると、茂兵衛は「吾は劍と同じく金性であるからには、いづれ刃にかゝつて死ぬるのが前世の約束であるか」おさんは「私は土性、墓の土も同じであるからには、何として墓の中に埋められないで」「木性であるが如くに、遂には木の上にて磔にされて」「屍をさらし、名をさらしする」などと、小唄にまで作られて、栗田口にて、きつい處刑に出遇ふことであらう。そして蹴上の名水に名を流すおさんと茂兵衛の新精靈に對して手向けるべく、恥しながら、同じ罪とがに問はれる玉といふ名の下女は、魂は冥土に通ひながら魄の方は此世にとどまつて、共々に憂い名は流しても、冥途では主従一緒になり、女中として手馴れたわざによりて、絶えぬ苦の無間地獄で、無間の釜にて、二人の新精靈に手向の茶をわかし、往き來の人から回向を受けて、我身の悟を開くのであらう。

ア、歎くまじ今更に、何くよ／＼と凶會日の、悔むもよしな引よせて、むすべは露の命にて、とくればもとの道芝に、やがていのこや五里六里、十しも過ぎて是ぞ此、小川通は三途の川、籠の町さへ近づけば見物群集とり／＼の、曆が噂くりかへす、思へばわしが嫁取よし、我が昔の元服よしの、日どりもよしや蘆に驚、裾の模様も繪にうつし、筆につらねて末の世に、かたりつゞけて、三重聞及ぶ道順夫婦群集の中をもしわけ／＼、「おさせる罪が重ければ、又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも、此翁媪を代りにたて、二人を助け下され。やれおさんかわいや」と、すがりつけば警固の者、「寄つたら打つ」と追はらふ。

【註】○凶會日―悔ひにかく。一切のものに用ひて悪いとされてゐる日。○よしな―悔んでも仕方のないこと。○引よせて……

引よせて結べば柴の庵にて、とくればもとの野原なりけりの歌からとつたのだ。人間の命は結ばれれると、露の如き短いものもなるが、其結ばれが解けると、また元の、道に生へた芝草の中へいんてしまふ。○いのこや―行こやにかく。いのこは即ち玄猪にて、十月の亥の日をぬのこといつて、昔から餅をついて祝つた。○五里六里―京都までの引まはしの距離だらう。○十死―黒日について悪い日に、十のもの十まで死すとされてゐる日に、何事にも用ふべからずとされてゐる。五、六につゞけて、十と出ただけで他に意味はない。○小川通―上加茂の西、堀川から二筋束の筋にて、南北の通り。○三途川―冥土にある川にて、栗田口に近づく途中にある、此小川通を三途川と思ふのである。○籠の町―小川町通り二條下つた所を古城町といひ、その次をろうの町とも下古城町ともいふ。此邊昔牢のあつた所。○曆が噂―曆の訓を此身につけて、此身の噂に通じた。○わしが嫁取よし―わしは以春のことで、其昔以春が嫁取よしの日をゑらびて嫁をもらつた意。○元服―元服とは普通に男子成人して服を改め、髪をなほし、冠を加へた儀式をいつたのであるが、また嫁した女が、眉を剃り、齒をそめ、髪を丸鬘などに改めることをいつた。「元服姿の女」といふ語あり。○蘆に驚―此模様は巻頭の圖を参照すべし。三度も繰返されてゐるからには引廻されてゐる時人の目に立つたものであらう。上の句のよしやといつたからあしとつけた。○纏にうつし筆に……此模様を繪にかいたりして後世に傳へられて聞かされてゐる。○慈悲とふ名が重し―罪が重いと、それを許すことになれば、自ら慈悲も深く名も重大なる、その重大な慈悲にての意。

【譯】あゝこの悟を開くべき日に、歎きもすまい。今更何をく／＼と悔ひ、悔んだとて、役にもたぬことで、引よせて結ぶと露の命となり、解けると昔の道の邊の芝草となる、その芝草路を、行くこと五六里もすると、これは小川通りである。此通りはいはゞ三途の川で、牢の町さへ近くなつて來る。即ち見物群集は、とり／＼に此身の噂を繰返してゐる。思ふて見ると、わたしにとつて嫁いだ日はよかつたとか、昔の元服の日取がよかつたとか悪かつたとかいつて、芦に驚の裾模様も、繪にうつしとつたり筆にて書いたりして、後の世まで云ひ傳へ語り傳へて、今も之を聞いてゐるのである。道順夫婦は群集の中をもし分けながら進み出で、「娘の犯した罪が重いから、お許し下さらばまたお慈悲の深さも深く名も重大なことであるが、磔にしても獄門にしても、どちらでも私達老人を代りにして處刑し、若い二人をお助け下されい。やれ、おさん可愛や」といつてすがりつくと、警固をする人々は「寄

りでもすると打つぞ」といつて遂拂ふのである。

黒谷の東岸和尚、衣の袖を捲り上げ、韋駄天の如く飛來り、「出家に棒をあてたらば、五ぎやくどい
く。サアおさん茂兵衛、此東岸和尚が助けた」と、持つたる衣を打かけく、臂をはつて立給ふ。
役人頭腹を立て、「罪科極つたる囚人を助くるとは、上を輕しめたる御坊の仕方、叶はぬく。それ衣
引剝げ」と、どつとよれば、和尚「ア、是々、出家侍さとりは同然。助くるといふ義理は、三世に渡
る衣の徳、愚僧が念願相叶ひ、二人が命下さるれば、是現世を助かる衣の徳。もし又罪に沈んでも、
愚僧が弟子になすからには、未來を助かる衣の徳、未來でも現世でも、救るといふ文字二つはなし。
サアたすけた」とよばはる聲、諸人わつと感ずる聲、道順夫婦の悦びの、聲は盡せず萬年曆、むかし
こよみ新曆、當年末の初曆、めでたくひらきはじめける。

【註】 ○黒谷……菩提寺として前に出てゐた。此和尚が出て來て救ふ所、如何にも不思議であり、劇としての力は弱くとも、作者
はこれにて大なる理想を述べてるのだらうと思ふ。之については別冊「研究」を参照されたい。○韋駄天―佛法守護の神にて、武裝
して劍をもつてゐる。魔王が佛舍利を奪うて走るを、追かけてとつたといふことから、速く走ることにとへる。○五逆罪―害
父、害母、害羅漢、破和合僧、出佛身血。○持つたる衣―衣を打ちかけて、うまくそれが罪人の體にかぶさると罪の許される習
があつた。○さとりは同然―出家も侍も悟りを開けば同様。○三世……過去、現在、未來の三世を通じての功德をなすものでの
意。○萬年曆―いつまでも續く意に萬年曆をかけ曆をならべたに過ぎぬ。○昔曆新曆―昔の曆といふは、貞享元年に用ひた貞享
曆のこと、其後に用ひかへた支那の宣明曆を新曆といふのだ。別に意味はなく、只曆の名をならべたのだ。○當年末の新曆―これ

は正徳五年の未の年であらう。即ち此作が此年の作であり、此年がその初興行であることを、初曆の發行にかけたもので、外題年
鑑記載の如く、これを寶永三年(戌年)初興行とするはをかし、さりとて此前の未年元祿十六年を初興行年と見るはなほをかし
らうとは、此未の字から近頃唱へられてゐる説である。○めでたく開き初め―曆の開き始めに、此作の上演初めをかけた意だ。

【譯】 黒谷の東岸和尚は、此時衣の袖をまくり上げて、韋駄天の如くに此處へ飛んで來て「出家に對して棒でもあ
てたら、五逆の罪になる。そのやうなことをせずと此出家におさん茂兵衛を助けさせられよ。さあ此二人は和尚が
助けた」といつて、もつてゐる衣を罪人の頭を目かけて投つけて、臂をはつて立つた。役人頭の男は怒つて、「罪の
きまつた囚人を助けるとは、如何にもお上の掟を輕んずるやり方である。そのやうなことはならぬく。今着せか
けた衣を引剝がれい」といつて、どつと近よると、和尚は「あ、これく、出家も侍もさとれば、同じことである。
凡て助けるといふ義理は、過去現在未來の三世に及ぶ功德を生ずるもので、若し愚僧の願が叶つて、二人の命を下
さることゝなれば、これは現世を助かることの出来る衣の功德と申すもの。もし又罪になつても愚僧の弟子にする
からには、未來を助かることは請合だが、それも衣の功德である。未來でも現世でも助かるといふ文字は一つしか
ない、さあ助けた」と呼ぶ聲に、人々は感じ入り、道順夫婦の悦の聲は盡きずしていつまでもつゞき、その物語を
此年未年の初曆をめめでたく開くと同時に、今開き始めたのである。

嘉平次
おさが

生
玉
心
中

嘉平次
おさが

生玉心中

解説

此作は正徳五年五月五日の出来事を、同年八月一日から上演したものである。

茶碗屋五兵衛の忤嘉平次は、許婚のおきはを厭つて、元は天満扇風呂の湯女として盛え、今は伏見坂町の柏屋に抱へられてゐる女郎おさがと深く契り、悪友長作の爲に金で苦められてゐる折柄、又親からはおきはとの結婚を強制されて、端午の夜生玉社内にて二人は心中するのである。

それにしてもおさが嘉平次が何故に心中しなければならぬかは、其理由が極めて薄弱で、現代人の容易に理解し難いところであつて、此等は作者の理想の立場から見始めて説明出来ることであらうと思ふ。此については別冊の研究の部にゆづることとして、一體で、此作は文學上から見では餘りに慥れたものではないけれども、作者の忠孝観とか、藝術観とか、時代と環境の點とか、町人観とか、その他文化史の色々な點から見、特に近松研究上見のがせない種々の資料に富んでゐる作であることを附加しておきたい。

なほ此作の結構は曾根崎心中と殆んど同巧異曲といつてもよく、敵役長作の如きは、曾根崎心中の九平次と同一

のタイプで、而もそれが殆んど同様に扱はれてゐる。又二枚繪草紙にて、市郎右衛門が神酒徳利から酒と思つて一歩銀をつぎ出す趣向は、もつと巧妙に此作に應用され、父親五兵衛は倅の嘉平次を思ふの餘りに、酒の代りに一歩銀を大皿につぎ出して説法し、親としての情愛を面白く見せてゐるのである。

嘉平次
おさが

生玉心中

上卷

次第今に傳へて老松のく、かはらぬ色を頼まん、其松が枝の宮柱、今に榮へて數萬人、心々の願立に、神のお身さへア、いそもじの、まして流れの憂節や。日毎に替る身の勤め。今日も苦海の神詣で道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や。社の周り浮れ出、見渡せば數々の、花屋植木屋立並び、色賣るく花の色賣、我も色賣る身は仇花の、花に價の高下があれば、勤の品もだんくの、品々有るもことばりや。花と色とはもと一つ、されば身を賣る金の名を、花代とこそ名付けられ。

【註】 ○今に傳へて……此卷の場面が天神の場であるが爲に、調子を高めて、いかめしげに謡がよりて云ひ出したのである。○その松が枝……その千年も色をかへぬ老松と同じ松でつくつた宮の柱といつたが、實は宮をさして居るのだ。○數萬人―幾萬人となくの意。○心々の願立―幾萬人となき人が願立をするので、神の身はいそがしいが。○いそもじ―いそは、いそがしい、もじは恥かしいことをおはもじなどいふと等しい女の詞、○流れの憂節―憂きは浮きにかく、浮き川竹に身をゆだねたことをさす。○苦海―遊女の境涯をさす。○駕籠も一里―道頓堀から天満宮まで約一里の道を駕籠で飛ぶが如くゆく意を、飛梅にかく。飛梅は例の菅公のあとをしたつた飛梅のこと。○花屋植木屋―當時天神の附近に澤山あつたと。それが花を賣つたのである。

【譯】今までも傳はつて、變化せぬ色を頼まう。その變らぬ色の松を柱とした宮は、今も榮えて、數萬人の人々が各其心の向ふ所に従つて願立てをなすので、神のお身ながら忙がしいことである。夫にまして忙がしいのは浮き川竹の流れの身で、相手は日毎に變る勤である。今日も苦海にありて神詣をなし、道頓堀から天神の方へ一里の間駕籠を飛ばして、飛梅をまねたのである。そして社の周圍に浮れ出て見ると、澤山の植木屋や花屋が並んでゐて、それが色を賣り色々の花を賣つてゐるのである。我も亦花の色を賣る身であるが、その身は實は仇花であつて、まことの實を結ぶことなき身である。ところが花の値段に高下があるごとく、勤の身の遊女にもまことに品々があり、段々があるのである。ところで花といひ色といつても、もと／＼同じ一つのものであるから、身を賣り色を賣る金のことを花代と云つてゐるのである。

先鉢植の作り松、すんと流しの一枝は、太夫の威勢備はりて、悋氣の嵐手管の雨、無理な口説の霜雪も、騒がず痛まず彌増しに、情の縁はびこりて、松の位とたとへられしも憎からず。冷泉春立行けば色失せて、さびしき梅も捨られず。是天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、仇な袂に香を留めて、歌さんさ思ひの種かひの。根から嫌なら添ふ氣じやないに、だまされて憎や辛やをさかさまに、客に泣せてきぬくの、別れあやなき菖蒲草、局女郎に擬らへて、牡丹鳥の名盡しに、大臣も目を遣手の玉が、忍ぶ戀路をせきだいの、女蘭夫蘭は呂州の姿、白と眺めて白牡丹、しやんとしてからいやみなく、しかも色香の深見草。

【註】〇すんと―すつきりした。〇流し―生花の法にて、天地人になぞらへて本手、留、流しの形あり。天地の間にある枝が流

しにて、人にあたる。そのすつきりした姿が太夫だといふのだ。〇太夫―松のことを太夫といひ、又遊女の最高階級を太夫ともいふ。此處は兩方にかけた。即ちすんと流しの姿は松の位の太夫の威勢をそなへ、その太夫は。〇悋氣の嵐―太夫の遊女は他人から悋氣を受け、手管の雨、口舌の霜も受けるが……。〇情の縁―松の縁のぶごとく、一層情をひろげて。〇松の位―鉢植の松からひいて、最高階級の女郎を太夫といふから、松の位といつた。秦の始皇が松を奉じて太夫に列した故事にもとづく。此から後は暫く植木屋を見てゐる間に、心もちを述べたのである。所謂木づくしの處である。〇冷泉―冷泉節にて此處を唄ふ意の節附のしるし。〇天職の姿―梅は松に對しての女郎の第二階級の別名で、又天神とも天職といふ。〇一夜流れ―一夜ごとにそれからそれと流れゆく梅即ち遊女。〇仇な譯―あだなは空な、眞ならぬ意。〇香を留めて―一夜流れの女郎の、婀娜な袂に香を留めおいて、斯う解するが普通だが、若しとめてを求めて、戀を求めてと解することが出来るとすると、もつとよく分るやうに思ふが、それは無理な事か、参考に記す。〇さんさ―拍子詞。〇思の種―一夜の香を留めて、それが思ひの種となる。〇添ふ氣じやないに―根本からいやだつたら一夜でも添ふ氣ではないが、いやでないから女が男に添ふて。〇だまされて……女の方では思ひ込んてしまつたに、男が來ずして、だまされると憎く辛く思ふのに、男の方ではまた逆さまにさうではないといつて、事情をいつて後朝の別れでは泣き別れをするのである。〇きぬくの別れ―相逢ふた後の朝の別れ。〇あやなき―曲もない。趣きもない。あやまない。〇菖蒲草―あやなきにつけた文飾に過ぎぬ。〇局女郎―太夫、天神、鹿戀の次に位する遊女を端女郎といふ。端女郎は、みせ女郎ともいふ。その一種に局女郎あり。茶屋などへゆかず其局ですますからいふ。〇牡丹畑の名盡しに―牡丹畑に澤山の牡丹の名があつてあるのに對しての意。〇大臣も……大臣は大盡にて、廓ではでな遊びをするもの。それが牡丹畑の牡丹を見て、密かに戀心を起して、その方に目をやると、遣手女のお玉が、その戀をせき邪魔をするをいふ。牡丹の澤山あるのは澤山の遊女にかけていつたのだ。〇石臺―せきにかく。植木の臺ではなく、鉢植の中に石の取合せがあつて蘭などの植えこんであるのを石たといふ。樋口氏新説。石がとり合せてあるから、大變涼しさうにも見えて、それが呂州の姿とも見えるのだ。〇女蘭夫蘭―男女の蘭、夫蘭は建蘭といふのがある。〇呂州―風呂の、呂に州といふ接尾をつけたもので、風呂場の湯女の意。石のとり合せをして、鉢に植えた女蘭夫蘭は清楚な呂州の姿に似てるといふのだ。〇白―白人、無藝の遊女をいふ。風呂屋の湯女を呂州とも又白州ともいひ、もと素人で淫を賣つたのだが、後には黒人となつたので、此白州の語は京都から起つたらしいと高野博士は説く。白牡丹は白人に似て、しやんとしていやみなく、色香が深いと見るのだ。〇深見草―牡丹の異名、白牡丹は色香の深みがあると

いふのだ。

【譯】先づ鉢植の作り松の、すつきりと流した一枝の姿は正に太夫の姿である。此松に比ぶべき遊女の太夫には、太夫の威勢がちやんと備はつて、愔氣の嵐が吹き手管の雨がふり、霜雪の如き無理な口舌にあつても、少しも騒ぐことなく、痛を感じることもなく、いよ／＼情の縁をはびこらしてゆくのである。かゝる遊女が松の位にたとへられ太夫と呼ばれるのも憎からぬことである。

更に春立去れば、色を失ふて淋しげなる姿となる梅も捨てたものではない。蓋しこれ遊女の天神の姿にたとふべきもので、この一夜／＼にそれからそれと流れゆく、軒端の梅に比すべき遊女天神のあだつほい袂に、床しい香を留めておくも、さて思ひの種ではある。もと／＼女の方で、天でいやであるなら相添ふ氣はないが、いやでないから添ふたのである。ところが、角添うて見ると、男が來ぬので、だまされたやうな氣がして憎や辛やと思つてゐると、逆に客の方では、だましたのではないといつて、泣いて、あやのない後朝の別れをするのである。局女郎にも比ぶべき牡丹畑には色々の名を盡して、牡丹があるのであるが、それに大盡も目をやれば、遣手のお玉が忍び戀ふ戀をせかうとし、石臺の女蘭や夫蘭はまた清楚な湯女の姿に似てゐるものである。白牡丹は素人の如く、しやんとしていやみなく、しかも色香が深いのである。

歌思ひされとは死ねとの事か。江戸生きて添はれぬ浮世なら、いつそ烟に成りたやな。辛氣燃して待宵に、似たりや似たり桂仙花、暫し休らふ木影を宿の、枝は木こく我身はちやく、うるさき里の勤めどと、誰かは黄楊や柏檜や、縦南天に、小手毬に、いとし男と射干の、扇の形に末廣の、逢瀬を祈る神垣に、拍手ならぬ柏屋の、我名も嵯峨の若楓、戀草千草思ひ草、眺めらるゝもながむるも、をな

じ色なる袂百合、扇かざして神々詣で、安居生玉清水坂を、しやなら／＼／＼ちよこ／＼走りしやんとして見よや。

【註】○江戸―此處を歌ふ節の指定。○辛氣燃して―辛氣はじれつたさ、思ひ焦れること、即ち桂仙花は思ひをこがし、いら／＼して待つ宵の傾城に似てるといつたのだ。○桂仙花―紫色の花を開く翁草のこと。けいせいにかく。○木榭―ゆづり葉の小さいやうな葉をした木、この木蔭を宿として暫しやすらふといひ、ちやくの引合ひに出したのだ。○ちやく―茶園、呂州など、同じく遊女の一種。○黄楊―誰かは告げんにかく。○柏檜―葉は柏に似、木皮は杉及檜に似る二丈位の樹。○小手毬―葉は山吹に似、花は手まりに似て小さく白し。此邊道ばたの植木店を見てあるく風にして皆植物の名をあげたのだ。その他に何の意味もない。○射干―草の名にて、逢ふにかく。○末廣―末廣は扇の形から扇のことを云ひ、末が廣がる意から、末長くの意に通ぜしめたのだ。○神垣―神社をめぐらす垣の意から轉じて、神社の意をさす。○我名も…前の、思ひ切れとは…から女主人公、さかの身の上のことを述べたのである。さがといふ若い女といふ意を若楓とかけたのだ。○戀草千草思ひ草―戀をする頃の女であり、思ひになやむ年頃だといふことから、色々の草の名詞にかけたのだ。戀草は戀ひ心のもえるのを、草の茂つてゐるにたとへていつたので、思ひ草は煙草の異名。○ながめらるゝも…人から見られるのも、こちから見るのも、同じ、即ち見られる人も、見る人も、夏なるが故同じ色の、袂百合のやうな白い色の着物を着てる意。○袂百合―もと琉球の深山谿谷に産する白色のもので、繩によりて谷に下り、袂に入れてやつと手に入れ得るといふから此名がある。○しやなら／＼―美人のたをやかに歩む形容。○見よや―見好いかなの意。

【譯】私を思ひ切れとは、私に死ねといふことか。どうせ生きてゐる夫婦として暮すことが出来ぬのならば、いつそのこと死んで焼かれて烟になりたいことぢや。本に傾城の身が、いら／＼と戀ひこがれて戀人をまつ宵に、桂仙花は似たことである。又木蔭を宿として、暫し休むのは木榭の枝の下であるが、我身はちやくである。その我身をうるさい里の勤の身であると誰が告げることであらう。いとしい男と出遇つて、扇の形に末廣く、いつまでも出遇

へるやうにと祈る神に、拍手を打つのでなくて、柏屋の我はさがといふ若い女である、臺の上には更に戀草や思ひ草や千草があつて、また見る人も見らるゝも、同じ袂百合のやうな白い着物を着、扇をかざして、神々に詣り、安居生玉清水坂などをしやならゝ、ちよこゝと走りつて行く女の姿は、しやんとして見好いことである。

歌「柏屋さがははすはに御座る。戀の意地酒ヤトン、手もとでかゝる押へてかゝる。どうでもさがは濡者じや。油壺から出すよな女房、しんとろとろりと見とれる女房。拗る男をぼつかけて、そこらゝをずんづと飲しやるゝ。サアエイトン、エイトン、エイトン、しんぞ一夜はお手枕、日影色どる五月棚、草の異名は様々に、よむ共よしや葭簾、西の茶屋から我を呼ぶ。忙しないとて見残して、見捨る花や三重恨むらん。

【註】 ○柏屋さがは……落葉集五の槍野權三の作りかへで、「重帷子」にはその原文が用ひてある。○はすは―蓮葉、京阪地方で旅店の下女の意の方言といふが、こゝは浮氣者の意。○手もとでかゝる―自分の手許で始末する意。○押へてかゝる―押へて自分で酒を飲む意。○濡者―戀する女、色事師。あだもの。○油壺から……つるゝとして美しい意。○しんとろとろり―油の縁で引いた語で、うつとりとなる形容。○ぼつかけて―退かして。○そこらを……すねて逃げやうとする男を追かけていつて、そこをうまくとりなして、ずんづと酒をのませる。○しんぞ―神ぞで、眞にの意。○一夜はお手枕―お手枕をさせてやすませる意。○日蔭色どる―五月即ちつゝじが、色々の色で、蔭の方に咲いて美しく見える。○五月棚―さつき、即ちつゝじをならべた棚。○よむとも……讀んでもよい、葭簾のかゝつた西の茶屋から、我を呼ぶので。○忙しない―せわしい。

【譯】 柏屋のおさは浮氣者ぢや。戀の意地酒を、自分の手許に引受け、自分に飲んでしまふ。どうでもおさは艶つぽい女ぢや。油壺から出すやうな艶々しい美しい女ぢや。とろりと見とれる程の女ぢや。すねる男を追かけて行つて、そこをすんゝと酒を飲ませる。そして誓つて一夜はお手枕で寝せてしまふのだ。日蔭を彩どつて美しく咲いたつゝじもあり、草などの異名は様々あり、それを色々に讀むとしてもよく、葭簾のかゝつた西の方の茶屋から我名を呼ぶものがあるので、忙しいからとて、それを見残して見捨てるのであるが、花の方では恨めしいと思ふことであらう。

色の勤の憂節の、峠を越て伏見坂、戀のないにも習とて、あたら肌を柏屋の、さがは大和の一言客が今日は天満の社内の茶屋で、酒と出かけて遊ばんと、一昨日からの揚續け、空も雨氣の駕籠の外樋、賣木の花に氣を晴し、清水屋にこそ入りにけれ。

【註】 ○憂き節の……辛い峠を。○伏見坂―伏見坂町とも、又單に坂町ともいひ、道頓堀の立慶町通りの芝居の裏手にて、柏屋のある所、もと玉造にあつたのが元祿十六年引移つて、今の坂町になつたと。○戀のないにも……戀心がなくても、習慣として。即ち遊女は戀する人ならずとも肌を貸す意。○柏屋―肌を貸すにたく。○一言客―一見客にて、始めて見る客。○外樋―桐油合羽。昨日からの揚け續けなので、空には雨氣があるのを、駕籠に合羽をかけて、……○賣木の花―植木などを見て氣を晴して、さがはゆるりとして清水屋にいつた。

【譯】 色勤め即ち廓生活の憂い辛いことの多い峠を越えて、伏見坂の廓に身を沈めてゐる遊女なれば、戀心の無き身ながら、習としてあたら大事の肌をかす柏屋のさがは、大和の國の初曾の客が、今日は天満の天神境内の茶屋で酒を呑んで遊ばうといつて、一昨日から揚け續けてゐるのである。即ち空も雨氣があるので駕籠には桐油合羽をかけて、さがは植木屋の賣物の花を見て氣を晴らしてから、茶屋清水屋に入つたのである。

茶屋には待かね、主人「エイさが様、駕籠の衆何として遅かつた。お客様は待焦れ、たつた一人飲でじ

や。いざ先あれへ」といひければ、さが「さればいの、こつい客の癖に、揚の日は半時も側に置ねば、損の様に吸付て居たそうなの。それで勤が續く物か。是駕籠の衆頼みます、私は雨氣で頭痛がして、休んでゐると間に合せ、盃の相手になつて、日比の手並にいきつかして下んせ」籠昇「どつこい氣遣なされますな。任せておけてもたらひでも飲付けてやりませう。是おか様精出して豆腐焼つしやれ、鰻も四五本焼つしやれ、冷飯も焼つしやれ」と、からげおろして入りにけり。

【註】○こつい―強いとか、無骨とか、無作法とか、頑固とかいつたやうな意。○揚の日―自分で金を拂つて、遊んでる日。○居たそうな―をりたいたやうな様子。○いきつかして―日頃の手なみで客の相手をして、私に息をさせてくれ。○おけても……置けと桶をかく。○飲つけて―桶でも飲んでやりませうといつてしやれたのだ。つけはたつきつける、受けるなどのつけ。○おか様―主婦をさす。○冷飯……調子に乗つて作者一流の云ひ方をしたのだ。冷飯もぬくめよの意。○からげ―尻からげ、着物をからげあげてゐたのを下ろすのだ。

【譯】茶屋清水屋では待かねてゐたので、主人は之を見るなり「えい、さが様いらつしやい。駕籠の衆どうして遅かつたのぢや。お客様は先から待焦れ、たゞ一人で飲んでゐなされる。さあ、先づあれへ」といへば、さがは「さればさ、無骨者の癖に、自分で揚げてゐる日は、半時でも側に引つけておかぬと損であるやうに考へて、吸つてゐたさうに見える。それで勤めの身のこちらが續くものか。これ駕籠の衆よ、頼みます。私は雨氣のせいで頭痛がして休んでゐるからといつて、間に合せに、盃の相手をして、日頃の手並で、うまくやらかして私に息をつかせて下んせ。」駕籠屋は「どつこい心配なされますな。任せておかせられい、桶でもたらひでも飲んでやりませう。これおかみ様、豆腐を焼いて下され、うなぎも四五本おやきなされ、冷飯もぬくめさつしやれ」といつて、からげた着物を下ろして入つた。

さがは主人の側に寄り、「さつきにいふておこした蜷川の、嵐の芝居へ便宜して下んしたか。様子はどふで御座んすぞ」主人「何の如才いたしましよ。お前からの書付を其儘持つてやりました。心中の狂言の口上の處、直に觸て貰ふた、と使はとうに戻つたが、もうお出なさるゝ筈。定めし狂言に見とれて、それがな遅いか」と、いひつゝ、炙る豆腐より、さがが心や焦るらん。

【註】○嵐の芝居―嵐三右衛門一座のことで、其處へ男主人公嘉平次が見に行つてゐたのである。○便宜―たより、即ち此處では呼びにやつたのだ。○如才―ぬかり、へまなどの意。○心中の狂言―丁度近松の曾根崎心中をやらんとして、今から口上を述べる所だつたので、直ぐ云ひふれて貰つた。

【譯】さがは主人の側に寄つて「先程こちらへいつてよこした、蜷川の嵐の芝居へ、嘉平次殿を呼びにやるたよりをやつて下されたか、様子は如何です」主人「何のぬかりがあります。お前さんの書付けをその儘もたしてやりました處、丁度心中狂言の口上を述べてる處だつたので、直ぐに見物にふれて貰つたといつて、使の者はとくに歸つたが、もうおいでになる筈です。大方狂言に見とれて、それでも遅いのかと思ひます」といひながら、炙つてゐる豆腐よりも、さがの心はもつと思ひこがれてゐたらう。

假初の薄茶茶碗も馴染ては、濃茶茶碗屋嘉平次は、さがが情の錦手に、染付られて親兄弟の、異見も耳に蓋茶碗、深編笠も隠れなく、さがは見付て、「是こゝじやこゝじや」と招けばちよこゝ走り、床几に腰を打かけて、側へ寄たい抱付たい。云ひたい事のわくせきも、主人が見る目憚かりて、他人向なる折からに、奥より客何ぞお肴銚子替やや」と手をたたく。花草「あゝ」と引のがお定り。蒲鉾梅干

粹な花車、氣を通して立ちければ、さが「のふ二日逢はぬはどうじやいの」と、顔差入るる編笠の下こそ戀の宿りなれ。

【註】○假初の薄茶々碗……かりそめに用いた薄い戀も、だん／＼なじみを重ねると濃くなる意をかけて、嘉平次が茶碗屋であるからいつたのだ。○錦手―五色の繪の模様ある磁器をいふ。即ち、さがのいろ／＼と情をこめた手管で戀心を深められた意にて、嘉平次の家業からいろ／＼と引いたのだ。○染付―青い繪の磁器。錦手は此上に更に繪をかくのだ。○蓋茶碗―耳に蓋をしてゐるからきこぬ意。○深編笠―その頃花柳の巷に忍ぶものは皆之をかぶつた。○わくせき―結ばれ。○蒲鉾―梅干と重ねる理由は別になく、蒲鉾の御馳走でも出したといふやうなことで用ひたのだ。○梅干―蒲鉾とぼの同韻で出したのだが、梅干婆、即ち老女の意も含む。○粹な―酸いにかけたので、萬事に氣のきくをいふ。○花車―茶屋などの女房をいふ。

【譯】かりそめの薄い交りも、馴染を重ねると、濃茶となつた茶碗屋の嘉平次は、さがの情愛の深い手管の色に染められてしまつて、親兄弟の異見も耳に蓋をして入らず、深編笠をかぶつて忍んで来る。その編笠をさがは隠れなく見付けて「これ此處ぢや／＼」と招くと、嘉平次はちよ／＼走つて床几に腰をかけて、側へ寄りたく、抱きつきたく、云ひたいことの結ばれもありながら、女主人の見る目を憚りて、他人らしい向き方をしてゐる折しも、客が奥から手をたゝいて、「何かお肴をもつて来て、銚子をかへよ」といふ。女主人は即ち「あい」とお定りの如く聲を引つばる。蒲鉾料理を出した梅干婆さんの、年寄つて粹な花車は氣をきかして立つと、さがは「二日逢はぬのはどうしたとぞ」といつて、編笠の下に顔を差入れるが、その編笠の下こそは、正に戀の宿りである。

嘉平次もなつかしさ、「此中は田舎客で平野屋にじやと聞いたゆへ、往か戻りに顔見よと、濱側を用有りげに往つ、戻つ、入りもせぬ和中散買ふたり、心太屋の水機關もそう／＼は見えていられず、うろ／＼すれば長町側の子供が見知つて、「ありや／＼東の難波焼が坂町通ひ、柏屋通れば二階からち

よいと招く。のつ是何としよ」と、悪口いへばあたりからはさよろ／＼見る。親の内へは往かれぬ首尾、出見世にも尻すはらず。いつその事遠かけに、蜷川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の徳兵衛と我等が思ひ引合せ、憂を晴す合點で、其通一筆書いて小弁を頼んで置いて来た。其文見てか。今日こゝへおじやつたは天神様の御利生。神も佛も馴染がほん。親仁の見世の焼物に一文づつでも天神様、お馴染ゆへじや」といひければ、

【註】○濱側―大坂では川岸をいふ。○和中散―當時の有名な賣藥、「丹波與作」に出づ。○水機關―心太を入れてゐる器に水を注ぐための色々のしかけをいふ。○難波焼―延寶の初、大坂高津附近にて、京都黒谷の土を用ひて始めて難波焼をやくと。つまり嘉平次が茶碗屋なる故いつたのだ。○坂町通ひ―伏見坂町通ひのこと、遊女町に通へばの意。前の伏見町の項を見よ。○柏屋通れば―松の落葉、七、吉田小女郎の「吉田通れば二階からちよいと招く、しかも鹿の子のずんど振袖がなへ君ちよいとしよ」をつくりかへたものだ。○遠がけに―遠出をして。がけは駈。○蜷川の芝居―當時蜷川の地に二つの劇場があつた。○曾根崎狂言―近松作の曾根崎心中にて、徳兵衛がその中の主人公である。此心中狂言を見て徳兵衛の境遇に我等が思ひを引合せて鑑賞するのである。まるで同趣向の作だから、わざとかういつたのだ。○小辨―さがの妹女郎の名。○御利生―御利益。○なじみがほん―馴染のあるのがほん／＼にたのしいものぢや。○一文づつでも天神様―店の焼物に、一文賣の天神がある、それは玩弄物であるが、その一文づつでも天神様にでも、馴染んでゐるから、この御利益があるのだの意。此天神は夕霧阿波鳴渡にも出て来る。

【譯】嘉平次もなつかしさに「此間は田舎客にあげられて平野屋に行つてるときいたから、往きか、歸りの時に、顔でも見ようと思つて、何か用事でもありげに、川岸を行きつもどりつしつ、入りもせぬ和中散を買つたり、心太屋の水機關を見たりしてゐたが、それもさう／＼は見えてゐられず、うろ／＼すれば長町側の子供達が見て知り、「あれ／＼、東の茶碗屋が坂町通をしてゐる。柏屋の所を通ると、二階から一寸まねく、なこれ何としよ」と歌の

調子で悪口をいふと、近所の人達はきよ／＼と見る。親の家へは往くことの出来ぬ首尾になつてゐる。出店の方にも尻をすゑてはゐられず。一層のこと遠出をして、蜷川の芝居で、會根崎心中の狂言を見て、醬油屋の徳兵衛の心と自分の心とを引比べて、憂さを晴す了簡で、其通りに一筆書いて、お前の妹女郎小辨に頼んで、渡してくれといつて、置いて来たが、其文を見やつたか。今日こゝへお前の来たのは、天神様の御利益である。神様も佛様も馴染のあるのが、眞實にたのしいものである。親父の店に値一文づゝの焼物の天神様があるが、かう御利益のあるのもあゝして天神様に御馴染あるゆゑぢや」といふと――

さが「さればいな其文見ると嬉しうて、客を勧めて此天満といふ思ひ付。幸と此清水屋は、私が前方扇風呂にゐた時からの近付ゆへ、こゝを頼んで芝居へも呼にやりやした。それに付けても父御さんの内方へも、まだ往かぬ首尾と有。是逢ひたい見たいは私とても、ほんに／＼寝た間にも忘れぬ共、つゝには末で女夫に成大願ではないかいの。其間が互のしんぼ。人は次第に身を持上げるがほんなれど、扇風呂のさが共いはれた身が、晦日節季は前垂掛で、裏屋背戸屋けんどん屋、三界懸取に歩く様な勤するのも澤山に逢はふ爲。こなさんが大和橋の濱納屋借ての出見世も、私が近くに居ようため。念比な宿では断りたて、出見世へ泊りに往く夜さは、女夫所帯をする心。同じ寝るのも身に付様で嬉しいされ共一度は父御さんのお耳へ入れねば、どうもならぬぞる。聞けば姉御さん、堺筋の鹽町邊に、縁付してごんすとや。此姉さんなど頼まし、前方から父御さんに能ふ思はれて下んせ。昨日の晦日も

内に居さんせず。譯の悪い評判聞けば頭髮一筋づつ抜るゝよりも苦しうて、氣を揉んでももがいても、身は裸なり工面はならず。大方は四日迄と私が請合置やした。私一人なら死んで成としまはふが、こなさん悪ふ云するが口惜い悲しい。茶屋の勤する者は、人の小息子唆かし、悪道に引入れるの、不孝者にしてのけると、十人が十人で町の衆は思はんす。涙が溢れて疎ましい。私可愛いが定ならば、父御さん共姉弟御とも首尾能ふして下んせ」と、涙ぐみたるしんみの詞、更に勤と思はれず。

【註】 ○前方―前の頃。○扇風呂―天満五丁目にあつて、さがは其以前此風呂の湯女であつたのだ。それが成り下つて、坂町などいふ場末の遊女になつたのだ。○裏屋背戸屋―裏の家、背戸の家にて、どちらも同じやうな意。○けんどんや―うどん屋。あまりに上等でない、場末の遊女町では、ひまな時には、遊女が懸取りもやつたのである。○三界―まごの意、江戸三界といふやうな時に用ふ。○濱納屋―川岸の片側には、舟からあげた荷物を入れる爲の納屋が澤山あつたのだ。○ねんごろな宿…親切な心安い茶屋へ行つた時には、これからどこそこへ行くといつて、ことはり即ちあいさつをして。○身につく―身になるともいふしみ／＼と楽しくうれし心地にて、たべ物でも、落つかず、そは／＼として食べると、身にも薬にもならぬといふ。○譯の悪い―金拂ひなどたまつて、不義理なことをいふ。○疎ましい―きらはしい、思はしい。

【譯】 さがは「さればぢや、其手紙を見ると嬉しくて、客にすゝめて、思ひついて、此天満に来たのぢや。幸ひ、此清水屋は、私が以前扇風呂に居つた時からの親しい家であるから、此家に頼んで芝居へもお前を呼びにやりました。それにつけても父御のお家へもまだ行かれぬやうな具合だとやら。これ出遇いたくない顔見たいは、私とても同じことで、ほんに寝た間も忘れはせぬが、やがて末には、女夫になる大願があるのではないかな。それまでの間がお互の辛抱ぢや。人といふものは次第に身をもち上げてゆくのが本當ぢやが、扇風呂のさがともいはれた身が、落ぶられて、坂町の遊女にまでなつて、晦日節季には、前垂掛で、裏屋背戸屋うどん屋三界まで、懸取りにあるくやうな

勤をしてゐるのも、つまりはお前に度々遇はう爲ぢや。お前さんが大和橋の濱納屋をかりて、出店を出してゐるのも、私の近くに居ない爲ぢや。親切な心安い茶屋へ行つたやうな時には、茶屏へことはつて、お前の出店へとまりに行つたが、さうした時には全く女夫世帯をする心にて、同じ寝ても、身になり薬になるやうで嬉しい。けれど一度は父御のお耳へ入れなければどうもならぬぞや。聞けば姉御さんが、堺筋の鹽町邊りに縁づいておいでとや。此姉さんなどにお頼みなされ、女夫になる前から、父御によく思はれて下され。昨日の晦日にも内には居なさらず、金拂に不義理があるといふ悪い評判をきくと、頭の髪一本づゝ抜かるゝより苦しくて、氣をもんでもがいても、今の身は裸ではあるし工面することは出来ず。大抵は四日までは何とかしよう、私が請合つておきました。つまりが私一人なら死んでなりとしまひもせうが、お前を悪く云はせるが口惜しく悲しい。茶屋勤めするものは、他人の息子をそゝのかして、やれ悪い道に引入れるの、不孝者にしてのけるのと、十人が十人とも町の人達は思はつしやる。思へば涙がこぼれて忌はしい。きつと私が可愛いといふことであるなら、父御や姉御さんと首尾をよくして下され」と、涙ぐんでいふ親身の詞は、更に勤する者の詞とも思はれない。

嘉平次もとも涙、「今に始めぬそなたの心底、過分〜。ハテたつた一人の父親なり、一ツ屋の五兵衛とて、若い時は男を研ぎ、物の筋道りくぎを立て、無理をいふ人でもなく、子供が少し色遊び、五百目壹貫目つかふた逆悔む人ではなけれ共、どう共かう共叶はぬ事が有るぞいの。今迄は隠したが、弟の幾松とおれとが間に、十八に成るおきはといふ妹が有る、元は在所一ツ屋の叔母の娘、後々は此嘉平次と従弟同士女夫にする約束で、藁の中から養ひ、死なれた母の肝精で、物も書き縫針、綿もつむ機も織る、算用もやり居る。顔も十人並なれど、其方をのけ 此世界に女子が有ると思ふにこそ。

綿をつまふが機織ふが、おきははあろか中将姫の再誕が、蓮の糸で一重羽織おりやるとて、見向もする平でない。され共親の契約、小さい時からいひ名付、今日祝言明日祝言とせがまる。一理窟こねたの。『是親仁様、私や畜生じや御座らぬ。種腹わけねど兄弟、妹よ兄様といひつゝも、夫婦に成るは犬鶏のする所爲。男もたてた一ツ屋の五兵衛は、畜生を子に持たといはせては私も不孝、こなたも一分廢る事。ならぬ〜』と云破る。

【註】○男を研ぎ―男らしい男をみがくといふのはつまり男伊達をすることをいふのだ。○りくぎ―六儀にて、周禮の「國士を養ふには道を以てし、之に六儀を教ふ」から來たものであるが、此處は只物事の道理の意。○五百目―銀勘定は目方で表はしたもので銀六十匁を金一兩と算した。○一ツ屋―前のも同じで、天王寺附近にあつた。○藁の中から―生れ落ちるとすぐからの意。○肝精―骨折、世話。○綿もつむ―綿つみの繪といふのが人倫訓蒙圖藁にあるのを見ると、綿を着物に入れるやうに、ひろげてゐる。これで見ると、つむは綿を糸にするのではない。女の藁の一つとして、即ち此綿をひろげること習つたのだ。○思ふにこそ―例の反語的表白法で、あると思はふと思はぬの意。○中将姫の―天平寶字七年右大臣豊成中将の姫は、大和國當麻寺に入りて尼となり法如といつた。蓮の莖から糸をとりて、淨土變相の圖を織つたといふ。今おきわが蓮の糸で羽織を織つてもといつて、中将姫の腕を例に出したのだ。○平―嘉平次のこと。○種腹分けねど―互に種を分け、血を分け同じ腹から生れはせぬが、○一分廢ること―男が立たぬ。一分は面目、名譽などの意。

【譯】嘉平次も共に涙を流し、「今に始つたでない、以前から見えてゐるお前の心の程は過分である。はて、たつた一人の父親ではあるし、一ツ屋の五兵衛といつて、若い時には男を立て、物の筋道、道理を明にし、無理をいふ人ではないから、子供が少し位色遊びをなし、五百目や一貫目の銀をつかつたとて、悔むやうな人ではないが、どうともかうとも叫はぬことが他に一つあるはいの。今迄は隠してゐたが、弟の幾松と私の間に、おきはといふ妹

がある。元來在所の一ツ屋の叔母の娘であるが、後には此私といとこ同士の女夫にする約束にて、生れるとすぐか
ら養ひ、死んだ母の世話で、字も書き、縫針仕事もし、綿をひろげることやり、機も織る、その上算用もやり顔
も十人並であるが、私にとつては、お前の外に、世の中に女があらうとどうして思ふものか。綿をひろげうが、機を
織らうが、おきははおるか、中將姫がまた生れて、蓮の糸で一重の羽織を織つたにしようとして、見向もする私では
ない。けれども親の契約によりて小さい時から許嫁であつて、今日は明日はと祝言をせがまれてをる。そこで私は
一理窟をこねた。『これ親父様、私は畜生ではない。二人は互に種を分け腹を同しうしてはをらぬが、兄弟は兄弟で
それが妹よ兄様といひつゝ、夫婦になるのは、全く犬や鶏のすることぢや。昔は男達もした一つ屋五兵衛は畜生を子
にもつたなど、人に云はせては私も不孝であるし、あなたも男の名がすたることぢや、ならぬ。』といつて私は
云ひ破つた。

「そこらを詰らぬ鎌親仁、『ヲ、こりや出来した、イヤよふいふた。ヤイ畜生吟味する根性で、茶屋者
とくさり合、親にも知らせず夫婦に成極めして行先が借錢だらけ、人に疎まれ指さるゝ、是が又人
間か。五兵衛が眼には畜生と見へるはい。茶屋者と縁切つておきはと女夫に成迄門詰も踏さぬ』と、
打たぬ計の首尾なれば、母屋へとは禁制、姉婿は他人なり、ずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣、
問談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて、負ふた門は七八間、銀高僅壹貫目餘り、身を刻んで
も當なければ、欠落か自害と思ひ定めた所になふ、生身に餌食天道人を殺さず、覺えてか此前、扇風
呂でそなたの事で大喧嘩した、西國橋の印傳屋の長作、味な事で其喧嘩から、兩方心底見届け、齒の

根も喰合ふ念比、彼奴は所帯持なれば少しの取替もしてくれる。此長作が肝煎で、中國のお屋敷へ親
仁の棚から錦手建山音羽焼の、皿の鉢の茶碗のと、十五六兩が物賣つてくれ、晦日にお銀が渡る、請
取書いておこせと四五日前に取りに来た。定めし昨日請取つる。今日嵐の棧敷に侍衆につるて居
た。おれも芝居を立様に、棧敷の裏から音づれて、直にこゝへ来てくれと、旁がた約束して来た。今では
此平に命もくれる挨拶、管違へる男じやない。芝居果てに長作が銀持つて来るか、こゝへもばつとはづ
もうし、此方の出見世の仕廻は少シ取ル懸も有る。貳百目あればさゝんざ伏見坂から道頓堀、壹厘殘
さず物の見事に仕舞ふて、待つて居や節句から面も笠も脱せう。ヤ借錢の笠は脱いでも傘は放され
ぬ、又降つて来た。南無三寶あれ見や。あの菅笠著て来る女房、鹽町の姉じや人。目の悪い角前髪は
弟の幾松」

【註】 ○そこらを詰らぬ―其處ら、即ちそんなことでは行きつたらぬ閉口せぬ。○鎌親父―鎌のやうに氣のねぢけた父。○疎ま
れ―忌みきははれ。○門詰もふまさぬ―門詰は門口、即敷居もまたがされぬ、出入りが許されぬ。○ずんど堅い―ずんどはずつと
非常に、よほど堅い。○問談合―相談。○いろは茶屋―此頃道頓堀の濱側即ち川岸にあつた四十八軒の水茶屋。これは芝居客の
休息所にて色茶屋即ち遊女屋ではない。○負ふた―借金した。○七八間―七八軒のあて字。○生身には餌食―生きてゐる身には
自ら食を與へられる意。○印傳屋―羊又は鹿などの革を賣ふ店。○味なこと―うまいこと。○齒の根も…：きちりと合する、親
しみ合ふ意。○中國のお屋敷―商家でなく、武家などの大家のこと。○建山―乾山のあて字にて元祿頃尾形乾山が始めた陶器。
○音羽焼―其頃京都にあつた焼物の一種。○嵐の棧敷―嵐三右衛門一座の棧敷。○挨拶―關係、縁などの意。○管―約束、手管な

どの意。もと矢の頭の弓の弦をはさむ所にて、びたりとはまつて間違はぬ意から来た。○来るか―来るとすぐに。○ぼつとはづもうし―ぼつとはなくしくはづんできばらう。○店の仕廻―店の勘定。○ざさんざ―賑かに大騒ぎすること、二百目あれば、借金も拂つて大騒が出来るといふ意。○晝匣―此處は金の實價をいのでなく、只僅かの錢の意に用ひた。○而も笠も脱がせう―きまりの悪い時に、面をかぶり笠をかぶるといふに對して現はれた語で、きまり悪さをとつてやらうといふ意。○角前髪―少年時代の前髪のとりにて、前の方を角にしたものだ。第一巻に圖あり。

【譯】「そんなことではへこたれぬ、氣のねぢけた親父は『おゝこれは出かした。いやよういふた。やい、畜生行爲を吟味する性根で、茶屋女と腐れ合つて親しみ、親に内證で女夫になる取極めをなし、行先々は借金だらけで、人には疎外され、指をさゝれる、これが又真人間のすることか。五兵衛の眼にはそれが畜生と見えるぞ。茶屋女と縁を切つて、おきはと女夫になるまでは敷居も跨がせぬ』と、まるで打たんばかりの調子だから、實家へは出入禁制である。それに姉婿とは他人の間柄であるし、すつと堅い商人。又一人の實弟は眼病の氣がある、誰と一體相談でもせう。道頓堀のいろは茶屋から坂町へかけて、借錢してゐる家は七八軒ある。その借金高は壹貫目余の僅かなものだが身を刻んだとて出せる當てがないから、駈落するか、自害をするかほかないと思ひきめた所へなあ、生きてをれば食が興へられ、天道人を殺さずの諺の如く、お前はおぼえてゐるか、此前扇風呂で、お前のことで大喧嘩をした、西國橋の處の印傳屋の長作と、うまい事で、あの喧嘩から、相方共心の底を見届け合つて、齒の根もきちりと食ひ合ふやうにつくし合つてをる。それに彼奴は所帯持のことであるから、少しは金の取替へ位はしてくる。此長作の世話で、中國のお屋敷へ親父の店から、錦手、乾山燒、音羽燒の皿や鉢や茶碗やと、十五六兩の品を賣つてくれ晦日に金はいるから、請取證を書いてよこせといつて四五日前にそれをとりに来た。定めし昨日請取つたことであらう。今日嵐一座の棧敷にて彼は待衆についてゐた。おれも芝居を立去る時に、棧敷の裏から訪問して、直ぐに此處へ来てくれ、とかたぐ約束して来た。今では此嘉平次に命もくれる程の關係だから、屹度約束をかへる男ではない。芝居が終つて長作が銀をもつて来ると直ぐに、此家へもぼつとをこらうし、おれの出店の勘定は少し取る懸け

嘉貳金もある百目あれば借金を拂つて騒ぎも出来る。伏見坂から道頓堀まで、一文も残さず、物の見事に借金を拂ふて、待つてゐるがよい、端午の節句からは、きまり悪い思ひはさせぬやうに面も笠もぬがせよう。や、借金の笠はぬいても傘を放すことは出来ぬな、又雨が降つて来た。南無三寶しまつた、あれを見やれ、あの菅笠を着て来る女房は鹽町の姉ぢや。目の悪い角前髪の男は弟の幾松ぢや。」

さが「ム、〱ほんに恰好が能ふ似やした。それ〱こゝへ御座んす。こなさん逢ふてもだんないか」「いかな〱。係も見せともない。あの幾松が手を引いて来る、腰の太い尻のひよつと出た女子、姉の内の竹といふ食焚。彼奴が見た事聞いた事、其日の内に大坂中に事觸れ、此方が取沙汰、何のかのと親仁に告げるいやさに、少し濡かけて欺したりや、ほれられ自慢でもう其事を觸れ歩く。それで彼奴が名を筒扱と付けて置く。そなたも姉の知つてじやげな。ヲ、うるさ、何處ぞにちよつと隠れし笠隠れみのなき身の置處、駕籠の雨外樋打明けて、二人が膝を組合せ、身を抱合ひて身を忍ぶ。」

【註】○だんないか―大事ないか。○いかな〱―どうして〱。○取沙汰―噂さ。○濡れかけ―色仕掛けで。○隠れ笠隠れ笠―保元物語の爲朝鬼ヶ島渡りの段にも、鬼ヶ島の寶物として敷へられてゐる。之を着て身を忍ばせるのである。どこかに隠れ笠か隠れ笠でもあればよいが、それもなくて、身の置所もない意。○雨外樋―雨よけの桐油合羽。

【譯】さがは「む、ほんに恰好がよく似てゐる。それ〱此處へおいでなさるが、お前は逢つても大事ないか」嘉平次「どうして〱、姿も見せたくない。あの幾松の手を引いて来る腰太の尻の飛出した女は、姉の家のお竹といふ飯焚女ぢや。あいつが見ると、見た事きいたことを其日の中に大坂中に觸れあるく、おれの取沙汰も、何の

のと親父に告げられるのがいやさに、少し色仕掛で欺してやると、ほれられた自慢で、もうそのことを觸れ歩くといふ風ぢや。それであいつの名を筒拔とつけてをる。お前も姉は知つてるさうな。あゝうるさや、どこにか、ちよつと隠れたい」といふものゝ、隠れ笠も隠れ蓑もなく、身の置所にこまつて、駕籠の雨避の桐油合羽をあげて、中に入り二人は膝を組合せ、互に抱き合ふて身を忍ばせた。

姉はそれ共道の邊の、清水が見世に暫しとて、「こゝ借ります」とぞ休らひける。奥には猶も飲しこり、踊るやら謠ふやら、騒ぐどさくさ若草の、妻もこまれる駕籠の中、あられぬ姿顯はれて、姉や弟の見咎めん。さがは奥より尋ねんかと、こはさに猶も身を寄せて、締めあふ中の冷汗は、外樋漏る雨の如くにて、肌著も絞る計りなり。

【註】 ○それとも道―それともみしらずにかけた。○道のべの……道のべに清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ、の西行の歌にとる。○しこり―しこるはしきる、盛る。○どさくさ―どた／＼混雑する中に。○妻もこまれり―伊勢物語、業平の歌、武藏野は今日はた焼きそ若草の妻もこまれり吾もこまれり。駕籠の中に丁度二人がはいつてゐるからいつた。○あられぬ姿―あるべからざる恰好。

【譯】 姉はそれとも見知らず、路傍の清水屋に少時息まうとて「こゝをかります」といつて休んだ。奥の客達は盛に飲んで踊るやら謠ふやら、騒いで混雑してゐる間に、男女二人がはいつてゐる駕籠の中の、あるまじい姿が露はれて姉や弟が見て咎めだてすることであらう。さがはまた奥から尋ねられはせぬかと、恐ろしさに猶ほ身を寄せてしめ合つてゐると、桐油をもる雨の如く冷汗が流れて、肌著もしぼるがやうである。

奥の客がだら聲にて、「こりやさがは何してじや、色が無ふて飲めぬはい。頭痛がしやうばこゝへ來て

寝やしやれ。どりやち迎ひに自身ち馬を出されふ」と、表へ出るひよろ／＼足、駕籠の者共生の酔、

「さがさま／＼、迷ひ子になつてか。返せ／＼さが様返せ。ヤアここにか、酒呑むまいとて手が悪い」と、姉に取付く手をもぎ放し、姉「エイ狼藉な。さがとやらじや御座らぬぞ。此方や道通り、雨宿りに茶屋の見世へ腰懸れば賣物と思やるか。阿房くさい」と叱られて、客「南無三寶さがのお山と取違へ、愛宕山へ上るとした。御免／＼」のちろ／＼目、あたりを見廻し、「扱こそな愛宕山から見下せば、嵯峨は一目に見付たぞ。駕籠から帶の端が見へるぞ。さがを探し出さうか」と、寄らんとすれば、さが「ア、是々、出ます／＼許さんせ」と、外樋の影より這出て、「こなさん達欺して隠ん坊したれば、つい探し出された其代に、なんぼ成と飲さんせ。何處のお内儀様やら鹿相な、こらへて下んせみんなごんせ／＼」と奥に入れば、嘉平次はさがを離れし嵯峨松茸、擇残されし風情にて、駕籠に縮んで居たりけり。

【註】 ○だら聲―馬鹿聲、大きなだらしなき聲、だらは北陸あたりでは馬鹿の意。○しやうば―するなら。○手が悪い―やり方がよくない。○さがのお山―お山は女郎のこと、それを嵯峨の山といつて、愛宕山へ上るとしやれたのだ。○ちろ／＼目―ちら／＼する目。ちらつく目。○嵯峨は一目に―愛宕山から見下ると嵯峨地方は一目に見える意を、すぐにさがを見つけたといつた。○嵯峨松茸―さがの山にはへてゐたのが、さがを離れたとしやれたので、松茸には例の近松一流の性器の意をふくめた悪ふざけがある。○縮んで―これも作者が性器にことよせた悪ふざけである。

【譯】奥の客が馬鹿聲を出して「これ、さがはどうしたのぢや。色氣がなくては酒がのめぬが、頭痛がするならば此處へ来て寝るがよい。どれ自身でお迎ひにと出馬せうか」といつて、ひよろ／＼足で表へ出で、駕籠かき等は生酔ひで従ひ、さかの姉に取つきながら「さが様／＼、迷ひ子になつたのか、返せ／＼、さが様返せ、や此處においでか酒を飲むまいとて、やり方が悪い」といふと、姉は取られた手を、もぎ放し「ゑ、狼藉な、さがとやらでは私はない、私は道を通る通行人、それが雨よけに、茶屋の店へ腰をかけると、すぐに賣物と思ふのか、馬鹿くさい」と叱ると、客は「これはしまつた、嵯峨のお山ととりちがへて、とんでもない愛宕山へ上らうとした。御免々々」といつて、ちらつく目で四邊を見まはし「さてこそ愛宕山から見下ろすと、嵯峨は一目ぢや、さがを見つけた、駕籠から帯の端がのぞいてる、さがをさがし出さうか」と寄りつかんとすると、さが「あ、これ／＼出ます、許して」といつて、桐油合羽の蔭から這出して「あなた方をだまして隠れん坊したが、つい探し出された。その代り幾らでも酒を飲みなされ、どこの御内儀様やら、魚相をしてすみません、こらえて下され。皆來やれ」といつて奥に入ると、嘉平次はさがをはなれて、ゑり残された嵯峨松茸の様に、駕籠の中にちぎんでゐた。

姉はもとより商屋の、妻となる身の眼も早く、ちよつと見るより一寸やらず。駕籠なは弟の嘉平次、扱情ない身持かな、引摺出して叱らふ。いや／＼供の下女が見る處、さながら若い者、人中で恥もかかされまい。身の成果が可愛ひ、父様がいとしい、おきは心が無慙なと、様々胸にせめあまる、涙は聲にはやもれて、姉なふ幾松、そなたは仕合な。よい時に眼を病んで、淺ましい事見やらぬ。今のお山が、今日一日は奥の客に身を賣りながら、座敷を忍んで駕籠にかくれて居た體は、外に深い人に逢ふ手管とやらで有ふが、お山はお山の道にもせい、其深い男は、誰じや知らぬが、有るまい事じ

やないかいの、定めて此方の嘉平次もまああの通り。嘉平次の悪性では、お山と相駕籠で外樋の下に屈んで居ようも知れまい。見る目も悲しい淺ましい。是といふも親の恩を忘るゝゆへ。心もみだらに身を持崩し、人にも人といはれぬ。父様や母様に娘は有り息子は有る。何を不足におきはといふ子を貰ふて、乳母を取り守を付け、うき世話が病みたかろ。少い時から女子の手業も教込、心もたまかに育てあげ、嘉平次と夫婦になしたらば身代の藥なり、商ひの勝手も能く繁昌もさせたいと、嘉平次がいとしいばかりに世話をやんで病み死の、母様の恩をはや忘れ、可愛げにおきはもほんの天竺牢人、見世の若い者共、あの女子始として、兎や斯う評判する時は、姉が耳へ八寸釘を打たるゝよりも猶こたへる。若も自然此駕籠に、お山と嘉平次と乗合て居る處、今の客が見付けて引摺出して踏とても、何と言譯有物ぞ。見こそせね聞こそせね、定めてさい／＼行先で恥をかきつらふ。其身一人の恥かいの。親兄弟は何になれ、來世の便はなけれ共、あの人ゆへに迷はしやる母様がいとしい」と、慈悲の涙も眼に余る、駕籠に當ての口説言。

【註】一寸やらず―やらずは見のがさぬ意。○駕籠なは―のは、中に居るのは。○さながら―あのやうな、あの通りの。○胸にせめあまる―攻め入れることが出来ぬ、收めこめぬ。○お山は…お山としては、そのやうなやり方もあらうが。○有まいこと―あるまじいこと。○悪性―放蕩。○世話が病みたかろ―世話をして心痛したかろ。○たまかに―玉のやうに、忠實に。○身代の藥―身代の爲になる。○天竺牢人―天竺から來た浪人、どこにもたよるところなき意。○あの女―こゝでは下女のお竹をさ

す。〇さいく〜！既々。〇何になれ〜どうにでもなれといふのか。〇便はなけれども〜死んだ母の行つた未來の國から、何とも便りはないが、さぞ嘉平次故に迷つておいでであらう。〇あの人故に〜嘉平次ゆえに。

【譯】 姉は素より商人の妻なる程あつて、目もさどく、一寸見るなり少しも見のがさず、駕籠の中なるは、弟の嘉平次ぢや、さても情けない身持であることよ。引摺り出して叱つてやらうか、いや〜お供の下女の見處で、あのやうな若い者を、人中で恥もかゝすわけには行かまい。身の行く末が可哀さうであり、父様が氣の毒ぢや、おきはの心もみじめである、と様々に考へて、胸中に收めあまつた涙は聲にもれて、「なう幾松や、お前は仕合ぢや、よい時眼病になつて、浅ましいことも見ぬ。今のお山が、今日一日は奥の客に身を賣つてゐながら、座敷をにげて、駕籠の中にかくれてゐた有様は、他の深い人に逢ふ企みとやらで有るかも知れぬが、よしお山としては、お山のやり方であるにせよ、其深い男は誰かは知らぬが、有るまじいことではないか。定めし此方の嘉平次も、まづあの通りである。嘉平次の放蕩では、お山と相乗り駕籠で、桐油合羽の下にかごんでゐるかも知れはせぬ。見るのも浅ましく悲しいことぢや。是といふも、皆親の恩を忘れるからのことで、心もみだらにもち身を持つくづし、他人にさへ眞人間とはいはれない。父様や母様には娘もあり息子もある。それに何を不足で、おきはといふ子を貰ふて、乳母をつけ、子守をつけて、憂い世話をして心痛がしたからう。それはつまり小さい時から、女の手でする色々な業も教へ込み、心も忠實に育てあげて、嘉平次と夫婦にしたら、まづ身代の爲にもなり、商賣の勝手もよく、従つて繁昌もさせたいと、嘉平次が可愛いばかりに世話をやいて、その苦勞で病み死にされたのぢや、その母様の御恩をも忘れて、おかけでおきはも可哀さうに眞の天笠浪人ぢや。店の若いものどもや、あの下女を始として、とや角と評判すると、姉の耳へは八寸釘を打たれるよりもつとこたへる。ひよつとして自然と此駕籠に、お山と嘉平次とが乗合つてゐる處を、今の客が見つけて引摺出して踏つけたとて、どうして言譯があるものか。私は見せせず聞きもせぬが、定めし行先々で、恥をかいたことであらう。だがその恥が其身一人の恥であらうか、親兄弟はどうなつたとしたところで、勝手にしろといふのか。死んだ母親の處から便りは來ないけれども、さぞあの嘉平次故に、中

有に迷ふて居なさるであらう。その母様が氣の毒ぢや」といつて慈悲の涙を目にあふらしながら、駕籠の中にある嘉平次にあてつけの口説きごとをした。

嘉平次は身も縮み、命も縮まる計にて、消も入たき心地なり。幾松は嘉平次が、駕籠に有共氣もつかず「エ、曲もない見きの心、今ならでは申さぬが、私が眼病もあの人ゆへ。聞て下され有事か、『おきはと其方と夫婦になれ。其代に家屋敷、商ひの株共に親父の跡を繼する。合點せい〜』と、道ならぬ事耳かしましく、所詮私が死ぬるか、かたはにして下されと、山上様へ願をかけたれば、御利生で此病。つる時花目、顔すれど、眼は綿繰で繰るやうで、響いて物もいはれぬ。天満に上手の眼醫者が有と連てお出なされゆへ、道すがら物語もと、是迄は參りしが、養生はしませぬ。私が盲目になつたらば、兄様の一人して見世の事も取捌、内に身が据つたら、自らおきは様と一つになる氣も出來ませう。エ、私等迄身を捨て、是程に思ふとは思遣も有まい。聞へぬ所存な見きや」と、目を抱へて泣きければ、

【註】 〇曲もない―面白くもない、なげけない。〇今ならでは…今だからいふが。〇有る事か―あらうことか。〇山上様―大和の大峯山に役行者をまつる。山上祭りといふを行ふ。〇時花目―行眼病。〇綿繰―昔家庭用として木綿を二本の棒の間にはさみ、その棒を車でまはして綿の種を取除くに用ひた器械。くる〜と音がしたから、響いてとうけたのだ。〇物語も―物語もしようと思つて。

【譯】嘉平次は身も縮み命も縮まるばかりで、消えてしまひたい心地である。幾松は嘉平次が駕籠にゐるとも気がつかず「え、なさけない兄の心。今だからこそいふが、私の眼病もあの人ゆえぢや。聞いて下され、あらうことか『おきはとそちと夫婦になれ、その代り、家屋敷及び商賣の株一緒にして、親父の後をつがせる。承知しろ〜』と、兄は道ならぬことをやかましく云つて仕方がないので、私は所詮自分を死なすか、不具にして下されと山上様へ願がけをしたところが、御利益で此病になりました。自分では、つい流行眼病のやうな顔をしてをれど、眼は綿繰でくるやうにて、痛が響いて物もいはれぬ。天満に上手な眼醫者があるといつて、連れておいでなされたから、途中で此物語もしようと思つて、ここまでは参りましたが、養生はしませぬ。私が盲目になつたら、兄様は一人で店のことも取り捌をなし、そして自分の家の内に身がすはつたら、自然とおきは様と一緒に氣も出て來ませう。え、私等まで身をすて、これほどに思ふてゐるとは思ひやりもなさるまい。譯の分らぬ考の兄きである」といつて、目をかゝへてなくと――

供の竹がさし出口、「嘉平次様といふ人は嘘つきの骨頂、私にもきつうほれて居る。いつぞ日の暮に出見世へ来て、思ひを晴させてくれと、口説かつしやるいとしさに、お使の序に寄つたれば、今宵は遁れぬ客が有、重ねて此方から便宜せう。心ざし嬉しい」と、錢三十程包んで懐へ入らるゝ。むつと腹が立つて来て、「私やてんや者じやないぞや、身を賣る女子じやないぞや。肌ふれねば聞ぬ」と喚びたりや、「こりや誠の契りは重ねて。約束のしるし是じや」といふて、引寄しつぽりと頬摺して、「サア往ね〜」と突出さるゝ。私も名残が惜うて、跡視いて見たれば、氣味悪そうに見世の手水鉢で、頬を洗ふてけつかつた」と、語れど二人は余りの事、紛らす耳の余所の町、風に嵐の芝居果て、散し太

鼓の聞ゆれば、南無三寶長作が來ぬ先に、姉も往んで下されかしと、飛立計の駕籠の中、今にも來たらば何とせう、のめ〜共出られぬ首尾、出ねば〜はらりと筈違ふ、氣を揉でも詮方なく、何御存知なき天神を、俄に頼む計なり。

【註】○骨頂―頂上 最高 ○いつぞ―いつか。○遁れぬ客―逃れられぬ客。○錢三十―三十文。勿論青銅錢のことにて、千文が一貫文、即ち金四分の一兩にあたる。又銀では千文が十三匁にあたり銀六十匁を金一兩と算した。○てんや物―店の商品、商賣女。○けつかつた―今日も用ふる俗語で、ゐやがつたなどの意。○紛らす耳の：…餘りの事であるのにあきれて、耳を紛らさうとしてゐると、餘所の町の風につれて大鼓の音がきこゑるといつた。○散らし大鼓―芝居が終つてから、客をちらし歸らす太鼓。○のめ〜とも―おめ〜とは。○筈―手筈。

【譯】お供のお竹がさし出口をして「嘉平次様といふ人は嘘つきの骨頂ぢや。私にもひどく惚れてゐなさん。いつか日の暮れ出店へ来て、思を晴らせてくれと口説きなさんが可愛さに、お使の序に寄つたところが、『今宵は逃れられぬ客がある、改めて此方から頼りをしよう、志は嬉しい』といつて、錢三十文程包んで懐へお入れなさん。私はむつと腹が立つて、私は賣女ではない、身を賣る女ではない、肌をふれねば承知ならぬと喚めきたると、『これ誠の契りは改めてする。これは約束のしるしぢや』といふて、引寄せて、しつぽりと頬をすり合せて『さあ歸れ〜』と突出しなさん。私も名残惜しさに、後でのぞいて見ると、氣味悪さうに、店の手水鉢で頬を洗つて居つた」と語つたが、聞いてゐる二人は、餘りの事なのに呆れて、耳を紛らさうとしてゐると、餘所の町の風が吹いて來て、嵐一座の芝居が終つて、大鼓の音がきこゑるので、南無三寶、之はしたり、長作が來ぬ前に、姉も歸つてくれ〜ばよいと、飛立つばかりに、駕籠の中では思ひながら、今にも長作が來たら何とせう。おめ〜と出るわけにもゆかぬ場合、出ないとすると、がらりと手筈が違つて來る。といつて氣をもんでも仕方なく、何の御存じもなき天神を拜んで俄にお頼みするばかりであつた。

約束なれば長作、暖簾の書付見て、「ムム清水屋は是じゃな。少たのも。道頓堀の茶碗屋嘉平次はこゝにか。約束の通長作が来たといふてたも。嘉平次ノ〜」といふ聲に、兄弟驚く其中にも、姉は知たる駕籠の中、思遣りては諸共の心づかひぞ殊勝成。さが聞付て走出、「ヤア長作様久しうござんす」長さがどのか。嘉平次が来るからは、此方もこゝにと思ふた。我らは今日侍衆の相伴で、嵐の芝居から直に鯉屋へ往く筈で、是袴の躰なれど、嘉平次が何やら内々の一物、今日入らいで叶はぬ持て来てくれといふ棧敷の事武士の前、おうとはいふたが何の事ぞ。つんと此方に覺へがない。嘉平次は何處にぞ早う逢ふて聞たい」といへ共さがは姉の前、駕籠に共いはればこそ。

【註】 ○兄弟―此處は姉弟である。○内々の一物―内證の品物。○つんと―とんと。○いはればこそ―駕籠にをるといはいはれ、ばこそいはれぬ。

【譯】 約束したので長作はやつて来て、暖簾の文字を見るなり「む、清水屋は是ぢやな。少し頼もう。道頓堀の茶碗屋嘉平次は此處にをりますか、約束通り長作が来たといつて下され、嘉平次ノ〜」といふ聲によつて、姉も嘉平次も驚いてゐる中にも、姉は知つてゐる駕籠の中を思ひやつては、一緒に氣をつかふのは殊勝なことである。さがは聲をきゝつけて走つて出て「や、長作様お久しうござんす」長作「さがどのか、嘉平次が来るからには、お前も確に此處に來てるだろと思ふた。私は今日侍衆の相伴をして、嵐の芝居を見てから鯉屋へゆく手筈で、此の通り袴をはいてゐる具合だが、嘉平次が、内々の品物今日手に入らぬと叶はぬから、もつて来てくれといふ。棧敷の上のことであるし、武士の前の事故、おゝとはいふたが何の事であらう。とんと私に覺えがない。嘉平次は何處にを

るのぢや、早く逢うてきゝたい」といふが、さがは姉の前のことではある。駕籠の中にをるともいはれ、ばこそいはれはせぬ。

さが「いやちよつと彼處迄。追付けて御座んしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞いたが、あの様の賣物をこな様が取次で、屋敷方へ賣んした其銀が、十何兩とやら昨日渡る筈じゃげな。請取も往つて有るとの事。大事無か私に渡さんせ。左無かまちつと酒でも呑で待んせ」といへば長作、「ヤアノ〜大それた事いひますの。酒處で御座らぬ。エ、いかに身が術ないとて不器用な氣に成ちつた。如何にも賣物は取次、銀高壹貫貳百三十目代、拾六兩體に彼に手渡しして、則自筆印判の請取を握てゐる。地體是は九之助橋、親五兵衛の棚の賣物。銀はあのれが使ふて、親の手前の算用立たず。此長作を横道者にせうとは、底意の怖い盗人。此物騒の世の中、此方の所も裏は野じや。内の勝手は知つてゐる。必用心さつしやれ。身があつければどの様な事仕様も知れぬ」と、眞顔の云分。

【註】 ○追付て…追付け歸るでござんしよ。○あの様―あの人、嘉平次をさす。○無か―なくば、なければ。○左無か―さうでなければ、さもなくば。○まちつと―今少し計り。○術ない―術がない、仕方がない。○不器用な―下手な、まづい、不都合な。○銀高一貫二百三十目代―普通の勘定では、銀六十目を金一兩に勘定すればよいが、その割でゆくと一貫二百三十匁は十六兩にはならぬ、二十兩以上である。處が相場は、銀の中へのませものによりて變動があるから、此處はその爲に勘定があはぬと見るべきだ。○地體―一體。○此方の處―お前の屋敷の裏は野原だから、何をするか分らぬ用心しろと脅すのである。○身があつければ―熱くて苦しいと何をするか分らぬ。どんな亂暴な返しをするか分らぬ意。

【譯】 さがは「いや一寸彼處まで行つたのだから、追付け歸るでござんしょう。今日、はいらないと叶はぬとは私も聞きました、あの人の賣物をお前さんが取次いで、屋敷方へ賣りなされたとやら、その金が、十何兩とか、昨日渡される筈だとやら。請取證も行つてるとの事、大事なくば、私にお渡しなされ、さなくば、も少しの間酒でも飲んでお待ちなされ」といふと、長作、「やあく、大それたことを云ひなさるな、酒を飲むどころではない。ゑゝいかに仕方のない身ぢやとて、不都合な氣になつなもんだ。如何にも賣物は取次きはしましたが、銀高一貫二百三十匁代、拾六兩をたしかにあの人に手渡しして、自筆に印判の据つた請取をちやんと握つてをる。一體でこれは、九之助橋側なる親五兵衛の店の賣物である。それを賣つて、銀は自分が使つて、親父の手前勘定が出来ず、従つて、此長作を横着者にせうとしてゐるのだといふことが明に分り、まことに底意の恐い盗人ぢや。此物騒な世の中に、此方の家も裏は野原ぢや、それに家の中の勝手は存じてをる。屹度用心をなされい。身に火をつけられたりして苦しいと、どんな亂暴をするかも知れないから」と眞面自さうな云ひ分である。

さがははつと色違ひ、兄弟は猶、身にかゝる難義を察して駕籠の中、くはつとせき上げ身をもがき、嘉「エ、無念やかたられた、姉の手前が恥かしい。いつそ駈出踏で腹をいよふか、出ては姉の恥辱か。早ふ歸つて下されかし」と、千萬碎く氣の働。胸の吹子に怒の火焰、駕籠も揺めく計なり。長作駕籠には氣もつかず、「是さが殿、驚く事ではない。地體あの氣な生れ付、それを知らずに空惚して、此長作は捨られた。惨いぞやく。なんと元へ戻して、おれが念比してやるふか。嘉平次などとは違ふた。十貫目や拾五貫目は手の悪い事せず、見ん事今でもくじや。此方も憎かる筈がない」と、しなだれ寄て手を取れば、

【註】 ○兄弟は猶……兄弟のものはなほ更、長作のいふやうに嘉平次の悪い行ありとすれば、罪の責任をとはれ、自分等の身に
かゝる難儀を思ひ、又駕籠の中の嘉平次は、かつとせき上げて……。○踏んで腹をいよふか―ふみつけてやつて腹をいよさう
か。○千萬碎く氣の働―いろく心と心を碎き氣を働かし。○胸の吹子……胸がいかにもふいごの如く働いて、怒りの火焰をま
したて。○地體あの氣な生れ付―一體がそのやうな氣立の生れ付であることを知らないで。○空惚―徒らにほれて。

【譯】 さがははつと色をかへ、兄弟は猶更嘉平次の行の爲に、自分等の身にかゝる難儀を思ふて驚き、駕籠の中の
嘉平次はまた、かつとせき上げて、身をもがいて、「ゑゝ無念なるかな、だまされた。姉の手前に對して恥かしい。
いつそのこと飛出して、長作を踏みつけて、腹をいよさうか、それとも飛出しては却つて姉の恥だらうか、それな
ら姉が早く歸つてくれよばよい」と、色々心と心を碎き氣をもみ、ふいごのやうな胸の中に怒の炎はもえて、その爲
に駕籠もゆらく程である。長作は駕籠にも氣がつかないで、「これさが殿、驚くことはない、一體嘉平次はあの様
な氣質の生れ附だ。それを知らないでお前は彼に徒らに惚れこんで、お蔭でおれは捨てられてしまつた。慘酷なこ
とをするな。どうぢや、もと通りになつて、おれが親切にしてやるか、嘉平次などはちがつて、十貫や十五貫
目の金は、手くせの悪いことをしないで、見事に今でも出して見せるぞ、それにお前も憎からう筈はない」といつ
てしなだれかゝつて、さがの手をとると――

さが「ア、いやくなめすぎた置んせ。あれ町の御内儀様も見て御座る。勤の者はあんな者かとさげし
みが恥かしい。たとへ平様が盗人で有ふが、強盗で有ふが、いとしようく命をやつた此さがじや。
なんぼ此方が佛程正直でも、顔も見たうないわいの」長「サア先一旦さういはねば譯が立ぬ。それも此方
に合點じや。今に嘉平次が大盗人仕をつて、一ツ屋の五兵衛、鹽町の姉が首にも繩付、其身は此方の

裏の西の方に鳥のとまつた様に、首計になつた時、長作様念比しやうといはふより、今思切たれば、彼奴も仕合此方も徳、どれ前の様にむつちりと肥てか。嘉平次めが吸取たか。肌を見たい」と懐へ手を入る。取て突退け、さが「小見ともないおかつしやれ。いひにくいけれど此さがと、平様とは一心づくで逢ふてゐる。こなたの様な口前ではないぞや」と、おろ／＼涙の腹立聲。

【註】 ○なめすぎた―馬鹿にする意にて、今日も俗語に用ふ。○町の御内儀―嘉平次の姉をさす。○譯が立たぬ―義理がたぬ。○こなたの裏の西の方―方角からいつて、千日の刑場の方をいつたのだ。○首計り：獄門にかけられた時。○念比：歡を過する。○吸取る―うまい汁を吸取られてしまつて、やせたかの意。○一心づく―心を一つにし、互に他をかへり見ず。

【譯】 さがは「あゝ、いや／＼、人を馬鹿にし過ぎてゐる、おいて下され。あれあの通り、町のどこかのおかみ様も見ておいでなさる。廓づとめをするものは、あんなみだらなものかと、さげされるのは恥かしい。たとへ嘉平次様が盗人だらうが、強盗だらうが、可愛くて／＼、命をわたしてゐるこのさがぢや。どれほどお前さんが佛のやうに正直であつても、顔も見たくないわい。」長作「先づ一旦さういはないと義理合がたぬ。それもおれはちやんと承知ぢや、今に嘉平次が大盗をつて、一つ屋の五兵衛や、鹽町の姉の首にも繩をかけ、自分にはお前の家裏の西の方の千日の刑場で鳥がとまつたやうに、首ばかり獄門にあげられた時、長作様、可愛がつて下されといふよりも、今嘉平次を思ひ切つてしまへば、あの男も仕合お前も得ぢや。どれ以前のやうに、むつつりと肥つてゐるか、嘉平次にうまひ汗を吸ひ取られて瘦せたか、肌を見てつかはさう」といつて懐へ手を入れる。とそれをとつて突きつけながら、さがは「見つともない、おきなされい。云ひにくいことぢやが、此さがと平様とは、互に一心を盡して逢引をしてゐる。お前さんのやうな口先はかりの人とはちがふぞや」とおろ／＼涙をながしながら腹立て聲でいふ。

嘉平次はもう是迄、堪忍袋も破れかぶれ、飛で出んとする處へ、姉の内より迎ひの丁稚、大息ついで「申おゑ様、ちやつとお歸りなされませ。早ふ呼で来いと、旦那様は門に出て待て御座ります。はやう／＼とせきかくる。姉「ア、心もとないけた、ましい、何事が起つた。こりやこゝは公界しやぞ。誰も人の名はいはず、様子計ちやつといへ。構へて人の名をいふな」と、心のきいたる姉の利發。使はる、丁稚も氣轉者、丁角屋敷の親仁様がお出なされて、彼の板圍ひの惣領殿が、一昨日から在所が知れず、付届借錢乞親仁様も一分立たぬ、お前の留守も合點がいかぬ。兄弟の事なれば眼醫者にかこつけ、惣領をかくまへたに極つた。姉も共に勘當じや」と喚き散して御座りました。それで走つて來ました。ア、づゝなや」と息をつぐ。

【註】 ○おえ様―お家様にて、上方でおかみ様の意。○ちやつと―さつさと、ちやんと。○旦那様―姉の夫をさす。○心もとない―不安心な、いらだ、しい。○公界―公けの處。人中。○構へて―決して注意して。○角屋敷―一つ屋の五兵衛のこと。○板圍ひの惣領―嘉平次のこと。板圍は濱納屋の嘉平次の出店をいつてゐるので、ざつとした構造だつたのだ。○付届借錢―揚屋へ拂ふべき金の書附けと、借金取り。○一分たつ―男がたつ。顔がたつ。○つゝなや―せつない、くるしい意にて、じゆつない、仕方ない意から來たのだ。

【譯】 嘉平次は、もうこれまでと思ひ、堪忍袋もやぶれ、破れかぶれに飛出して出ようとする處へ、姉の家から迎ひの丁稚が來て、大息をついて、「申しおかみさん、さつさとお歸りなされませ。早く呼んで来いと、旦那様は門に出て、まつておいでとす、早く／＼とせきかける。姉は「あゝ、心配な、騒々しい。何事が起つたのぢや。これ

此處は人中ぢやぞ。誰も名をいはないで、様子だけを、早くいふがよい。決して人の名をいふな」と氣のきいた利發な姉の言葉に對して、使はれてゐる丁稚も氣轉のきいた者のこととて「角屋敷の親父様が、おいでなされて、あの板圍ひの出店の惣領殿が一昨日から行衛が分らず、書つけ届けや借金取りが来て、親父様にも顔がたゝぬ、あなたのお留守なのも合點がいかぬ。姉弟のことだから、眼醫者につれてゆくといふことにかこつけて、惣領をかくしたにきまつた。あなたも一緒に勘當するといつて、わめきちらしておいでよした。それでかけてまゐりました。あつらや」といつて息をついだ。

姉「ア、そんなら往ざ成まい。往ひでは叶はぬ所も有。見捨がたない事もあれど、男も女も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使、ア、女郎様も邪魔しました」と、怪我の振にて駕籠にはつたと行當り、姉「ハア駕籠が有とは氣がつかなんだ。是に限らずうろたへては、鼻の先な事に氣がつかぬ事が多ひ。商ひ物の請取なら、買主の手へ渡りそんな物が、中使の手に握てゐるとは、是も氣のつかぬ事」と、教る智恵や天神を、伏拜みてぞ歸りける。

【註】○見捨がたない事―見すてられぬこと。かたなしのなは、せはしいことをせはしいといふと同じ類。○夫の呼使―夫からの呼び迎への使。○中使―仲にたつた使。こゝでは長作が屋敷へ品物を納めて、金の請取書を買つた人の手に行かないで、長作の手に止つてゐるのが怪しいといつたのだ。○教へる智恵や天神―智恵ない神に智恵つけるといふ諺をかりて、知らぬものに教へる意。

【譯】 姉は「そんなら歸らずばなるまい、往かなくてはならぬ所もある。見すてがたい事もあるが、男も女も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼迎への使とあつては歸らにやならぬ。あゝ女郎様お邪魔しました」といひながら、けがに當つたやうな風で駕籠にばつたと行きあたり、「あゝ駕籠があるとは氣がつかなかつた。之に限らず何事もうるたへると、目の先のこと氣がつかぬ事が澤山ある。商ひ物の金の請取といへば、買主の手へ行きさうなものだが、中に立つた人の手にあるといふのはをかしい、それに氣がつかぬとは」といつて知らぬものに教へて、天神を拜んで歸つて行つた。

嘉平次憚る方もなく、駕籠踏散し跳り出、長作が髻取つて引据へ、「此嘉平次を盗人のかたりのとは、何の煩拵で吐いた。先は武家方、中取したと思はれては出入がならぬ。先請取書いて渡せ。銀取つて遣ふとうまゝと能ふ喰せたなあ。今のは身が姉じや人、駕籠にゐるのも見付てじや。姉の前で能ふ恥を與へた。人かと思ふてはまつた。涙が溢れて口惜いと、齒齧をなして泣居たり。長「ヲ、成程姉とは一言で見て取つた。買主の方へ往べき手形が、中にとまつて有とは、何じや女の猿智恵。先へは此長作が請取してあげた。あれは身が方への請取。をのれもせちがな奴じや者、銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなあ」

【註】○人かと思ふて……眞人間かと思つて、だまされた。人でなくて畜生だつた。○手形―證文。○長作が請取して……先方へは自分の方から請取證を出した。○身が方へ……自分の方へもらふべき請取。○せちがな奴じやもの―せちは世智、世才、小才にて、つまり小才のある奴だもの。○あたゝかに―ぬくぬくと。いゝ氣で。○請取をせうわいなあ―請取證を書いたことだらうなあ。

【譯】 嘉平次は即ち誰に憚ることもなく、駕籠をふみちらして跳り出し、長作の髻をとつて、引すへ「此嘉平次を盗

人だのかたりだのとは何の顔でいつた。先方は武家のことであり、中に立つて横取したと思はれると、出入が出来なくなる。だから先づ請取證を書いて渡せ。銀を受取つて渡さうといつて、うまくとよくも人を欺したな。今のはおれの姉ぢや、おれが駕籠の中にもゐるのも見つけられてゐた。それなのに、よくもまあ姉の前で恥をかゝした。眞人間かと思ふてたまされてしまつた。涙がこぼれて口惜しいといつて、齒がみをして泣いてゐた。長作は「お、成程汝が姉であらうとは、あの女の一言で見ぬいてしまつた。買主の方へ行くべき證文が中途にとまつてゐるといつたか、あれは何のことぢや、女の智恵だ。先方へはこの長作が請取をこしらへて差出した。だから嘉平次から貰つた受取はおれの方へ貰ふべき受取ぢや。汝も小利巧な奴であるのに、銀の顔も見ずに、ぬく／＼と請取を書かうとはなあ」

嘉「エ、さもしい騙め。ヤイ銀が欲くば穢い云懸せうより、奇麗に家尻きれいやい。さつてもたくんだ／＼今思ひ當つた。嵐の芝居の曾根崎の狂言が、面白ふて再々見ると吐したが、能ふ見覺えた。取りも直さず油屋の九平次。惣じて狂言淨留璃は、善悪人の鏡に成をのれは騙の手本にするか。師匠の九平次より倍越した大騙。此春をのれに三百目銀借つた念比の中手形もいらぬと吐したれど、よい中の垣と預り證文してやつた。それに引續く合點なら差引して算用せい。こりや油屋の九平次、醬油屋の徳兵衛をだました格を出したらば、少と願を喰遠よふ。ちよつと手をつけるが最期じゃぞ長作」と、腕まくりして捻寄れば、長「ヤアびこ／＼するな、わやにしてもさせぬ／＼。手形の銀は手形の通、取所で取て見しよ」

【註】○云懸け—云ひかゝり。○屢尻切れ—泥棒しる。○曾根崎の狂言—近松の曾根崎心中の狂言のこと、此邊如何にも仕組が曾根崎心中をつくりな爲に、作者がきまたり悪きに、よう覺えたなどいつて、こんな辯解をしたのだと見れば見れぬこともない。○油屋の九平次—曾根崎心中の長作にあたる悪人の名。○善悪人の鏡…善悪ともに教訓になる。この點は、作者が勸善懲惡などの教化的立場から淨るりなどを見てゐることを知るに足る言だ。○よい中の垣—よい中にも垣をせよの諺から、親しい間でも、禮儀作法は守るものだの意。○合點—了簡。○醬油屋の徳兵衛—曾根崎心中の主人公で、丁度嘉平次にあたる人物。○願を喰遠よふ—豫想ちがひ見當ちがひ。○手まつけるが最期—手を出したらそれで片がつく。○びこ／＼する—びよこ／＼する。○わや—關西の方言で、無茶、譯なし、無法などの意。

【譯】「え、しみたれた騙り奴、やい銀が欲しければ、穢ない云ひが、りをせうよりか、立派に泥棒でもしろ。さても企んだり／＼、今こそ思ひあたつた。嵐一座の芝居の曾根崎心中の狂言が、面白くて、度々見るといつてゐたが、よくも見覺えたな。汝はつまり曾根崎狂言の油屋九平次だ。一體芝居や淨るりは善悪何れも他人の鏡になるものぢや。汝は騙の手本にするつもりか。師匠の九平次よりか倍も悪い大騙り者ぢや。此春おれは汝に銀三百目をかぎつた。その時親しい仲のこと故證文もいらぬといつたが、よい仲でも垣をせよといふ諺の通りに、預り證を書いてやりました格でゆかうとすると、ちと見込がちがはうぞよ。おれが一寸手をつけるが最期、それきりだらうぞ長作」といつて、嘉平次が腕まくりをして捻ぢよると、長作「や、ひよこ／＼するな。無茶苦茶にして誤魔化さうとて、さうはさせぬぞ。證文の金は證文通りに、取る所へ出て取つて見せう」

嘉「ヲ、三百目の手形に十六兩は得遣まい」長「やるまいとはどうして」嘉「先かうして遣まい」と、めつかうほうど喰はする長「ヤア二才め打れてゐようか」とぶちかくる腕捻上、ひつくり返せば起上りむしやぶりついて擲さ合ふ。さがはあせつて、「なふ喧嘩／＼」と呼はる聲。客も駕籠も酔潰れ、「させ

ぬく」と割込で、ひよろつく足を踏こかされ、客「さへ人踏んだは堪忍せぬ」と、相手がどれやらめつた撲、大道へまくり出、大臣も泥まふれ、駕籠の者もちんば引、さがは嘉平次かこはんと身を捨て、駈廻る、喚く人聲雨の音、三重瀧を流すに異ならず。祝子宮奴棒突散し、「社内の騒ぎ狼藉千萬、出よ」と制すれば、どやくや紛れに長作は行方なく逸失せたり。

【註】○めつかう―真向、ひたいのこと。○ほうど―ぼんと。○むじやぶりついて―食りついて、盛にとりついて。○駕籠―駕籠昇の男。○こかされ―たふされ。○さへ人―とりさへ人。仲裁人。○まくり出―ほりり出され。○大臣―お大盡―豪遊をする客。○はぶり子―神主。○宮奴―宮に仕へる奴婢。○どやくやまぎれ―どさくさ紛れ。

【譯】嘉平次は「お、三百日の借金の證文に對して十六兩やるわけには行かぬ。」長作「やらぬとはどうしてくれぬのだ。」嘉平次「まづかうしてやらぬ」といつて、真向からぼんと喰はす。長作「やあ青二才奴、おれが汝に打たれて黙つてゐるか」と打ちかける腕を捻ぢあげて、ひつくり返すと起上つて、食ふりついて來て互に叩き合ふ。さがは即ち氣をあせりながら、「やれ喧嘩々々」と呼びたてる。客も駕籠の男も酔ひつぶれて「喧嘩はさせぬ」といつて、間に割り込んで、ひよろく」と足のふらつく中に踏み仆され、客は「仲裁人をふんだのは堪忍ならぬ」といひながら相手がどれか分らぬまゝに滅多矢鱈に打ちつける。その間に大道へ投げ出されて、お大盡も泥まふれとなり、駕籠の者もちんばを引き、さがは嘉平次を安全な地におかうとして、身をすて、駈け廻る。かうしてわめく聲に雨の音が加はりて、宛がら瀧を流すやうであつた。神主や、宮仕への人々は棒を散々について「社内で騒ぎをするとは狼藉千萬である。出ろく」といつて制すると、どさくさまぎれに、長作は行方分らぬやうに逃げ失せてしまつた。

茶屋は思はぬ踏立、はや日も暮れた御門がしまる、お客様もはやお立、さが様は大事の身、駕籠の衆

早う乗せて往つしやれ。お客様も笠貸まじよか、但お駕籠かりまじよか」客「いや、駕籠は錢が出、只貸す笠を借ぬが損。さがは夜る晝身共が揚、道の間も算用の内、駕籠について歸らふ」と、跣足に成て出ければ、さがは心も暗紛れ、「何としてじや何處にじや」と見廻せば、ア、悲し、平は鬢もかき亂れ、亂るゝ雨の藤の陰、濡れて立たる味氣なさ。勤として口惜い、大事の男を打擲かせ、濡れしほるゝを見て居ながら、我身は駕籠に乗る事か。エ、儘ならば飛下て、共に抱ても濡れう物、と見やれば男も目を合せ、焦るゝ中のうき涙、いとど雨こそしきりなれ。

【註】○踏立―ふみたてられること、ふみあらされること。○御門―生玉社境内の門がしまるのだ。○暗紛れ―心もくらくと、日の暮にまぎれてとかく。○味氣なさ―面白くない、つら。○目を合せ―男もこちらを見て、即ち互に見合せることをいふのだ。【譯】茶屋は思はぬ踏み荒しに遇つて主人が「はや日も暮れた、御門がしまる、お客様もはやお立ちなされ。さが様は大事の身だから、駕籠の衆よ、早く乗せて歸られよ。お客様も笠を貸ませうか。それともお駕籠をかりて進ませうか。」客「いや、駕籠をかれは錢がある。只で貸す笠をからぬが損ぢや。さがは晝夜ともおれが揚げることにしてある。さすれば道中でも、おれの算用の内にはいる。即ち駕籠について歸らう」といつて跣足になつて出ると、さがは心もくらく、闇の暗きにまぎれて、「嘉平次はどうしたのぢや、何處にゐるか」と見まはすと、悲しいかな、彼は鬢もかき亂され、藤の蔭に立つて、亂れ降る雨にぬれてゐる面白くなさはどうであらう。「勤の身なればとて口惜しい、大切な男を打たゝかせ、それがぬれしよげてゐるのを見てゐながら、自分は駕籠に乗るとは何事ぞ。思ふやうにならば飛下りて、一緒に抱き合つて濡れもせうもの」と思ひながら見やると、男もこちらを見合せて、互に焦るゝ中に憂き涙を流し、雨もしきりにひどく降つてゐた。

さが「なふ駕籠の衆、先待てや。わしや此外樋がうつとしい。身は濡ても厭はぬ。是をこゝに捨置いて、俄雨に逢ふた人、著て下されば本望、是はさが貰ふた」と、手を上げて引しぼり、疊んでひらりと捨ければ、平は立寄拾取、押載さて雨に著る、田篋の鳥の寡鶴、泣いて立たる哀れさに、さが「ア、忝ない誰かは知らねど能ふ拾ふて着て下んす。私も其下に暫しが程の雨宿り、こなさんも其通其雨外樋を一樹の蔭、他生の縁で御座んす」と、駕籠は見返る、嘉平次は見送る中に降る涙、無情や神の梅の雨、降隔てゝぞ三重別れゆく。

【註】○外樋―桐油合羽。○田篋の鳥の……誰かきく難波の汐のみつなべに、田篋の鳥の鶴の諸聲、夫木集。雨により田篋の鳥をけふゆけば名には隠れぬものにぞありける。又、浪花瀉汐みちくらし雨衣田篋の鳥に田鶴鳴き渡。古今集。又、雨に著る田篋の鳥もあるなれば露も眞菅の笠はなどかなからん、論曲・蘆刈に縁をとつたもので、着るといふから篋と云ひ、田篋鳥にかけた。田篋の鳥は昔大坂の北にあつた。今は橋の名として残ると。此處の意は田篋の鳥の寡鶴の如く、鳴いて立ち去つた氣の毒さに。
○こなさんも其通り―私もさき程、其下に暫し雨やどりをなした。こなさんも同様だ。そしてその雨桐油を一樹の蔭として互に立寄るのも、これは他生の因縁ぢや。○神の梅の雨―梅雨、五月雨と、神の梅即ち例の天神の飛梅とかけた。

【譯】さがは「なう駕籠の衆、まあ、まつて下され。私は此桐油合羽がうつとしい。自分は濡れても何ともないから、之を此處にすて、おいて、俄雨に逢ふた人に譲らう。その人が着てくれれば本望ぢや。之はさが貰ふことにする」といつて、手をあげて合羽を引しぼつて、疊んでからひらりとすてると、嘉平次は立寄つて拾ひ取つて、戴いて雨の中に着た。そして田篋の鳥の寡鶴が鳴いて立つが如く、それを身にまつて泣いて立つてゐる姿があらはれげなので、さがは「あゝ忝けない、誰かは知らぬが、よくも拾つて着て下さる。私も暫く其下で雨宿りをしま

した。こなさんも其通り、其雨合羽を一樹の蔭として身にまとはるゝ、これも他生の縁でござんす」といつて駕籠からも見送り、嘉平次も見送るその間に落し合ふ涙を、つれなや五月雨が降りて中を隔てゝ、二人は別れてゆくのである。

中の巻

心々の商ひも、皆世渡りの大和橋、下行水の淡よりも、色にぞ銀は消やすく、際は素焼の明徳利、今日の菖蒲の節句にも、見世指身皿とやかくと、人も火入や灰吹も、碎けて物や思ふらん。繁昌の日の紋日さへ、更て淋しき五月闇。駕籠の者共提灯提げ、嘉平次が見世割るゝ計に叩け共、誰そと咎むる人氣もなく、頻りに叩けば家主、紺屋の若い者共大欠して出合ひ、若し誰じややかましい。一年に一度の五月の節句、我人皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前からこゝにはいらぬ。二日の晩方ちよつと戻つて、それから影も見せられぬ。懸請衆なら、夕べ請ふたがよいわいの。節句しも何事ぞ。惣して其處は出見世で火を焼事も御法度。母家は松屋町九之助橋の角、一ツ屋の五兵衛殿隠れはない。」

【註】○心々の商……思ひの商賣をするのも皆世渡りの爲である。○大和橋―嘉平次の出店のある所だが、世渡りの渡る意から橋を出して、大和橋といつた。大和橋の嘉平次とてさうであるが、その橋の下を流るゝ水の。○淡―泡のあて字。○色にぞ銀は……水泡は消え易いものだが、その水の泡よりも、色事につかふ金は消え易い。○際は素焼の明徳利―際は五節句とか盆暮の

如き時期。素焼の徳利は節句などに神前にそなへる徳利。明徳利は空のもの。即ち全體の意は、節句などの時には、支拂勘定をさけて、空徳利の如く家を空にして、逃げかくれする。徳利など皆、嘉平次の商ひが陶器店の事故、かくの如く引いたのである。○菫の節句―五月の端午のこと。○見世指身皿―指し皿は銀すにかく。銀すはさす。○人も火入や……人もとやかくと批を入れる批難をするにかく。火入れといつたから灰吹といつたのみ。○碎けて物や……百人一首の碎けて物を思ふ頃かなを引く。とやかくと人の批難を受けて物を思ふことであらう。陶器店故碎けてといつた。○紋日―もの日にて、節句など祝ひ日をいふ。○五月團―嘉平次の店は戸をしめて不在なる上に、端午の前三四日頃はまだ月も一寸しか出ぬので團といつた。○駕籠の者共―駕籠昇ども。○咎むる人……戸をひどく叩くのは誰かといつて、中から咎めるものもない。○懸請衆―掛け金取の人々。○タバ誘ふたが……昨晩来い、節句の前晩に来べきだ、端午の夜来べきでない意。○かくればない―人が皆よく知つてゐる。

【譯】 思ひ思ひの商賣も、皆世渡りの爲で、大和橋の嘉平次の店とてさうであるが、その橋の下を流るゝ水の泡よりも消え易いのは、色事に費す銀である。即ち節句などの時には、素焼の空徳利のやうに、支拂をさけて嘉平次は家を空にするのであるが、今日の端午の節句にも、見世を閉ぢて、とやかくと人も批難をするので、心を碎いて物思ひをすることであらう。繁昌する都會の紋日にさへ、夜が更けると淋しい五月團に、駕籠屋共が提灯をさげて來て、嘉平次の店の戸を割れんばかりに叩くけれど、中からは誰ぢやといつて、とがめ立てする人氣もなかつたが頻りに叩いてゐると、家主と紺屋の若い者どもが大あくびをして出て來て「誰だ八ヶ間敷い、一年に一度しかない五月の節句に、我も人も皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前から此處には居られぬ。二日の夕方に一寸歸つて來て、それからは影も見せはなさらぬ。懸取り衆なら昨夕請求に來るべき筈だ。節句に來るとは何事だ。一體そこは出店で火を焚くことも禁制だ。母家は松屋町九之助橋の角の、一つ屋の五兵衛殿といつて隠れなく知れてる家ぢや」

駕籠や懸請では御ざらぬ。伏見坂町柏屋のさがと申が、是も二日の夜から見へませぬ。今日で四日さまくにして知れませぬ。こんな所によもやとは存じながら、嘉平次様とは深い中、念の爲で御座

る」といふ所へ、理窟臭い白髪まじり、「嘉平次どのはまだで御座るか。歸られたらいふて下され。西國橋印傳屋長作から參つた。手形の銀子不埒につゐて、明後日お願ひ申ますと」若者「ア、聞くに及ばぬ。こゝは出見世の棚貸、何事も存せぬ。本宅へ」と、取合はねば詮方なく、皆東へと走りける。

【註】 ○利窟臭い―理窟でもいひさうな顔をした。○印傳屋―羊又は鹿などのなめし皮の一種を商ふ店。○銀子不埒―證文の金がまだ不埒故くれるといふ意。○御願申します―其筋へ訴へ出る意。○出見世の棚貸―棚貸は店貸にて、貸家して住ませることにて、家をかしてある支店の意。

【譯】 駕籠屋は之に答へて、「いや、懸金取りではない。伏見坂町の柏屋のさがといふものが、二日の夜から姿を見せませぬ。今日で丁度四日間いろく」と探すが分りませぬ。こんな所によもやをりはせぬと存じながら、嘉平次様とは深い仲の事ではあるし、念の爲に探しまゐつた」といふ處へ、一理窟云ひさうな顔の白髪交りの男が來て「嘉平次殿はまだ歸られぬか、歸られたらいふて下され、西國橋の印傳屋長作の家から參つた。證文の金をまだ拂つてもらへぬから、明後日其筋へ訴へ出ますといつて下され。」紺屋の若い者は「あゝその様な話はきくに及ばぬことぢや。此處は貸店の支店であるから、何事も分らぬ、本店の方へどうぞ」といつて取合はないので仕方なくて、皆々東へ走つて行つた。

紺屋の者共あされはて、「なんと清介、此さがといふお山見やつたか。ム、其方は終に見ぬか。さいくこゝへ泊りに來た。それはくよい女房。如何にもく嵯峨の釋迦毘首羯磨の御作といふてもだんない」と、いへば一人が肯いて、「ム、それで聞えた。嘉平次の借錢檀」と打笑ひ、しむる門口しん

くと、川音更ふけて静しずなり。

【註】 ○お山！遊女。○さいくー再々、度々。○嵯峨の釋迦—京都郊外嵯峨の清涼寺の釋迦。清涼寺の釋迦は毘首羯磨の作と傳へるから、類似音を重ねて用ひたのだ。○毘首羯磨—工匠を司どる佛。○だんない—大事な音便。よい意 ○借錢檀—清涼寺の釋迦が赤梅檀の樹で出来てゐること、嘉平次が借錢になやむことをかけた。

【譯】 紺屋のものども呆れはて「どうぢや清介、此さがといふ女郎衆を見たか。むゝそなたはとうと見ないのか。度々此處へ泊りに來たが、それはく美しい女房ぢや。如何にも嵯峨清涼寺の、毘首羯磨の御作なる釋迦如來だといふてもよい」といふと、一人の若者がうなづいて「むゝそれで分つた。嘉平次は借錢をしたのだ」と清涼寺の釋迦如來が赤梅檀で出来てゐることにかけていつて笑つて、門口をしめると、夜はしんく〜と更けて、川音は静しずに聞えるのである。

世の中に秋果はてよとてつきし名か。今は身にさへ秋のさが、平ひらと二人が二日の夜、身の憂うれきまゝにふつと出て、何處どこをとぼく行先の、當あたもない駕籠かごかりの世に、死しなねばならぬ信濃しなの紬つづの糸いとよりも、心が細く氣も弱よわく、廣ひろひ國くにをも我われと我わが、心こゝろで狭すく住すなせし、日本橋にっぽんばしにぞ著つける。

【註】 ○秋果あきぐみよとて……秋果あきぐみてる、秋死あきしぬると飽果あきぐみるとかく。世の中に飽あきぐみいてしまへとつけられた名か。○身にさへ秋のさが……謡曲「小督」の「牡鹿鳴く此山里とながめける嵯峨野の方の秋の空」に縁をとるか。我身にも飽あきぐみいた嵯峨の意。○身の憂うれきまゝ—物うき、即ち心ふさぐので。○駕籠かごかりの世に—行き先の當あたてもない駕籠かごをかりてと、假りの世とかく。○信濃しなの紬つづ—常陸結城の袖につぐ品とさる。信濃しなののしなは死しなねばならぬしなにかく。此しなは關西で行きしな歸りしな、即ち行く時歸る時の意のしなにて、時の意にかく。信濃しなの紬つづの縦糸は細こきを用ふ。○日本橋にっぽんばし—道頓堀にかけた。前に廣ひろい國くにといつたのは比日本の語をさしつゝだ。

【譯】 世の中に飽あきぐみいて死しねといつてつけられた名かも知れぬが、今は自分の身にさへ飽あきぐみいてしまつて、嘉平次と二人で、二日の夜、物憂ものうれきまゝにふいと家を出て、何處どこへ行くともなく、とぼく〜と歩いて、行く先の當あたてもない駕籠かごをかりて、假りの世に、死しななくてはならぬ時のこととて、信濃しなの紬つづの糸いとより細こい心をいただき、氣も弱よわつて廣ひろい日本の國くにも自らの心で狭すく住すみにくいものにしてしまつて、日本橋にっぽんばしについた。

さが「なふ平様、どれ顔見せさんせ。」いとしや漸げん々に氣が暗くろふならんす。どう思おもふてぞいの。此様にうかく〜と、唐高麗からかうらいを歩いた迎、壹貫目いちくわんと上のほつた銀かねふり湧わかふ筈はずもなし。其中人に見付けられ、見苦し目に逢あふ時、難波燒なにはの嘉平次かへいじが死しんでもものけず、茶屋の銀負かねおふてあのさま見よといはれた時、此比こひ天満あまで姉御あねごさんのおしやんす通、御一門迄ごいつもん面汚おもてし。とても生きぬ覺悟の上、早はやふ死しなふじや有あるまいか。ア、思おもへば姉御さん、こなさんを大切にいとしそらな詞ことば。さがといふ名は聞いて成、大事の弟せいを先度さきどの奴やつが殺ころしおつたか、恨にくめしと憎にくみをうけうが悲かなしいと、手に取付て泣なきければ、

【註】 ○氣が暗くろふ—この語は顔を見ていつてるのだ。○唐高麗—唐高麗までも意。○貫目—銀貨は目方にて計算し、凡六十匁を金一兩と算した。○ふり湧わかふ—天から降り下り地から湧き出る。○難波燒—大坂高津邊にて延寶頃から焼始めた焼物、嘉平次の家が陶器商なる故いふ。○貢たまふて—借金して。○此比—先達、先頃。○聞いてより—聞いて知つてゐることより。○先度の奴—此間見た奴。

【譯】 さがは「なう平様、どれ顔をお見せなされ、可愛や次第に氣が鬱ふさいでしまはれる。どう思おもはれるかいの。こんなにか〜と、唐高麗までも歩いて行つたとて、一貫目に達した銀が、天から降り地から湧き出る筈もない。

其中に他人に見つけられて、見苦しい目に逢ふた時、難波焼屋の嘉平次が死んでもしまはず、茶屋で借金して、あの態を見るといはれたらば、先頃天満にて姉御様のいはれたやうに、御一門まで面を汚されることになる。とても生きてはゐないといふ覺悟の上のこと故、早く死なうぢやないか。あゝ思ふと、姉御様は、お前を大事にして、いとしさうな詞であつた。既にさがといふ名は聞いてをれることではあるし、大事の弟を此間の奴が殺したか、恨めしいといつて、憎まれるだらうことが悲しい」といつて、手にとりついて泣くと――

嘉「ヲ、今宵は延さぬ合點なれど、先そつと出見世へゐて、小刀でも用意し、我宿と名づけた出見世の門口、夫婦手を取り最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢なんだ。サア這りや」と戸を押して嘉「南無三寶ついで引櫃差いて出たれば、親仁からか家主からか門に錠をゑろした。こりやかう有る筈」と、四邊を尋ね、栗石拾ひ、力に任せしやんくく、しやんくく」と打響き、四邊はしんくく遠音の符、紺屋に聞付、「すは盗人よ。捻棒よ提燈」と若い者共駈出る音。さがを後に羽織の下、裾を被さの海士ならで、人の見るめも覺束な。

【註】○返さぬ合點！今宵死ぬことを、明日には延さぬことは承知だが。○あていつて。○南無三寶！これはしまつた意。○栗石！小石の丸くなつたのをいふ。○捻棒！棒ねちなどをやる用心棒。○裾をかづきの……かづきは水に潜ること、潜水する海士を、裾をかぶる、即ちかづき意にかけ、更に海士といつたから、海松にかけ見る目といつた。裾をかぶつたが爲に海士ではないが人目に判然せぬ意。覺束なは、はつきりせぬ意。

【譯】嘉平次「おゝ今宵死ぬ覺悟は動かさず、決して延ばしはせぬこと承知なれども、先づ密に出店へいつて、小刀でも用意し、我家と、兎も角も名のついた出店の門口から、夫婦で手をとつて、最期の門出をする積りにしたいものぢや、嬉しいことには通行人にも遇はなかつた。さあ這入るがい」といつて戸を押して見るが開かない。嘉平次「南無三寶しまつた。つい引棧をさして出たものだから親父か家主か門の戸に錠を下ろした、これはその筈ぢや」といつて四邊を尋ねまはり栗石をひろつて力に任せて、しやんくく」と打つ。その音が響いてしんくくたる四邊に遠いこだまをなす、その反響を紺屋できづつけて「それ盗だ。捻棒を出せ提燈出せ」といつて若い者共が駈出る音がする、即ち嘉平次はさがを後にやり羽織の裾をかぶつて隠れさせると、人の目にも判然と見えなくなつた。

若者「ヤア嘉平次殿、此中はどうじゃ、際の日に商人の見世を捨て、何處へぬつくり這入てぞ。書出しやら懸乞やら、今宵迄も尋ねて来る。返答にも困つた。エ、譯の悪いぢ人じやなふ」嘉「尤々。京の清水焼にずんと安い仕舞物が有と聞、人に先を越されまいと、俄に上つてやうく今朝下つた。日比やだの有此嘉平次、さぞ逃た走つたと評判で御座らふ。親仁も商ひに精出すとていつにない機嫌で、今夜は出見世に泊れといはるる、何處も首尾に成ました。家主殿の錠そうな。サア鍵が有なら明て下され。とてももの事に火も貫はふ。行燈にともして下され。何かと皆の御苦勞。其代に今度の清水焼には利がある。わつさりと振舞を」と、さがを圍ふて身を背け、此期に成ても口利口、後を見せぬは兵なり。

【註】○際の日！師走節句などのことを際といふ。際境の日。○ぬつくりぬくく」と。○書出し！附け出し、書つけ。勘定書。○譯の悪い！金拂の悪い。○ずんとずつと、すてきに。○仕舞物！拂ひ物。○やだ！疵、弱點。○首尾！好都合。○とてももの事！序のこと、一そのこと。○わつさりと……賑はしく振舞をしよう御馳走しよう。○圍ふて！身をかくしてやつて。○後を見

せぬ一敵に後を見せぬ、即ち後へ引かね、恐れぬ意と、自分の後ろにゐるさが見せぬ意をかけた。○兵一したゝかもの。敵に後を見せぬ剛の者。

【譯】 若者は「やあ嘉平次殿、此間からどうした。節句などの境の日に、商人が店をすてゝ、どこへぬく／＼と、這入り込んでゐたのぢや。勘定書やら、掛乞ひやら、盛にやつて来て、今夜までもやつて来るので、返事にさへこまつた。えゝ金拂の悪い人ぢやのう」。嘉平次「京の清水焼に素敵に安價な拂物が有るといふ話を聞いて、他人に先越しされまいと思ふて、急に上京して、やつと今朝下阪した。平生弱味のあるこの嘉平次のことだから、さぞや、逃亡したの走つたのと、色々の評判でありませう。ところが親父も私が商賣に精を出すといつて、いつもになく上機嫌で、今夜は出店へ行つてとまれといはれる。何處もいゝ都合になりました。比錠は家主殿が下ろされたものらしい。さあ錠があるなら、あけて下され、序のことに燈火も貰ひませう、行燈にとほし。下されい。何かにつけて、皆様の御苦勞恐入る。其代り、今度の清水焼はもうかるから、賑はしく奢りませうぞ」といつて、さかの身を隠して自分の身をそ向け、此時になつても口伶俐な物云ひをなし、敵に後ろを見せぬ所は、流石にしたゝか者である。

其間に錠明けて、若者「是火もともし付ました。茶でも所望に御座らぬか」と、表へ出れば嘉平次は、跡じやうりして入替り、「もう休んで下され、明日お目にかゝらふ。いかふねむたい寝ます」と、はたとさして内よも懸金しやんと締めれば、さかは溜息身を震はし、「早ふ死んでのけたい」と、叫くも只涙なり。表には猶不審を立て、小側に打寄り、若者「今夜の歸り合點がいかぬ。云分といひ飲込まぬ。清介は親御に此様子知らせておじや」。清「まつかせ」と駈出す。若「こちも是で二度起きた。ま一度起るは定の物」と、呟き内に入にけり。

【註】 ○跡じやうりあとしざり。○さして一戸をしめて。○飲込まぬ一飲込めぬ。○まつかせ一おつとまかせ。○ま一度二度あることは三度あるといふ諺から、今一度あるといつたのだ。

【譯】 若者はその間に錠をあけて「これ火も燈しました。茶でも欲しくはないか」といつて表へ出ると、嘉平次は後しざりをして若者と入り替つて家にはいり「もうお休み下さい。明日またお目にかゝりませう。ひどく寝むいから、寝ます」といつて、はたりと戸を閉めて、内から懸金をしやんとかけると、さかは溜息をつき身をふるはし、「早く死んでしまひたい」と涙ながらに嘔く。表の方ではなほ不審に思ひ、脇の方に寄つて、「今夜の歸り様はどうも譯が分らぬ。物の云ひ様といひ、どうも飲み込めぬ。清介は嘉平次の親御に此様子を知らせて来い」。清介「よし来た」といつて駈出す。若者は「吾等もこれで二度起された。もう一度起されるのはきつとだ」といつてつぶやきながら家に入った。

嘉平次表に氣を付、「サア向ひの門もしまつた。是迄こそ太儀なれ。何處に何の障りもなし。二人がかう並べば夫婦住ひし同然なり。是こゝがそなたの内じやぞや。エ、口惜い世間廣ふ内へ入れ、親にも逢せ、町へも廣め、そなたに世帯を打任せ、商ひも仕廣げ、嘉平次が女房は勤の者の風はない、何程の大世帯も捌かねまい女房じやと、いはせうと思ふたに、叶はね事は叶はぬ物、たつた僅か壹貫目余りの銀の瀬戸を越しかねて、浮名を取つて死ぬる事、無念なはいの」と齒ざしみし、頭も上げず泣きければ、さか「さればいの、わしとても一日成と父御様に御奉公、姉御様を姑御と宮仕へせう物と、明暮の願ひ事叶はぬのみか此しだら、及ばぬ願の逆罰か。此前去人に三世相見て貰ひしに、先生で佛前の